

市内遺跡発掘調査報告書

高田遺跡第 17 次調査

高田遺跡第 19 次調査

高田遺跡第 20 次調査

吉岡原遺跡第 7 次調査

めだか
女高 I 遺跡第 11 次調査

吉岡原遺跡第 6 次調査

吉岡下ノ段遺跡第 6 次調査

女高 I 遺跡第 10 次調査

2008

掛川市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書

高田遺跡第 17 次調査

高田遺跡第 19 次調査

高田遺跡第 20 次調査

吉岡原遺跡第 7 次調査

めだか
女高 I 遺跡第 11 次調査

吉岡原遺跡第 6 次調査

吉岡下ノ段遺跡第 6 次調査

女高 I 遺跡第 10 次調査

2008

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成 18 年度に現地調査を実施し、平成 19 年度に整理調査を行った埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 調査は、茶園の改植・個人住宅の建築等に伴う緊急発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、以下の地権者・耕作者の方々の、埋蔵文化財に対する多大なご理解とご協力を頂いた。(順不同、敬称略)
大場茂、鈴木文雄、深田義勝、宮崎順一、大場清一郎、山崎延雄、鈴木弘子、山崎孝弘、大庭龍彦、大井彰夫、山本慎吾、大場洋、大場知、大場章人
4. 発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。(順不同)
青島信二、寺沢巧、藤田弘、藤田房幸、向川隆、山崎辰雄、長谷川勇次郎、萩田進一、深田重男、福田一郎、松浦弘司、森下昭、山崎弘明、加藤君代、藤田理恵、井筒いつよ、笠谷みゆき、鈴木辰江、鈴木はつ子、溝口玉緒、多賀一美、西田泰子、上山貴代子、早乙女のぞみ、榛葉豊子、杉山和子、山下広美
5. 現地調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を頂いた。(五十音順、敬称略)
白澤崇、鈴木敏則、竹内直文、平野吾郎、松井一明、向坂鋼二、渡辺武文
6. 本書の執筆・編集は、掛川市教育委員会生涯教育課文化振興室文化財係の前田庄一と戸塚和美で行った。
7. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、高田遺跡第 17 次調査・第 19 次調査・第 20 次調査、吉岡原遺跡第 7 次調査、女高 I 遺跡第 11 次調査が座標北である。吉岡原遺跡第 6 次調査、吉岡下ノ段遺跡第 6 次調査、女高 I 遺跡第 10 次調査は、磁方位である。
2. 本書で使用した遺構表記は、次の意味である。
SA : 柵列 SB : 掘立柱建物跡 SD : 溝状遺構 SF : 埋葬土坑 SH : 竪穴住居跡
SK : 土坑 SP : 柱穴 SZ : 方形周溝墓 SX : 性格不明の遺構
3. 本書で使用した柱間寸法は、柱穴下場の中心間の数値である。
4. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

例 言・凡 例

I	はじめに	1
	1. 調査に至る背景	1
	2. 地理的・歴史的環境	1
II	高田遺跡第17次調査	3
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	3
	2. 調査の方法と経過	3
	3. 調査の内容	3
	4. まとめにかえて	9
III	高田遺跡第19次調査	69
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	69
	2. 調査の方法と経過	69
	3. 調査の内容	69
	4. まとめにかえて	74
IV	高田遺跡第20次調査	99
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	99
	2. 調査の方法と経過	99
	3. 調査の内容	99
	4. まとめにかえて	100
V	吉岡原遺跡第7次調査	109
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	109
	2. 調査の方法と経過	109
	3. 調査の内容	109
	4. まとめにかえて	114
VI	女高I遺跡第11次調査	153
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	153
	2. 調査の方法と経過	153
	3. 調査の内容	153
	4. まとめにかえて	160
VII	吉岡原遺跡第6次調査	223
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	223
	2. 調査の方法と経過	223
	3. 調査の内容	223
	4. まとめにかえて	223
VIII	吉岡下ノ段遺跡第6次調査	229
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	229
	2. 調査の方法と経過	229
	3. 調査の内容	229

4. まとめにかえて	229
IX 女高I遺跡第10次調査	239
1. 調査に至る経緯と調査の目的	239
2. 調査の方法と経過	239
3. 調査の内容	239
4. まとめにかえて	240
X おわりに	247
付載 掛川市内遺跡出土炭化材の樹種同定	249
吉岡原遺跡第7次調査出土顔料分析	255

挿 図 目 次

I はじめに

第 1 図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

II 高田遺跡第17次調査

第 1 図 遺跡内における調査地点位置図	第 22 図 SH05・06実測図(3)
第 2 図 SB01実測図	第 23 図 SH07実測図
第 3 図 SB02実測図	第 24 図 SH08実測図(1)
第 4 図 SB03実測図	第 25 図 SH08実測図(2)
第 5 図 SP87・100実測図	第 26 図 SH09実測図
第 6 図 SB04実測図	第 27 図 SH10実測図
第 7 図 SB05・11実測図	第 28 図 SH11実測図
第 8 図 SB06実測図	第 29 図 SH11内遺物出土状況図
第 9 図 SB07実測図	第 30 図 SH12実測図
第 10 図 SB08実測図	第 31 図 SK01~03実測図
第 11 図 SB09実測図	第 32 図 SK04~06実測図
第 12 図 SB10実測図	第 33 図 SK07・08実測図
第 13 図 SF01実測図	第 34 図 遺物実測図(1)
第 14 図 SF02実測図	第 35 図 遺物実測図(2)
第 15 図 SH01実測図	第 36 図 遺物実測図(3)
第 16 図 SH01炉跡実測図	第 37 図 遺物実測図(4)
第 17 図 SH02実測図	第 38 図 遺物実測図(5)
第 18 図 SH03実測図	第 39 図 遺物実測図(6)
第 19 図 SH03内ピット, SH04実測図	第 40 図 遺物実測図(7)
第 20 図 SH05・06実測図(1)	第 41 図 遺物実測図(8)
第 21 図 SH05・06実測図(2)	

III 高田遺跡第19次調査

第 1 図 遺跡内における調査地点位置図	第 4 図 SD01実測図
第 2 図 遺構全体図	第 5 図 SH01・02実測図
第 3 図 SB01実測図	第 6 図 SH04・05実測図

- 第 7 図 SH06 実測図
- 第 8 図 SH07 実測図
- 第 9 図 SH08 実測図 (1)
- 第 10 図 SH08 実測図 (2)
- 第 11 図 SH13 実測図

IV 高田遺跡第 20 次調査

- 第 1 図 遺跡内における調査地点位置図
- 第 2 図 SA01~06 実測図
- 第 3 図 SB01 実測図

V 吉岡原遺跡第 7 次調査

- 第 1 図 遺跡内における調査地点位置図
- 第 2 図 遺構全体図
- 第 3 図 SA01~04 実測図
- 第 4 図 SA05, SB03 実測図
- 第 5 図 SB01 実測図
- 第 6 図 SB02 実測図
- 第 7 図 SB04 実測図
- 第 8 図 SH01・02 実測図
- 第 9 図 SH03 実測図
- 第 10 図 SH05 実測図 (1)
- 第 11 図 SH05 実測図 (2)
- 第 12 図 SH05 内ピット実測図
- 第 13 図 SH06 実測図

VI 女高遺跡第 11 次調査

- 第 1 図 遺跡内における調査地点位置図
- 第 2 図 遺構全体図
- 第 3 図 SA01・02 実測図
- 第 4 図 SA03・04 実測図
- 第 5 図 SB01 実測図
- 第 6 図 SB02 実測図
- 第 7 図 SB03 実測図
- 第 8 図 SB04 実測図
- 第 9 図 SB05 実測図
- 第 10 図 SD02・03 実測図
- 第 11 図 SD04, SK01 実測図
- 第 12 図 SF01 実測図
- 第 13 図 SF02 実測図
- 第 14 図 SF03 実測図
- 第 15 図 SH01 実測図 (1)

- 第 12 図 柱穴列実測図
- 第 13 図 SX04 実測図
- 第 14 図 遺物実測図 (1)
- 第 15 図 遺物実測図 (2)

- 第 4 図 SB02 実測図
- 第 5 図 SB03 実測図
- 第 6 図 SB04 実測図

- 第 14 図 SH04・07・12 実測図
- 第 15 図 SH08 実測図
- 第 16 図 SH09 実測図
- 第 17 図 SH10 実測図 (1)
- 第 18 図 SH10 実測図 (2)
- 第 19 図 SH11 実測図
- 第 20 図 SH13 実測図
- 第 21 図 SH14 実測図
- 第 22 図 SH15 実測図
- 第 23 図 遺物実測図 (1)
- 第 24 図 遺物実測図 (2)
- 第 25 図 遺物実測図 (3)
- 第 26 図 遺物実測図 (4)

- 第 16 図 SH01 実測図 (2)
- 第 17 図 SH02 実測図
- 第 18 図 SH03・04 実測図
- 第 19 図 SH05・07 実測図
- 第 20 図 SH06 実測図
- 第 21 図 SH08・09 実測図
- 第 22 図 SH10 実測図
- 第 23 図 SH11 実測図
- 第 24 図 SH12 実測図
- 第 25 図 SH13 実測図
- 第 26 図 SH14 実測図
- 第 27 図 SK02・03 実測図
- 第 28 図 柱穴群実測図
- 第 29 図 SZ01 実測図
- 第 30 図 SZ01 周溝断面図

- | | |
|----------------------------|------------------|
| 第 31 図 SZ01 周溝内遺物出土状況図 (1) | 第 37 図 遺物実測図 (4) |
| 第 32 図 SZ01 周溝内遺物出土状況図 (2) | 第 38 図 遺物実測図 (5) |
| 第 33 図 SX01 実測図 | 第 39 図 遺物実測図 (6) |
| 第 34 図 遺物実測図 (1) | 第 40 図 遺物実測図 (7) |
| 第 35 図 遺物実測図 (2) | 第 41 図 遺物実測図 (8) |
| 第 36 図 遺物実測図 (3) | 第 42 図 遺物実測図 (9) |

Ⅶ 吉岡原遺跡第 6 次調査

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 第 1 図 遺跡内における調査地点位置図 | 第 3 図 SD01~03, SP 実測図 |
| 第 2 図 遺構全体図 | |

Ⅷ 吉岡下ノ段遺跡第 6 次調査

- | | |
|----------------------|----------------|
| 第 1 図 遺跡内における調査地点位置図 | 第 4 図 SZ01 実測図 |
| 第 2 図 遺構全体図 | 第 5 図 遺物実測図 |
| 第 3 図 SF02, SP 実測図 | |

Ⅸ 女高遺跡第 10 次調査

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 第 1 図 遺跡内における調査地点位置図 | 第 3 図 SH01, SX06・07 実測図 |
| 第 2 図 遺構全体図 | 第 4 図 柱穴実測図 |

付図

- 付図 1 高田遺跡第 17 次調査遺構全体図 (調査区南半部分)
 付図 2 高田遺跡第 17 次調査遺構全体図 (調査区北半部分)
 付図 3 高田遺跡第 20 次調査遺構全体図

図 版 目 次

Ⅱ 高田遺跡第 17 次調査

- 図版 1 SB01~04, SH02~04, SF01 完掘 (空中写真)
 SB05~11, SH05~12 完掘 (北から)
- 図版 2 SB01 (南から) SB03 (南から) SB03 SP87 土層断面 (南から)
- 図版 3 SB03 SP87 (北から) SB03 SP92 土層断面 (南から) SB03・04 (東から)
- 図版 4 SB04 (南から) SB04 SP100 内遺物 (西から) SB05・06, SH10 (西から)
- 図版 5 SB08~11 (南から) SF01 (西から) SF02 (南から)
- 図版 6 SH01 床面 (西から) SH01 炉跡 (北西から) SH02 完掘 (南から)
- 図版 7 SH03 完掘 (北から) SH03 SP130 内遺物 (南から) SH03 SP129・130 内遺物 (東から)
- 図版 8 SH04 完掘 (南から) SH05~07 完掘 (北から) SH05・06 完掘 (南西から)
- 図版 9 SH06 炉跡 (東から) SH08 完掘 (南から) SH09・10 完掘 (北から)
- 図版 10 SH11 完掘 (東から) SH11 内遺物 (北から) SH11 内遺物 (北から)
- 図版 11 SH11 内遺物 (東から) SH12 完掘 (西から) SK03 (南から)
- 図版 12 SK04 (南から) SK07 内遺物 (南から) SK08 内遺物 (南から)

- 図版 13 遺物 (1)
- 図版 14 遺物 (2)
- 図版 15 遺物 (3)
- 図版 16 遺物 (4)
- 図版 17 遺物 (5)
- 図版 18 遺物 (6)

Ⅲ 高田遺跡第 19 次調査

- 図版 1 調査区西半全景 (空中写真) 調査区東半全景 (空中写真)
- 図版 2 調査区西半全景 (東から) 調査区東半全景 (北から)
- 図版 3 SD01 (西から) SD01 土層断面 (西から) 柱穴列 (北から)
- 図版 4 SH01 (北から) SH04・05 (北から) SH04 炉跡 (南から)
- 図版 5 SH06 (北から) SH08 (北から) SH08 炉跡 (東から)
- 図版 6 SX04 (北から) SX04 土層断面 1 (北から) SX04 土層断面 2 (北から)
- 図版 7 遺物 (1)
- 図版 8 遺物 (2)

Ⅳ 高田遺跡第 20 次調査

- 図版 1 調査区東半全景 (空中写真) 調査区西半全景 (空中写真)
- 図版 2 SA01~05 (西から) SB02・03 (南から) SB04 (北から)

Ⅴ 吉岡原遺跡第 7 次調査

- 図版 1 調査区東半全景 (空中写真)
- 図版 2 調査区西半全景 (空中写真) SH05~09 床面 (南から)
- 図版 3 SA04 (東から) SB03 (南から) SH03・04 完掘 (西から)
- 図版 4 SH03 完掘 (北から) SH03 内遺物 (西から) SH05 完掘 (北から)
- 図版 5 SH05 内遺物 (西から) SH05 内遺物 (南から) SH05 SP63 内遺物 (北から)
- 図版 6 SH05 SP63 内遺物 (北から) SH05 SP71 内遺物 (西から) SH06 床面 (西から)
- 図版 7 SH06 ベンガラ付き岩のブロック (北から) SH07 内遺物 (北から) SH08 内遺物 (北から)
- 図版 8 SH08 内遺物 (東から) SH09 炉跡と遺物 (東から) SH10~12 完掘 (東から)
- 図版 9 SH10 完掘 (南から) SH10 床面 (南から) SH10 炉跡 (西から)
- 図版 10 SH11 完掘 (南から) SH13 完掘 (北から) SH14・15 完掘 (北から)
- 図版 11 遺物 (1)
- 図版 12 遺物 (2)

Ⅵ 女高 I 遺跡第 11 次調査

- 図版 1 SH01・02 全景 (南から) 調査区西半全景 (北から)
- 図版 2 SA02, SH13 完掘 (北から) SB02, SD02・03 (北から) SB04・05, SH10 完掘 (南から)

- 図版 3 SD01・02東半（東から） SD04, SH02完掘, SK01, SZ01（北から）
SF01・02, SH10完掘（南から）
- 図版 4 SF01（東から） SF02（東から） SF03（東から）
- 図版 5 SH01完掘（東から） SH01床面北壁際遺物（東から） SH02完掘（北から）
- 図版 6 SH02床面（北から） SH03床面（北から） SH06床面（東から）
- 図版 7 SH11完掘（東から） SK01土層断面（南から） SK03内遺物（東から）
- 図版 8 SZ01西側周溝完掘（北から） SZ01北側周溝完掘（東から） SZ01西側周溝内
遺物（西から）
- 図版 9 SZ01南側周溝内遺物（西から） SZ01南側周溝内遺物（北から） SZ01北側周
溝内上層遺物（北から）
- 図版 10 SZ01北側周溝内下層遺物（北から） SZ01北側周溝内最下層遺物（北から）
SX01（北から）
- 図版 11 遺物（1）
- 図版 12 遺物（2）
- 図版 13 遺物（3）
- 図版 14 遺物（4）
- 図版 15 遺物（5）
- 図版 16 遺物（6）
- 図版 17 遺物（7）
- 図版 18 遺物（8）
- 図版 19 遺物（9）
- 図版 20 遺物（10）

Ⅶ 吉岡原遺跡第6次調査

- 図版 1 SD01・02, SP01完掘（南から） SD03, SP02完掘（南から） SP02
～04完掘（南から）
- 図版 2 SD01土層断面（北から） SD02土層断面（東から） SD03土層断面（東から）

Ⅷ 吉岡下ノ段遺跡第6次調査

- 図版 1 南区全景（東から） 北区全景（南西から）
- 図版 2 SZ01全景（西から） SZ01周溝土層断面（西から） 作業風景
- 図版 3 遺物（1）
- 図版 4 遺物（2）

Ⅸ 女高I遺跡第10次調査

- 図版 1 調査区全景（南から） 調査区全景（東から）
- 図版 2 SH01床面の土器（西から） SX06内遺物（東から） SX07内遺物（西から）

I はじめに

1. 調査に至る背景

掛川市は、静岡県西部地方（大井川以西）に位置し、東経 138 度線上にある。南に小笠山、東に牧之原台地に続く丘陵、北には赤石山系から連なる丘陵に囲まれ、その間を、原野谷川、逆川をはじめとする中小河川が流れ、沖積平野の端には、解析された小さな谷が無数に入り込んでいる。

掛川市教育委員会は、平成 18 年度に国および静岡県の補助金を得て実施した市内遺跡発掘調査等事業で、開発等の事業に関連し 62 個所の確認調査と 8 個所の本調査を行った。

本調査 8 個所の内訳は、茶園の改植が 5 個所、個人住宅の建築が 2 個所、個人住宅の敷地拡張が 1 個所である。この 8 個所はすべて、市の北西部に位置する和田岡地区内において実施したものである。

和田岡地区は、茶栽培が盛んな市内でも有数の茶産地で、2 級河川原野谷川により形成された段丘上に茶畑が広がっている。この段丘上は、また、市内でも有数の遺跡分布地となっているところでもある。

平成 18 年度は、この茶栽培が盛んで、市内有数の遺跡分布地である和田岡地区で、茶園の改植、個人住宅の建築等の計画が相次ぎ、発掘調査に至ったものである。

次に、この和田岡地区の地理的・歴史的環境について、少しふれてみることにする。

2. 地理的・歴史的環境

今回報告する遺跡は、2 級河川原野谷川の右岸に位置し、原野谷川により形成された河岸段丘上に立地している。段丘は、大きく分けて、標高 60m 前後の吉岡原と呼ばれる上位面と、標高 40～50m の高田原と呼ばれる下位段丘面に区別される。どちらの段丘上にも、数多くの遺跡が分布している。

平成 9 年度に、企業の研究施設建設に先立ち調査された溝ノ口遺跡からは、旧石器時代と考えられるスクレーパーが出土している。それまで、掛川市の歴史は、縄文時代から始まるというのが通説となっていたので、それを塗り替える発見となった。

縄文時代に入ると、槍先形尖頭器が高田上ノ段遺跡から発見されている。中期になると、中原遺跡から、石囲い炉を伴う竪穴住居跡が発見されている。石囲い炉を伴う住居跡は、市内では数少ない調査例であったが、今回報告する高田遺跡第 17 次調査、平成 19 年度に発掘調査を実施した今坂遺跡第 6 次調査でも検出された。少しずつではあるが、中期の遺跡の様子が明らかになりつつある。

次に遺跡が確認できるのは、弥生時代後期になってからのことである。今坂遺跡からは、竪穴住居跡、方形周溝墓跡、溝ノ口遺跡・東原遺跡からは、竪穴住居跡・掘立柱建物跡、吉岡原遺跡からは、竪穴住居跡、高田上ノ段遺跡からは、竪穴住居跡、高田遺跡からは、竪穴住居跡・掘立柱建物跡、女高 I 遺跡からは、竪穴住居跡・溝跡などが検出されている。住居跡にくらべ、墓跡の検出例ははるかに少なく、当時の人々の集落と墓域の関係は、明らかではない。

古墳時代の前期は、女高 I 遺跡から竪穴住居跡・方形周溝墓跡、高田遺跡からは古墳、竪穴住居跡、瀬戸山 I 遺跡からは、竪穴住居跡、古墳時代中期になると、女高 I 遺跡から竪穴住居跡が確認されている。高田遺跡からは、中期の土坑墓等が検出されている。

この中期には、丘陵の縁辺部に、全長 66m の前方後円墳である各和金塚古墳をはじめとする前方後円墳・方墳・円墳が造られるようになる。



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

- 1.高田遺跡 2.吉岡原遺跡 3.女高I遺跡 4.吉岡下ノ段遺跡 5.西山城跡 6.城ノ腰遺跡 7.東原遺跡
- 8.今坂遺跡 9.今坂古墳 10.溝ノ口遺跡 11.中原遺跡 12.高田上ノ段遺跡 13.吉岡大塚古墳
- 14.高田上ノ段古墳 15.吉岡下ノ段古墳群 16.春林院古墳 17.大向遺跡 18.吉岡原古墳群
- 19.宮脇行人塚古墳 20.林遺跡 21.西村遺跡 22.瀬戸山II遺跡 23.瀬戸山古墳 24.瀬戸山I遺跡
- 25.瀬戸山III遺跡 26.花ノ腰遺跡 27.藤六古墳群 28.東登口古墳群 29.平田ヶ谷遺跡 30.高田古墳
- 31.行人塚古墳 32.女高古墳群 33.女高II遺跡 34.瓢塚古墳 35.高田古墳群 36.谷房ヶ谷古墳群
- 37.高田金鑄原遺跡 38.各和金鑄原遺跡 39.各和金塚古墳群 40.各和氏館跡 41.五輪平古墳群
- 42.中氏館跡 43.中殿谷古墳 44.殿ノ台遺跡 45.若一王子神社古墳群 46.高代山砦跡 47.高代山古墳群
- 48.旗差古墳群 49.椀貸古墳群 50.椀貸横穴群 51.岡津原I遺跡 52.岡津原II遺跡 53.岡津原III遺跡

Ⅱ 高田遺跡第 17 次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成 17 年 10 月、茶園の改植準備を行っているところを発見し、耕作者と協議して、平成 17 年 11 月 11 日、確認調査を実施した。確認調査の結果、地表下 45～70 cm で、弥生時代～古墳時代の包含層と遺構を確認した。遺跡の保護・保存のため、保護層を確保した状態での改植について耕作者と協議した。しかし、改植のためには深耕が不可欠であることから、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成 18 年 4 月 28 日、記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて、県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出書」を進達した。

平成 18 年 5 月 9 日、県教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。

2. 調査の方法と経過

調査は、対象地の形に合わせて 5 m 方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。グリッドは、アルファベットと数字を組み合わせて、B-2 区、B-3 区等の呼称とし、グリッドの北西に位置する杭にグリッドを代表させた。現地での図面作成は、遺構図を縮尺 20 分の 1 と 10 分の 1 を併用し、微細図は 10 分の 1 とした。写真撮影は、6×7 カメラ 1 台（プロニー白黒用）と 35 mm カメラ 2 台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、排土置き場を確保する必要から、対象地を 2 分割し、平成 18 年 5 月 9 日に前半部分の機械掘削を開始した。6 月 27 日から後半部分の機械掘削を行い、8 月 23 日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために、基準点測量を実施した。

3. 調査の内容

i) 遺構の概要

ここでは、今回の調査によって検出した遺構を、掘立柱建物跡、埋葬土坑、竪穴住居跡、土坑の順に、その概要を記す。

1) 掘立柱建物跡（SB）

SB01（第 2 図・34 図）

B-11・12 区、C-11・12 区から検出された 1 間×2 間の建物跡で、長軸の方位は、N-14° 30′ -W を測る。SH02 との切り合いは不明であるが、SP77 から出土した第 34 図-1 は、SH03 に伴う可能性が高いので、SH03 より新しい時期と考えられる。

SB02（第 3 図・34 図）

B-10・11 区から検出された 1 間×2 間の建物跡で、SP131・102・80 を結んだ軸の方位は、N-24° -E を測る。SP102 の底面近くに黒色土・暗褐色土が約 20 cm の厚さで、その上に暗褐色土・黒褐色土が 6～11cm の厚さで入れられていて、版築状の地業が行われていると考えられる。SP131 は他の柱穴にくらべ規模が小さく、浅くなる。SP102 から第 34 図-2 が出土した。

SB03 (第4図・5図・34図)

C-8・9区、D-8～10区から検出された1間×2間の建物跡で、長軸の方位は、N-13° -Wを測る。柱間は、SP92・87間で4.25m、SP91・96間で4.38m、SP91・93間で3.09m、SP93・92間で3.11m、SP96・90間で3.13m、SP90・87間で3.14mを測る。すべての柱穴で、版築状の土層が確認されている。SP87の東半南寄り、底面から7cm以上浮いた位置から長径13～25cmの礫が集中して検出された。SP90は、SB04の柱穴SP115を切ることから、SB04より新しいと判断される。SP91から第34図-3、SP90から4・5・8、SP93から6、SP96から7が出土した。

SB04 (第5図・6図・34図)

B-9区、C-8・9区から検出された1間×2間の建物跡で、長軸の方位は、N-21° 30' -Wを測る。南側SP85とSP86の中間からSP100が検出された。柱間は、SP86・85間で3.04m、SP95・137間で2.76m、SP95・115間で1.69m、SP115・86間で2.37m、SP137・84間で1.86m、SP84・85間で2.19mを測る。柱穴の覆土に、版築状の土層はみられない。SP86から第34図-9、SP100から10～13, 15、SP85から14, 17、SP95から16が出土した。

SB05 (第7図・34図)

B-6・7区から検出された柱穴列で、SP87とSP252を結んだ軸は、N-2° -Wを測る。柱間は、SP252・245間が2.45m、SP245・287間が2.50mを測る。SP245は、黒褐色土・暗褐色土・褐灰色土が7～20cmの厚さで積まれていて、版築状の可能性がある。他の柱穴からは、版築状の土層は確認されなかった。SP245・252をSH10の床面で確認していて、SH10より新しいことがわかる。SP245から出土した第34図-18, 19の土器片は、SH10の遺物が覆土に混入した可能性がある。

SB06 (第8図)

B-6・7区から検出された1間×2間分の建物跡で、調査区東側に続くと考えられる。SP239とSP228を結んだ軸は、N-30' -Wを測る。柱間はSP228・236間とSP236・239間が2.00mで、SP239とSP343の東端までが2.40mを測る。SP228は、SH09を切る。

SB07 (第9図・34図)

C-6～8区、D-7区から検出された1間×2間の建物跡で、長軸の方位は、N-18° 30' -Wを測る。柱間は、SP332・309間が2.95m、SP278・279間が2.80m、SP278・344間が2.43m、SP344・332間が2.55m、SP279・345間が2.41m、SP345・309間が2.26mを測る。SP309は、SH12の炉を壊し、SP344の上面にSH11の覆土を切る遺構(第41図-114, 116が出土した)が存在した。第34図-20, 21の土器が、SP278の上面を覆っていた。

SB08 (第10図)

D-6・7区から検出された1間×2間の建物跡であるが、SP324の北側2.52mにSP346が存在することから、さらに北側につづく可能性がある。SP303とSP324を結んだ軸は、N-13° -Wを測る。柱間は、SP251・303間で3.32m、SP236・324間で3.30m、SP236・247間で2.36m、SP247・251間で2.14m、SP324・299間で2.52m、SP299・303間で2.18mを測る。SP236でSB11と切り合うが、SB11に切られていると判断される。

SB09 (第11図・34図)

D-5～7区から検出された1間×3間分の建物跡で、SP237とSP270を結んだ軸は、N-13° -Wを測る。柱間は、SP246・237間が3.00m、SP271・270間が2.72m、SP270・268間が2.44m、SP268・237間が2.60mを測る。SP268は、SH08の支柱穴と位置が重なると考えられる。SP246は、褐灰色土・灰黄褐色土・黒褐色土を5～18cmの厚さで積んでいて、版築状の土層が観察さ

れた。S P271は、SH08の床面を切ることから、SH08より新しいと判断できる。第34図-22は、S P246から出土した。

SB10 (第12図)

D-5・6区から検出された2間分の柱穴列で、S P235とS P263を結んだ軸は、 $N-1^{\circ} 30'$ -Wを測る。柱間は、S P263・269間で2.30m、S P269・235間で2.04mを測る。S P235とS P263では、柱穴内に版築状の土層が確認できた。S P263は、SH08の床面を切ることから、SH08より新しいことがわかる。S P235から土器片が出土しているが、古墳時代中期以降のものはない。

SB11 (第7図)

D-6・7区から検出された1間分の柱穴列で、柱間は2.54mを測るが、全容は不明である。

S P236の覆土は黒褐色土・暗褐色土で、版築状の可能性がある。S P342は、SH08の壁溝を切っていることから、SH08より新しいことがわかる。

2) 埋葬土坑 (SF)

SF01 (第13図・34図・35図)

C-10・11区、D-10・11区から検出された。規模は、短径が上端で1.45m、底面で1.2mを測り、長径は上端で2.5m、底面で2.25mを測る。確認面からの深さは、最深部分で75cmを測る。形状は、隅円の長方形を呈し、長軸の南東側に半円形のテラスが付く。底面の北東隅は、20cmほど高く掘り残されていた。土層の観察からは、棺の痕跡は窺えないが、形状から埋葬土坑と判断した。

第34図-23～25、第35図-26～41の土器が出土した。器種は、壺、甕、高坏、脚付き鉢がある。

SF02 (第14図・35図・36図)

E-14区から検出された土器棺墓である。確認面の長径71cm、短径59cmの楕円形の土坑に、壺を埋納したものである。第36図-43は、第35図-42の口縁部で、口縁部を南に向けて寝かせて、第36図-45の壺底部を棺の蓋としていた。

3) 竪穴住居跡 (SH)

SH01 (第15図・16図・36図)

B-14区から検出された住居跡で、大半が調査区外に及んでいる。S P02の西側からS P04の西側までの壁面が直線的で、北側に続く壁面も直線的である。主柱穴は、掘り方からの深さ46cmを測るS P02、62cmを測るS P04、58cmを測るS P05が考えられる。炉は、石囲い炉と石囲い炉の南約30cmから検出された地床炉があり、地床炉から石囲い炉への造り替えが考えられる。主柱穴と考えられるS P04とS P05が接近していることから、住居の造り替えも想定される。石囲い炉は、長径10～60cmを測る地山の礫を使用したもので、炉の内部に堆積した2層中に長径0.5～1cmの炭が比較的多く混入し、3層中にもわずかに炭が混入していた。第36図-46～57の土器が出土した。

SH02 (第17図・19図・36図)

B-11・12区、C-11・12区から検出され、東西4.15m、南北約3.5mを測る長方形を呈する。幅約20cm、深さ約5cmの壁溝が全周する。土層の観察から、SH02はSH03を切ると判断される。炉は確認されず、主柱穴は明らかではない。第36図-59の土器は、位置的にS P130と重なるが、SH02の壁溝底のレベルより高い位置で出土したことから、SH02に伴うものと考えられる。

SH03 (第18図・19図・36図)

B-12区、C-11・12区から検出されが、確認面から掘り方まで4～6cmの残存しかない。南西壁面が直線状を呈し、他は円弧をえがく。A-A' B-B' C-C' D-D' ラインの柱穴を主柱穴と判断した。距離は、A-A'間で1.85m、B-B'間で1.67m、C-C'間で1.64m、D-D'間で1.78m

を測る。S P 130 の南側から炉跡と考えられる焼土が検出され、焼土の下から柱穴が検出された。

主柱穴と考えられるS P 129 から第36 図-58 が出土したが、祭祀に関わるものと考えている。

SH04 (第19 図)

B-8 区から検出された住居跡で、大半が調査区外に及ぶ。壁溝は、断面、平面ともに確認していない。中央から検出された柱穴は、SH04 の覆土を切っていることから、SH04 より新しい時期のものである。

出土した甕の口縁端部外面にキザミ目のないものが存在することと、壁面が直線的であることから、古墳時代に降る可能性がある。

SH05 (第20 図～22 図・36 図)

B-2・3 区、C-2・3 区から検出された。壁際に壁溝がめぐり、SH06 に壊されていて、詳細を知り得ない。主柱穴は、北側の壁から約1.7～1.9mの位置に存在するS P 293・S P 289、これらと組み合わせると考えられるS P 259・S P 291 を想定した。主柱穴間の距離は、S P 259・291 間で4.25m、S P 293・289 間で3.85m、S P 259・293 間で4.40m、S P 291・289 間で4.55mを測る。推定される住居は、東西約7.5m、南北約8.4mの隅円の長方形となる。第36 図-60～68 の土器が出土した。

SH06 (第20 図～22 図・37 図・40 図・41 図)

B-3・4 区、C-3・4 区から検出された住居跡で、北側のSH05、南側のSH07 を壊している。北側の壁は検出されなかったが、A-A' 断面では壁溝と思われる掘り込みが確認できたことから、壁溝が全周するものと思われる。南壁溝から西壁溝にかけて、直径26～44cmのピットが検出された。ピットの間隔は一定ではなく、38～105cm とばらつきがある。ピットの北から5番目と6番目は底面のレベル46.75m、壁溝からの深さ21cm、26cmを測り、他のピットより深くなる。主柱穴は、壁から約1.5～1.6mの位置に存在するS P 244・258・337・296 を想定した。主柱穴間はS P 244・296 間で4.15m、S P 258・337 間で4.16m、S P 244・258 間で4.25m、S P 296・337 間で4.36mを測る。住居は、壁面の残る東西で約7.45mを測り、南北は8.25mと推定され、隅円の長方形を呈すると考えられる。

SH05・06 内からは、竪穴住居跡の主柱穴と考えられるものが、さらに検出されている。S P 262・293・290 である。主柱穴間の距離は、S P 293・290 間で4.83m、S P 262・293 間で5.28mを測り、SH05・06 より大きな住居跡が存在した可能性がある。

SH06 内からは炉跡が2箇所検出された。北側の炉は直径約55cmを測り、南から東にかけて4～5cmの土手状の高まりがある。南側の炉は直径35cmを測り、赤褐色化した部分が薄く、すでに削平を受けていると考えられる。残存状況の良好なことから、北側の炉が新しいと考えられる。

住居内から、第37 図-69～78 の土器、第40 図-111、第41 図-112・113 の砥石が出土した。

SH07 (第23 図)

B-4 区、C-4・5 区から検出された住居跡で、大半をSH06 に壊されている。残存部分は、東西約5m、南北約2.5mである。弥生～土師器と考えられる土器の小片が出土した。

SH08 (第24 図・25 図・37 図)

C-5・6 区、D-5・6 区から検出された東西6.78m、南北7.44mを測る住居跡である。S B 09・10・11 は、この住居跡を切っている。壁際に幅22～34cmの壁溝がめぐり、その内側に幅25～35cmの土手状の高まりがある。住居の拡張あるいは縮小の痕跡と考えたが、土層の観察、平面の観察でこれを確認することはできなかった。主柱穴は、壁から1.15～1.68mの位置にあるS P 314・283・272 を想定した。主柱穴間の距離は、S P 314・283 間で4.30m、S P 383・272 間で4.48mを測る。S P 283 とS P 272 の間にあるS P 316・266 は、入り口に伴う施設等の可能性がある。炉は、南から東に

かけて3～4cmの土手状の高まりがある。住居内から、第37図-80～86の土器が出土した。

SH09 (第26図)

B-5・6区、C-5・6区から検出された東西約3.45m、南北約3.2mを測る住居跡である。土層断面図の1層下端が床面である。掘り方は、中央がいくぶん高く、壁際を少しくぼませている。壁溝は確認されなかった。炉は中央北寄りから検出され、北から南に少し傾斜している。住居に伴う柱穴は、明らかではない。住居内から、弥生時代後期の土器片が出土している。

SH10 (第27図)

B-6区から検出された住居跡で、確認部分の東西長約2.2m、南北長約4.2mを測る。壁溝は、壁の北西から調査区壁までと、南端に認められたが、東西方向の土層断面では認められなかった。土層の4層の下端が床面で、9層は非常に固くしまっている。炉は、南端が約4cm盛り上がり土手状を呈している。床面から、弥生時代後期に位置づけられる土器片が出土した。

SH11 (第28図・29図・37図・38図)

C-6～8区、D-6～8区にかけて検出された東西5.70m、南北5.63mを測る隅円方形の住居跡で、南東隅はSH12と重なっていて明確にできなかった。住居跡の中央を南北に切る溝状と思われる遺構が存在した。この遺構の覆土から、第41図-114の紡錘車形石製模造品、116の鉄鎌が出土した。

主柱穴は、SP303・348・343・280を想定した。SP303は、SB08の柱穴と重複していると考えられる。主柱穴間の距離は、SP303・348間で2.78m、SP343・280間で2.56m、SP303・343間で2.97m、SP348・280間で2.57mを測る。炉・竈の類は検出されなかった。

住居の南東壁近くから、第37図-88～第38図-96の土器がまとまって出土した。

SH12 (第31図・38図)

B-7・8区、C-7・8区から検出された住居跡で、SB07の柱穴で炉の西端が壊されている。確認した規模は、東西約3.15m、南北約3.85mを測る。主柱穴は、SP311・313・319を想定した。主柱穴間の距離は、SP311・319間で2.48m、SP311・313間で2.02mを測る。炉は、北東隅を除き、周囲に1.2～1.5cmの土手状の高まりがある。住居内から、第38図-97・98が出土した。

4) 土坑 (SK)

SK01 (第31図)

I-18区から検出され、規模は、東西約1.25m、南北約1.35mを測る。最深部分で、確認面からの深さ38cmを測る。1・2層が、3・4層を切っていると考えられる。出土遺物はない。

SK02 (第31図)

G-15・16区から検出され、規模は、東西約1.25m、南北約1.85mを測る。底面の北端に、一段高いテラス状を呈する部分がある。最深部分で、確認面からの深さ30cmを測る。出土遺物はない。

SK03 (第31図・39図)

H-15区、I-15区から検出された土坑で、南北方向の攪乱溝が2本縦断し、残存状況は良好ではない。残存する短径約1.75m、長径約2.1mを測る。最深部分で、確認面からの深さ45cmを測る。覆土は黒色土で、第39図-99～101の土器が出土した。

SK04 (第32図)

G-14・15区、H-14区から検出された。短径約1.45m、長径約1.7mを測る。確認面からの深さ、70cmを測る。覆土は黒色土、黒褐色土である。出土遺物はない。

SK05 (第32図)

F-14区、G-14区から検出され、遺構の大半は調査区外に及ぶ。確認面からの深さ72cmを測る。

出土遺物はない。

SK06 (第32図)

E-14・15区、F-14・15区から検出された土坑で、長径約2.4mを測る。最深部分で、確認面からの深さ49cmを測る。覆土は黒色土・黒褐色土である。出土遺物はない。

SK07 (第33図・39図)

C-8区から検出された土坑で、北端はSH12に切られる。底面は、南から北に向かい緩やかに傾斜し、断面形は浅い皿状を呈する。第39図-102の土器は、底面から約10cm浮いた状態で出土した。

SK08 (第33図)

B-2区から検出された土坑で、遺構は調査区外に及んでいる。覆土中に土器の小片多数と長径10cm程度の礫が数点混入していた。時期は、出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。

ii) 遺物の概要

1) 土器・土製品 (第34図～39図)

1は鉢、体部外面にハケ目を施す。2は壺である。1・2は、古墳時代前期に位置づけられる。

3～6は壺、7が甕、8は鉢の破片である。4の体部には横方向の押圧文が、5は波状文の間に羽状文が施される。6は、ハケ後にミガキが施される。8は、指頭痕が明瞭に残り、器壁の厚さも一定ではない。3～6は、弥生時代後期で、7・8は古墳時代前期に降る可能性がある。

9～16が壺、17は高坏の脚である。11の外面にはハケ目、刺突による羽状文が、内面に波状文が施される。13の口縁部内面は、縄文が施される。16の外面には、斜め方向の刺突文、ハケ、波状文が施される。これらの土器は、弥生時代後期前半に位置づけられる。

19は壺で、口縁部の外面には、幅広のキザミが施される。弥生時代後期前半に位置づけられる。

20・21は甕で、21は、口径14.2cm、体部最大径22.8cmを測る。古墳時代中期に位置づけられる。

22は、鉢の口縁部で、外面にミガキが、内面に板ナデが施される。器種は、不明である。

23～31が壺、32～38が甕、39・40は高坏、41は脚付きの鉢である。23の外面にはハケ目、内面端部にキザミ、その下に波状文が施される。24の外面には、円形浮文、羽状文、波状文が施される。30の外面には、赤彩が残る。34～38の台付き甕のうち、34の接合部には、粘土紐が巡る。39の高坏の口縁端部外面にはキザミが、40の接合部には羽状文が施される。41の脚付きの鉢は、体部外面にハケ目、内面にミガキが施される。これらの土器は、弥生時代後期前半に位置づけられる。

42～45は、SF02出土で、42は、体部最大径37.5cmを測る。43は42の口縁部で、口径23.4cmを測り、外面に横ナデとハケ目、内面にハケ目が施される。44の頸部外面にハケ目が、他はナデが施される。弥生時代後期前半に位置づけられる。

46は、沈線による区画の中に半截竹管状工具による押引き文が施される。49は、半截竹管状工具による平行沈線が施される。50は、北屋敷式の深鉢で、口縁端部の平坦面にヘラ状工具によるキザミが、外面はナデ仕上げの上に連続三角押文による連続弧文が施される。51の口縁部外面は、ナデ仕上げに粘土紐の貼付け文がある。52～55の口縁部破片は、端部に縄文が施され、外面に半截竹管状工具による平行沈線文が施される。56・57は、半截竹管状工具による平行沈線文・連弧文が施される。46～51が縄文時代中期中葉末に、52～57は中期後葉に位置づけられる。

59の壺は、体部外面に入念なミガキを施し、頸部に縄文を施す。古墳時代前期に位置づけられる。

58の鉢は、口縁部に直径3～5mmの円孔が2個ずつ開く。口縁端部に押圧痕があり、調整は、ハケ目とナデが施される。外面に赤彩が残る。古墳時代前期に位置づけられる。

60・61は甕、62～64は壺、66は高坏か器台の脚で4方に円孔が開く。67の鉢は、器高6.05cm、口径11.55cm、底径6.05cmを測る。68は、取っ手である。古墳時代前期に位置づけられる。

69～73は壺、74・75は甕である。76・77は高坏で、77の坏部内面に赤彩が残る。78は高坏形のミニチュア土器で、器高現存3.0cmを測る。土器は、弥生時代後期前半と古墳時代前期がある。

79は、SH08下層の溝状遺構から出土した壺の口縁部で、外面にハケ目とナデ、内面にナデを施す。80～86が、SH08出土である。80～83が壺、84～86は甕である。82の外面はミガキが施される。体部上半に赤彩が残る。83は、ミニチュアの可能性がある。80～86は古墳時代前期に、79は弥生時代後期に位置づけられる。

87はSH09出土の高坏の脚で、外面にミガキが施される。

88～91が甕、92は甗、93～95が高坏、96は鉢である。89は、頸部付近にミガキを施す。91は、器高24.2cm、体部最大径16.5cmを測る。92は、底部に8個の円孔が開く。体部最大径の2分の1以上が残るが、取っ手の痕跡はない。91と92は、胎土に直径1cm近い石が比較的多く混入し、輪積み痕を明瞭に残し、色調も共通する。95は口径18.6cmを測り、坏部の器壁は93・94より厚い。96は、体部外面にミガキ、口縁部内面はハケ後にナデ、他はナデが施される。これらの土器は、古墳時代中期中葉に位置づけられる。

97は壺、98は脚付きの鉢である。97の外面は、沈線状のハケ、刺突による羽状文、横方向の押圧文で飾る。98の調整は、ハケとミガキである。弥生時代後期に位置づけられる。

99は、100の頸部である。100の体部外面は、縦方向のハケ目の間に縦の波状文を施す。体部下端から底部にかけてミガキを施し、内面は板ナデである。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

102の壺は、外面の頸部付近にナデ、肩部に刺突による羽状文、体部にハケ、体部下端から底部にかけてミガキを施す。内面にミガキを施す。弥生時代後期に位置づけられる。

103は、SH06を切ると考えられるSP243出土の鉢で、口縁部の内外面を横ナデし、体部内外面はハケを施す。104は、SH08と重なるSP275出土の鉢で、口縁部の内外面を横ナデ、体部外面をナデ、内面を工具ナデとする。105は、SH02と重なるSP101から出土した高坏の脚である。106は、SF02に混入していた縄文時代中期中葉末の深鉢胴部の破片である。

2) 石器・石製品 (第40図・41図)

107は、G-17区SP185から出土した砂岩製の打製石斧である。108は、B-14区から出土した泥岩製のスクレーパーである。109・110は、敲き石の可能性がある。109は、SH06出土で、硬砂岩製、110は砂岩製である。111～113は、砂岩製の砥石である。114は、SH11の覆土を切る遺構から出土した滑石製の模造品である。文様はなく、中心の円孔は貫通しない。

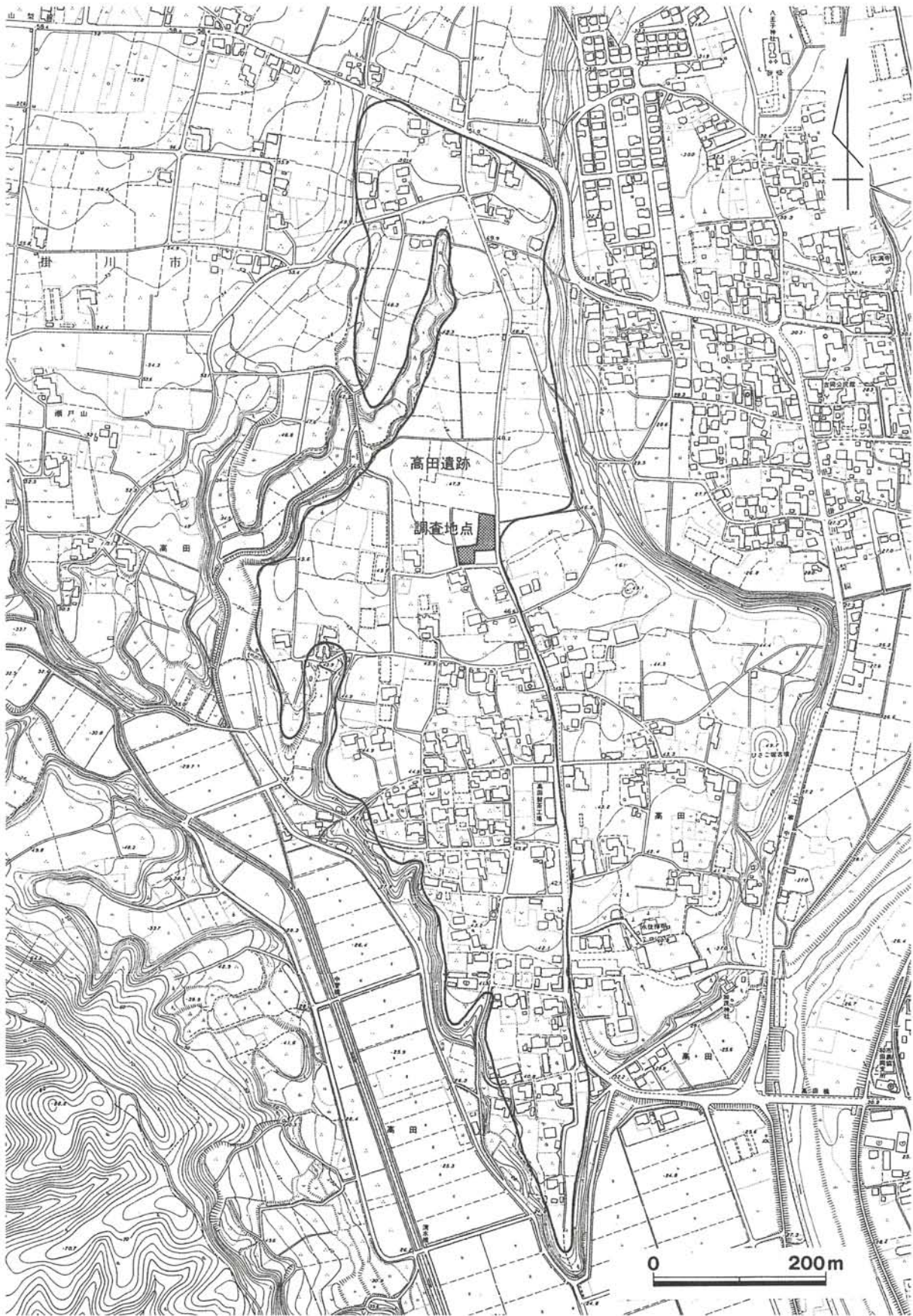
3) 金属器 (第41図)

115は、SH10の覆土から出土した鉄鎌の茎と考えられる。116は、SH11の覆土を切る遺構から出土した鉄鎌で、柄の着装部分を欠損する。

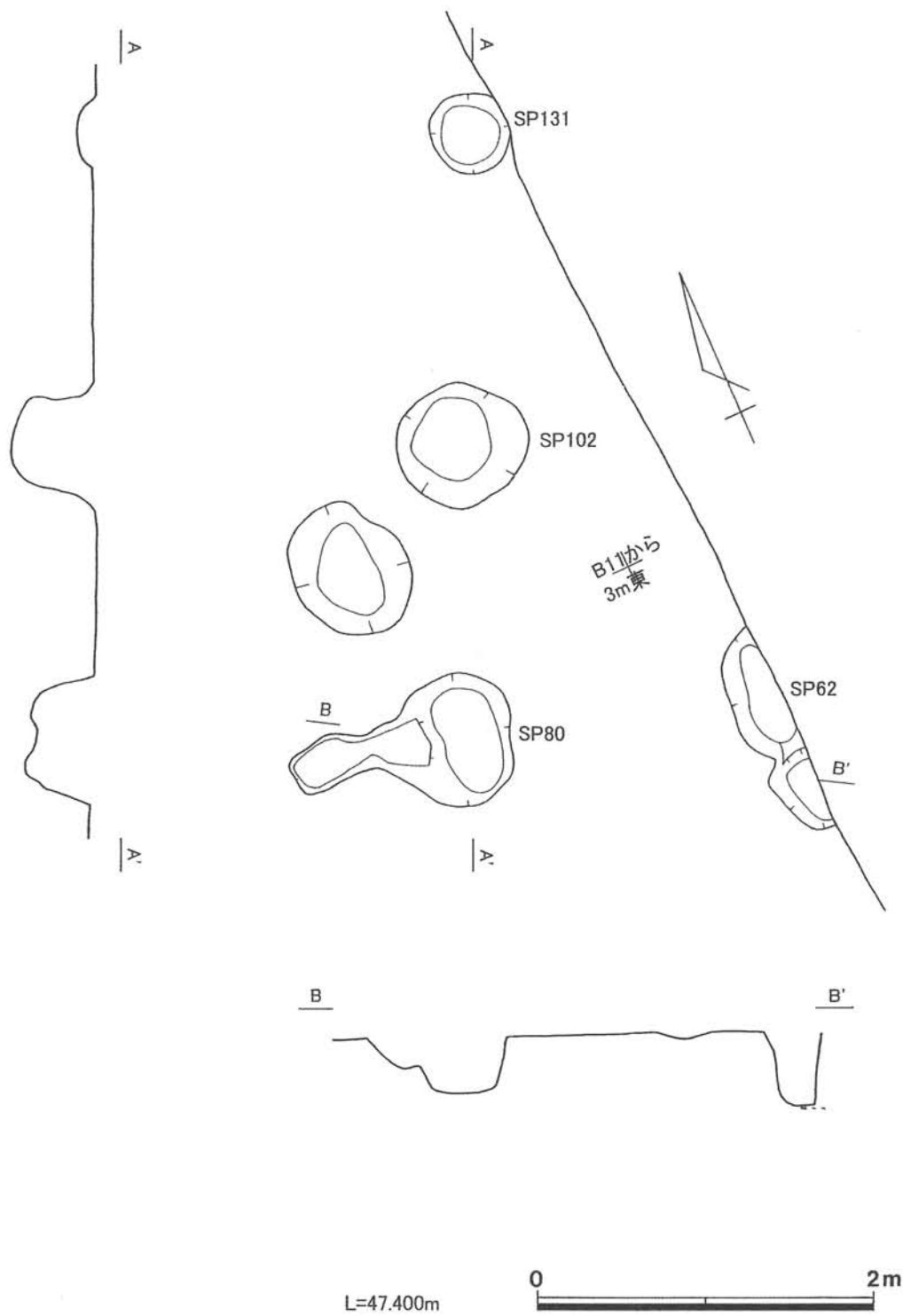
3. まとめにかえて

今回の発掘調査の成果を列記して、まとめにかえたい。

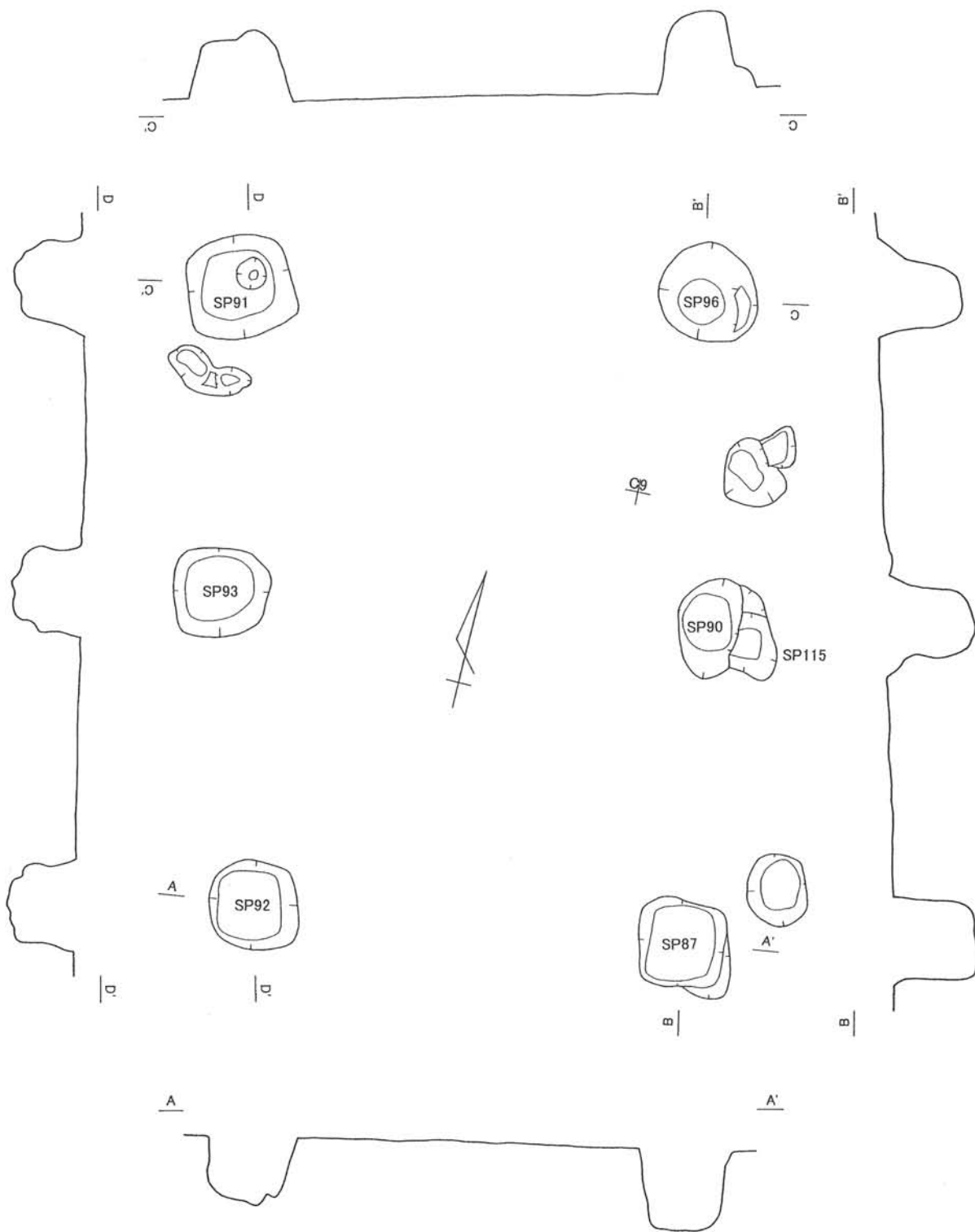
まず、周辺で検出例の少ない、縄文時代中期の竪穴住居跡の発見である。次に弥生時代後期の土坑墓・土器棺墓の発見で、これにより今回の調査地が、当時の集落の端であることが明らかとなった。古墳時代では、検出例がない大型の竪穴住居跡SH06の検出、古墳時代中期中葉の一括資料が出土したSH11の検出、祭祀に関わると考えられる石製模造品の出土等がある。



第1図 遺跡内における調査地点位置図

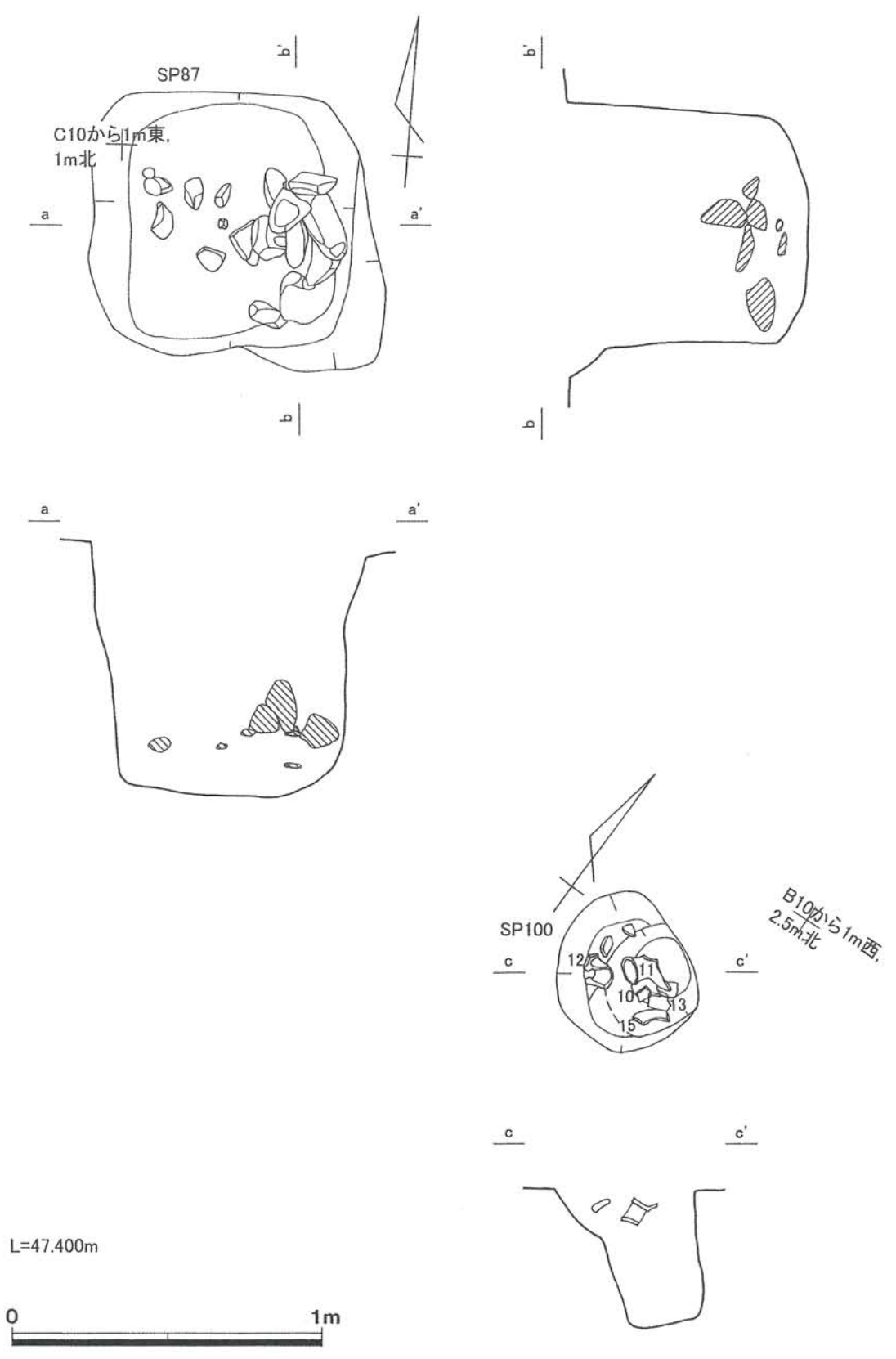


第3図 SB02実測図



L=47.700m 0 2m

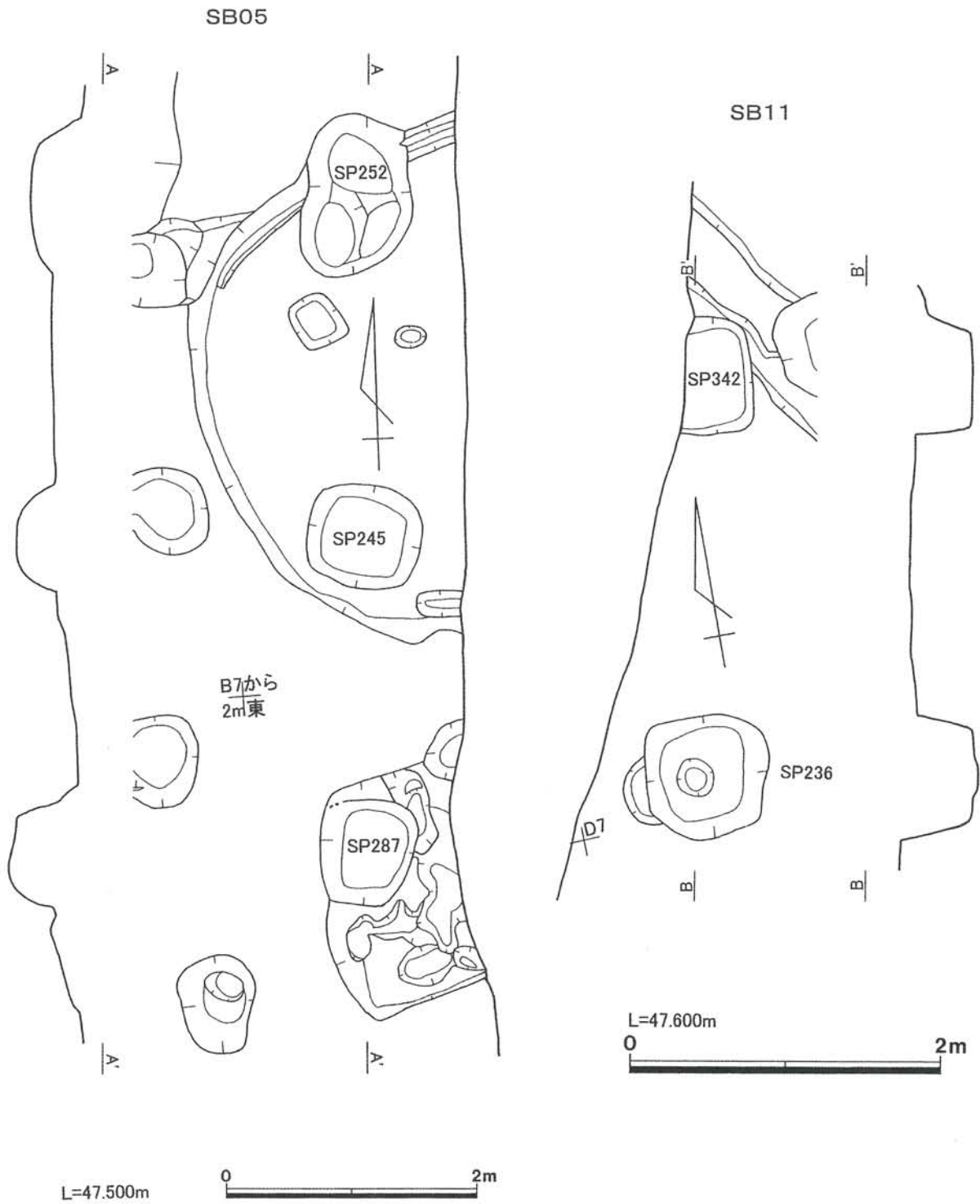
第4図 SB03実測図



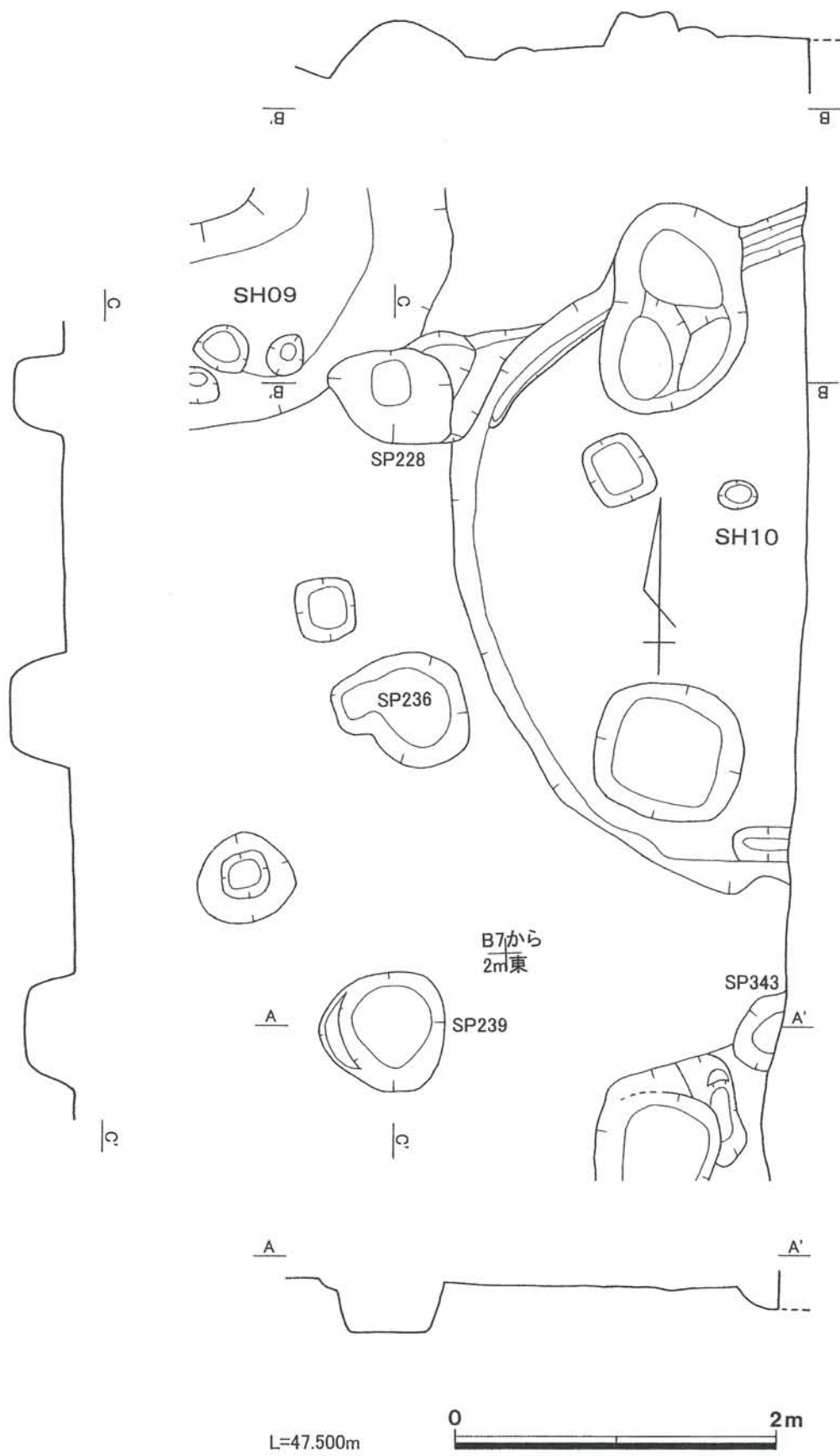
第5図 SP87・100実測図



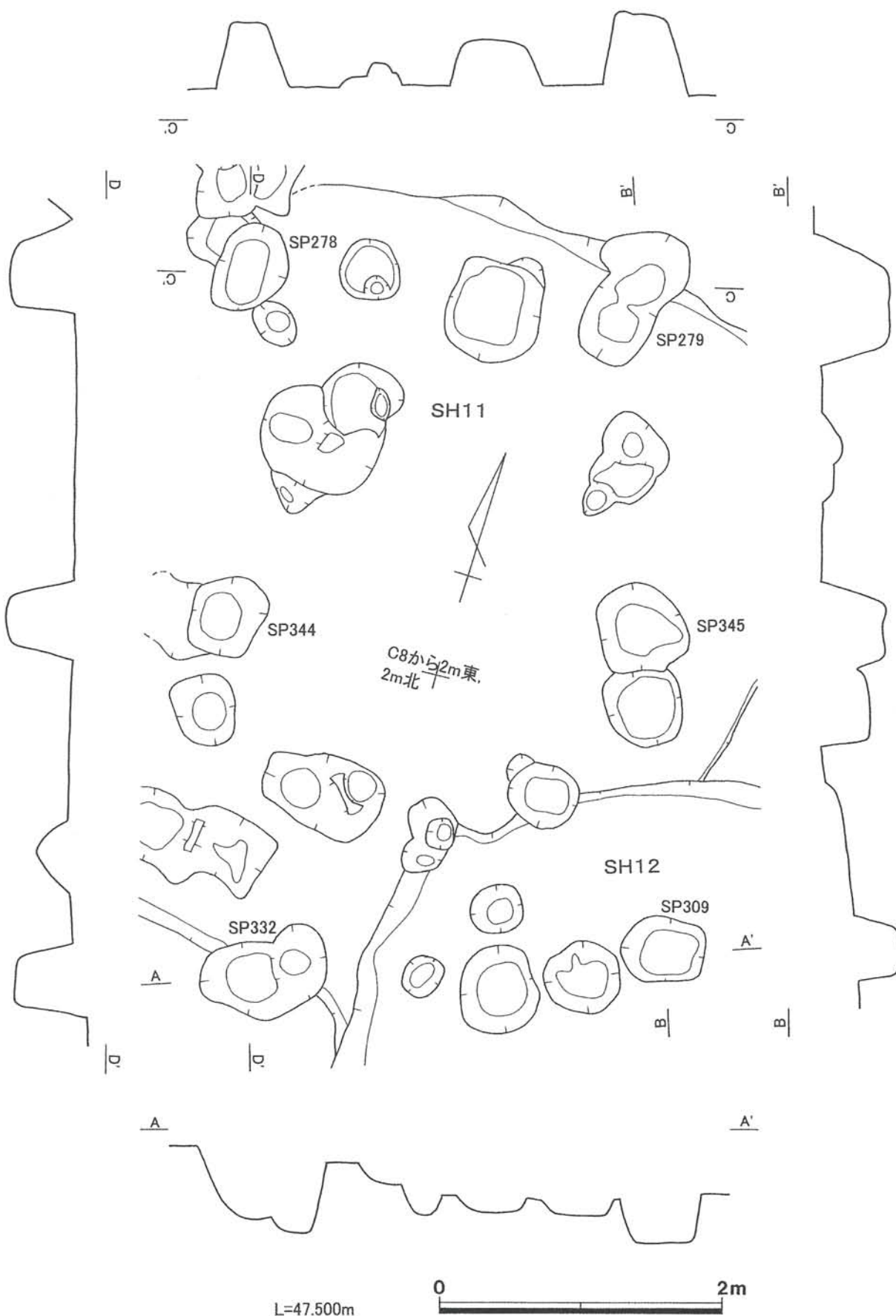
第6図 SB04実測図



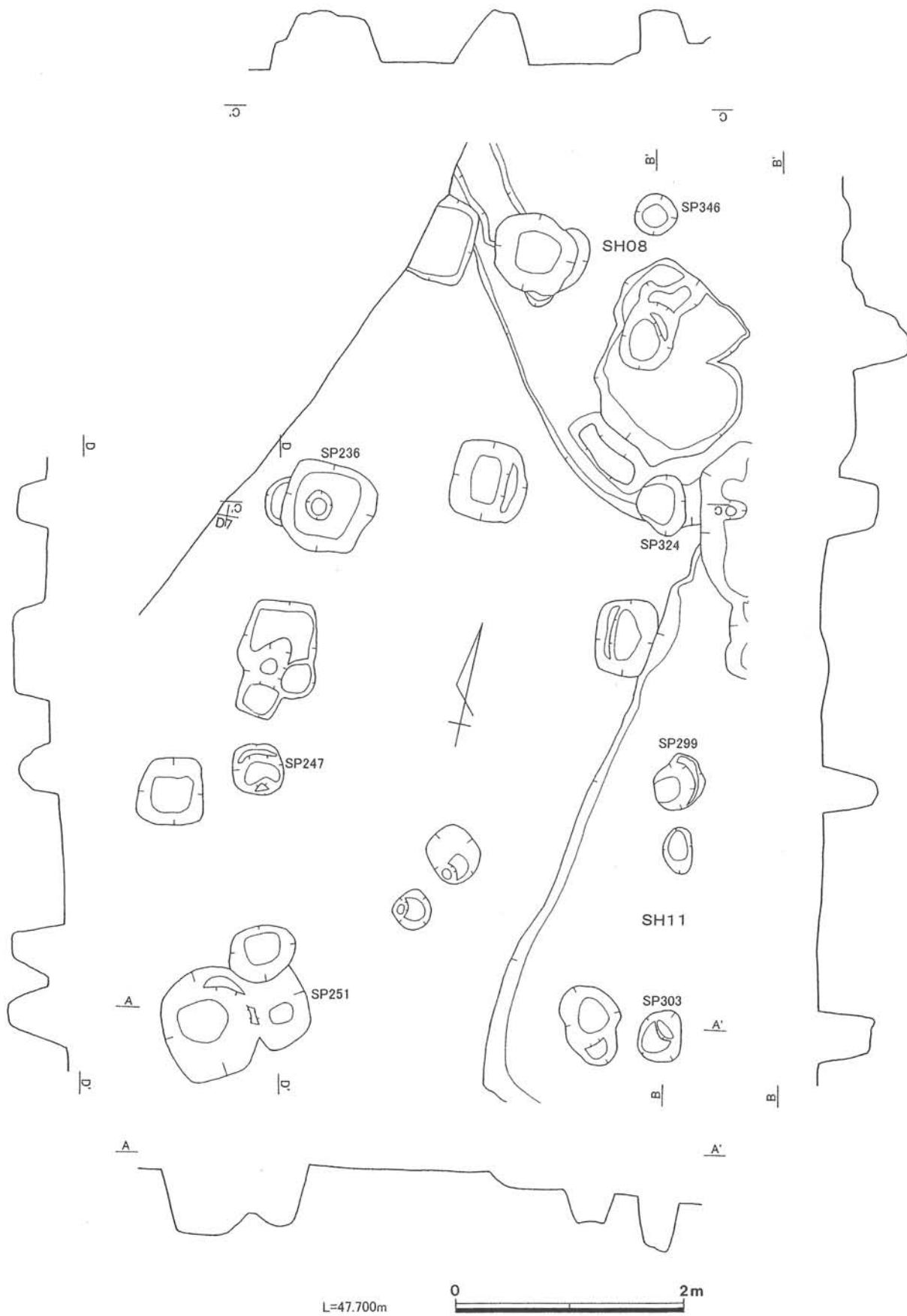
第7図 SB05・11実測図



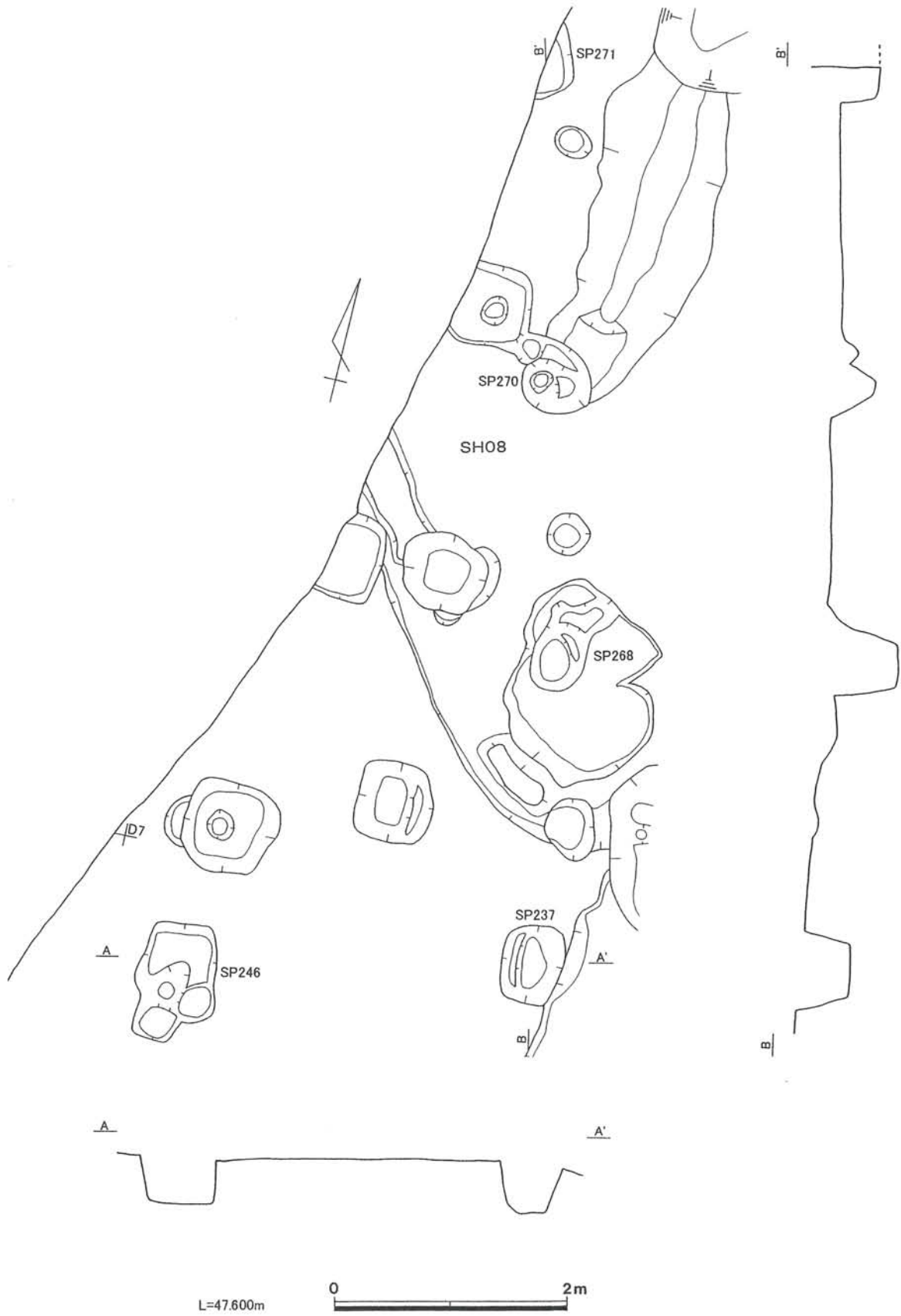
第8図 SB06実測図



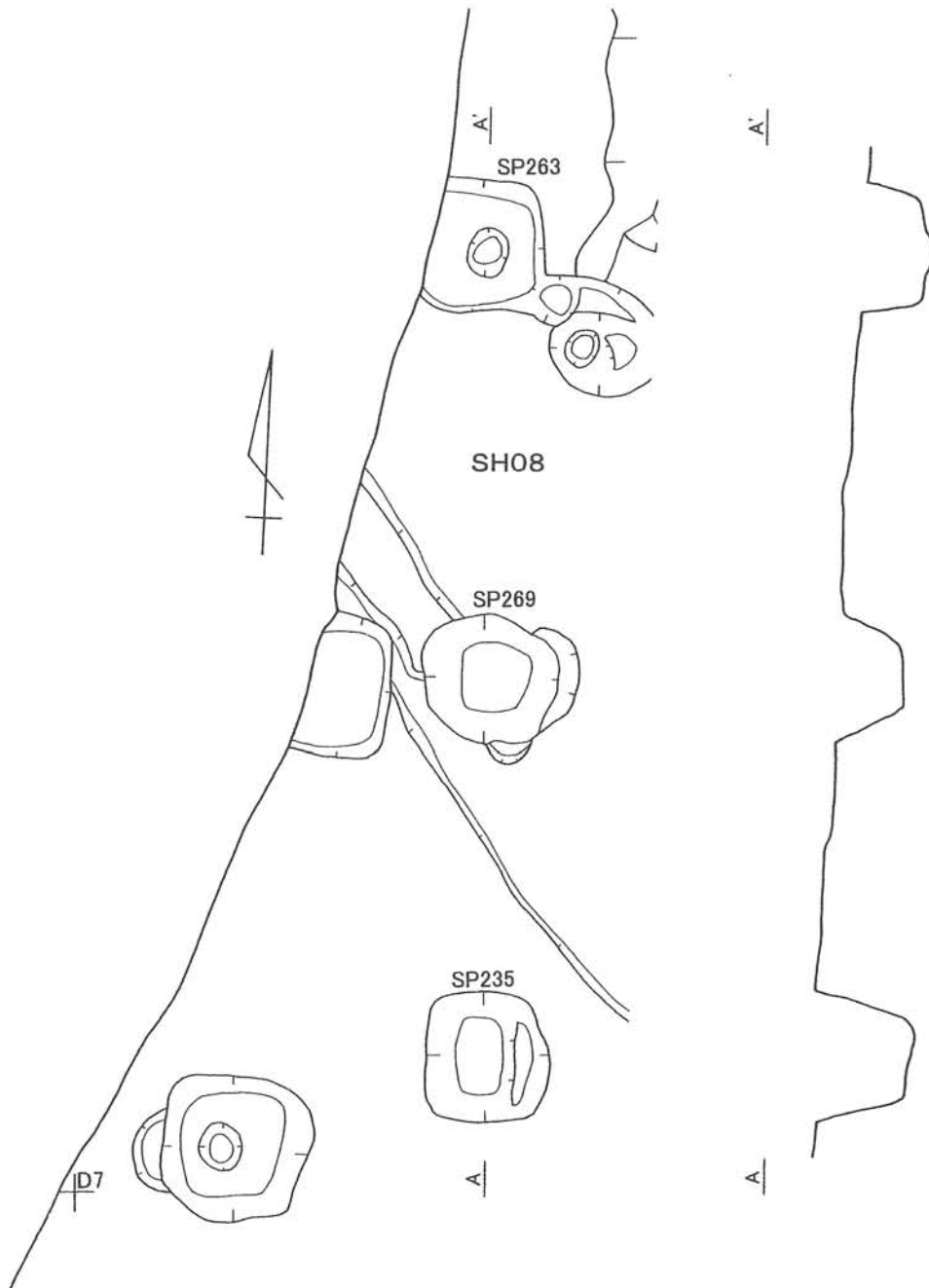
第9図 SB07実測図



第10図 SB08実測図



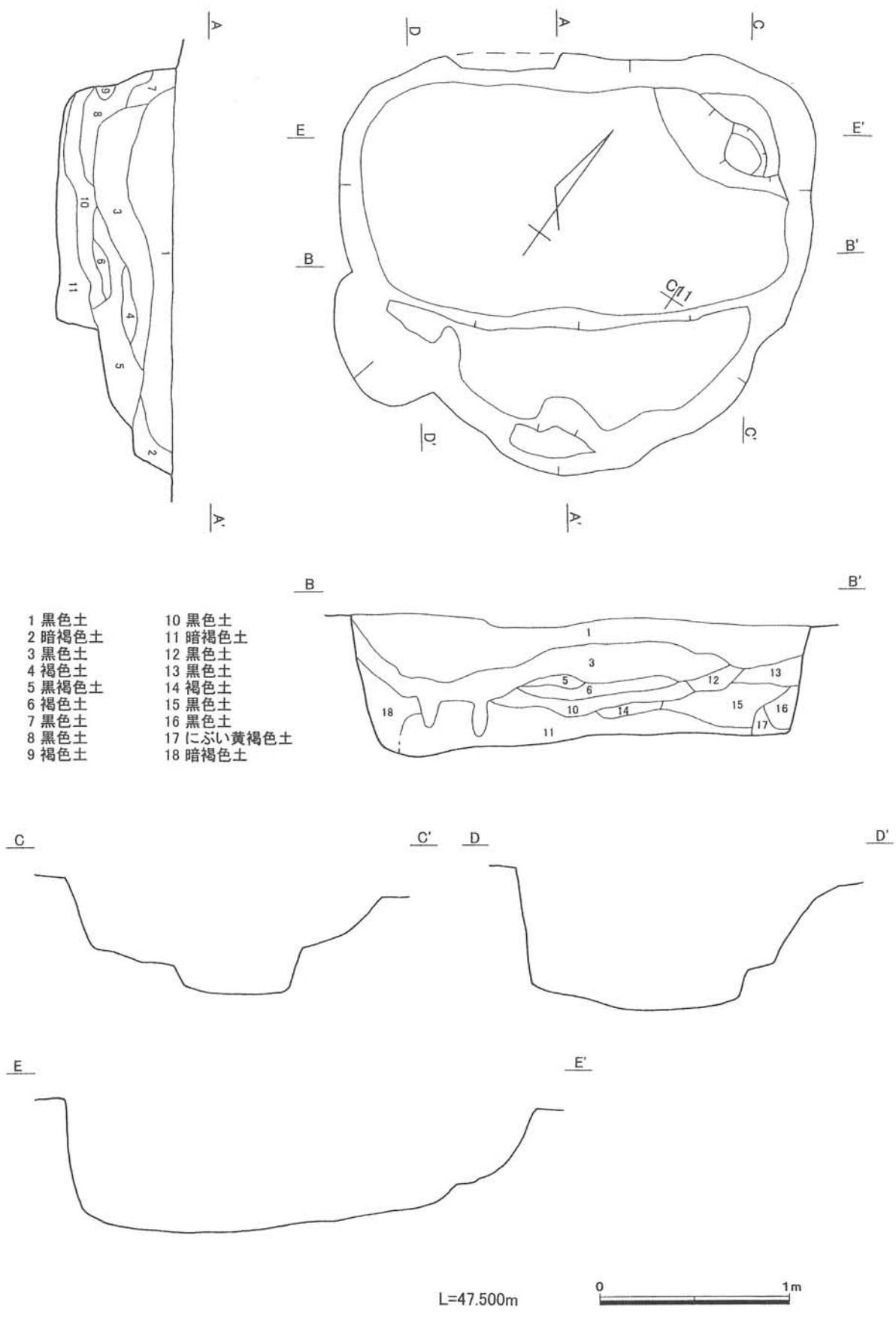
第11図 SB09実測図



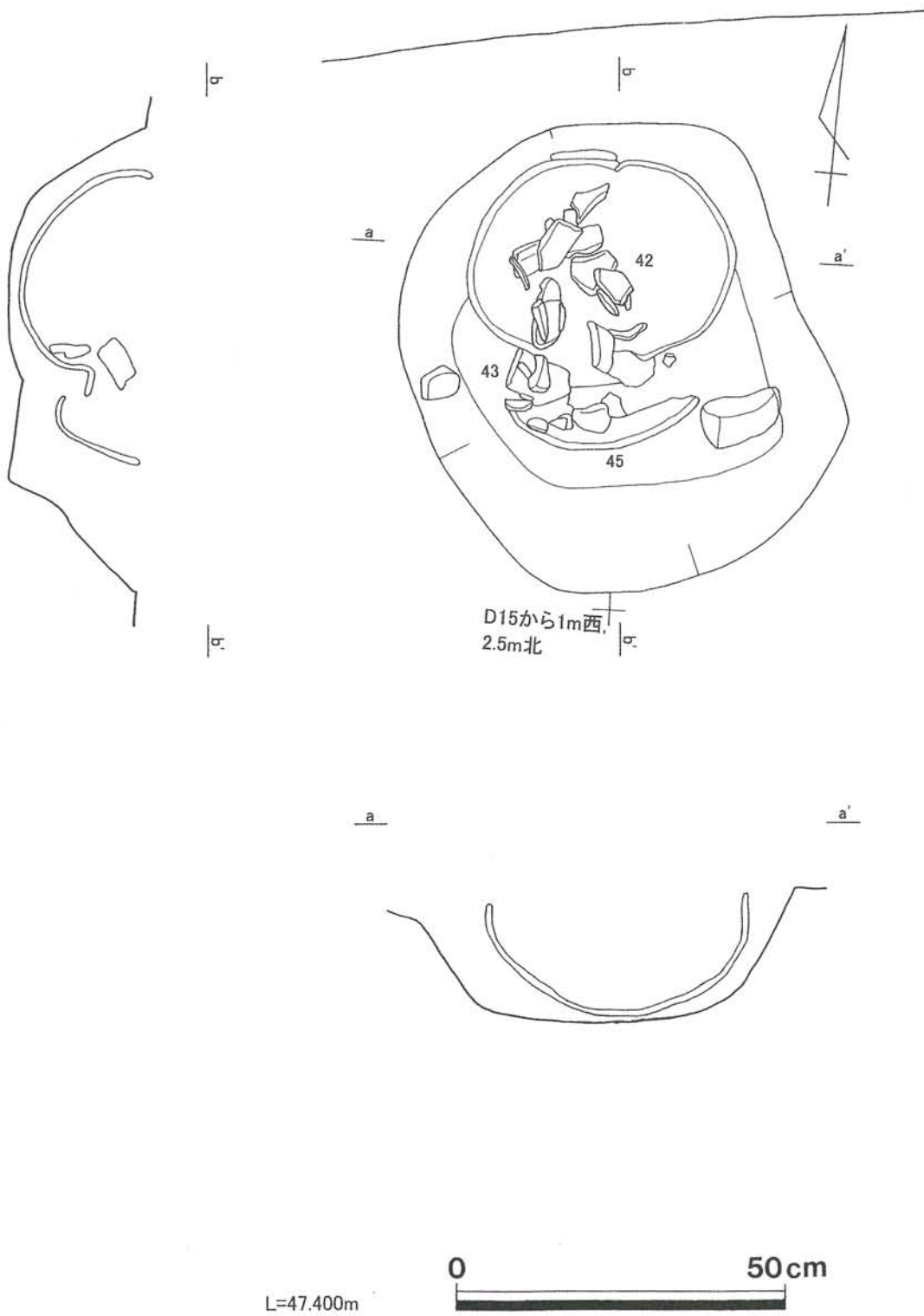
L=47.600m



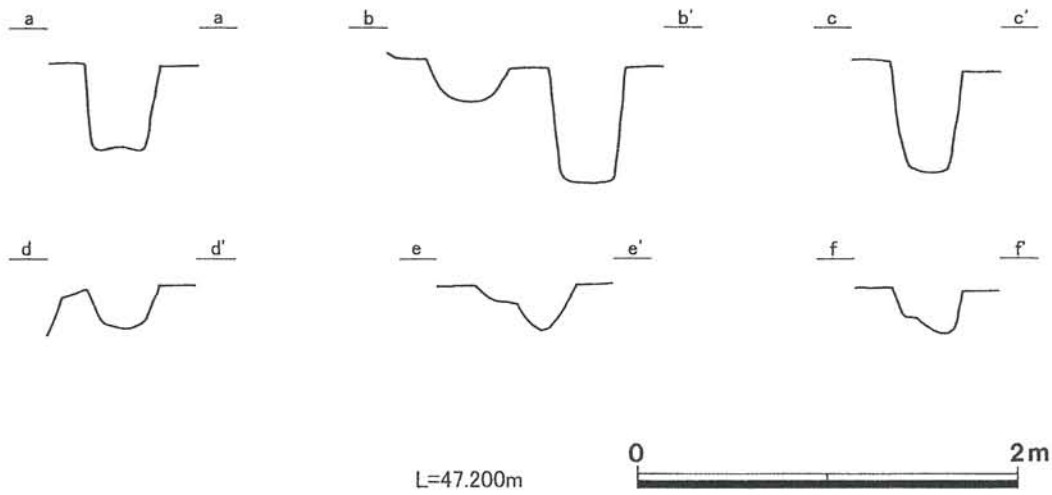
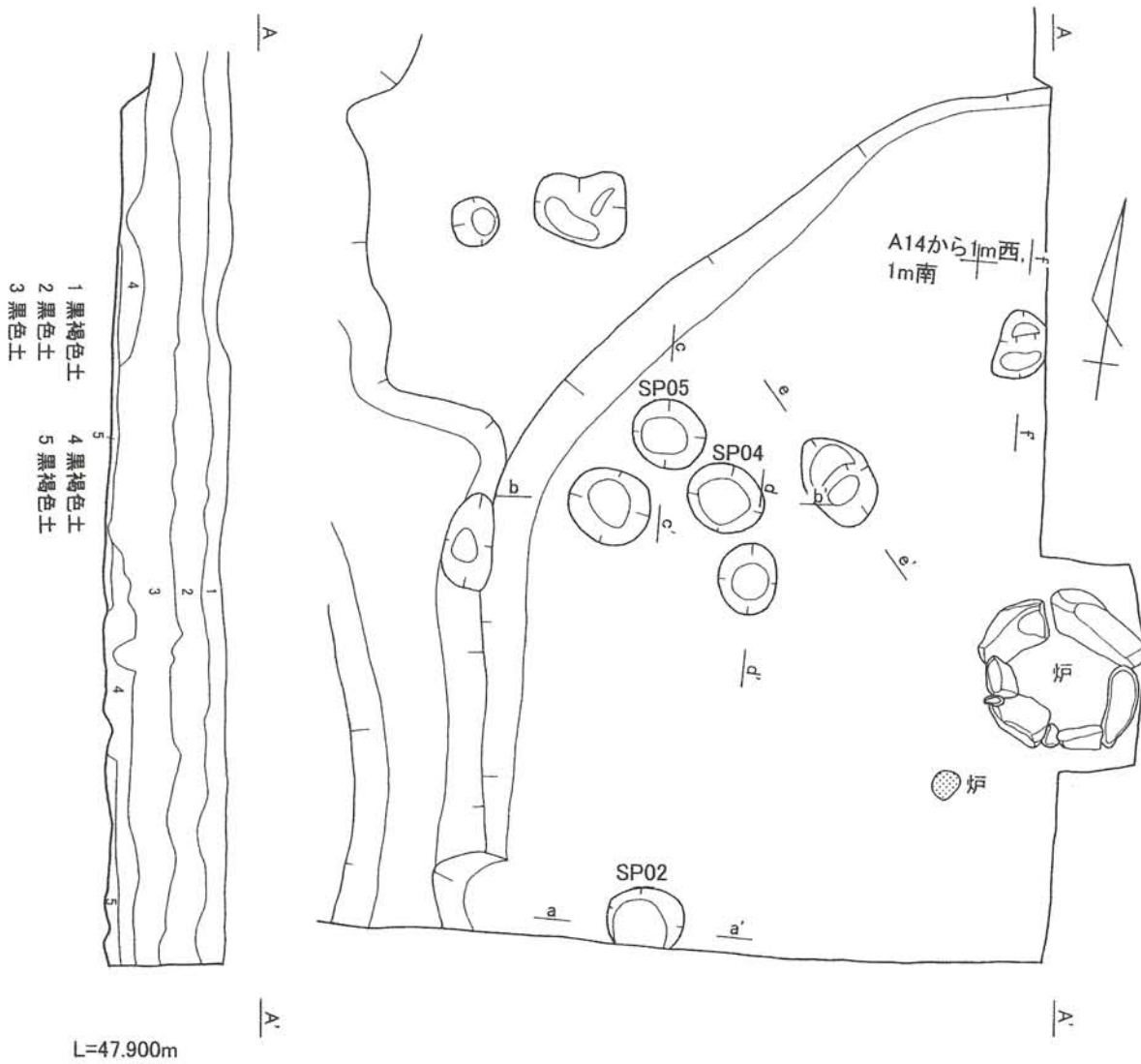
第12図 SB10実測図



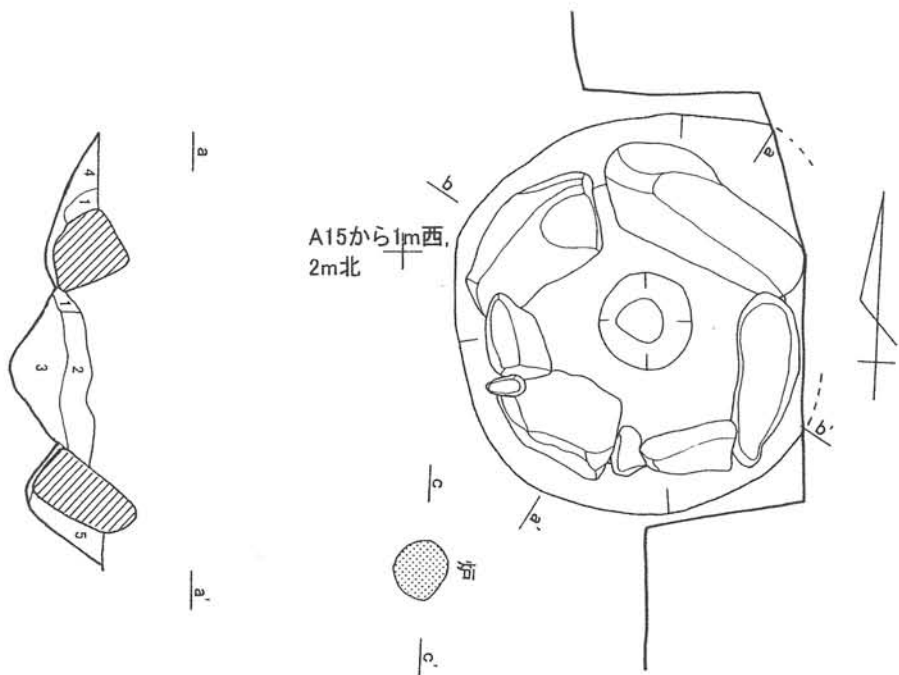
第13図 SF01実測図



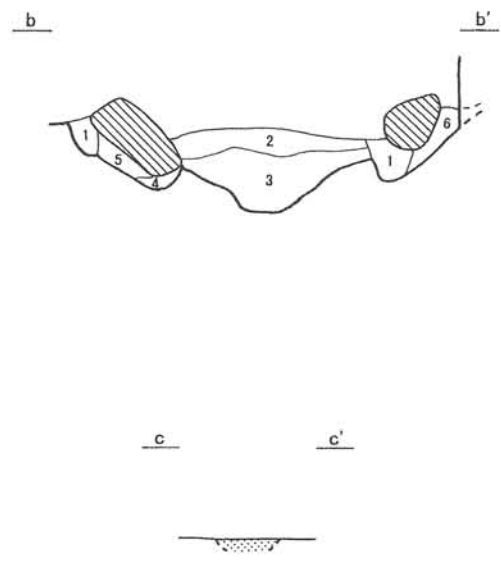
第14図 SF02実測図



第15図 SH01実測図



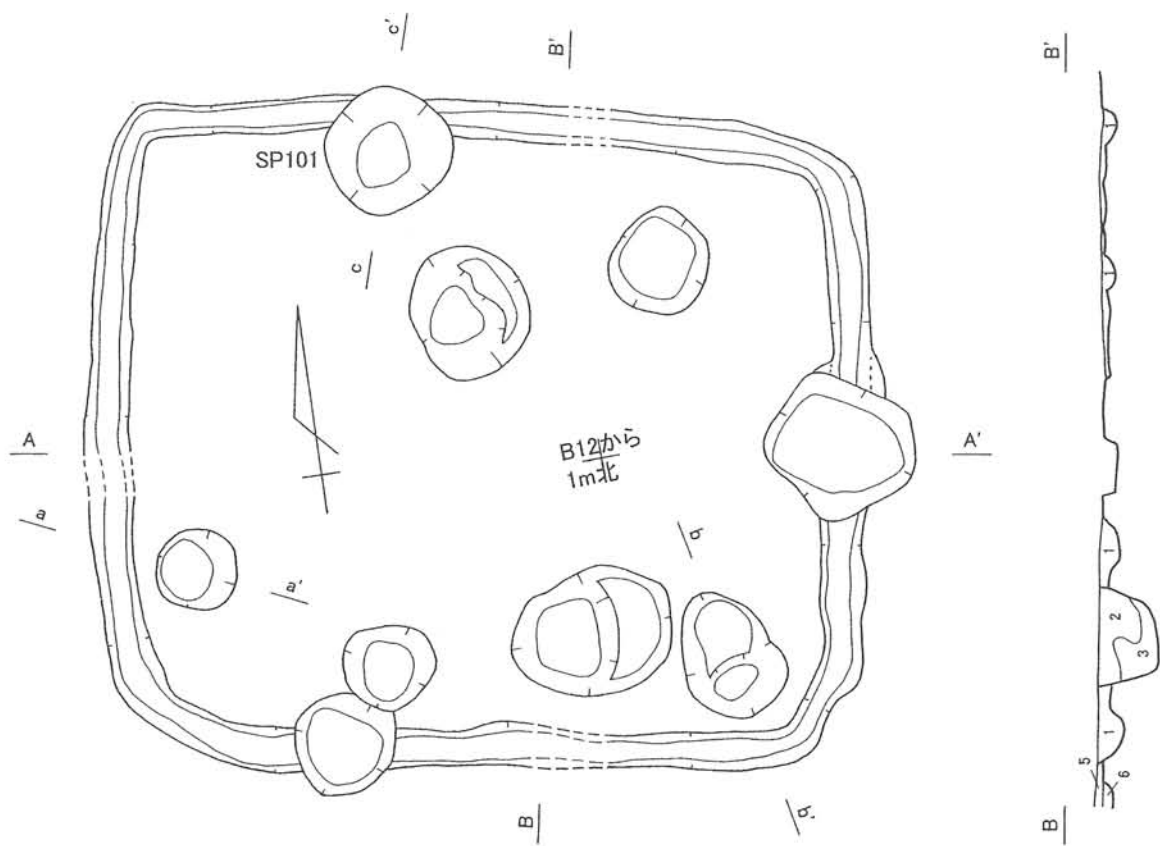
- 1 攪乱
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 黒褐色土



L=47.300m



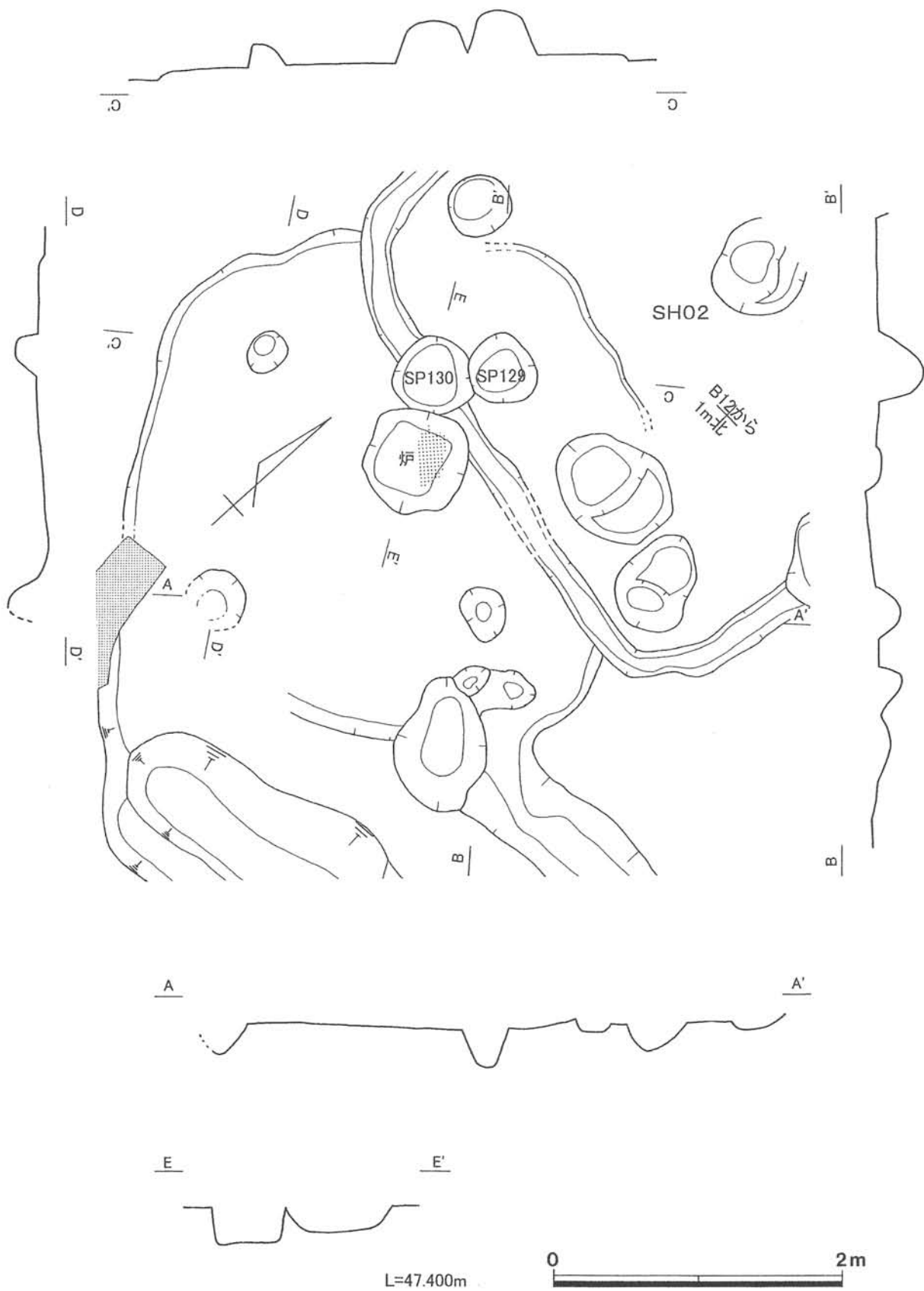
第16図 SH01炉跡実測図



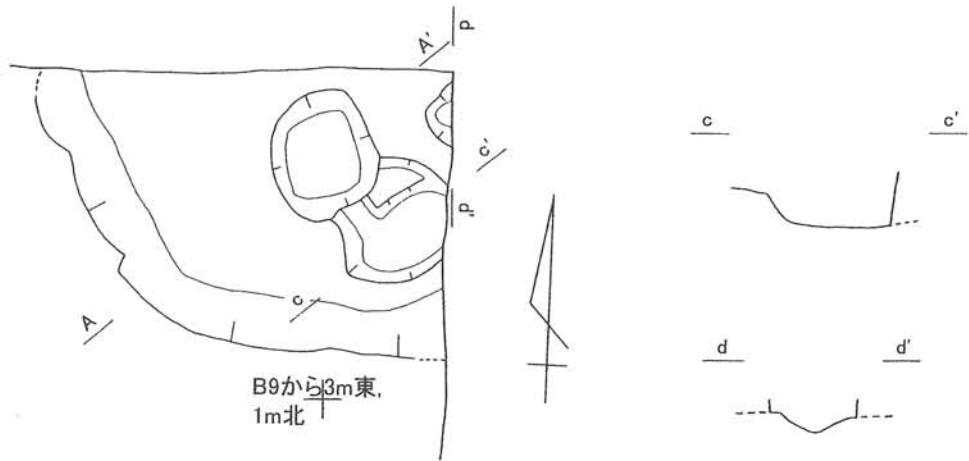
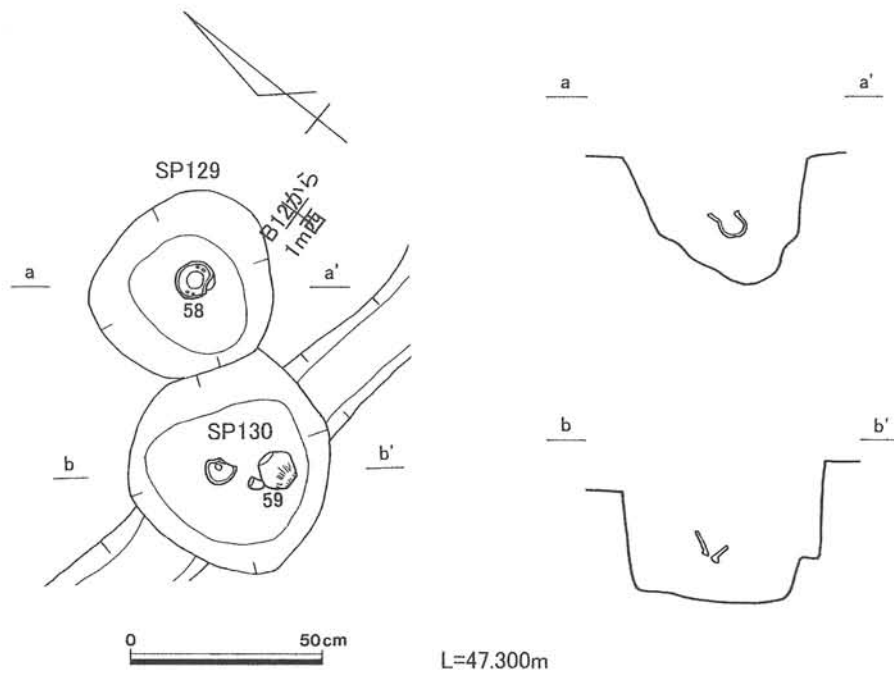
- | | |
|-----------|--------|
| 1 オリーブ黒色土 | 4 黒褐色土 |
| 2 黒色土 | 5 黒色土 |
| 3 黒褐色土 | 6 黒褐色土 |



第17図 SH02実測図

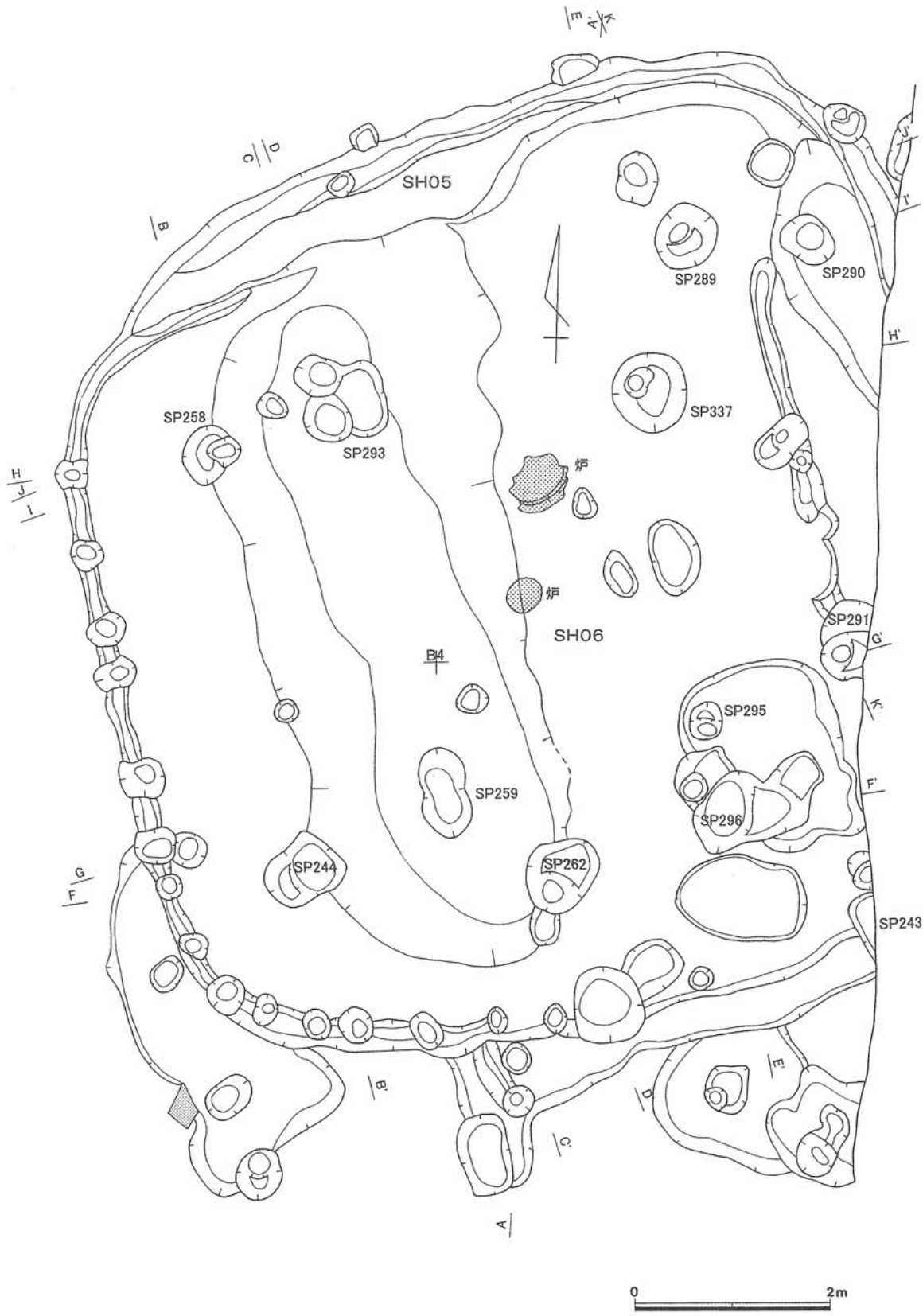


第18図 SH03実測図

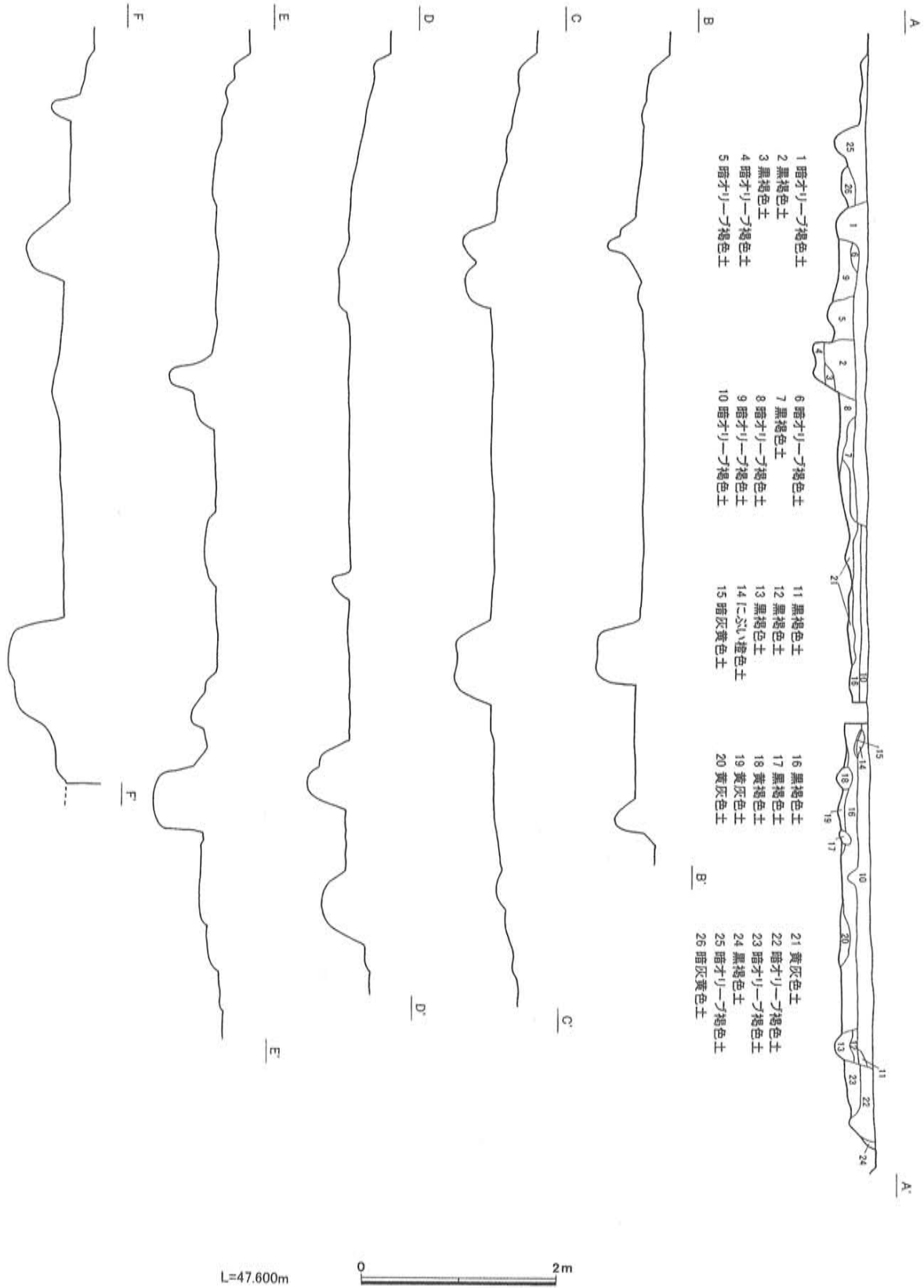


- | | |
|------------|------------|
| 1 黒褐色土 | 5 黒褐色土(貼床) |
| 2 黒褐色土 | 6 黒褐色土 |
| 3 黒褐色土 | 7 黒褐色土 |
| 4 暗褐色土(貼床) | 8 にぶい黄褐色土 |

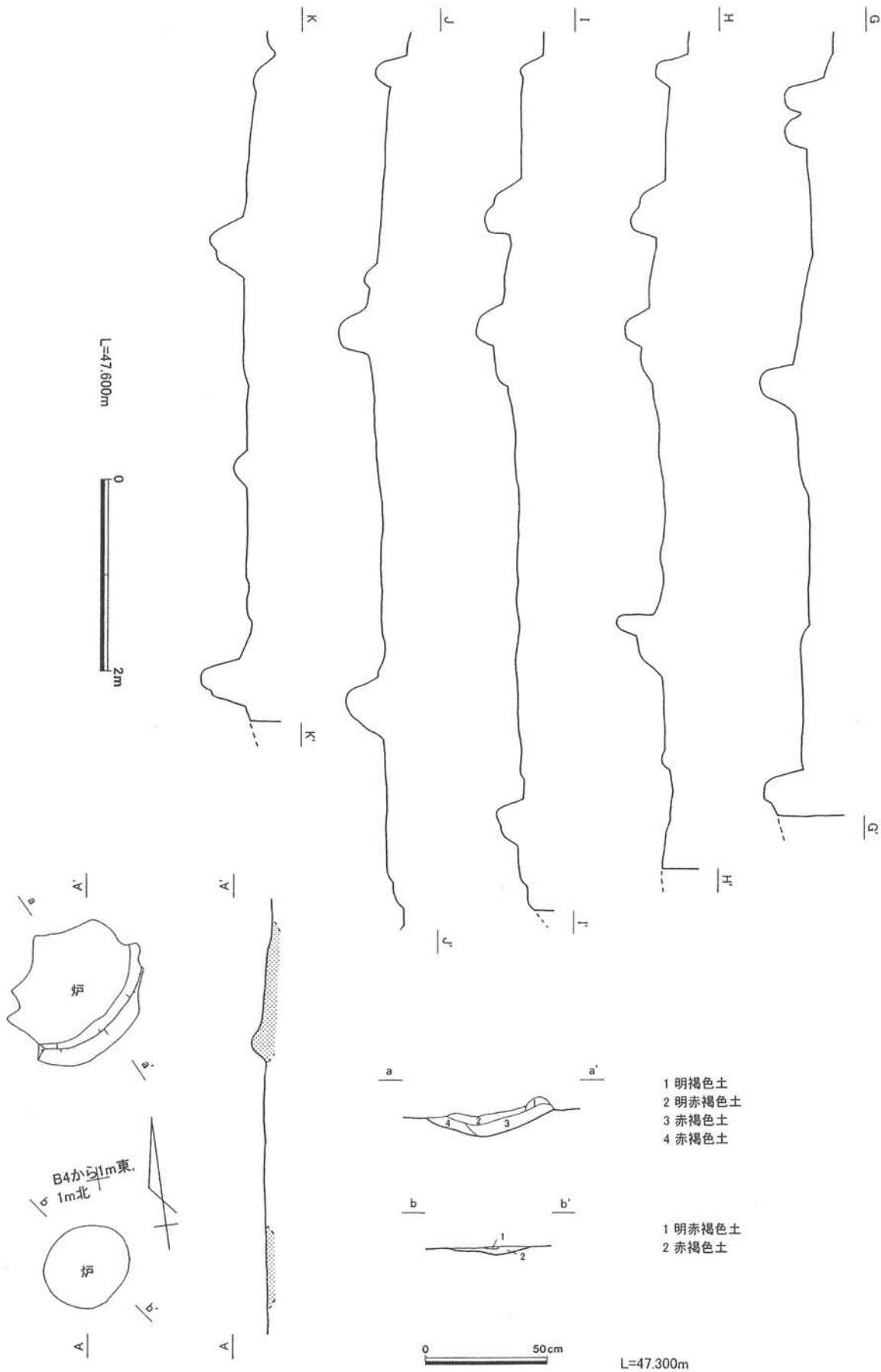
第19図 SH03内ピット、SH04実測図



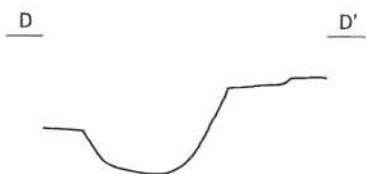
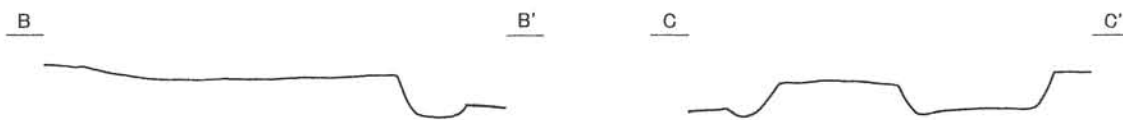
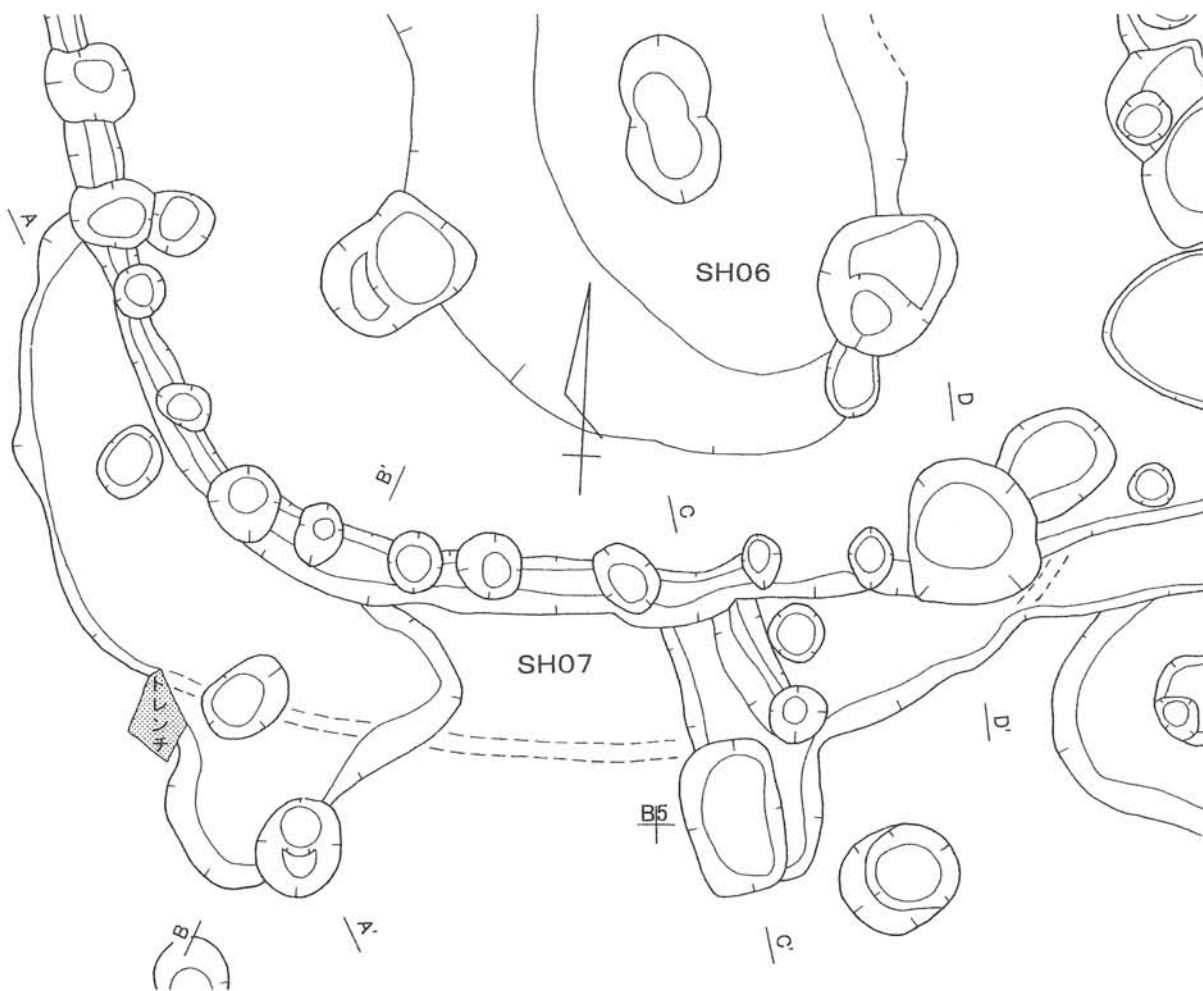
第20図 SH05・06実測図(1)



第21図 SH05・06実測図(2)



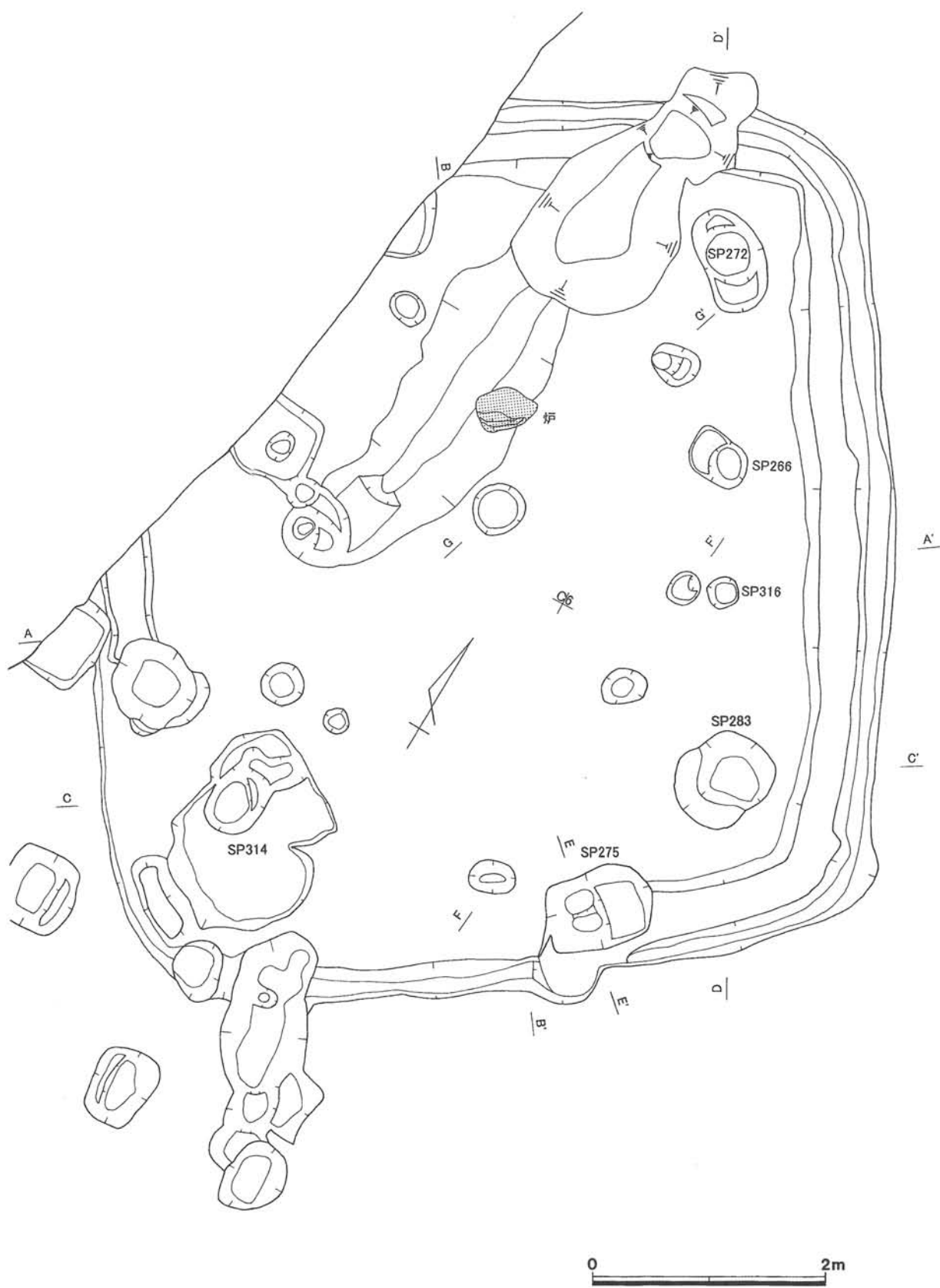
第22図 SH05・06実測図(3)



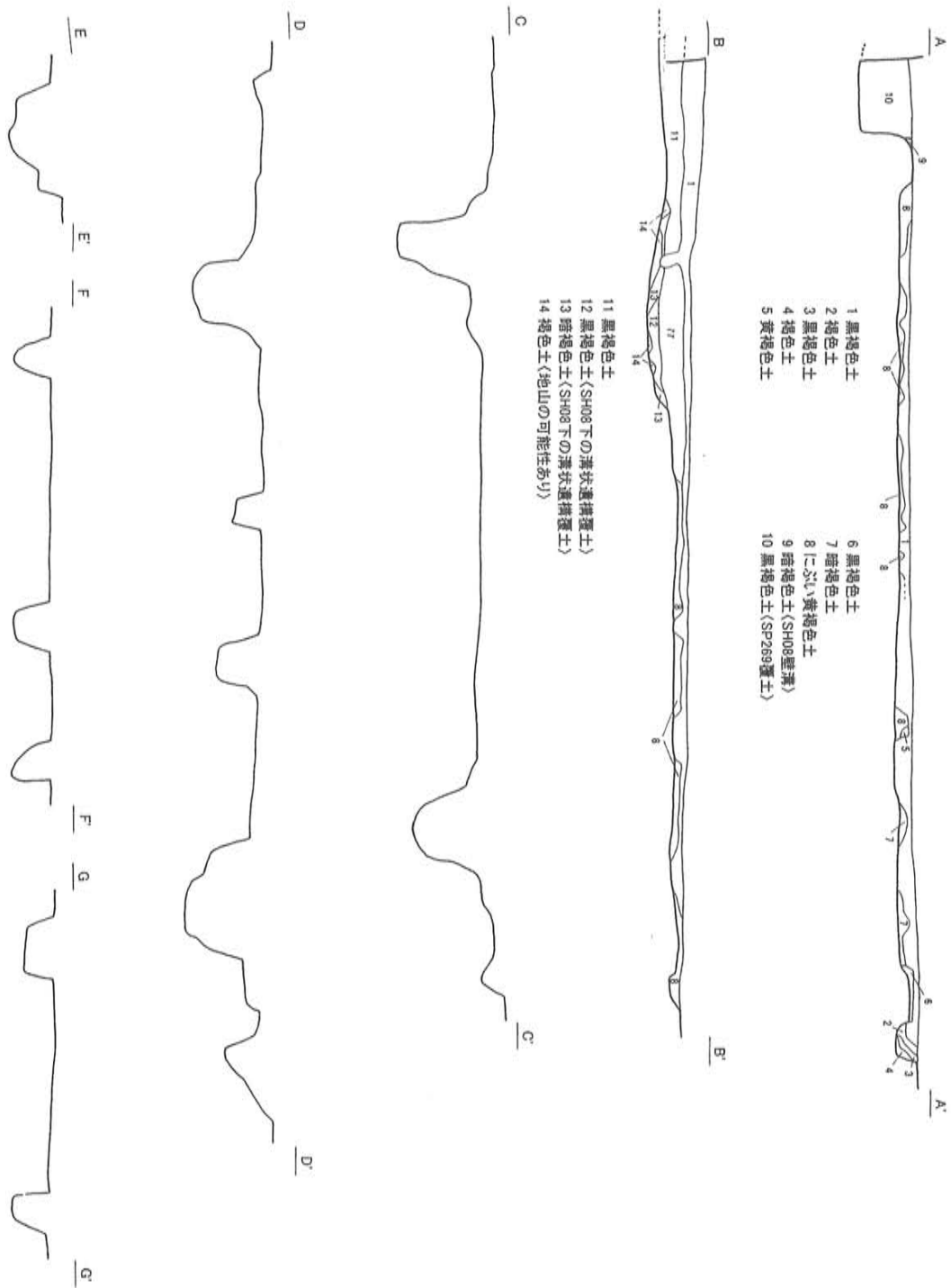
L=47.400m



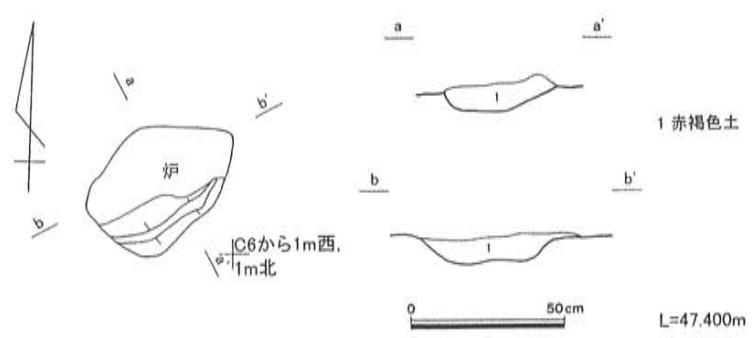
第23図 SH07実測



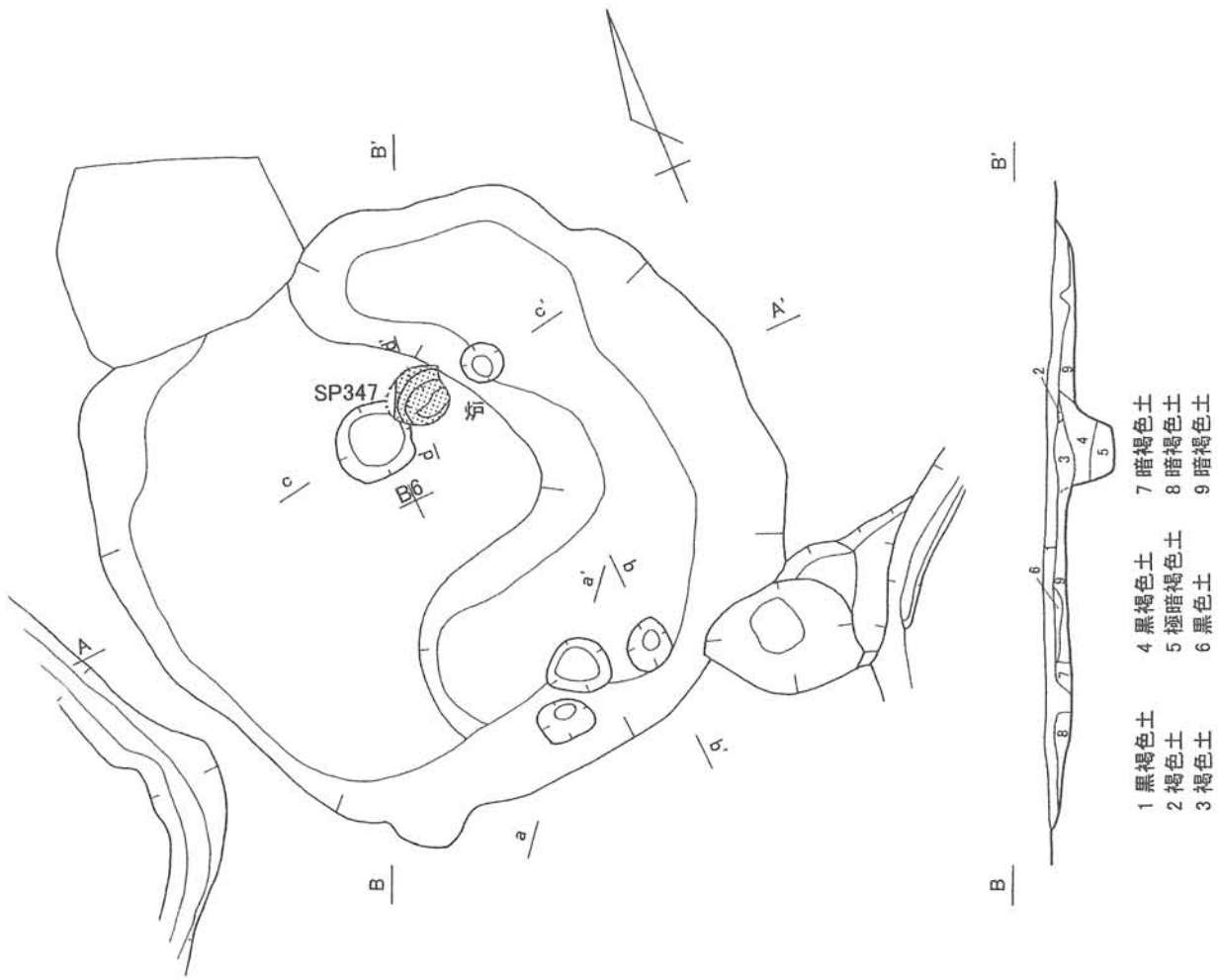
第24図 SH08実測図 (1)



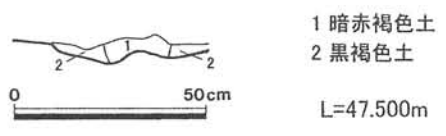
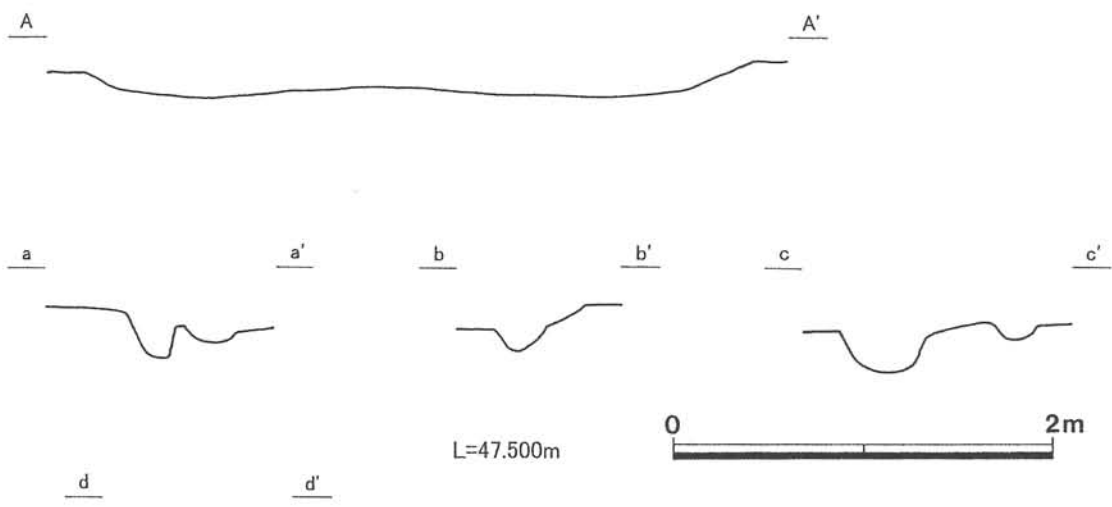
L=47,400m



第25図 SH08実測図 (2)

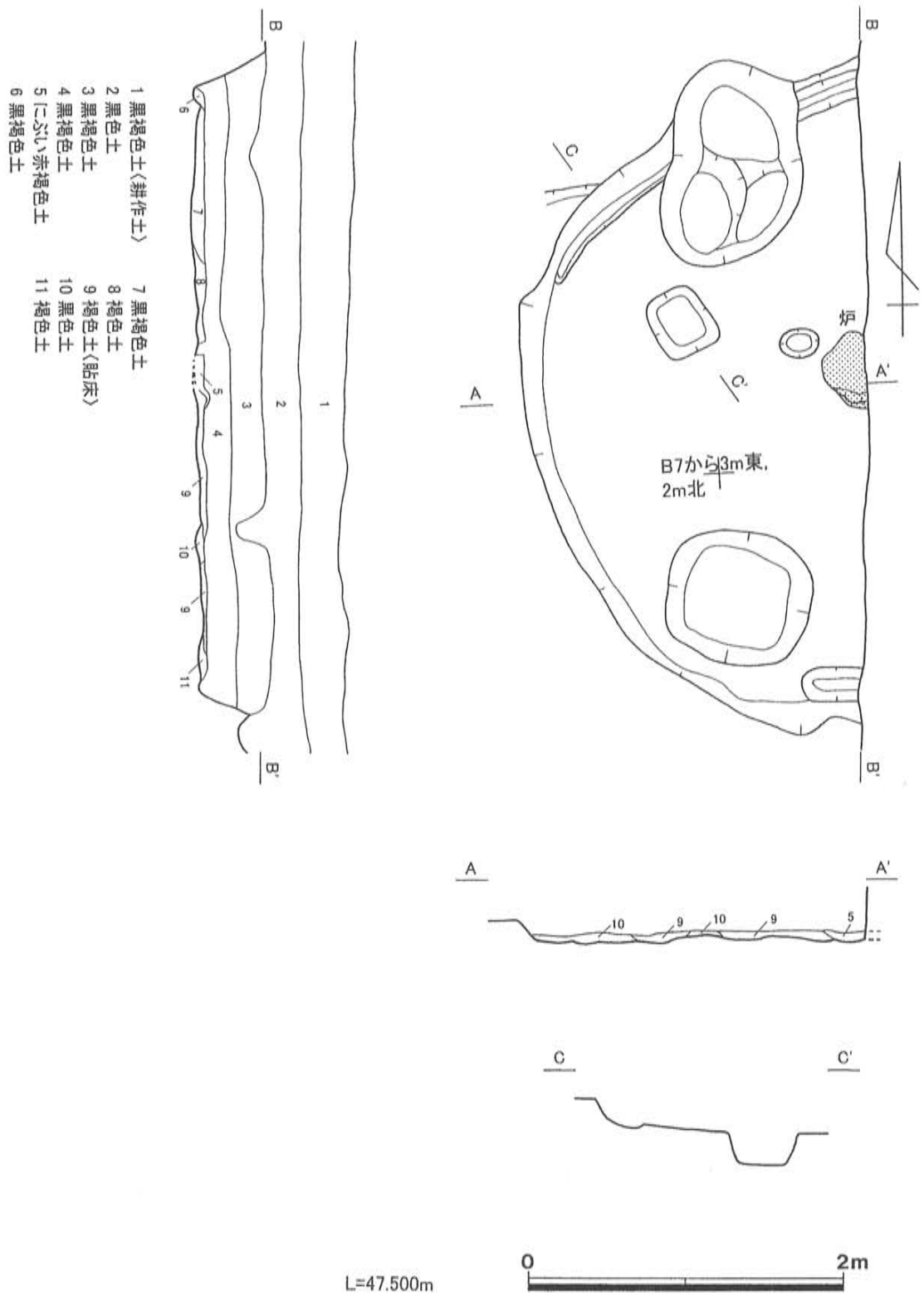


- 1 黒褐色土
- 2 褐色土
- 3 褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 極暗褐色土
- 6 黒色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土

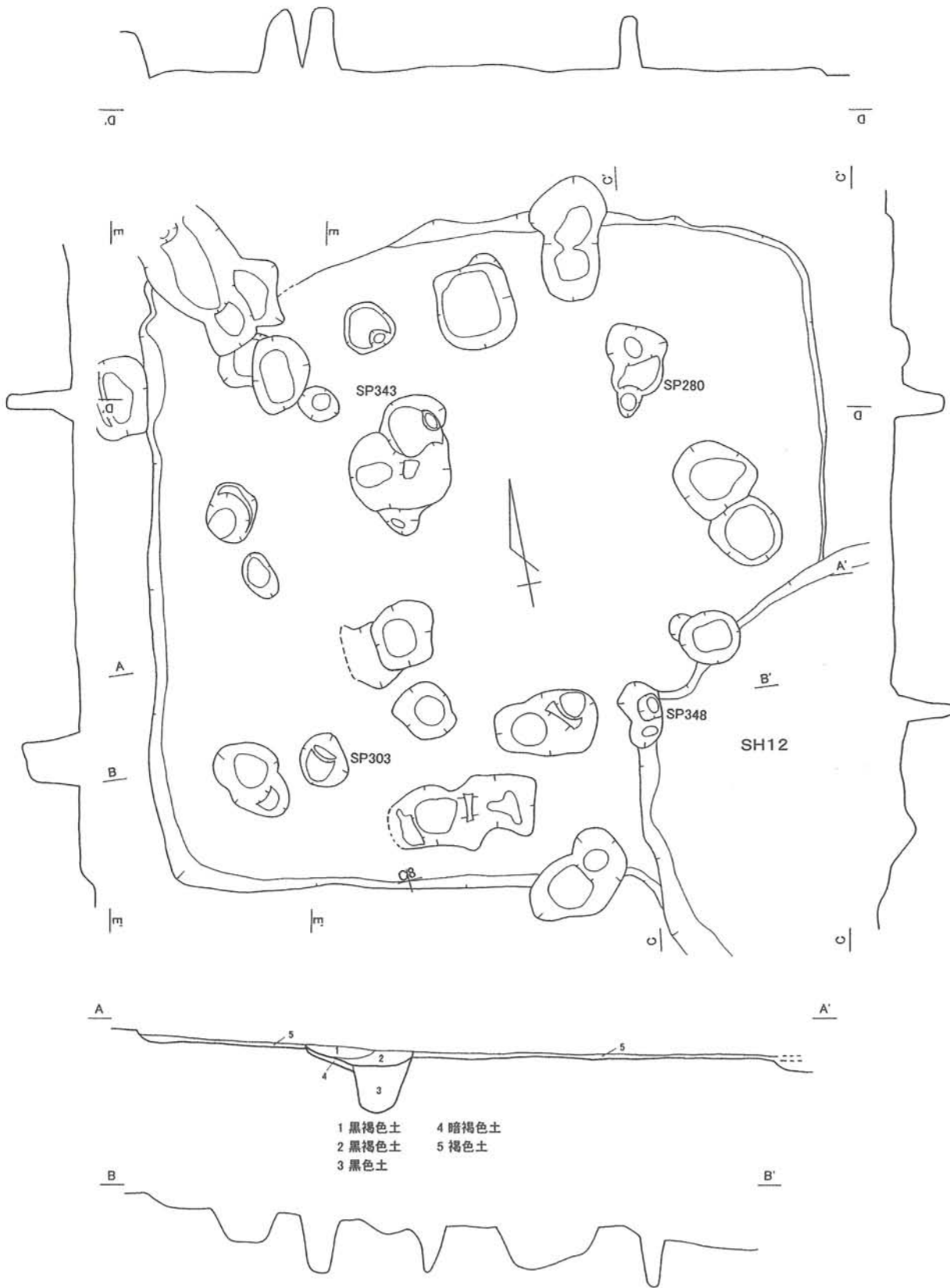


- 1 暗赤褐色土
 - 2 黒褐色土
- L=47.500m

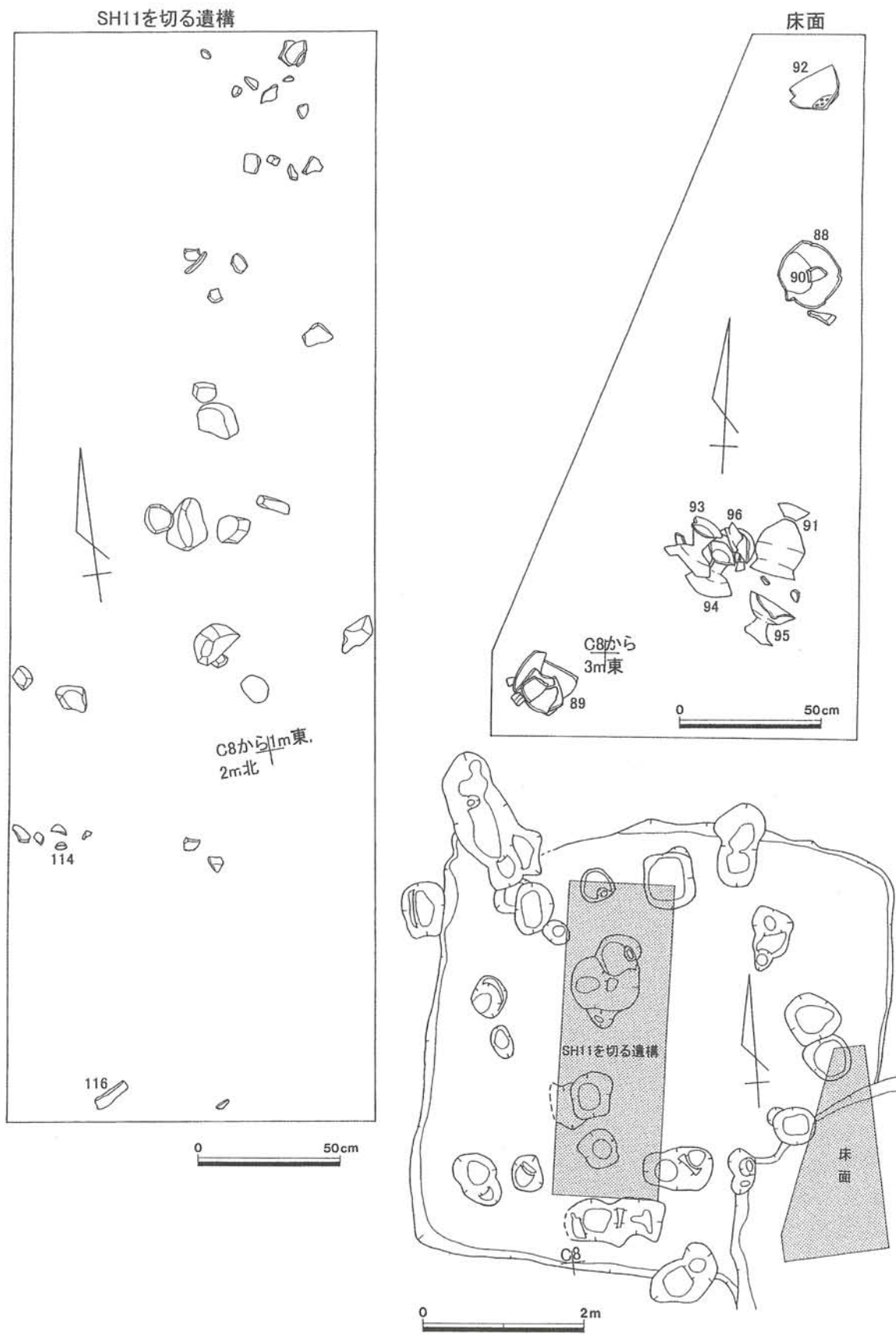
第26図 SH09実測図



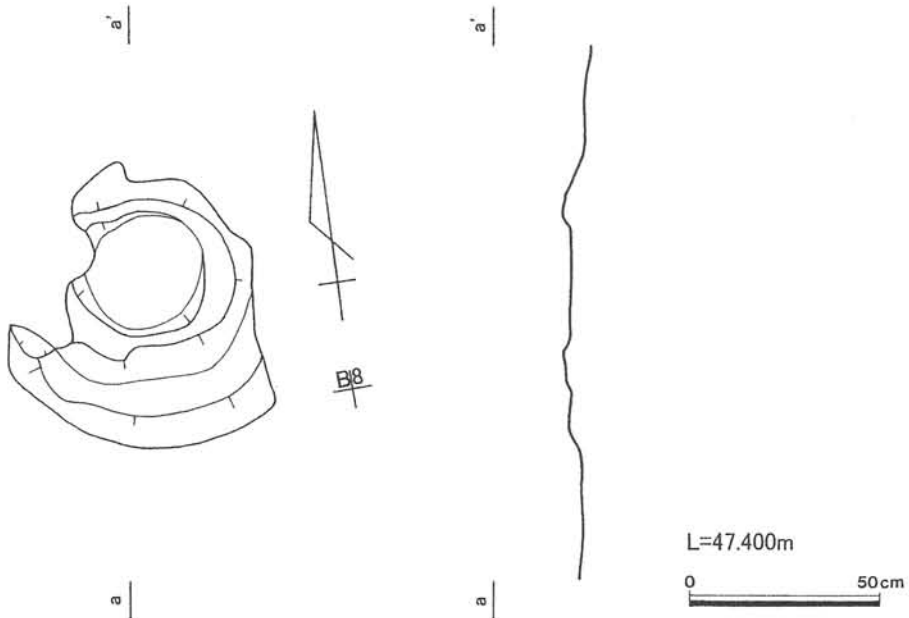
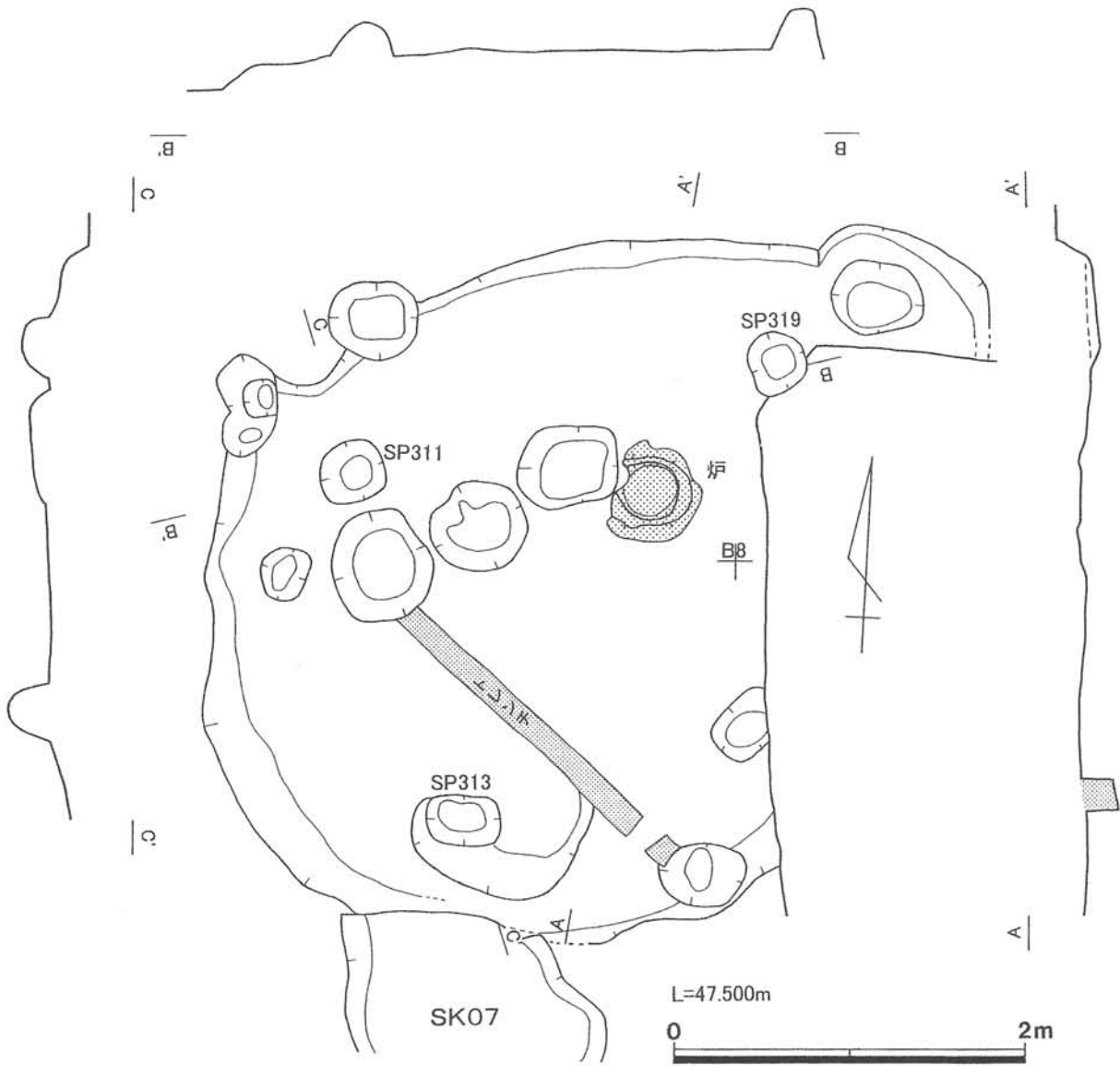
第27図 SH10実測図



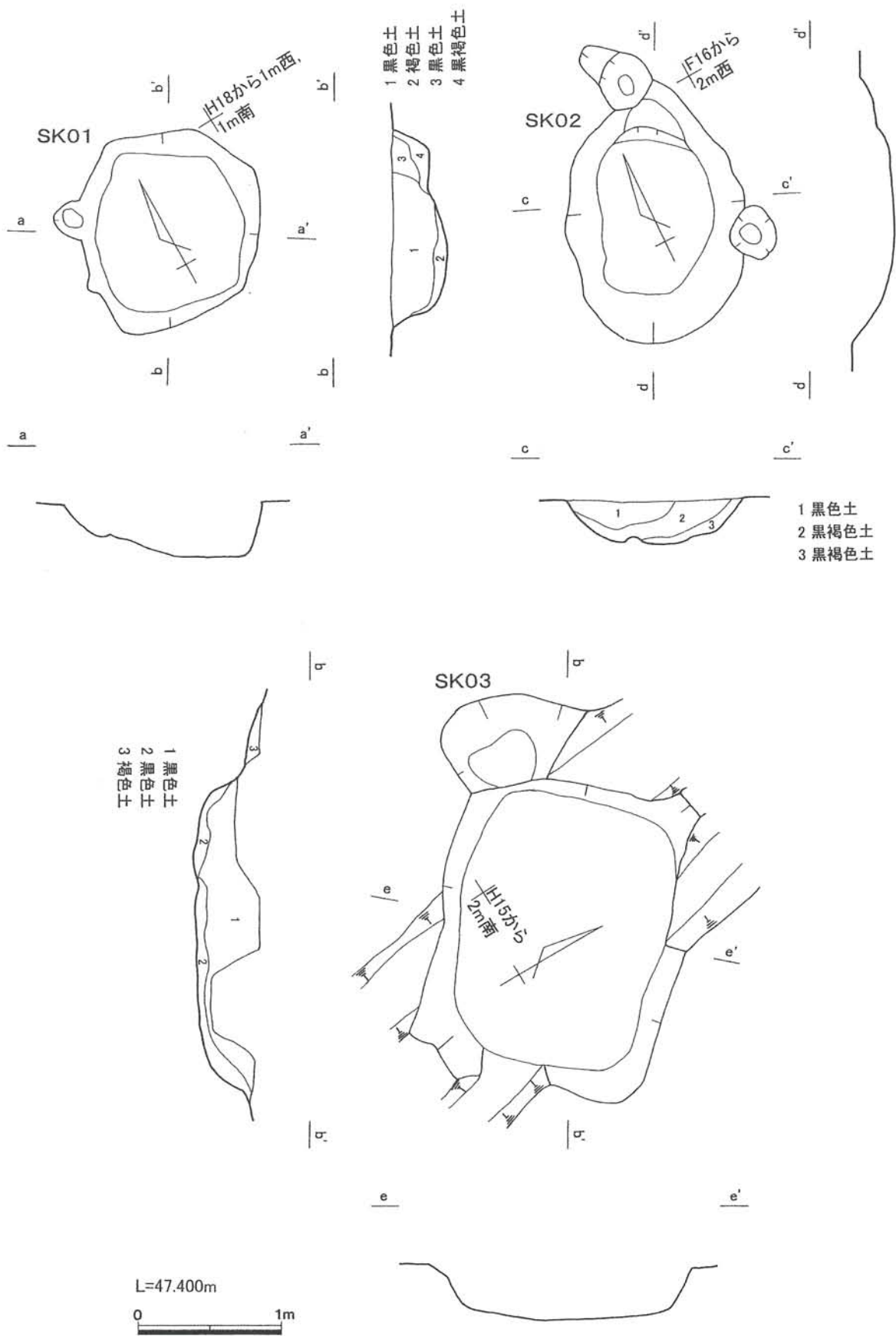
第28图 SH11实测图



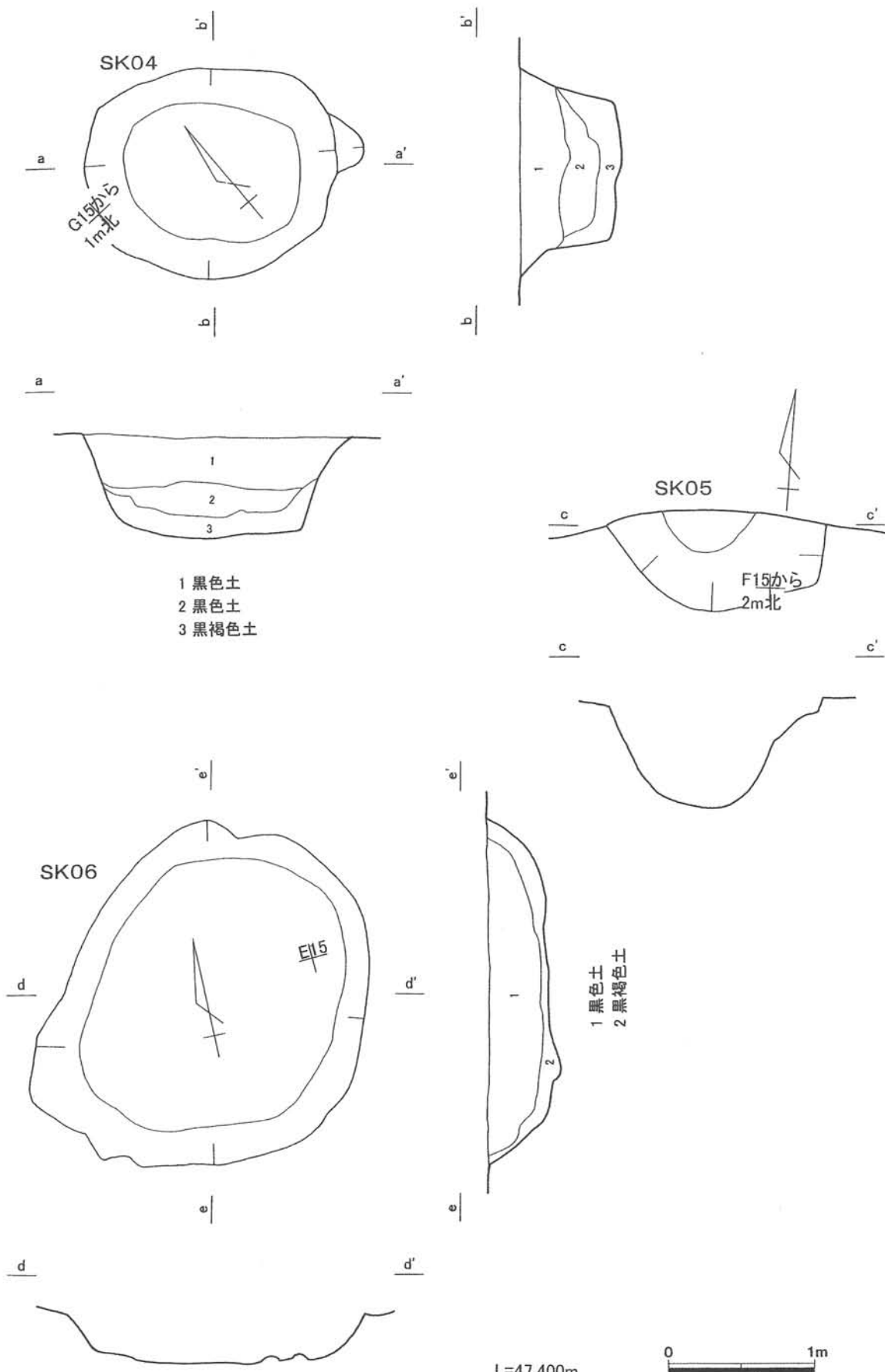
第29図 SH11内遺物出土状況図



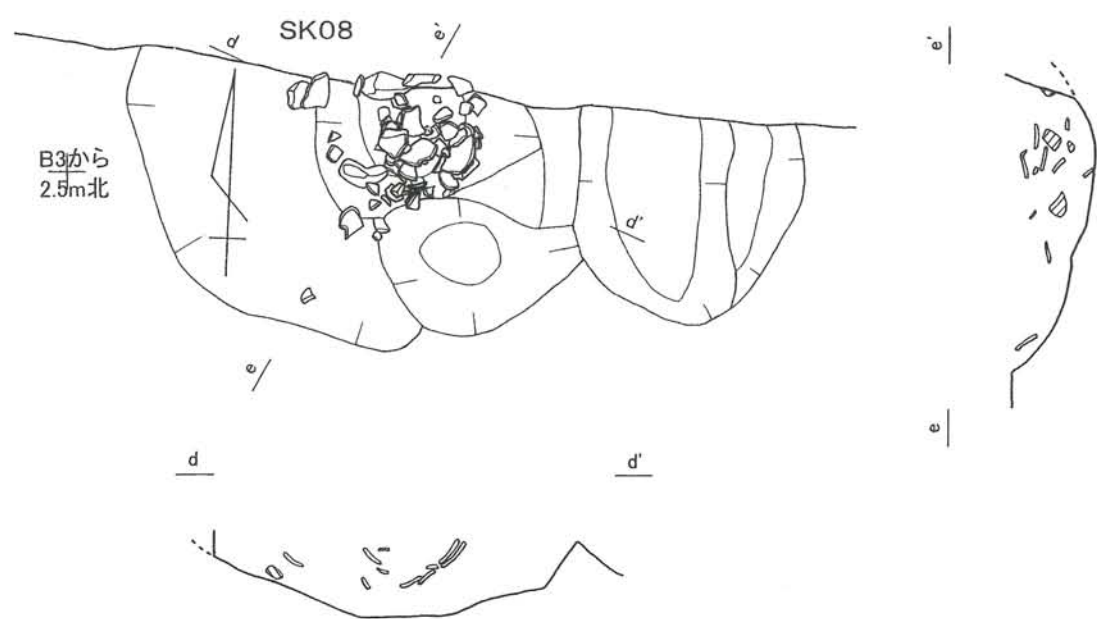
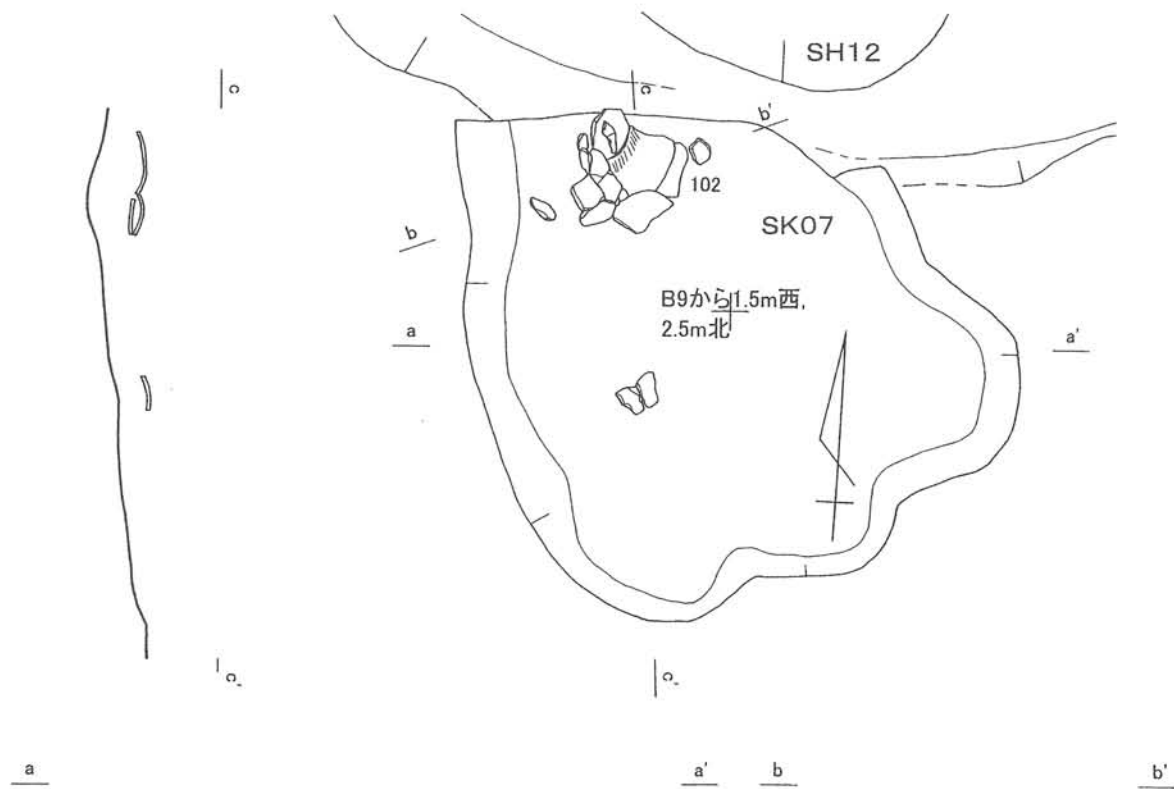
第30図 SH12実測図



第31図 SK01~03実測図

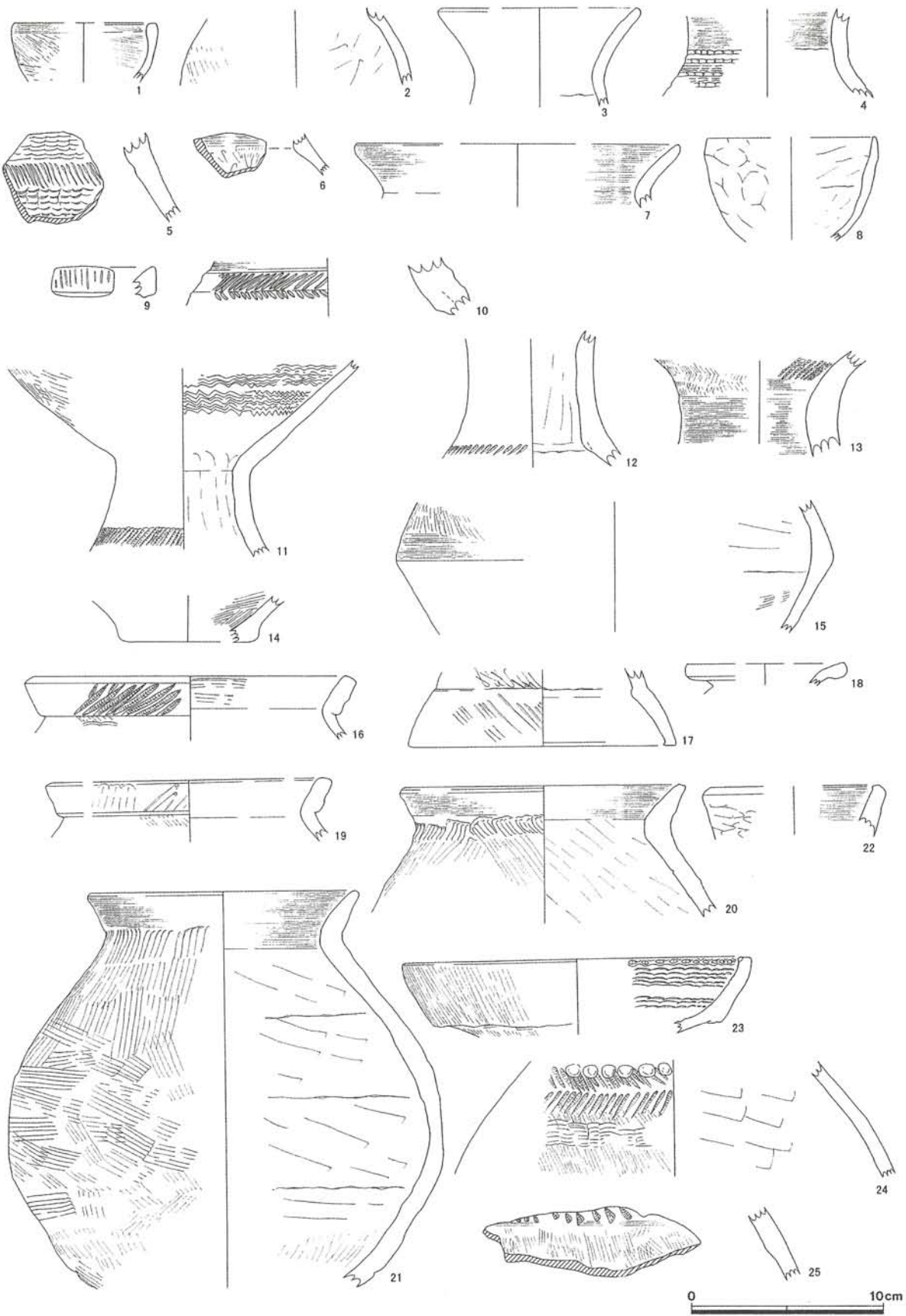


第32図 SK04~06実測図

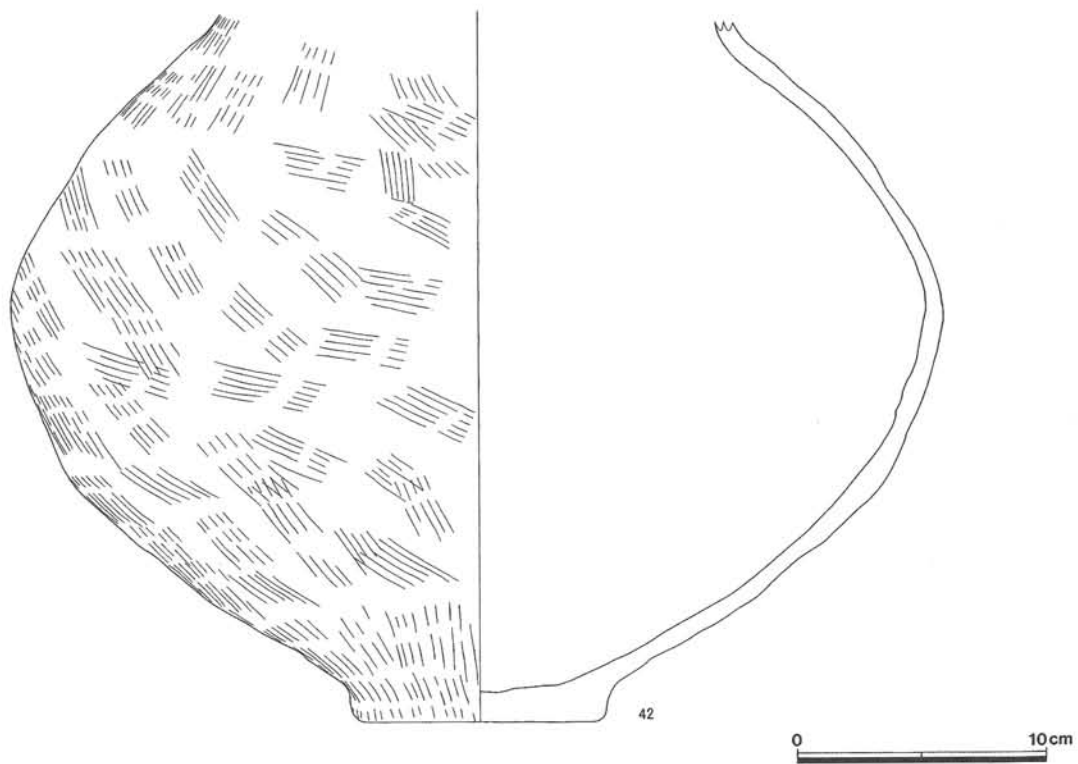
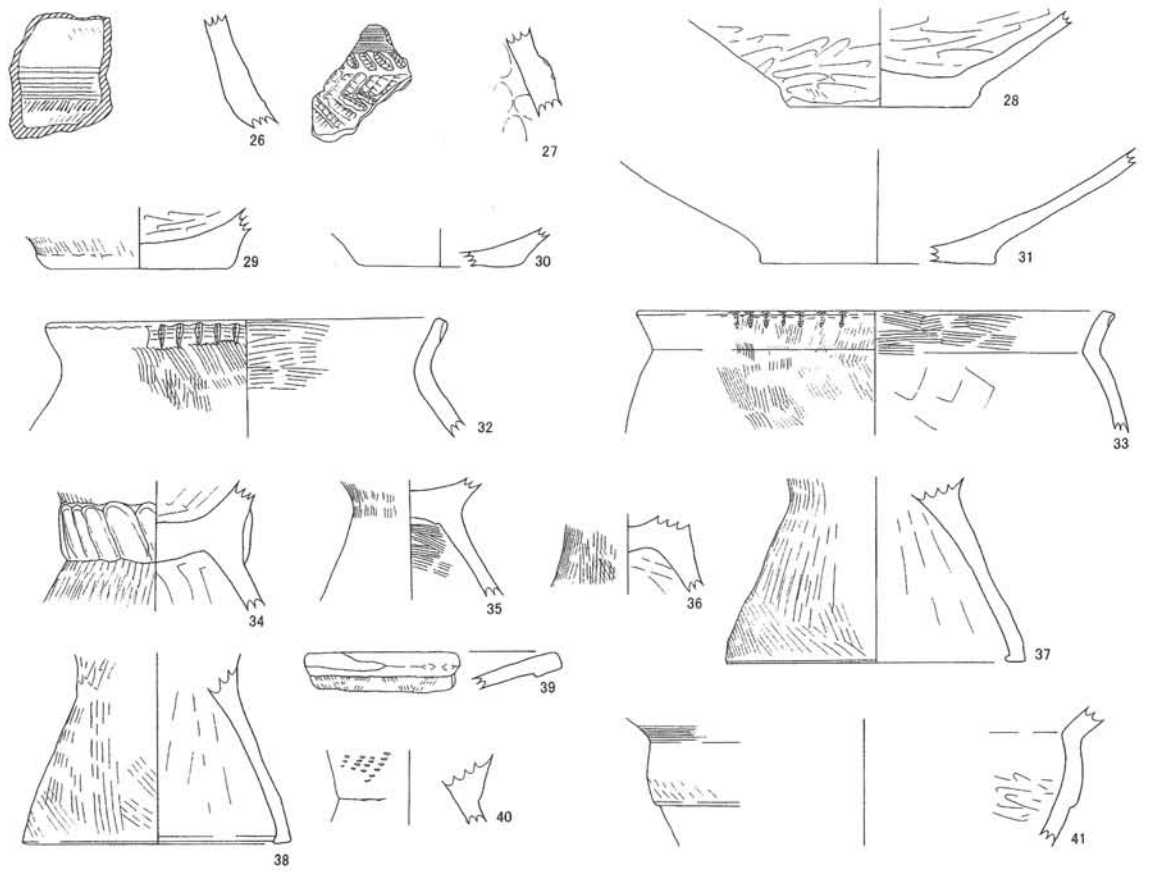


L=47.500m

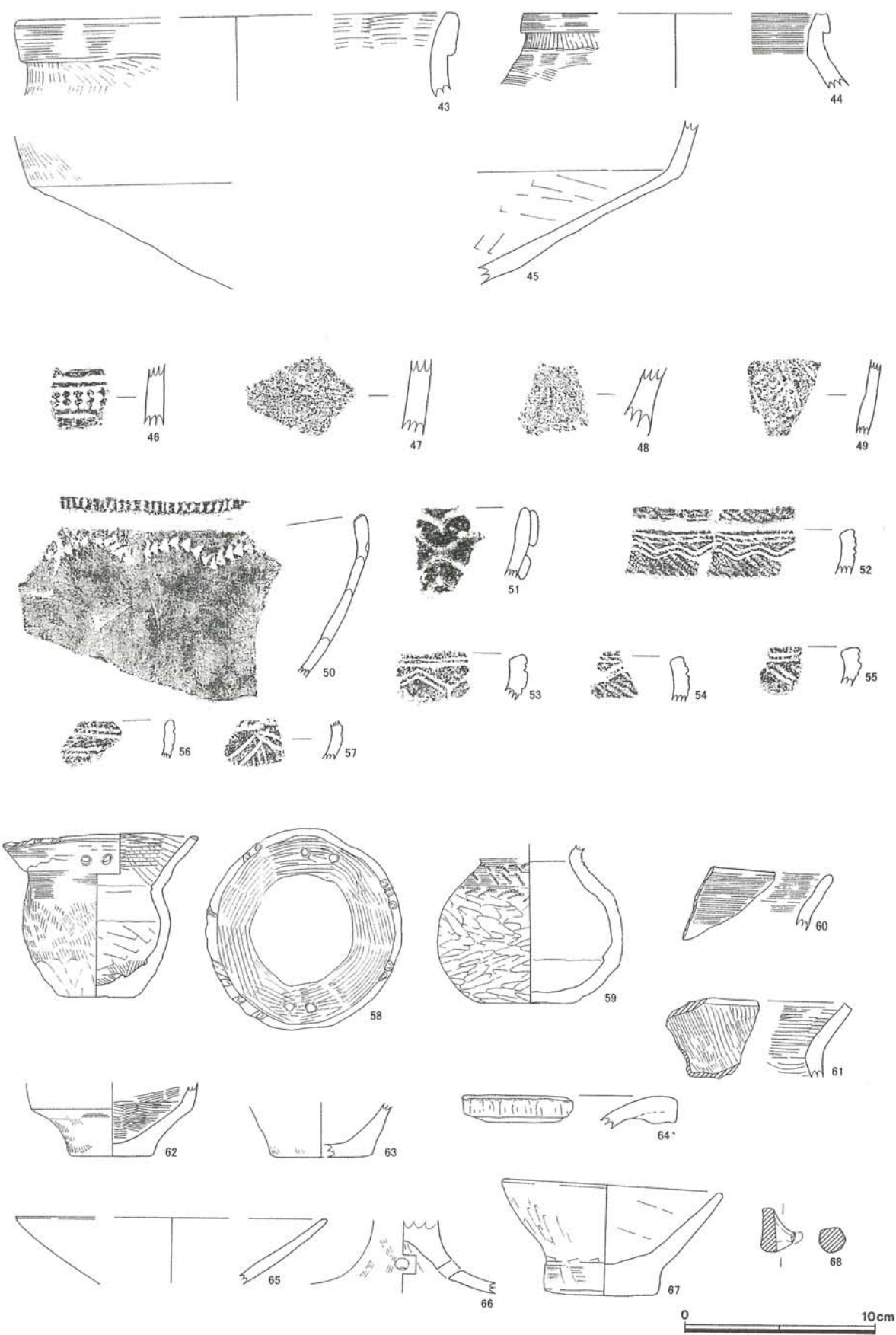
第33図 SK07・08実測図



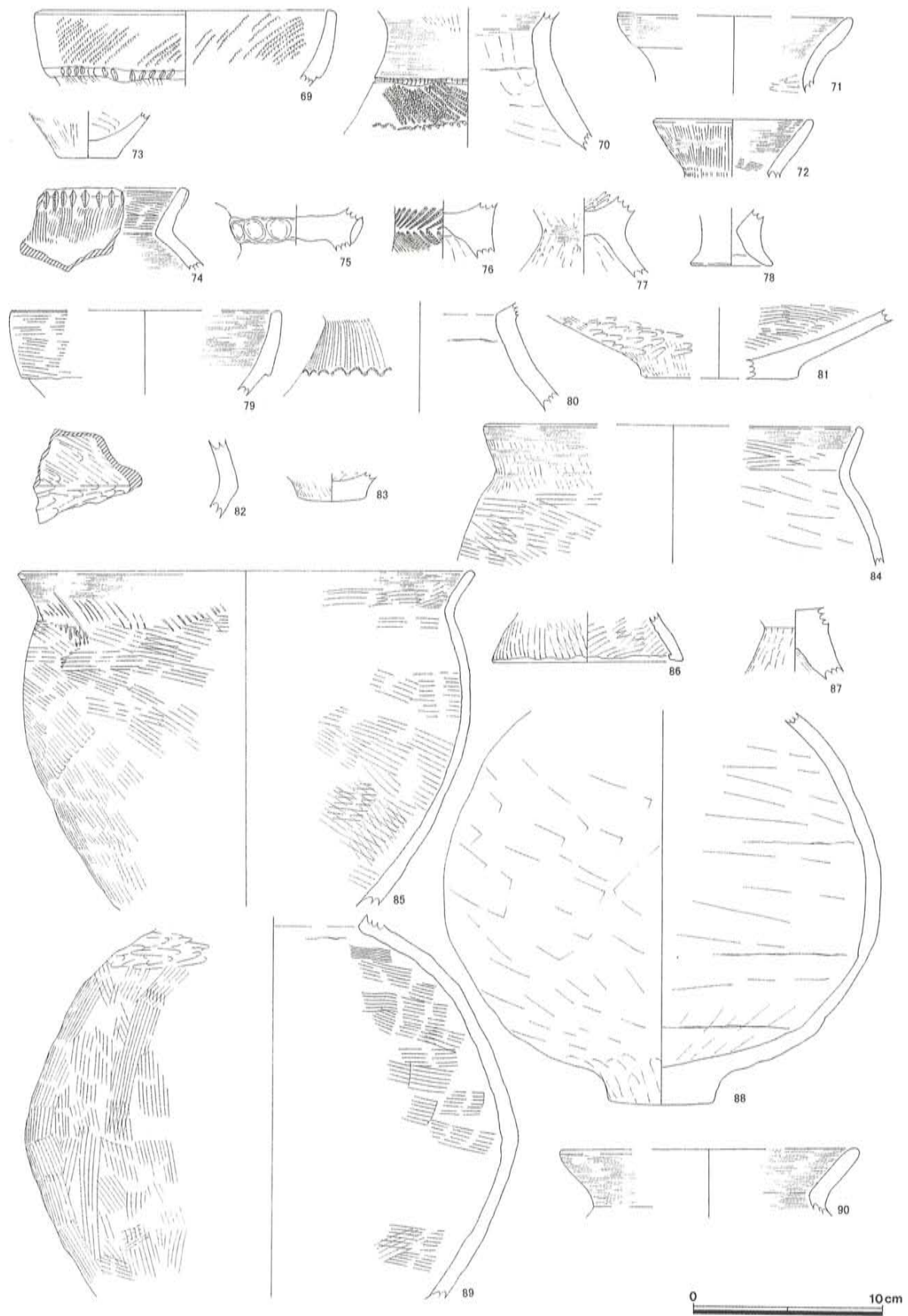
第34図 遺物実測図 (1)



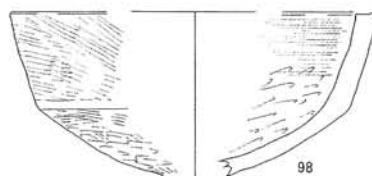
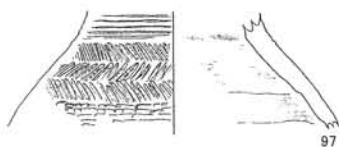
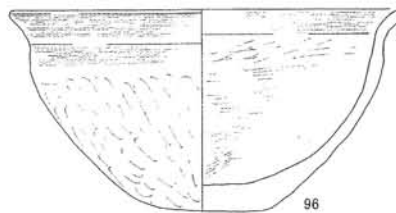
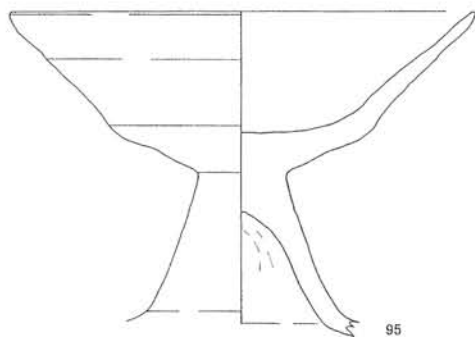
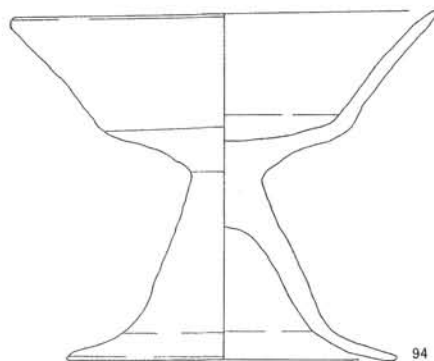
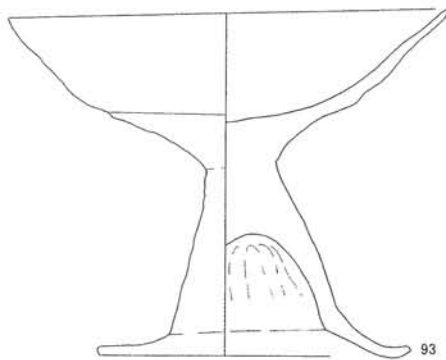
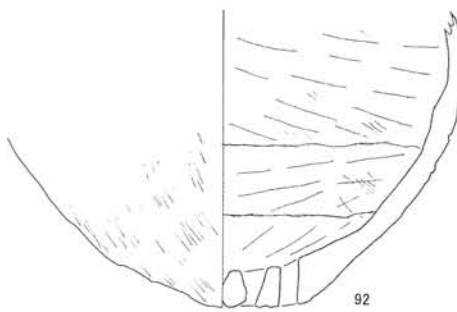
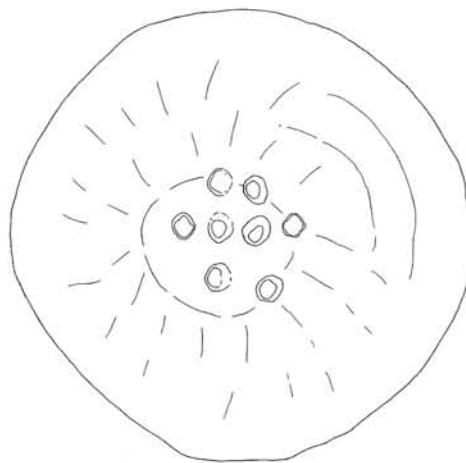
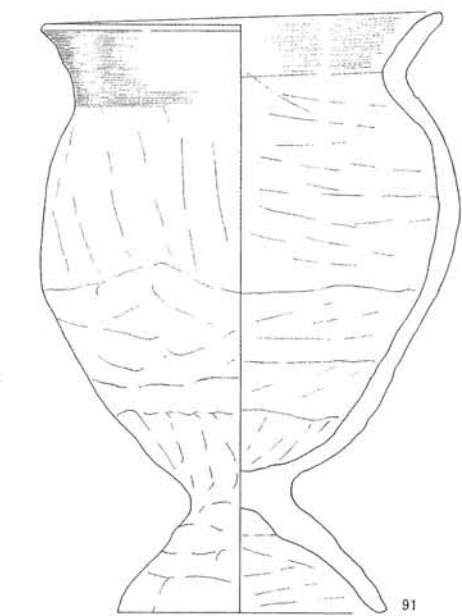
第35図 遺物実測図 (2)



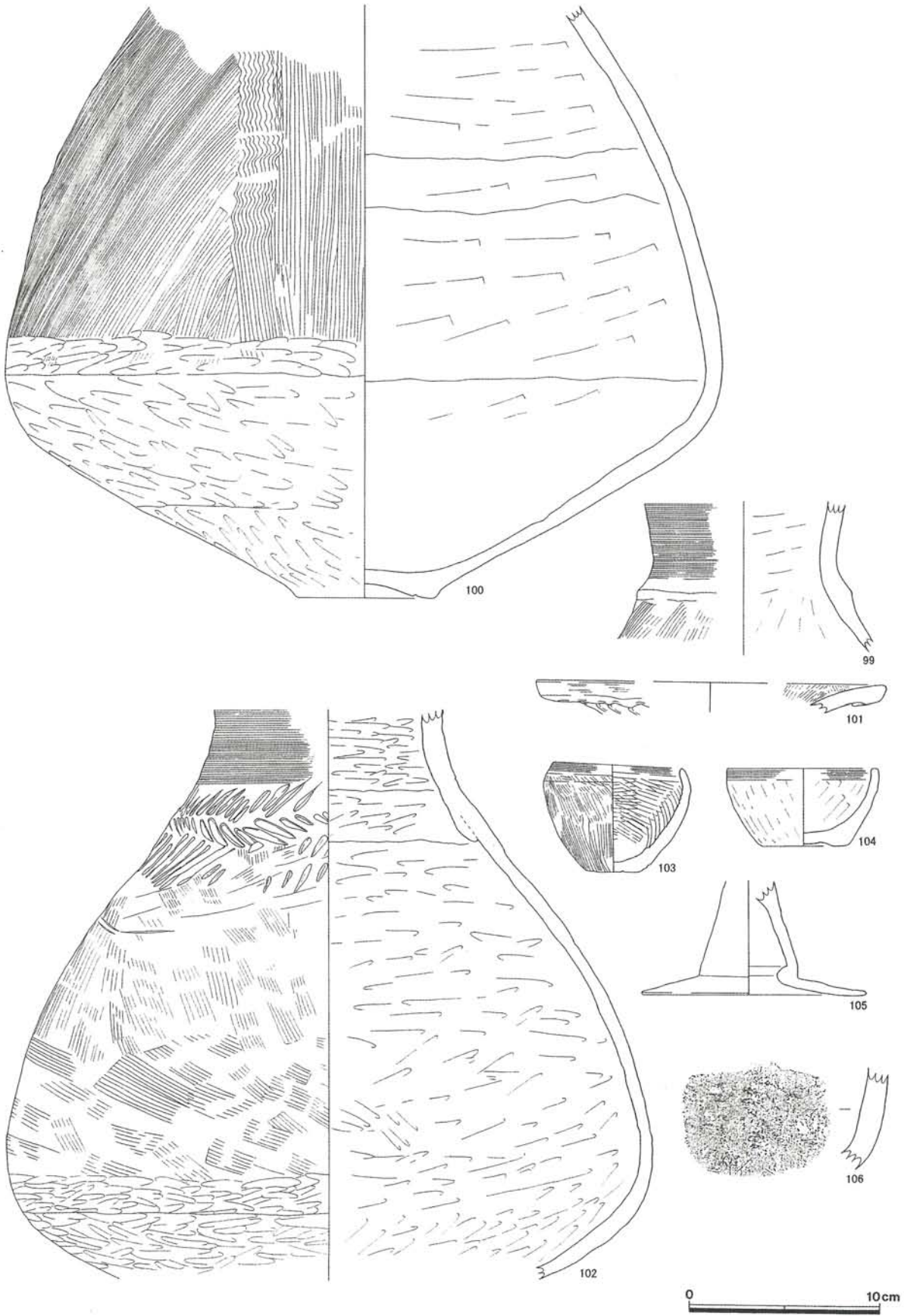
第36図 遺物実測図 (3)



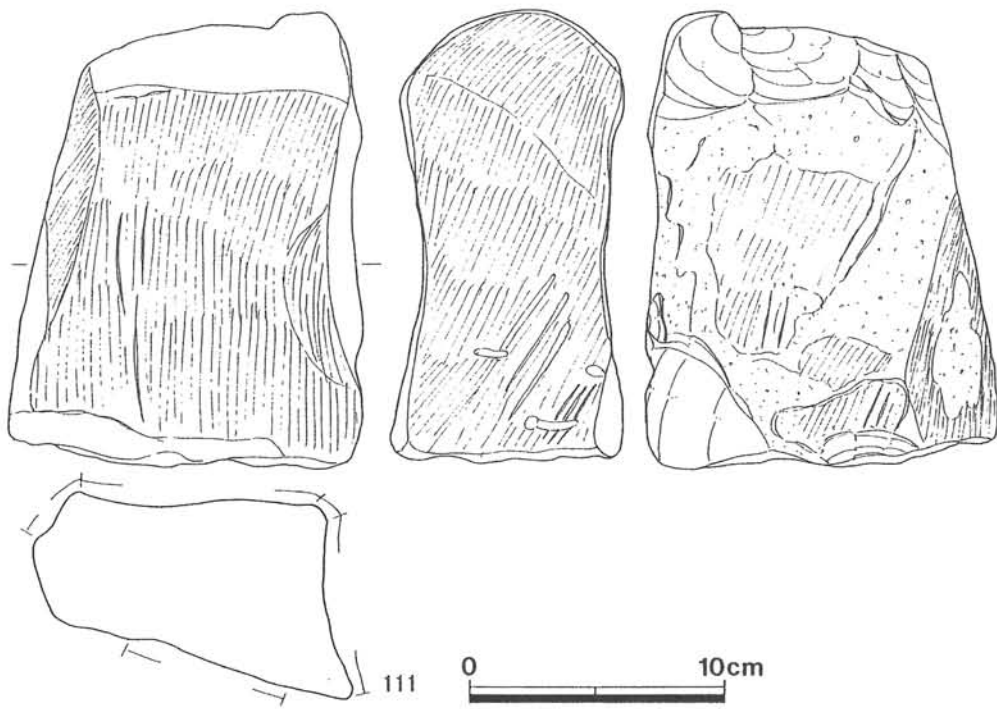
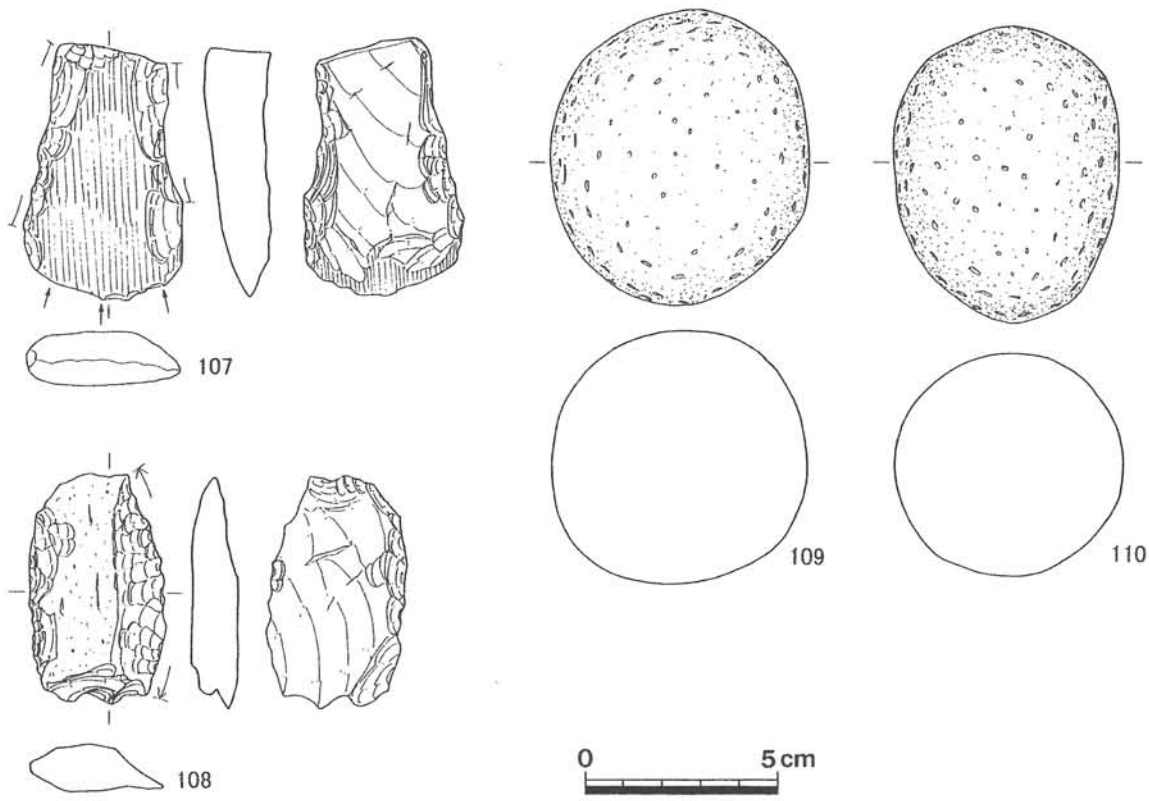
第37図 遺物実測図(4)



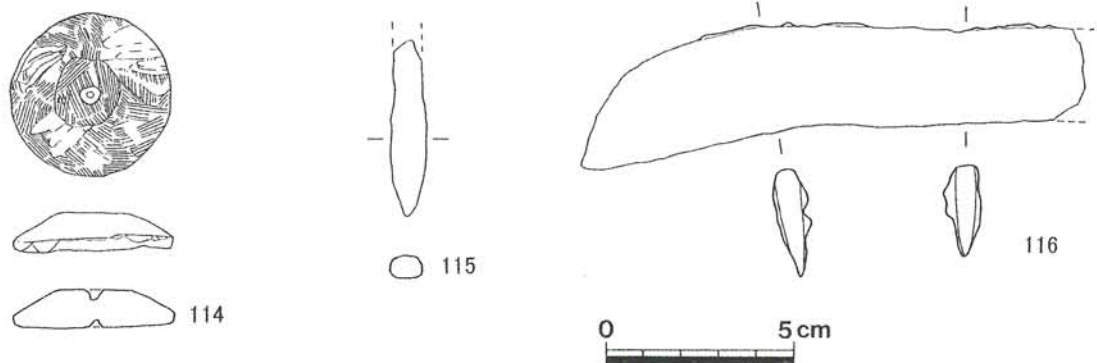
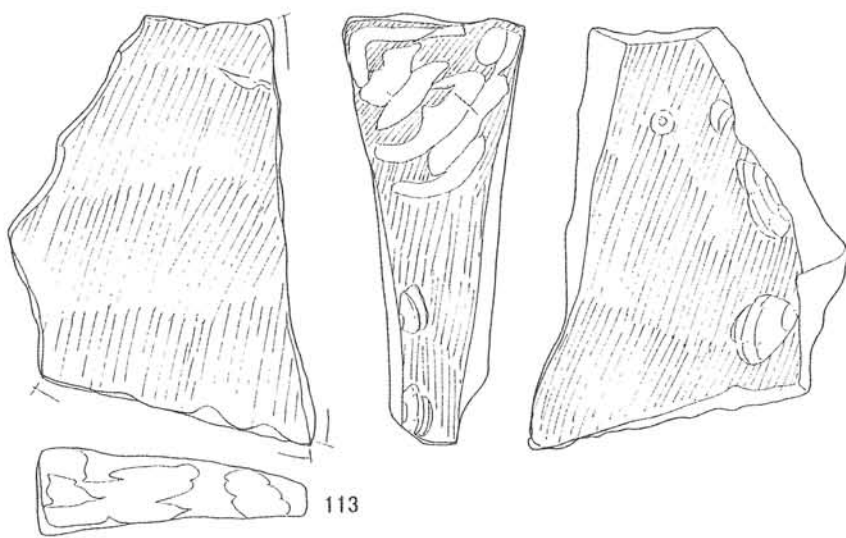
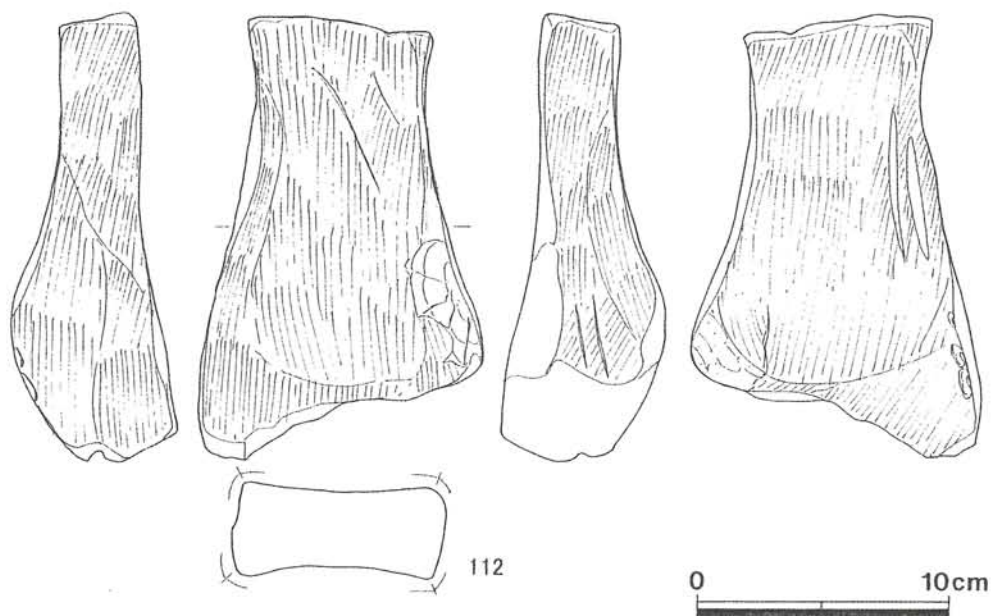
第38図 遺物実測図 (5)



第39図 遺物実測図(6)



第40図 遺物実測図 (7)



第41図 遺物実測図 (8)

図版 1



SB01~04,SH02~04,SF01完掘 (空中写真)



SB05~11,SH05~12完掘 (北から)

図版 2



SB01 (南から)



SB03 (南から)



SB03 SP87土層断面
(南から)

図版 3



SB03 SP87 (北から)



SB03 SP92土層断面
(南から)

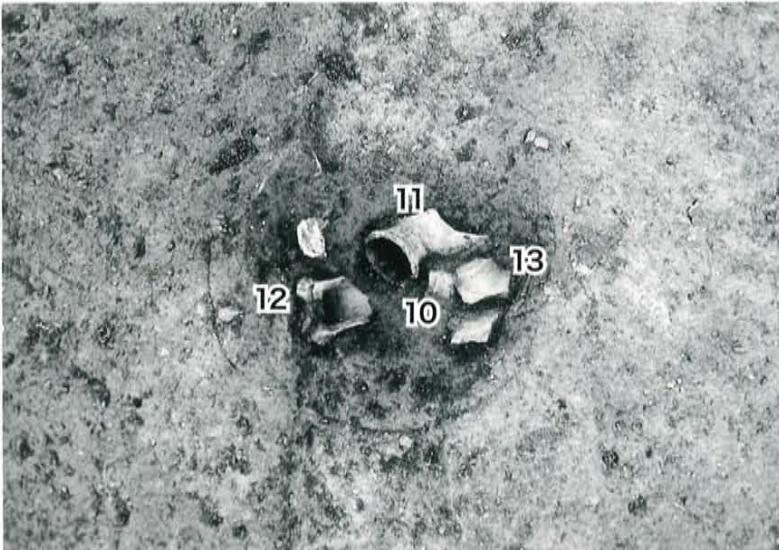


SB03-04 (東から)

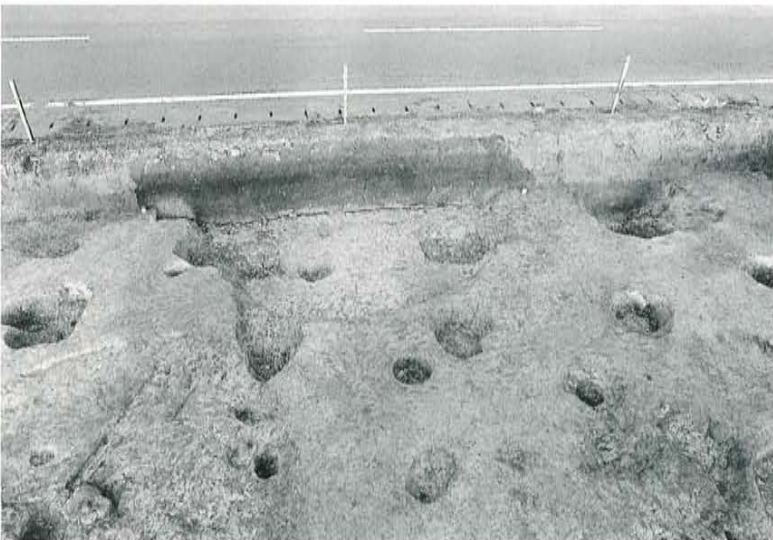
図版 4



SB04 (南から)



SB04 SP100内遺物
(西から)



SB05・06,SH10 (西から)

図版 5



SB08~11 (南から)



SF01 (西から)

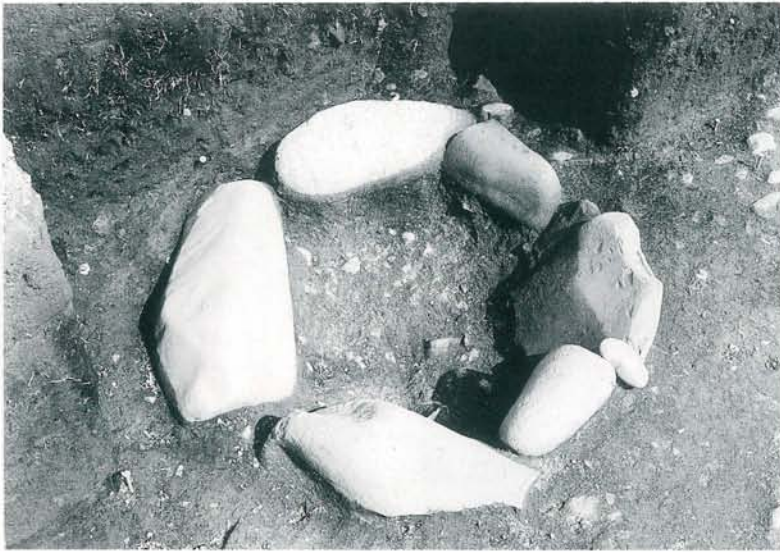


SF02 (南から)

図版 6



SH01床面 (西から)



SH01炉跡 (北西から)

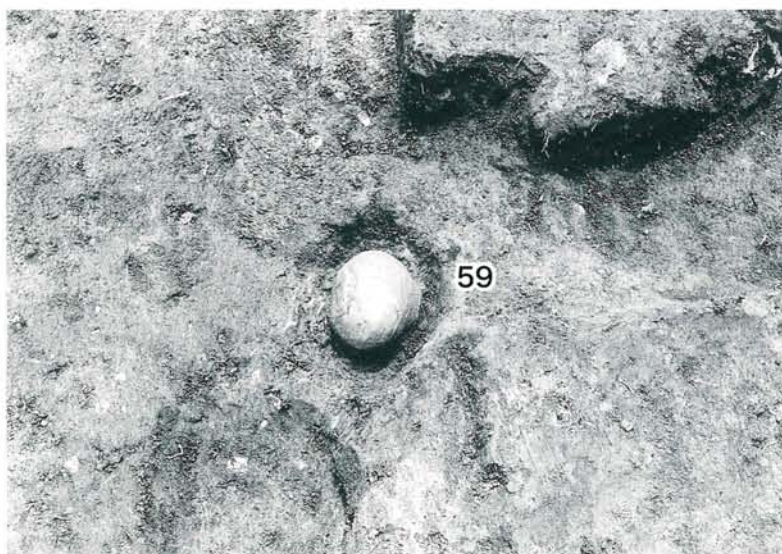


SH02完掘 (南から)

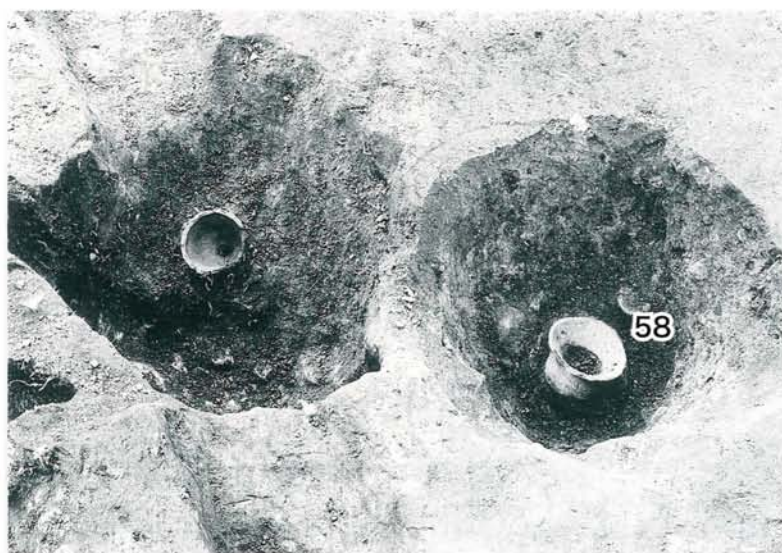
図版 7



SH03完掘 (北から)



SH03 SP130内遺物
(南から)



SH03 SP129・130内遺物
(東から)

図版 8



SH04完掘 (南から)



SH05~07完掘 (北から)



SH05,06完掘 (南西から)

図版 9



SH06炉跡 (東から)



SH08完掘 (南から)

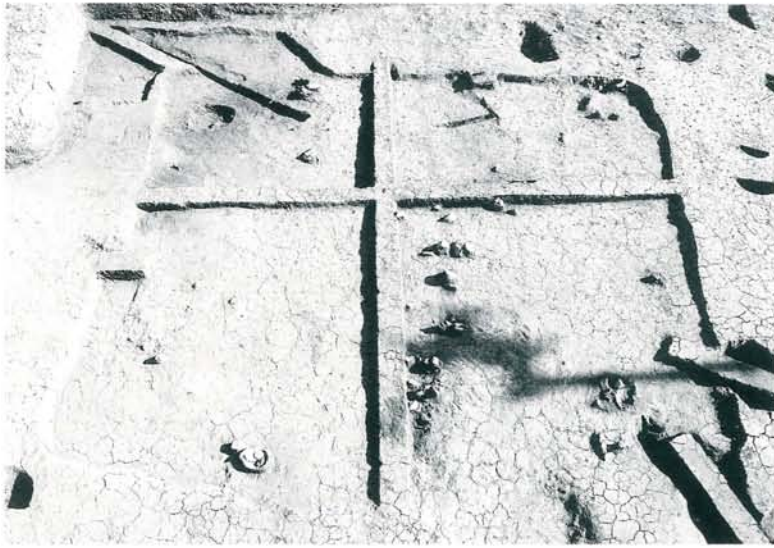


SH09・10完掘 (北から)

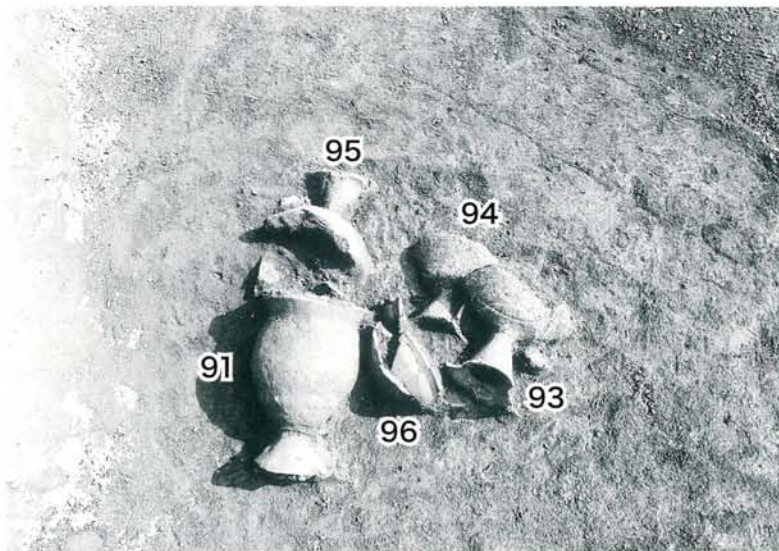
図版 10



SH11完掘 (東から)

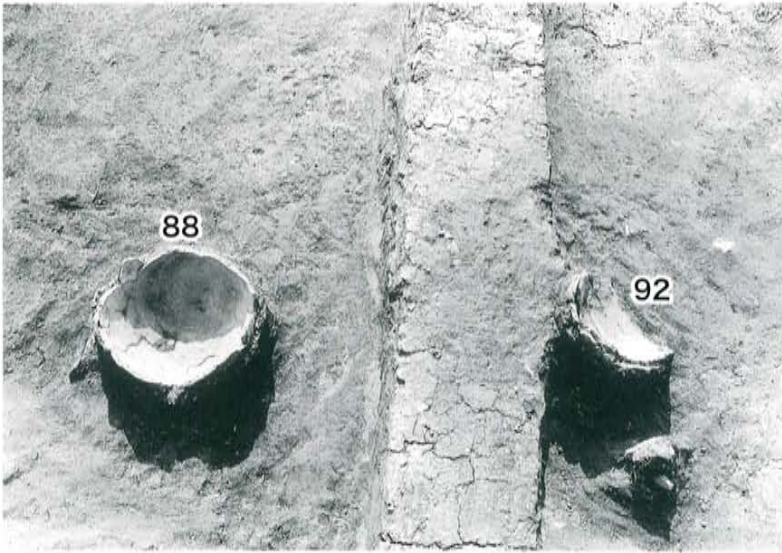


SH11内遺物 (北から)



SH11内遺物 (北から)

図版 11



SH11内遺物 (東から)



SH12完掘 (西から)



SK03 (南から)

図版 12



SK04 (南から)

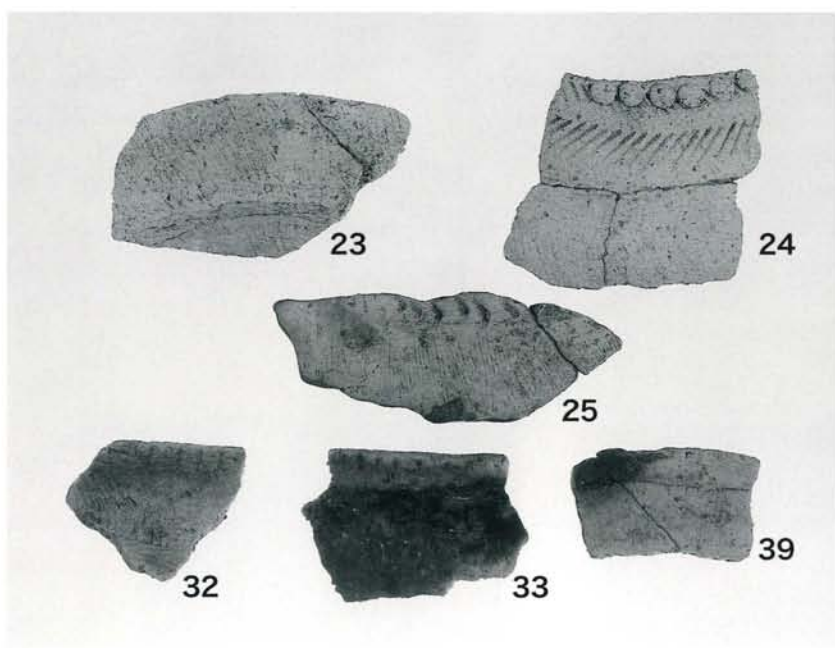


SK07内遺物 (南から)

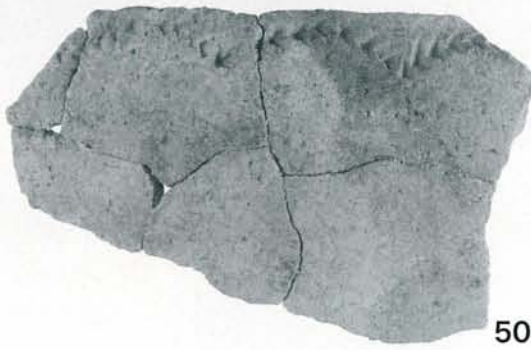


SK08内遺物 (南から)

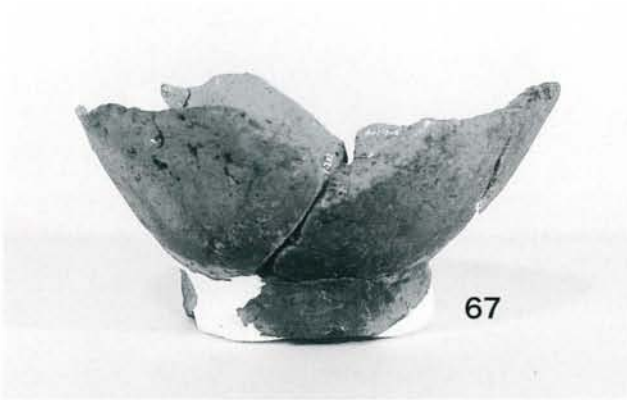
图版 13



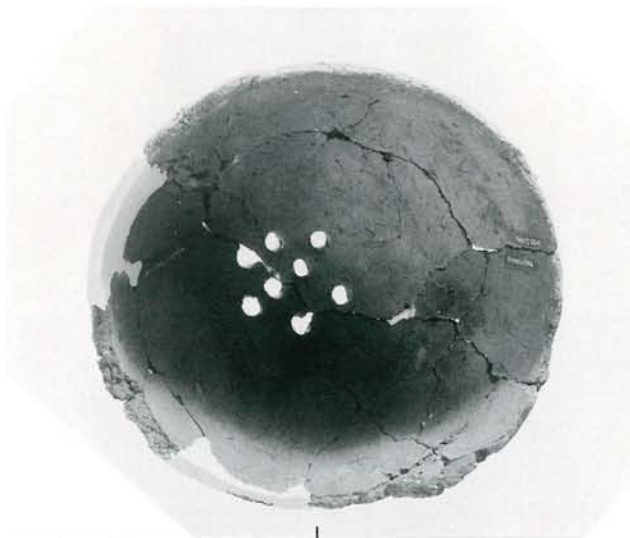
图版 14



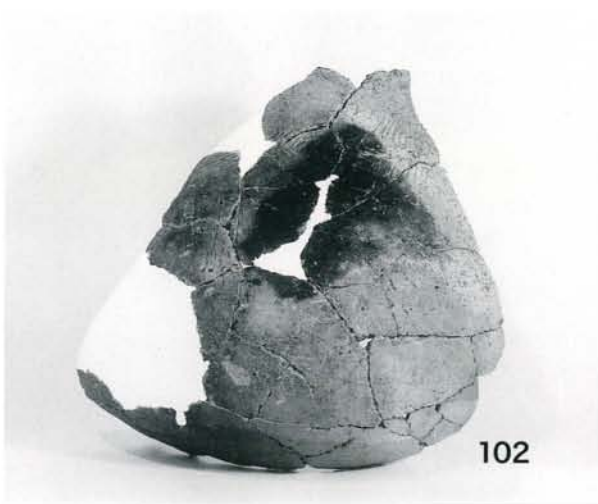
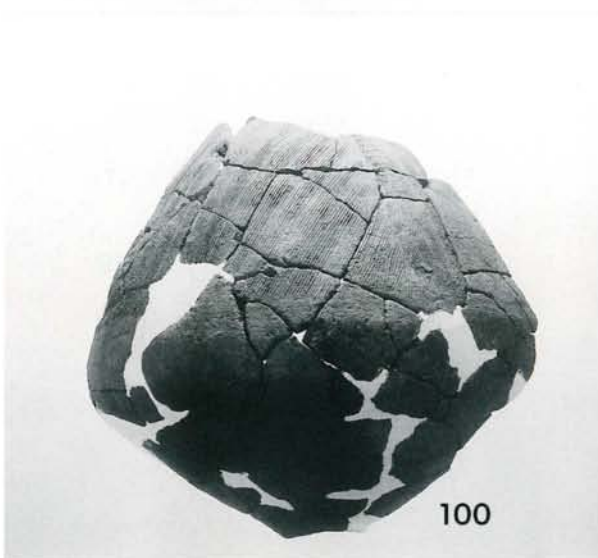
图版 15



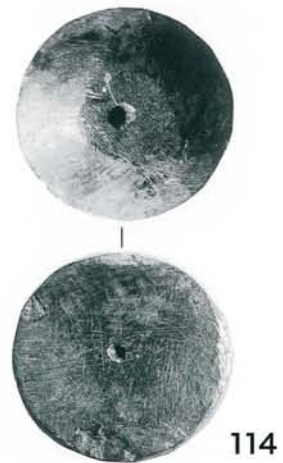
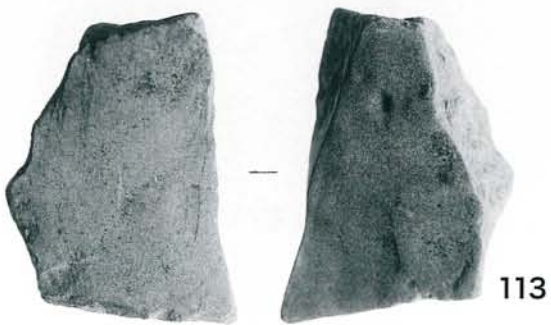
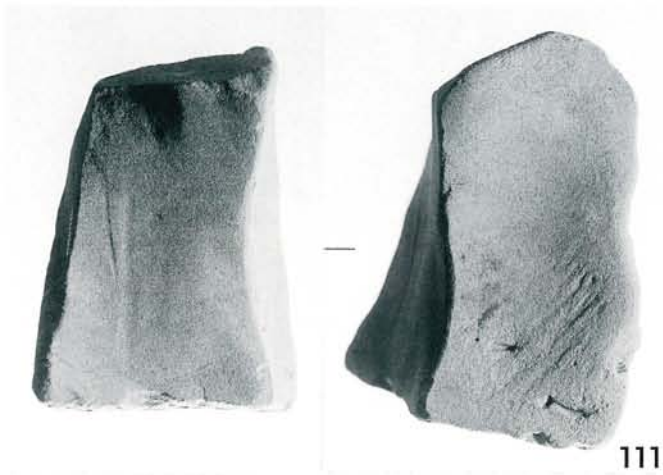
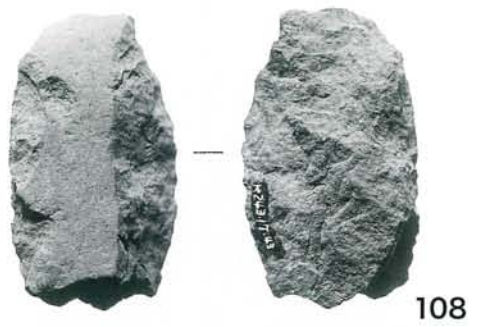
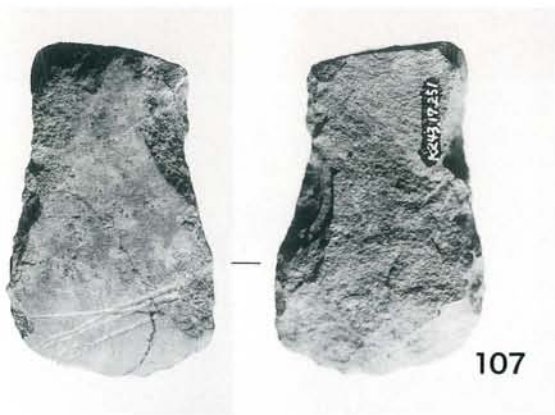
图版 16



图版 17



図版 18



Ⅲ 高田遺跡第19次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成17年10月に茶園改植の計画があることを把握し、10月26日に確認調査を実施した。その結果、地表下50cmから竪穴住居跡を検出するとともに、土器が出土した。確認調査の結果を基に耕作者と協議したが、遺構面までの深度が浅いことから、保護層を確保しての改植は困難との結論に達した。

そこで、平成18年5月8日に、記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。同年5月19日付けで静岡県教育委員会から耕作者に対し、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。

そこで、記録保存を目的とした本調査を実施するに至った。

2. 調査の方法と経過

調査は、対象地の形に合わせて5m方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。グリッドは、アルファベットと数字を組み合わせて、B-2区、B-3区等の呼称とし、グリッドの北西に位置する杭にグリッドを代表させた。現地での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1と10分の1を併用し、微細図は10分の1とした。写真撮影は、6×7カメラ1台（ブローニー白黒用）と35mmカメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、排土置き場を確保する必要から、対象地を2分割し、平成18年6月23日に前半部分の機械掘削を開始した。8月17日から後半部分の機械掘削を行い、11月14日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために、基準点測量を実施した。

3. 調査の内容

i) 遺構の概要

ここでは、今回の調査によって検出した遺構を、掘立柱建物跡、溝跡、竪穴住居跡、柱穴列、性格不明の遺構の順に、その概要を記す。

1) 掘立柱建物跡 (SB)

SB01 (第3図)

B・C-3・4区から検出された1間×2間と考えられる建物跡である。ただし、ピットの重複が著しいことと、調査区外南側に延びるため規模は確定できない。長軸の方位は、N-11°-Wを測る。

柱間は、SP56・68間で3.20m、SP68・06間で2.10mを測る。柱穴底面のレベルは、45.40～45.50mを測る。

SP07・56・68から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

2) 溝跡 (SD)

SD01 (第4図・14図)

A～C-1～3区から検出された溝跡である。調査区外北側に延びるため全体形・規模は不明であるが、A-3区からグリッドラインに沿ってC-3区に至り、C-3グリッド杭付近でほぼ直角に折

れ北に延びることから、全体形は方形にめぐる溝と考えられる。主体部は検出されなかったが方形周溝墓と考えられよう。SH02とは切り合い関係にあり、SD01がSH02を切っている。

方台部の規模は東西約6mを測り、南北で検出された長さは5mを測る。C-3グリッド杭付近ではほぼ直角に折れる南東コーナー部が確認されたが、南西隅ではやや南に開きながら延び明瞭なコーナーは確認されなかったことから、方台部の形状も整然とした方形ではない可能性がある。

溝幅は一定ではなく、1.0~2.2mでかなりばらつきが見られる。溝底のレベルも一定ではなく、最も深い南東コーナー付近では、確認面からの深さ42cm(標高45.58m)を測る。最も浅い北東部では、深さ28cm(標高45.77m)を測る。

土層断面をみると、いずれも溝内側から埋没しているのが確認されることから、方台には盛土の存在が示唆される。

周溝内の遺物は、ほとんどが弥生時代後期の土器片であるが、第14図-6の高坏のような古墳時代中期に比定される土器片も出土している。後世の流れ込みであろうが、これ以外にもわずかではあるが古墳時代中期の土器片が混入することから周辺域には当該期の遺構が存在した可能性がある。

周溝内の遺物には、第14図-1~6がある。

3) 竪穴住居跡(SH)

SH01(第5図)

A・B-4区から検出された住居跡である。ごく一部が調査されたのみで、大半が調査区外に及ぶため、規模等は不明である。

検出された範囲では、貼床が10cm程の厚さで確認され、小穴を伴った壁溝がめぐっていた。

掘り方は、検出された範囲ではほぼ平坦で、壁溝の一部は掘り方面にも及んでいた。

覆土内及び貼床内からは、弥生時代後期に比定される土器片が少量出土しているが、図示可能なものはなかった。

SH02(第5図)

A・B-2・3区から検出された住居跡である。大半が調査区外北側に延び、SD01にも切られるため規模は不明である。

検出された範囲では、貼床が7~9cm程の厚さで確認され、中央部は硬化していた。南東壁面では幅25cm前後の壁溝も確認された。床面には大小の小穴も検出されているが、柱穴に相当するかは不明である。

掘り方はほぼ平坦であるが、部分的に凸凹が確認された。

覆土内及び貼床内からは、弥生時代後期に比定可能な土器片が少量出土しているが、図示可能なものはなかった。

SH04(第6図・14図)

D-3・4区から検出された住居跡である。ほぼ半分が調査区外南側に延びるため全体形は不明であるが、南北に長軸をもった円形を呈すものと考えられる。検出された規模は、東西軸で5.10mを測る。SH05との重複がみられ、新旧関係においては、SH05埋没後にSH04が構築されている。

主柱穴と考えられる小穴は、東西間で2.25mを測る。

床面付近まで耕作による削平を受けていたが、炉跡を中心に半径2m程の範囲で硬化した貼床面が確認された。

炉跡は、住居のほぼ中央にて検出された。長径68cm・短径46cmを測る楕円形を呈す。南北に灰黄褐色粘土塊と石が確認されたが、周堤状に存在したかは不明である。粘土塊の内側は被熱によってブ

ロック状に硬化していたことから、長期にわたる使用が想定される。炉の掘り方は、床面から13cm程に掘り込まれた浅い皿状を呈す。

貼床撤去後の掘り方はほぼ平坦を呈すが、中央部(SH05)がやや窪んでいることから、SH05が完全に埋没しきらない状態でSH04が掘削されたと考えられる。

壁溝はほぼ全周する状態で検出され、一部は掘り方面まで達しており、小穴を伴う部分もあった。

貼床内から弥生時代後期に比定される土器(第14図-7)が出土している。

SH05 (第6図)

D-3・4区から検出された住居跡。重複関係にあるSH04同様、ほぼ半分が調査区外南側に延びる。そのため、全体形、規模、炉跡等の詳細は不明である。貼床も確認されなかった。新旧関係においては、SH05埋没後にSH04が構築されている。

掘り方面からは壁溝が確認されたが、全周していなかった。おそらく、SH04構築時にSH05の一部が削平されたものと考えられる。

覆土内からは弥生時代後期に比定される土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

SH06 (第7図)

D・E-1・2区から検出された住居跡である。掘り方面付近にまで削平が及んでおり、残存していた壁溝をつなぎ合わせ、炉跡と想定される焼土痕の存在などから竪穴住居跡と確認されたもので、遺存状態は非常に悪い。図上復元によると、南北約7.10m、東西約6.30mの南北に長軸をもった円形を呈すものと考えられる。

主柱穴と考えられる小穴も確認されている。小穴同士の重複が著しく複数の組み合わせが考えられるが、いずれも整然とした矩形を呈すものではない。想定される主柱穴間の距離は、東西3.20~3.30m、南北3.60~4.20mを測る。柱穴底面のレベルは、45.40~45.60mを測る。

掘り方はほぼ平坦であるが、壁溝内側の一部に周堤上の高まりが確認できる。

残存した貼床及び小穴内からは、弥生時代後期に比定される土器小片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

SH07 (第8図)

D・E-2・3区から検出された住居跡である。北側に位置するSH06同様、掘り方面付近にまで削平が及んでおり、壁の一部、炉跡と想定される焼土の存在などから竪穴住居跡と判断したものである。そのため、形状・規模等については不明である。

主柱穴と考えられる小穴が確認されているが、整然とした矩形を呈すものではない。想定される主柱穴間の距離は、東西2.10m、南北3.05mを測る。柱穴底面のレベルは、46.55~46.0mを測る。

炉跡については、炉跡と想定される焼土痕が確認されているが、周辺にはその他にも2カ所程の焼土痕が確認されていることから、SH07以外にも住居跡が存在していた可能性が高い。

残存した貼床及び柱穴内からは、弥生時代後期に比定される土器小片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

SH08 (第9図・14図)

E・F-3・4区から検出された住居跡である。ほぼ半分が調査区外南側に延びるため全体形は不明である。検出された範囲での規模は、東西7.08mを測る。

主柱穴は、東西間で3.72m、柱穴底面のレベルで45.24~45.26mを測る。

貼床は5~8cm程の層厚をもち、炉跡周囲は非常に硬化していたが、それに比べ壁内側は軟質であった。

炉跡は、北壁から3m程離れた箇所で見出された。長径68cm程の不整な円形を呈し、北側に開いたC字状の灰黄褐色粘土の周堤をもつ。周堤内は被熱による硬化部分が認められた。炉跡の掘り方は、長径78cm、短径74cm、深さ7cmを測る浅い皿状の円形を呈す。

貼床撤去後の掘り方はほぼ平坦を呈し、壁溝がほぼ全周するように見出された。北西部では壁溝が二重にめぐる箇所があることから、住居の拡張があったことが想定される。

覆土及び残存した貼り床及び柱穴内からは、弥生時代後期に比定される土器（第14図-8～11）が見出している。

SH13（第11図・14図）

E・F-1・2区から見出された住居跡である。北西に位置するSH06同様、掘り方面付近にまで削平が及んでおり、壁・壁溝の一部、炉跡と想定される焼土の存在などから竪穴住居跡と判断したものである。北西に位置するSH06とは切り合い関係にあるが、新旧関係は明確にできなかった。

図上復元によると、南北約5.40m、東西約4.60mの南北に長軸をもった隅丸方形を呈すものと考えられる。

主柱穴と考えられる小穴が確認されているが、整然とした矩形を呈すものではない。想定される主柱穴間の距離は、東西1.95～2.10m、南北2.50～2.75mを測る。柱穴底面のレベルは、45.52～45.80mを測る。

柱穴内から弥生時代後期に比定される土器（第14図-13）が見出している。

4）柱穴列（第12図）

F・G-1・2区から見出された柱穴列である。複数の柱穴が比較的まとまりをもち、直線的に列ぶことから掘立柱建物跡の存在も想定されたが、柱通りには建物としての規則性が認められないため柱穴列として取り扱った。ただし、調査区外東側にも延びる可能性もあり、柱穴列周囲には攪乱・削平が広範囲に及んでいたことから、建物としての可能性も否定できない。

SP126・125・124をから成る柱穴列は、主軸N-7°-Eを測る。柱間は、SP126・125間で1.05m、SP125・124間で1.10mを測る。柱穴底面のレベルは、45.68～45.92mを測る。

SP132・131・130から成る柱穴列は、主軸N-4°30'-Wを測る。柱間は、SP132・131間で1.54m、SP125・124間で1.83mを測る。柱穴底面のレベルは、45.40～45.48mを測る。

SP176・177・178・159から成る柱穴列は、主軸N-3°-Wを測る。柱間は、SP176・177間で1.35m、SP177・178間で1.58m、SP178・159間で1.70mを測る。柱穴底面のレベルは、45.52～45.72mを測る。SP159は他の柱穴とは異なり柱穴周囲が溝状に掘削された布堀状を呈している。

覆土内からは弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器片が少量見出しているが、図示可能なものはなかった。

5）性格不明の遺構（SX）

SX03（第4図）

C-2区から見出された遺構である。SD01（方形周溝墓）の内側に存在することから、SD01に伴う遺構とも想定されたが、形状などから見て関係はないようである。

平面形は不整円形を呈し、長径1.86m、短径1.25mを測る。長軸の断面形には段差みられ、土層観察からも複数の遺構の重複の可能性も考えられる。

覆土内からは弥生時代後期に比定される土器片が少量見出しているが、図示可能なものはなかった。

SX04（第13～14図）

F・G-3・4区から見出された遺構である。平面形は不整形で、長径5.50m、短径4.80mを測る。

立ち上がり（壁面）は緩やかで、その幅も箇所によってばらつきがある。特に東壁は1 m程の幅をもち明瞭な立ち上がりではない。

底面には、若干の起伏がみられる。また、小穴もみられるが、いずれも浅く意図的に掘削されたものではないと考えられる。

壁際にも複数の小穴が認められたが、柵のような並びは認められない。

土層観察によれば、レンズ状堆積が認められるが、1層の黒褐色土中より多数の古墳時代中期の土器破片（テンバコ 650×450×330：3箱）が出土している。いずれも破片であり、ほとんど接合しなかった。おそらく、土器破片を中心とした塵芥の投棄・埋め戻しのための施設、いわゆるゴミ穴と考えられる。

覆土中には、古墳時代中期の土器片のほかに弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が少なからず混入していたことから、古墳時代中期に比定されるSX04掘削以前には、SX04とその周囲に弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が存在していたことが窺える。よって、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片の混入は、該期の遺構を壊してSX04が掘削され、古墳時代中期の土器片を含んだ塵芥投棄後の埋め戻しの際に土器片が混入したものであり、掘削から埋め戻しまでは短期間であったことが示唆される。

覆土内からは古墳時代中期の土器片が多数出土しており、主なものとしては第14図21、第15図23～26がある。また弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器には、第15図27～30がある。

ii) 遺物の概要

ここでは、今回の調査によって出土した遺物を、遺構毎に、壺、甕、高坏、その他の遺物の順に、その概要を記す。

1～6は、SD01出土の土器である。1は壺の口縁部片である。折り返し口縁を呈し、内外面ともに磨滅が著しいが、棒状浮文の痕跡が確認できる。

2は壺の口縁から頸部にかけての破片である。頸部には細かい羽状刺突文が施文される。

3は壺の頸部片である。単節LRの縄文が施される。

4は壺の底部片で、比較的大型のものであろう。

5は台付甕の接合部で、外面にはハケが施される。

6は高坏脚部片である。いわゆる屈折脚で、ほとんど脚胴部は張らずに直線的に立ち上がる。

7はSH04出土の台付甕口縁部片である。口縁端部には浅いキザミが施される。外面頸部から胴部にかけて縦ハケが、口縁内面には横ハケが施される。

8～12は、SH08出土の土器である。8は折り返し口縁を呈す壺の口縁部片である。単節RLの縄文を施し、棒状浮文を貼付する。

9は壺の頸部片である。3段の羽状刺突文が施され、下段には5個単位の円形浮文が貼付される。

10は高坏もしくは壺の口縁部片である。口縁端部の上部と下部にそれぞれキザミを施す。

11は高坏の脚部で、脚部上部幅が広く、中位に径7mm程の円窓を穿つ。

12は台付甕の口縁から胴部片で、口縁端部をやや肥厚させそこにキザミを施す。内外面にはハケがみられるが、口縁の縦ハケは顕著である。内面にはナデが施される。

13はSH13出土の台付甕口縁部片である。頸部の屈曲が強く、口縁端部は面取りされ、そこに波状のキザミが施される。内外面のハケも丁寧に施される。

14はSP01出土の壺の口縁部片である。上部からハケ、ナデ、羽状刺突文が施される。内面は横

ナデが施される。

15はS P65出土の小型壺である。完形であるが、全体にやや歪みがある。胴部中位に最大径をもったソロバン状を呈す。口縁には横ナデが施され、その他はハケが施される。

16はS P130出土の甕の口縁から胴部片である。ズングリした胴に直立気味の口縁がつく。磨滅が著しいが、ハケ目が観察できる。

17～34はS X04出土の土器である。17は壺の頸部片である。細かい羽状刺突が施される。

18は小型壺の胴部片である。胴下半に稜線をもち、その周囲にはミガキが、それ以外にはハケ目が確認できる。

19は壺の頸部片である。押厚文と2段の羽状刺突文が施される。

20は壺の胴部片である。ズングリとした器形で外面には縦ハケが、内面には板ナデが施される。

21～25は、いずれも折り返し口縁の壺で、内外面ともに顕著な横ナデが施される。

22の肩部にはハケ目がみられる。

26は中型の折り返し口縁の壺でほとんど胴が張らない。

27は壺の底部片である。

28は高坏の接合部で、粘土の貼り付けがみられる。

29も高坏の接合部で、1段半の羽状刺突文とミガキが施される。

30も高坏の接合部で、明瞭な羽状刺突文が施される。

31は鉢の胴部片で、頸部には幅広の沈線がめぐる。

32は高坏の高部片で、磨滅が著しいが内外面にミガキが確認できる。

33は器台の脚部片である。3カ所に円窓をもち、上部には6本の沈線がめぐり、下部にはミガキが施される。

34も器台の脚部で、円窓を有し全体にミガキが施される。

35～42は遺構外から出土土器である。35は壺の頸部である。S字状結節と単節RLの縄文が2段にわたって施される。

36は壺で、口縁部を欠損する。胴下半に最大径を有し、そこに弱い稜線がめぐり、稜線をより上にはハケが施され、下にはミガキが施される。

37は壺の底部片で、外面にはハケが施される。

38は壺の底部片で、外面は磨滅しているが、内面にはハケが施される。

39は壺の底部片で、外面にはハケが施される。

40は高坏脚部で、外面は丁寧なミガキが施される。

41は高坏脚部で、坏部との接合部が非常に厚い。

42は高坏脚部で、脚端部に向かってやや広がる。

4. まとめにかえて

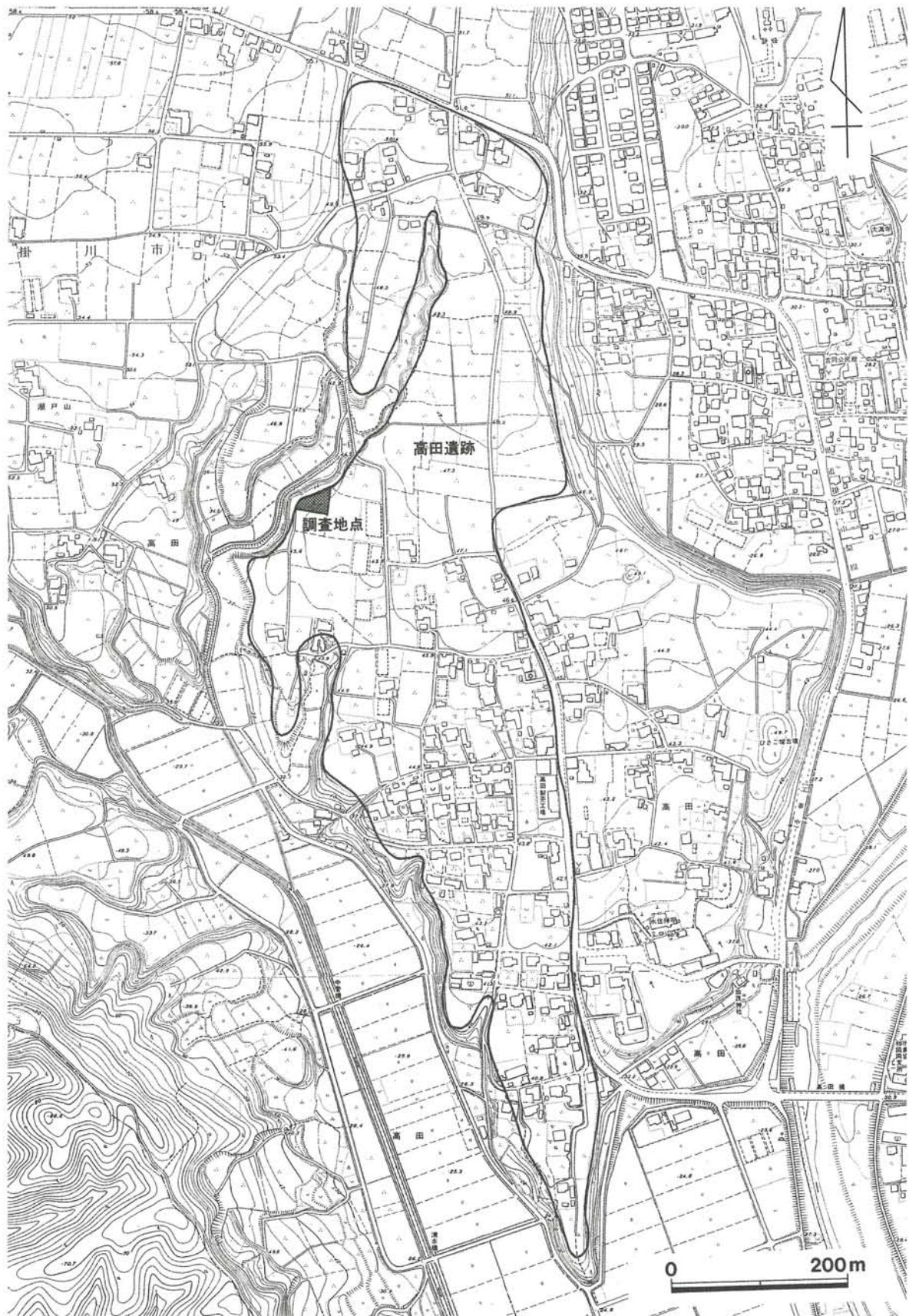
今回の調査に加え、今年度実施された高田遺跡第17・20次調査地点とともに、高田遺跡における集落の立地について若干の考察をもってまとめにかえたい。

今回の調査では、段丘縁辺部に展開する弥生時代後期の集落を確認することができた。竪穴住居跡そのものの遺存状態は、良好なものとは言い難く、調査面積も395㎡と決して広いものではないが、削平によって消滅したであろう竪穴住居跡の存在を勘案すると、竪穴住居の展開はかなり周密であったと言える。また、調査区外には掘立柱建物跡の存在も予想される。

高田遺跡は、原野谷川により形成された標高 40～50mの河岸段丘上に立地しており、その比較的平坦な段丘には、その粗密はあるものの弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が広く展開する遺跡である。今回の調査をはじめ、これまでの調査事例が示すように段丘縁辺部では当該期の集落が比較的周密に展開することが判明している。これまでの調査例のほとんどが段丘縁辺部であり、段丘内部の様相については不明な点が多かった。今年度実施された第 17 次調査地点は、段丘内部に立地しており、調査の結果、弥生時代後期から古墳時代中期に及ぶ集落で、各時期の遺構は比較的周密に展開していることが判明した。また、古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代中期の竪穴住居跡の発見をはじめ、これまでの段丘縁辺部の調査ではほとんど実態がつかめていなかった時期の集落の一端が垣間見られるなど大きな成果を上げている。弥生時代後期から古墳時代前期の集落は、段丘内部と縁辺部を問わず比較的広範囲に展開していたようであるが、これまで集落の様相がほとんど不明であった古墳時代前期から中期、特に中期以降の集落動向を考える上では非常に重要な資料となった。今後の資料増加に期するところが大きい、段丘内部における当該期の集落動向が注目される。

第 19 次調査点同様、段丘縁辺部に立地する第 20 次調査の場合は、弥生時代後期から古墳時代前期はおろか中世まで人跡は皆無に等しい。ところが、弥生時代中期に比定される条痕系土器片が出土していることは看過できない。1 間×1 間規模の掘柱建物跡は、当該期に比定される可能性もあり、集落の詳細は明確にできないが、弥生時代中期に人間の営みがあったことは確かであろう。また、弥生時代後期以降、集落は継続しない点を考えると、集落立地においては弥生時代中期から後期にかけては画期があったようである。このように、わずかな資料ではあるが、弥生時代中期の集落立地を考える上でも重要な資料となった。

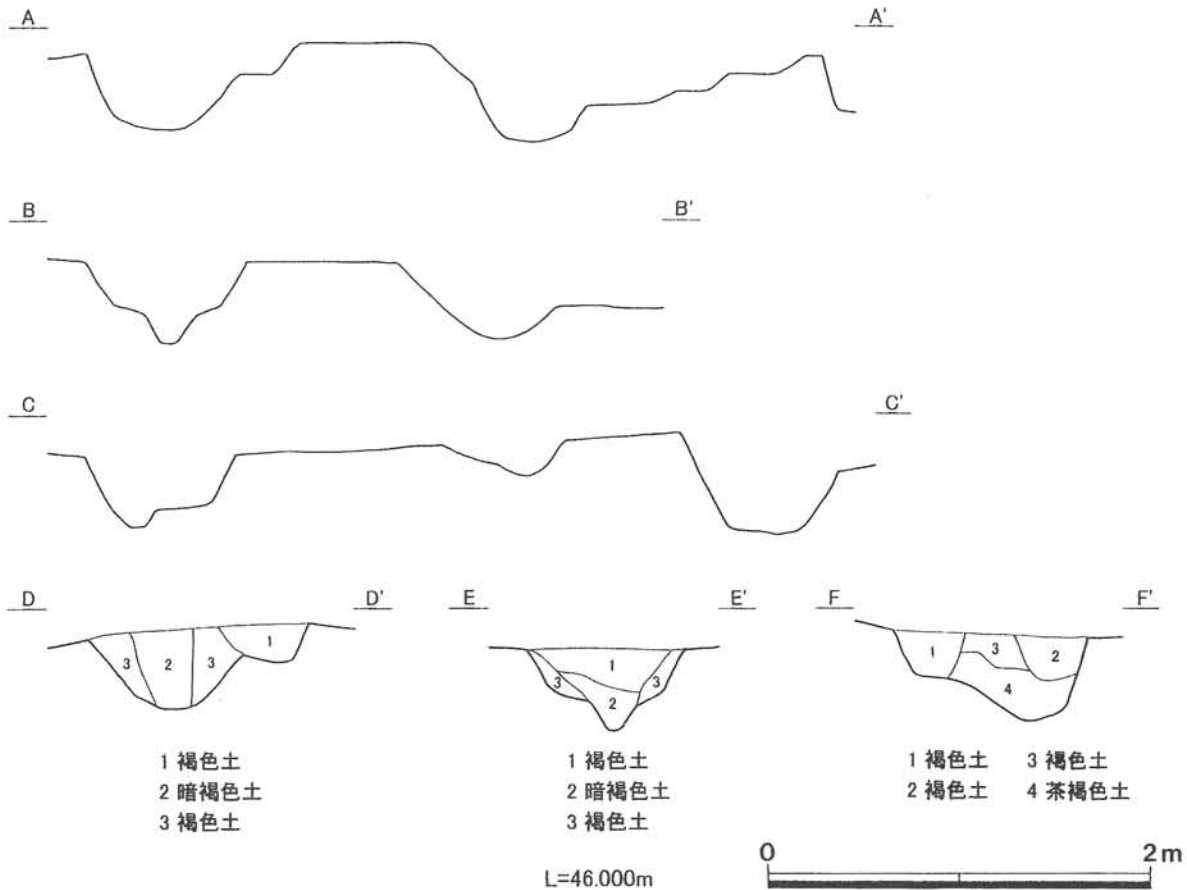
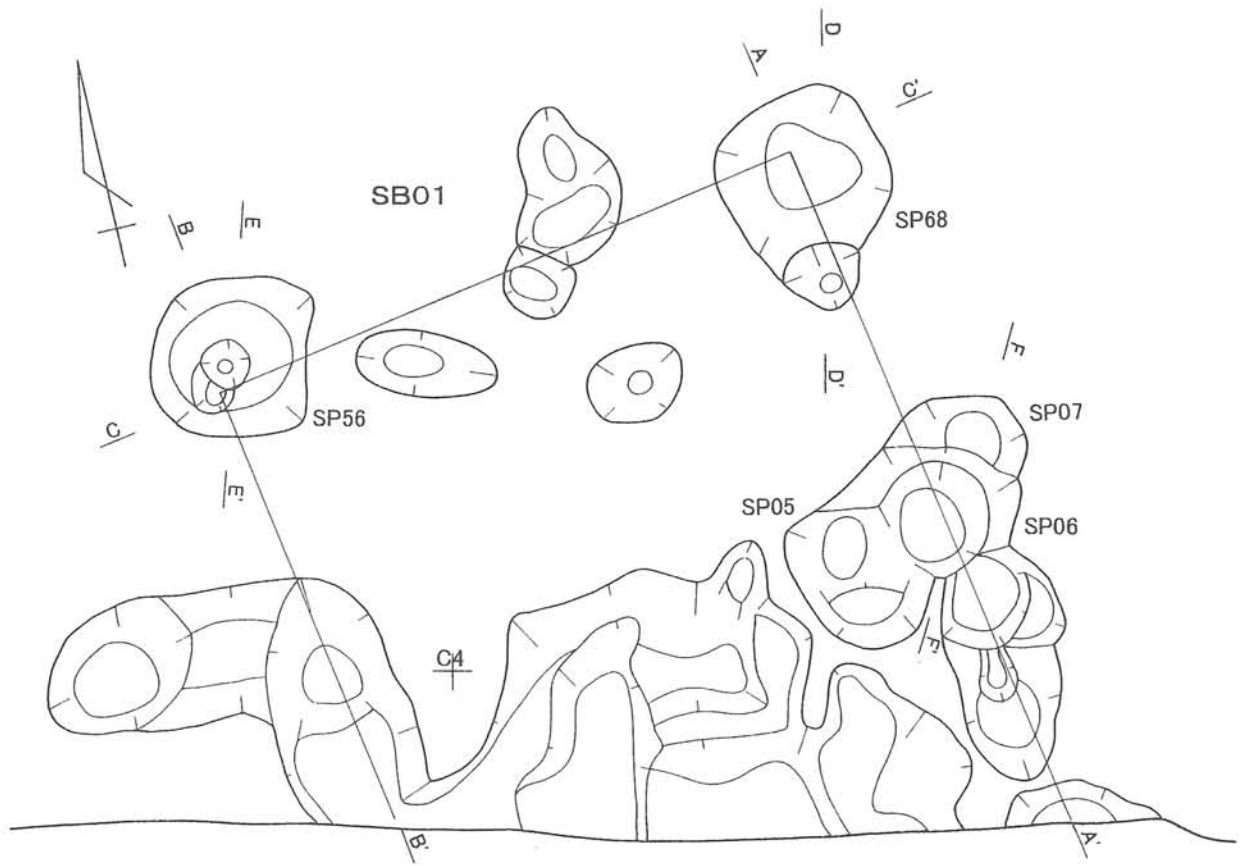
今年度の 3 地点での高田遺跡の調査によって、その粗密はあるものの弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は、段丘の内部、縁辺部を問わず比較的広範囲に展開することがあらためて明らかとなった。さらに、古墳時代中期の集落についてもその一端を垣間見ることができたが、集落動向については不明な点も多い。今後の事例増加に期したい。



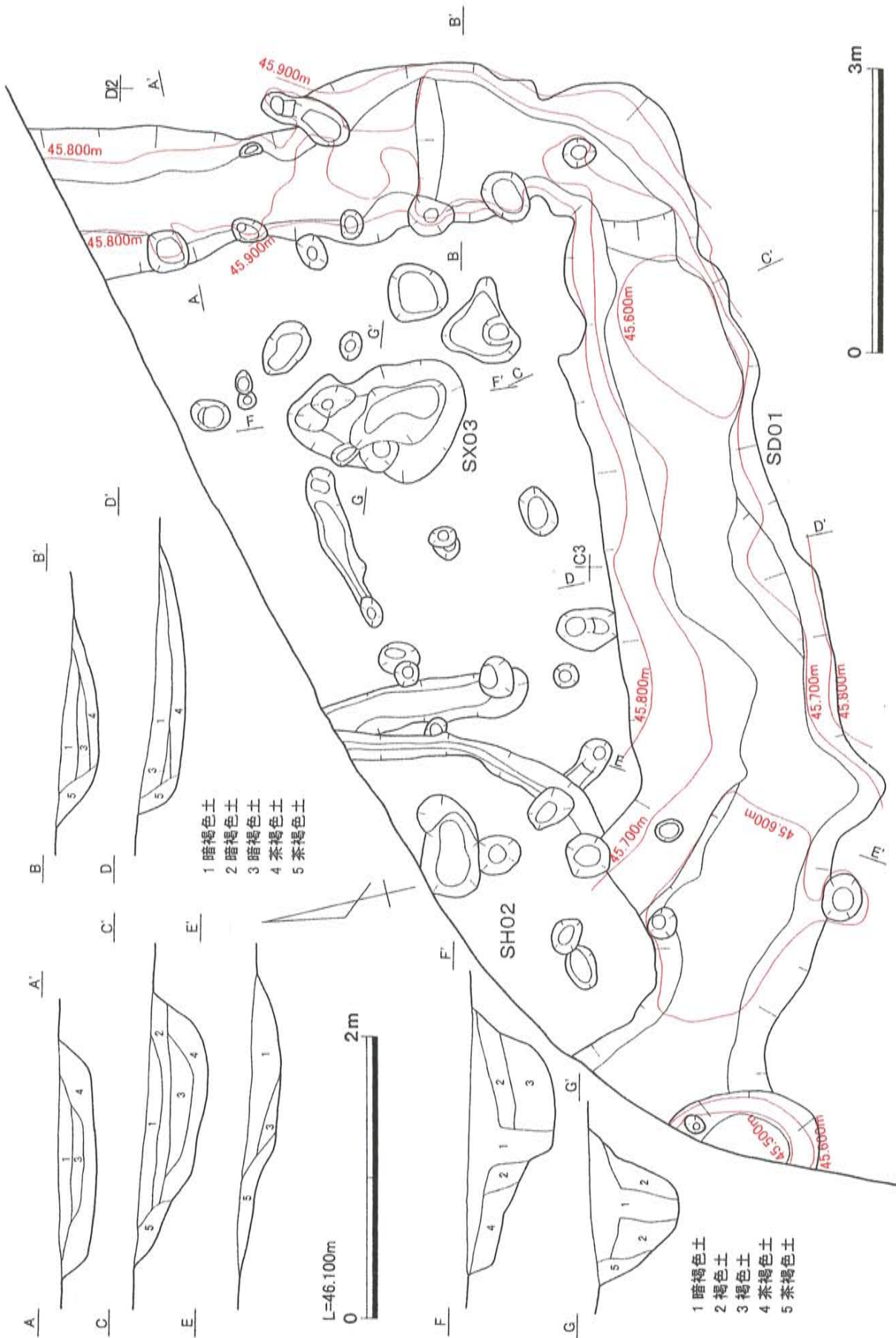
第1図 遺跡内における調査地点位置図



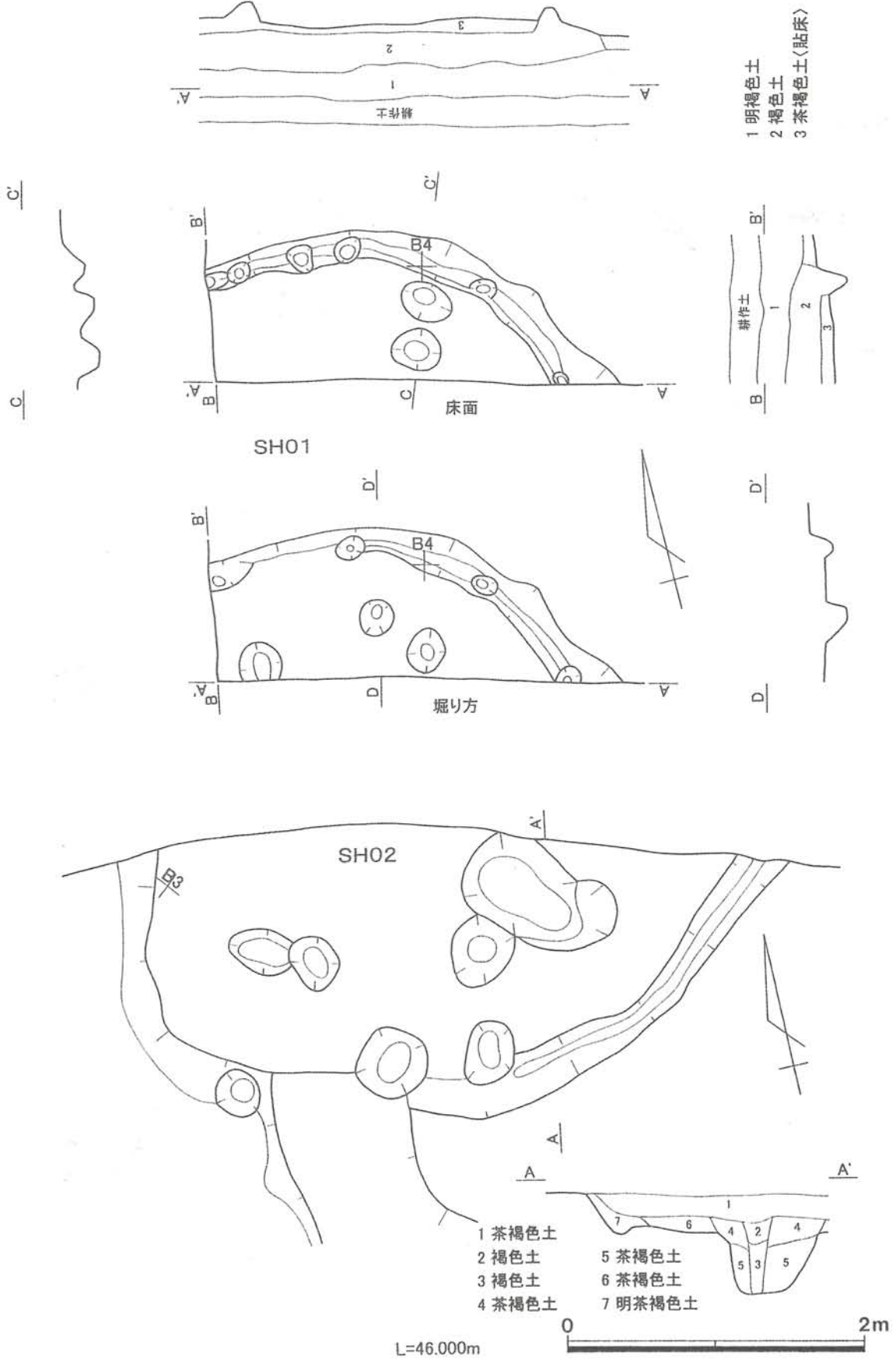
第2図 遺構全体図



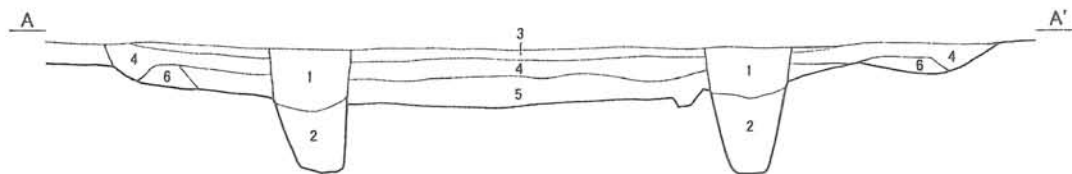
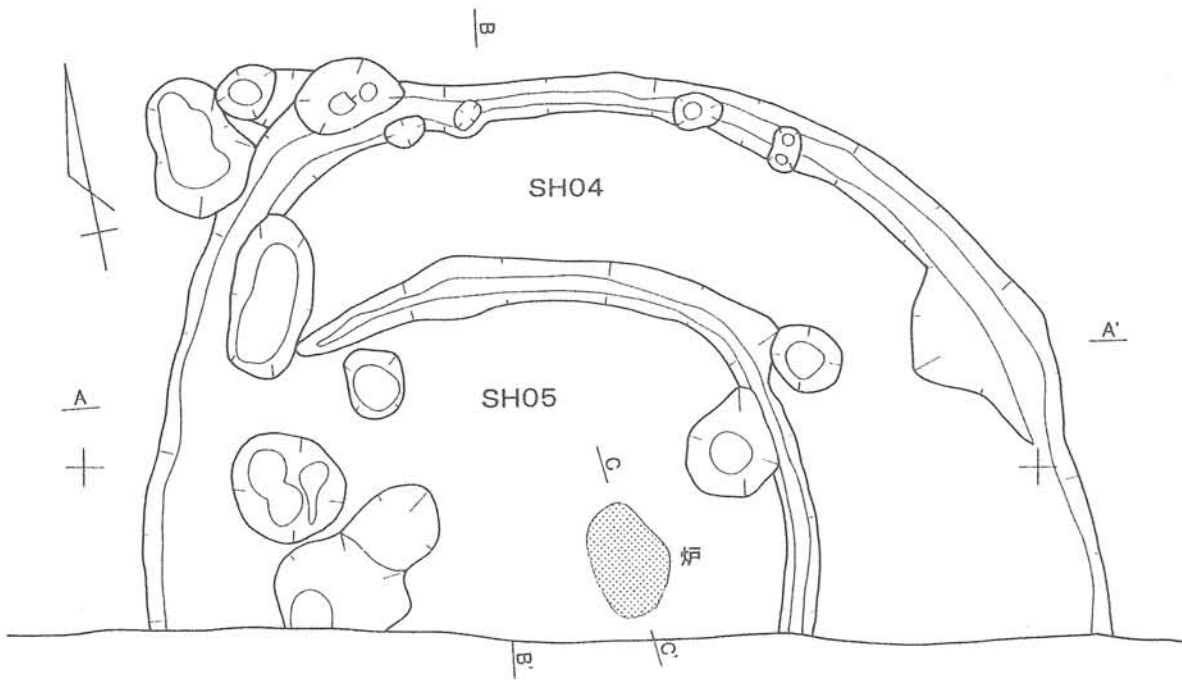
第3図 SB01実測図



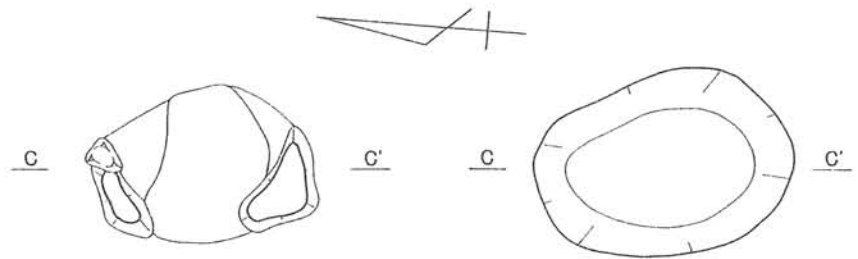
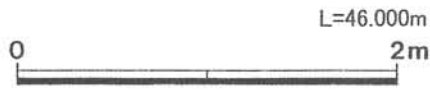
第4图 SD01実測図



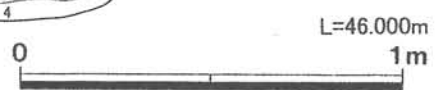
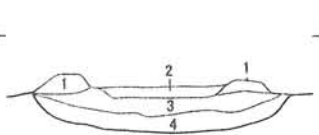
第5図 SH01・02実測図



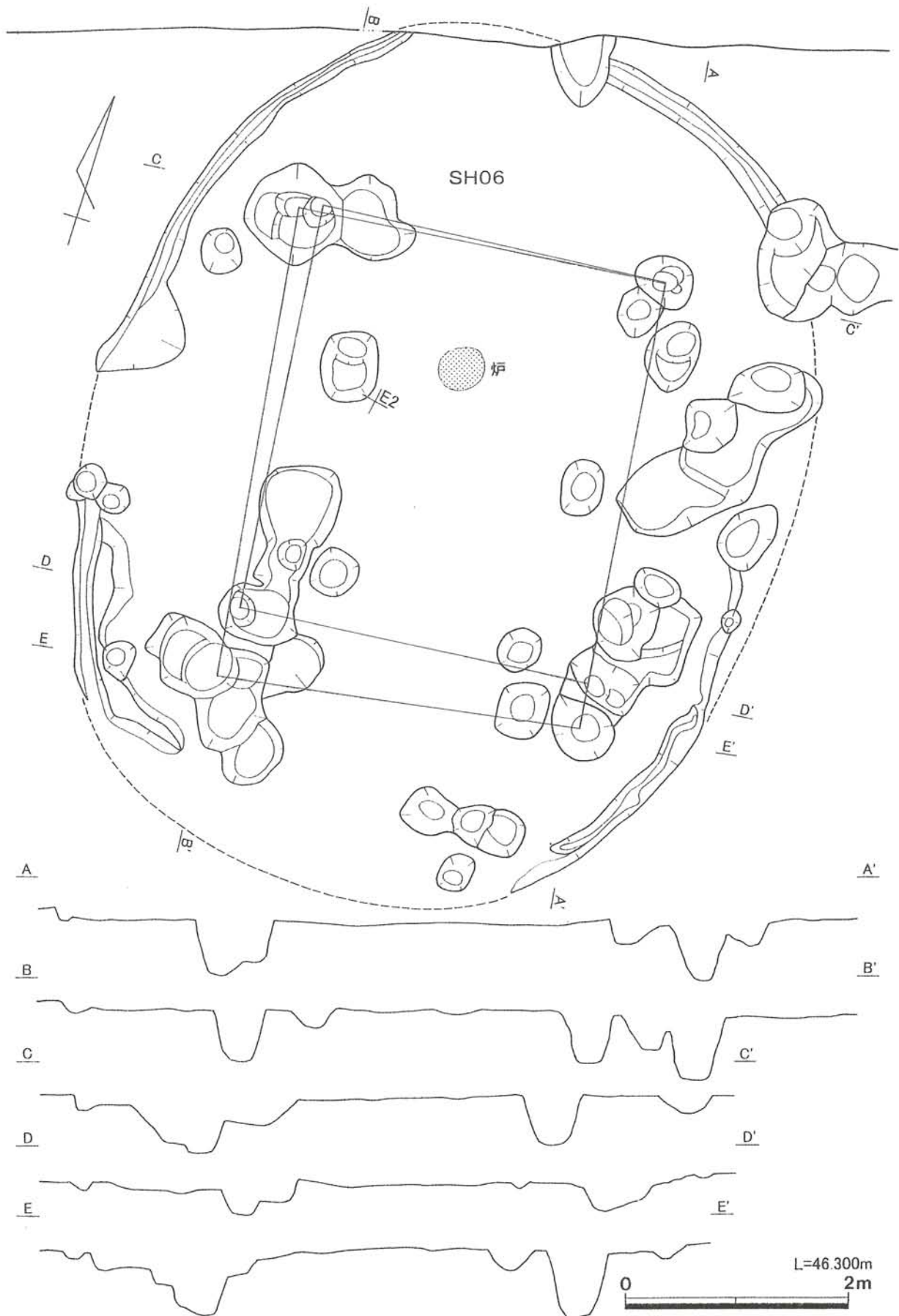
- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土(貼床)
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土
- 6 茶褐色土



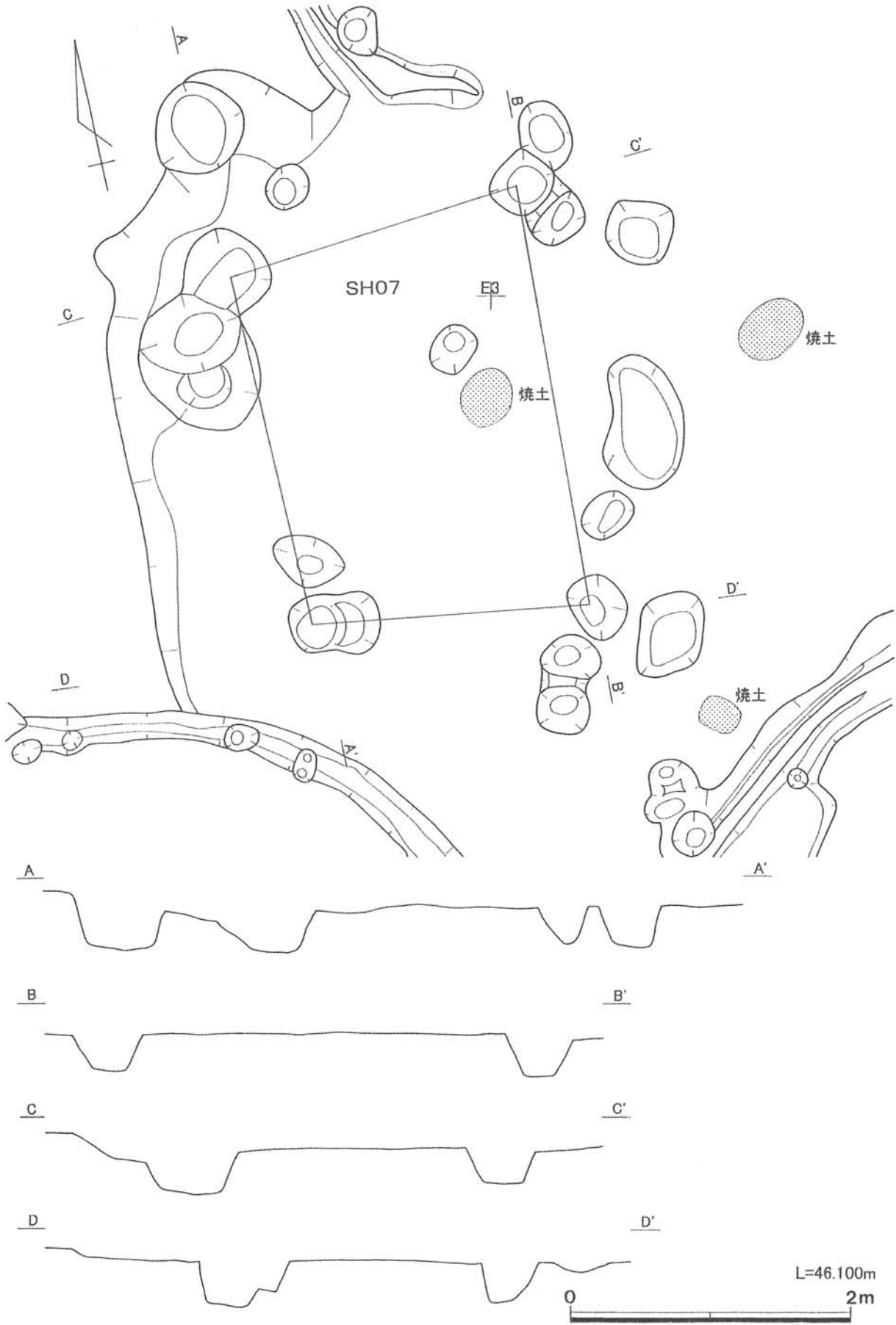
- 1 灰黄褐色粘土
- 2 被熱による硬化部分
- 3 被熱による硬化(ブロック)
- 4 茶褐色土



第6図 SH04・05実測図



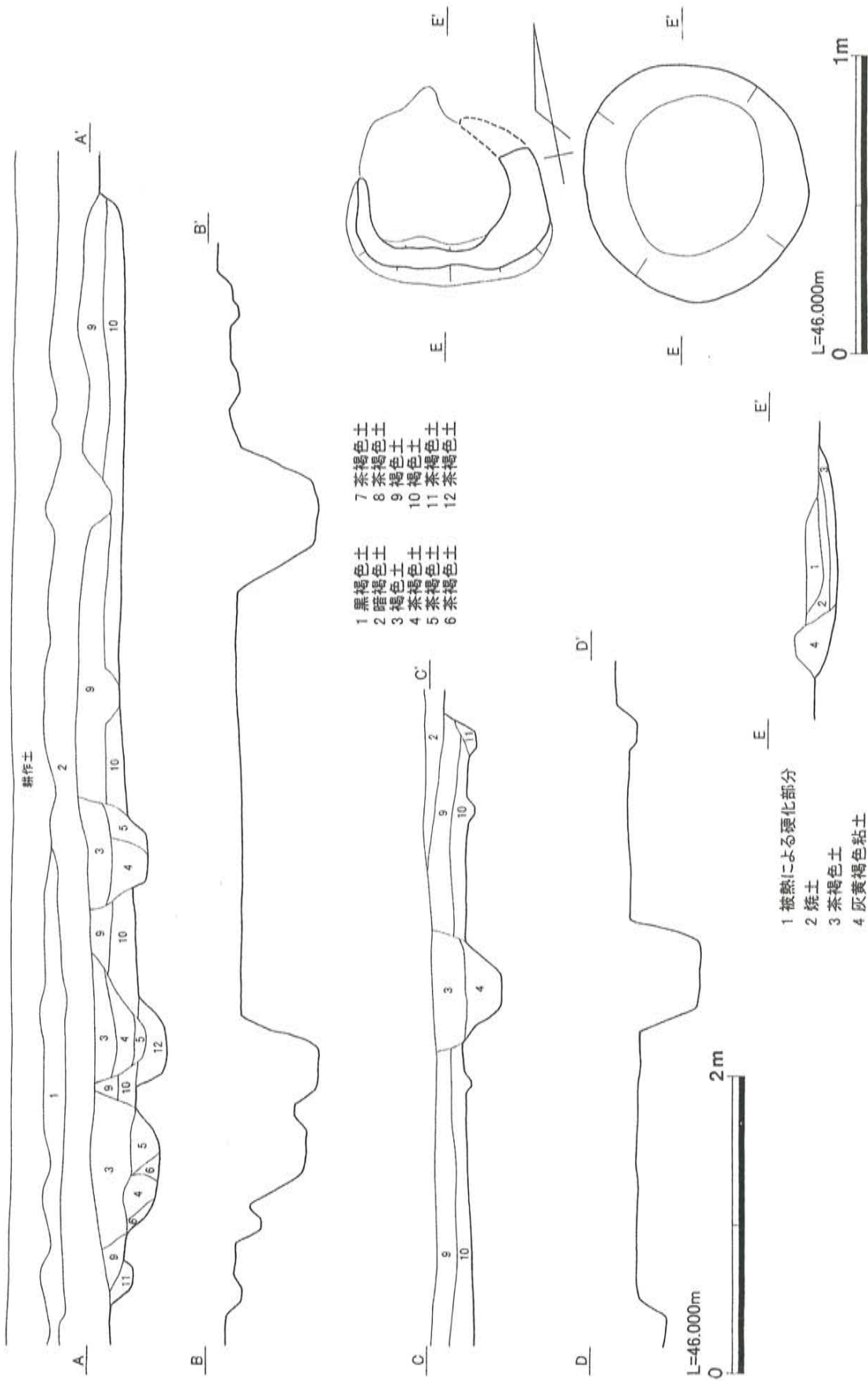
第7図 SH06実測図



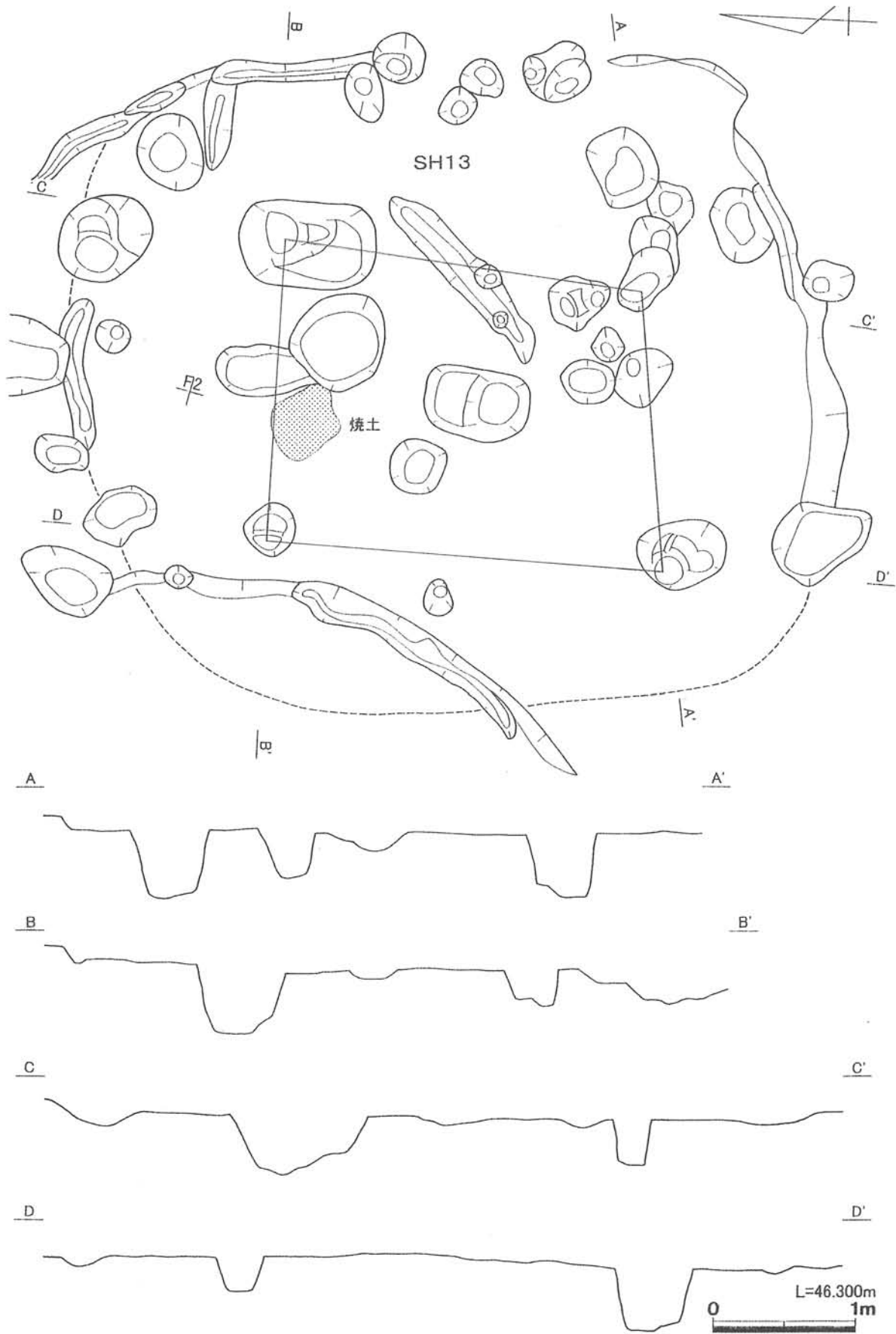
第8图 SH07实测图



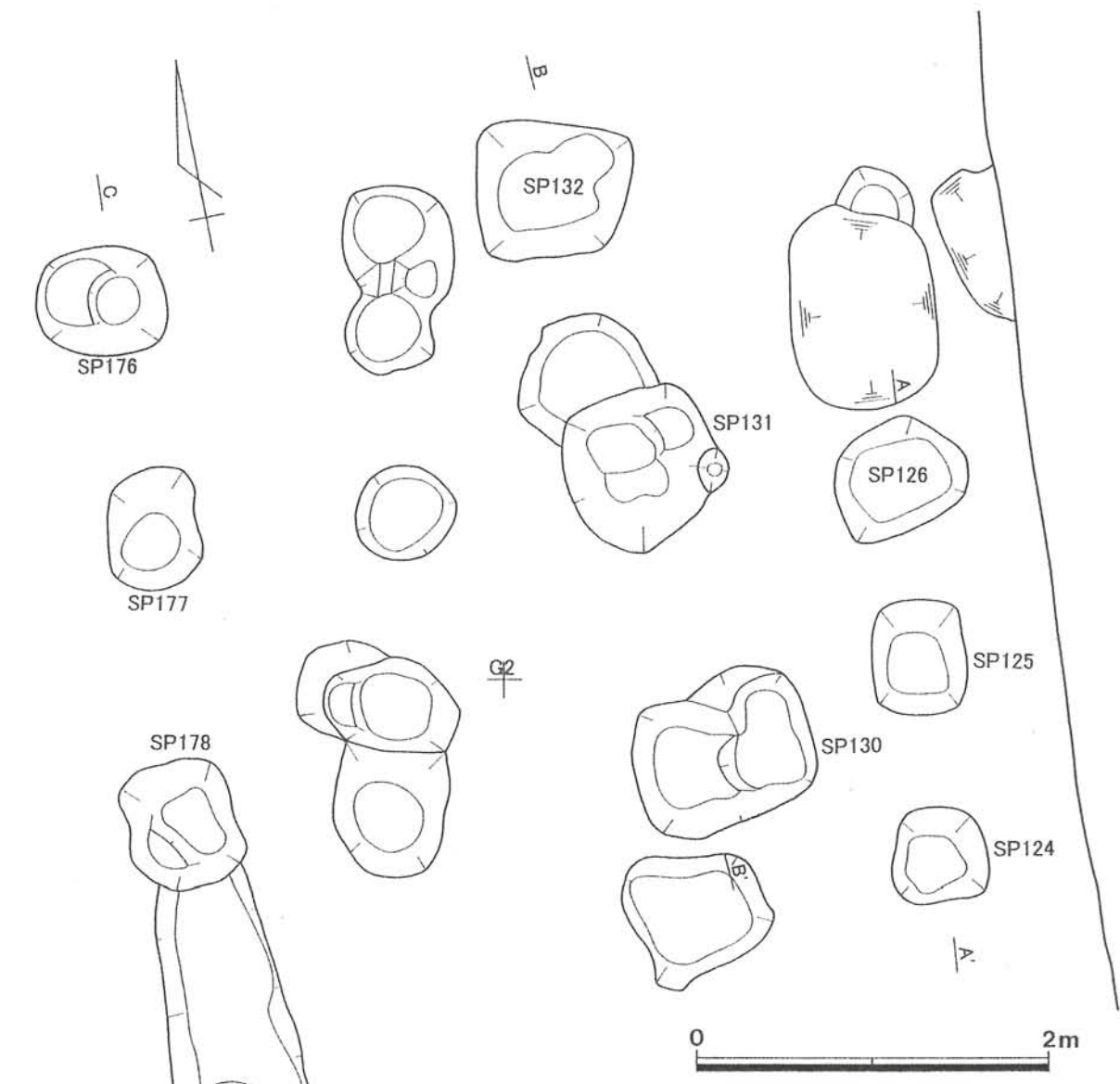
第9図 SH08実測図(1)



第10図 SH08東測図(2)



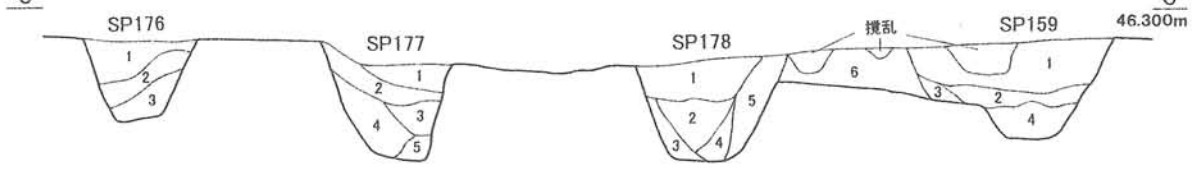
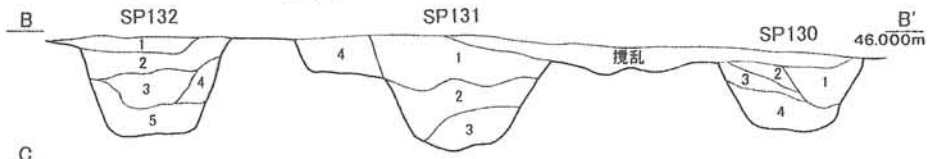
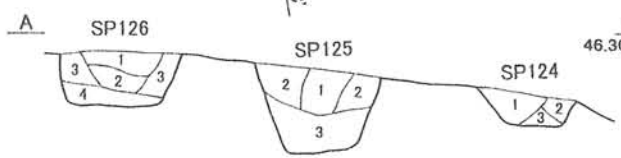
第11图 SH13实测图



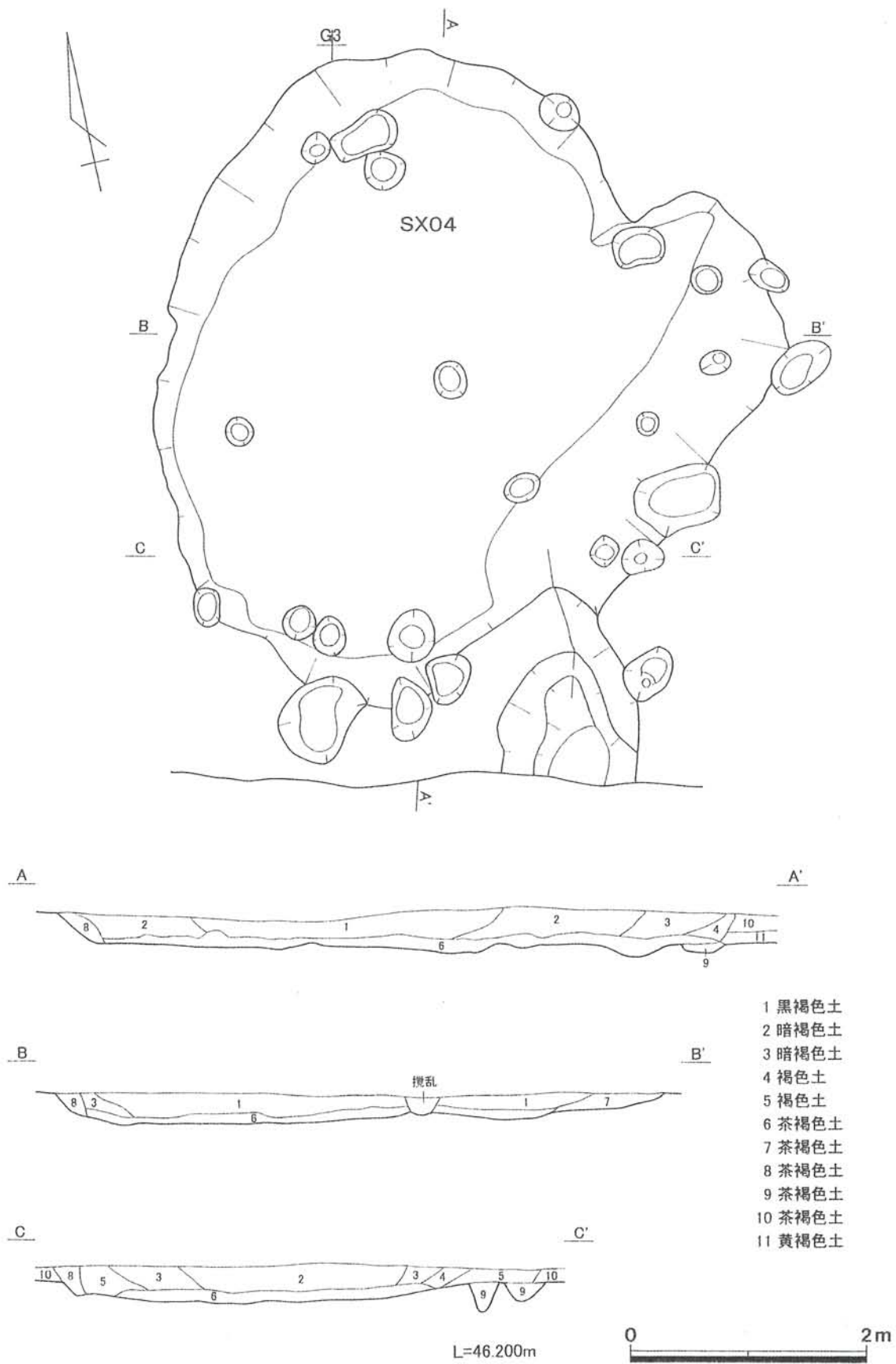
- | | | |
|--------|--------|--------|
| SP126 | SP125 | SP124 |
| 1 茶褐色土 | 1 暗褐色土 | 1 褐色土 |
| 2 褐色土 | 2 褐色土 | 2 茶褐色土 |
| 3 褐色土 | 3 暗褐色土 | 3 茶褐色土 |
| 4 茶褐色土 | | |

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| SP132 | SP131 | SP130 | SP176 |
| 1 暗褐色土 | 1 暗褐色土 | 1 褐色土 | 1 褐色土 |
| 2 暗褐色土 | 2 暗褐色土 | 2 茶褐色土 | 2 茶褐色土 |
| 3 褐色土 | 3 黄褐色土 | 3 茶褐色土 | 3 褐色土 |
| 4 黄褐色土 | 4 黄褐色土 | 4 黄褐色土 | |
| 5 黄褐色土 | | | |

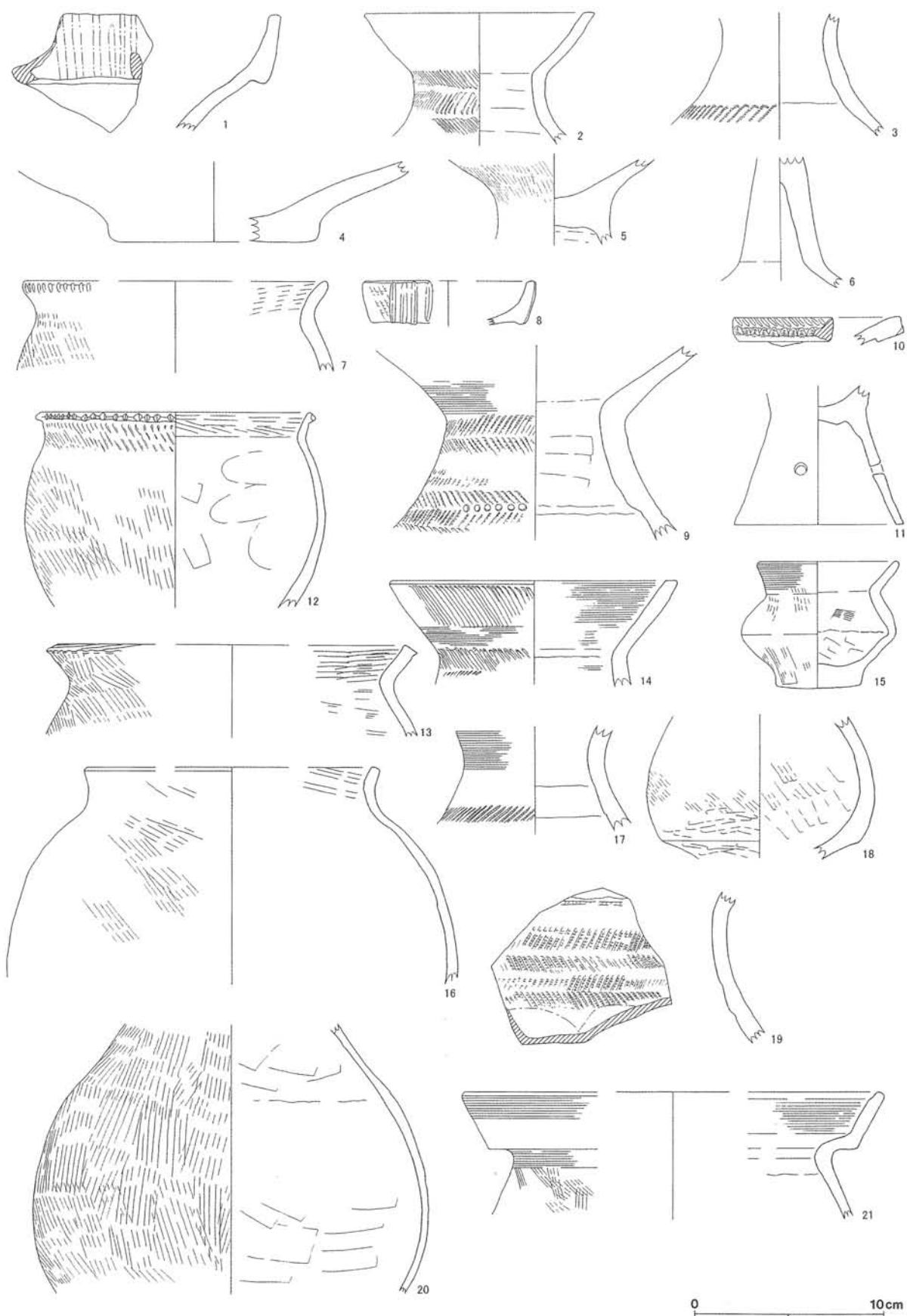
- | | |
|--------|------------|
| SP177 | SP178, 159 |
| 1 褐色土 | 1 褐色土 |
| 2 褐色土 | 2 褐色土 |
| 3 茶褐色土 | 3 茶褐色土 |
| 4 褐色土 | 4 褐色土 |
| 5 暗褐色土 | 5 暗褐色土 |
| | 6 茶褐色土 |



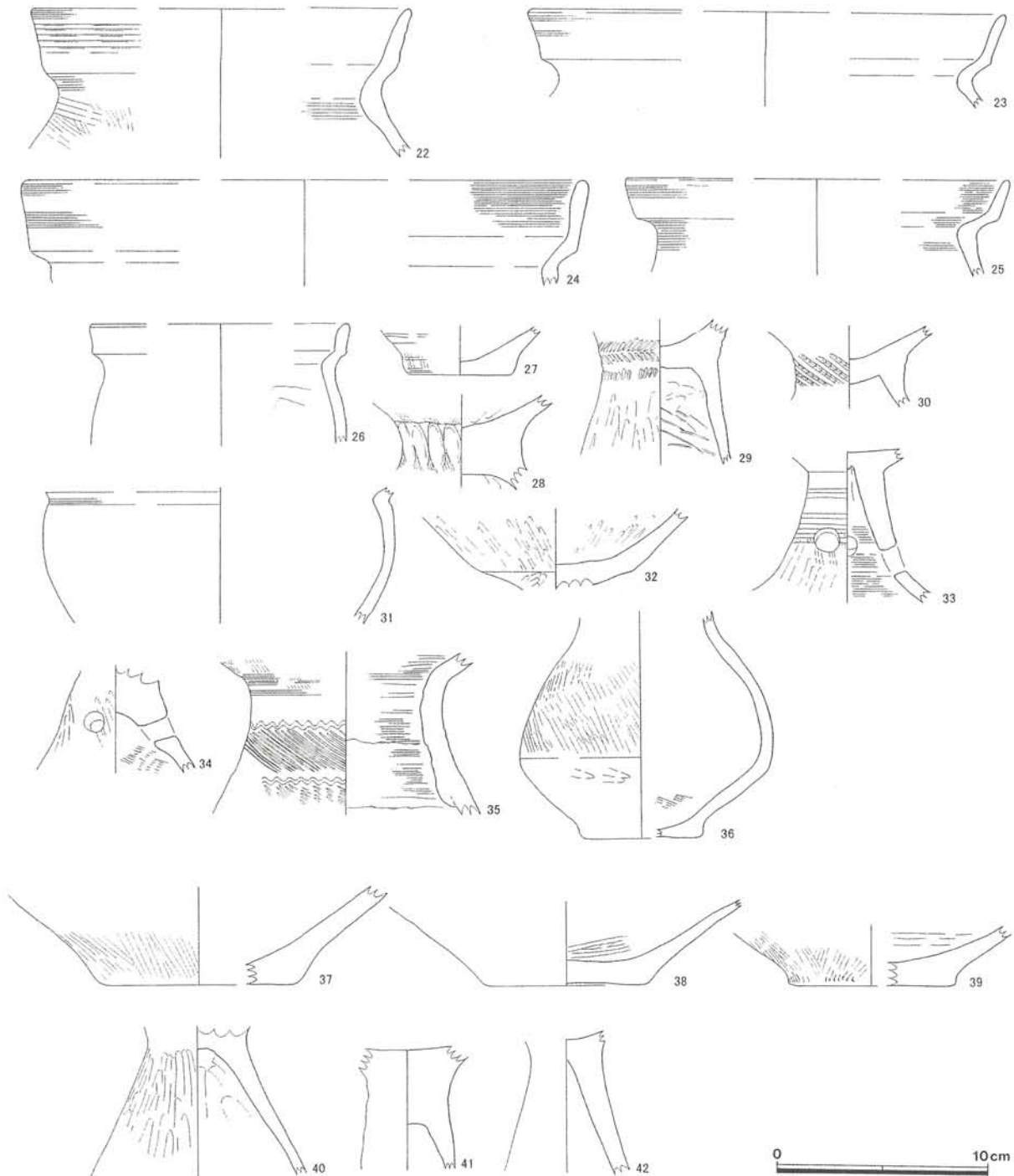
第12图 柱穴列实测图



第13图 SX04实测图



第14図 遺物実測図 (1)

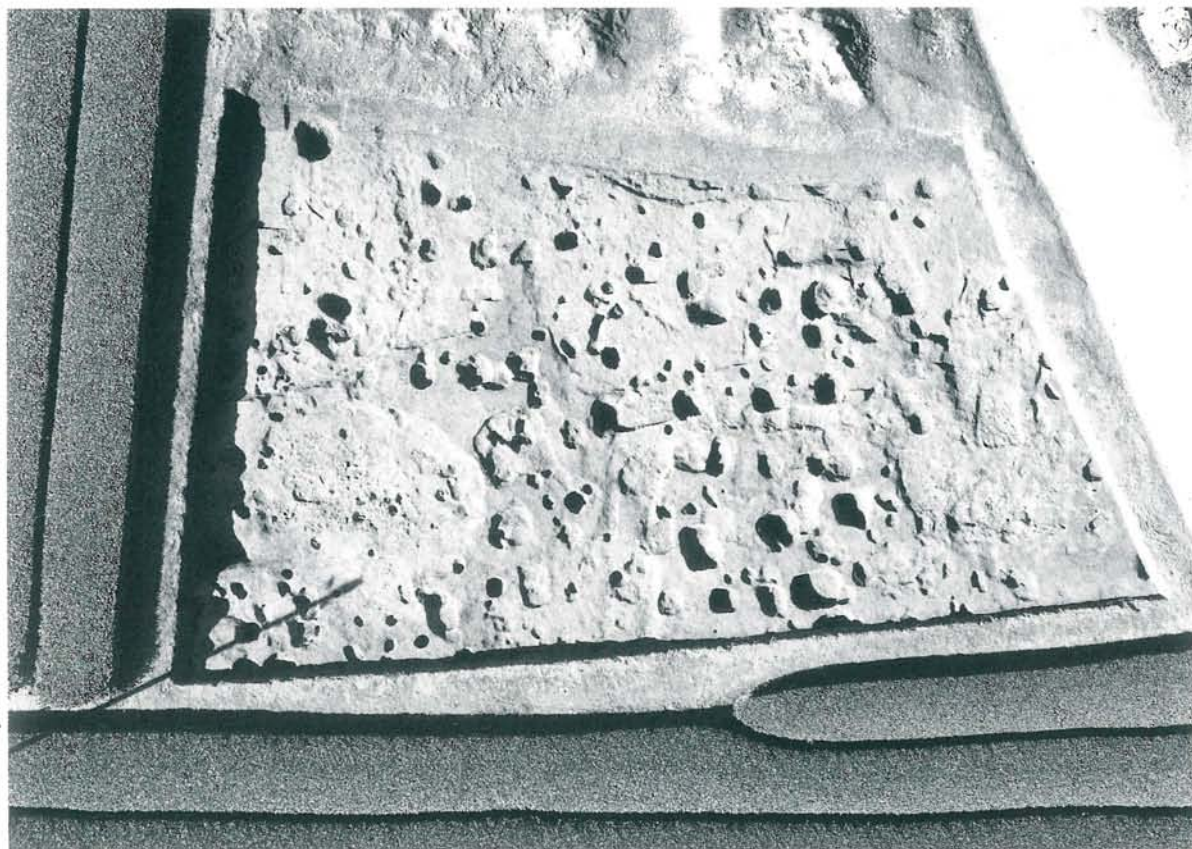


第 15 図 遺物実測図 (2)

図版 1

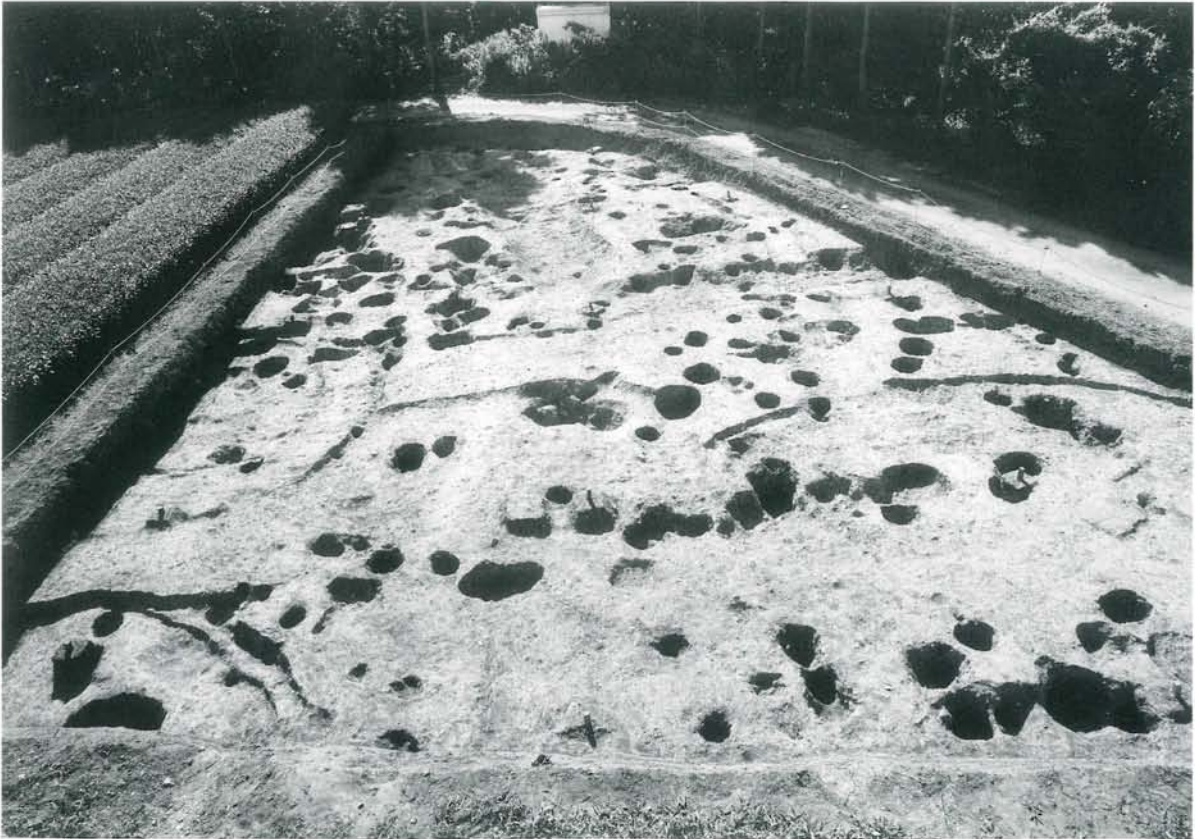


調査区西半全景 (空中写真)



調査区東半全景 (空中写真)

図版 2



調査区西半全景 (東から)



調査区東半全景 (北から)

図版 3



SD01 (西から)

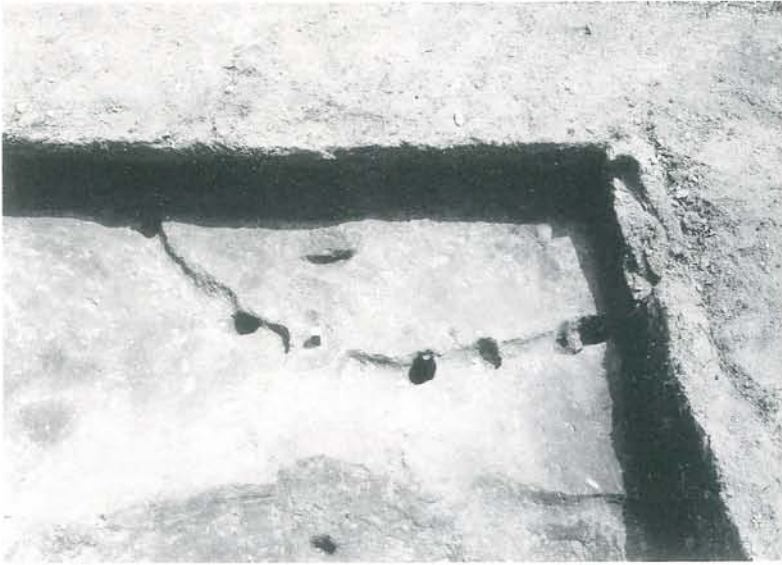


SD01土層断面 (西から)



柱穴列 (北から)

図版 4



SH01 (北から)



SH04・05 (北から)



SH04炉跡 (南から)

図版 5



SH06 (北から)

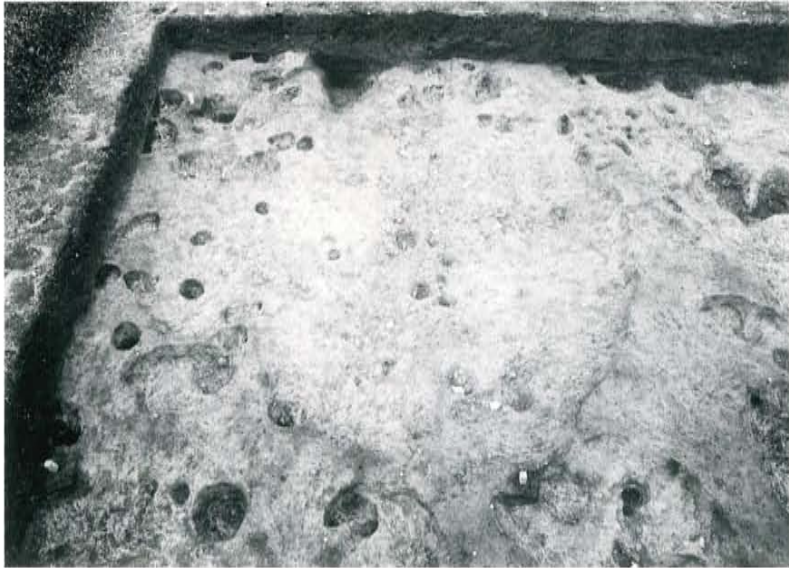


SH08 (北から)



SH08 炉跡 (東から)

図版 6



SX04 (北から)

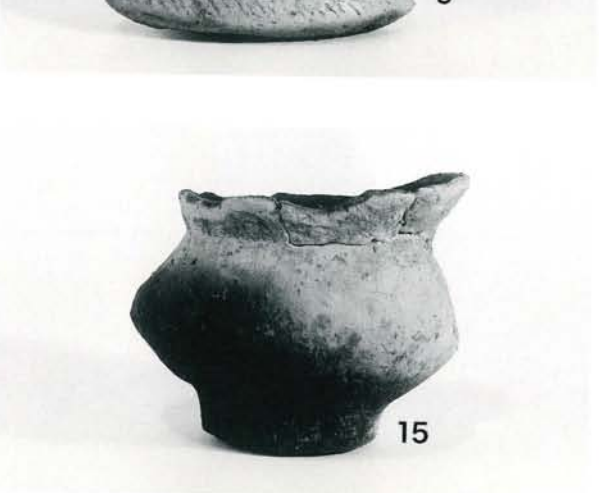


SX04土層断面1 (北から)

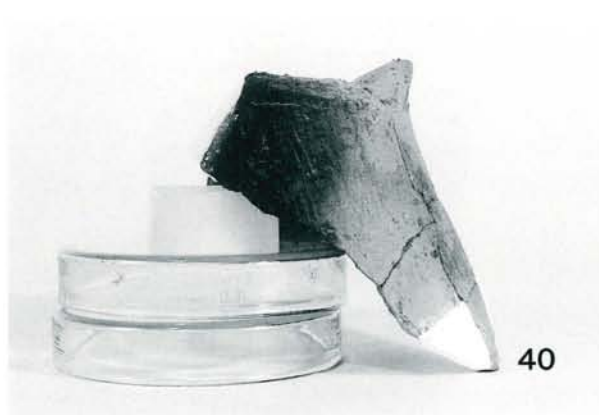
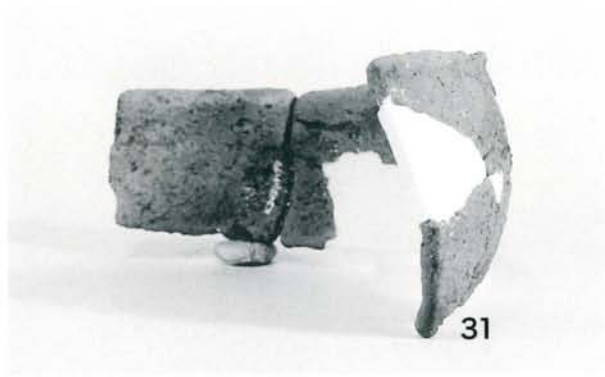


SX04土層断面2 (北から)

图版 7



图版 8



IV 高田遺跡第 20 次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成 17 年に茶園改植の計画があることを把握し、18 年 3 月 28 日に確認調査を実施した。その結果、遺物は出土しなかったが、地表下 30～35 cm から柱穴が検出された。確認調査の結果を基に、耕作者と協議したが、遺構面までの深度が浅いことから、保護層を確保しての改植は困難との結論に達した。そこで、平成 18 年 5 月 8 日に、記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。同年 5 月 19 日付けで、静岡県教育委員会から耕作者に対し、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」通知された。

2. 調査の方法と経過

調査は、対象地の形に合わせて 5 m 方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。グリッドは、アルファベットと数字を組み合わせて、B-2 区、B-3 区等の呼称とし、グリッドの北西に位置する杭にグリッドを代表させた。現地での図面作成は、遺構図を縮尺 20 分の 1 と 10 分の 1 を併用し、微細図は 10 分の 1 とした。写真撮影は、6×7 カメラ 1 台（ブローニャー白黒用）と 35 mm カメラ 2 台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、排土置き場を確保する必要から、対象地を 2 分割し、平成 18 年 10 月 17 日に前半部分の機械掘削を開始した。11 月 14 日から前半部分の埋め戻しと後半部分の機械掘削に入り、12 月 27 日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために、基準点測量を実施した。

3. 調査の内容

ここでは、柱穴の中で、柵列、掘立柱建物跡と考えられる遺構、わずかに図示できた遺物の概観を述べる。

i) 遺構の概要

1) 柵列 (SA)

SA01 (第 2 図)

C-6 区、D-6 区から検出された S P08・240・245・247 を柵列と考えた。S P08 と S P247 を結んだ軸は、N-71° 30' -W を測る。柱間は、S P247・245 間で 2.27m、S P245・240 間で 2.20m、S P240・08 間で 2.08m を測る。S P245 から、弥生土器か土師器の小片が出土した。

SA02 (第 2 図)

D-6 区から検出された S P229・230・247 である。S P229 と S P247 を結んだ軸は、N-16° -E を測る。柱間は、S P229・230 間で 0.92m、S P230・247 間で 0.91m を測る。出土遺物はない。

SA03 (第 2 図)

C-5・6 区から検出された S P08・462・217・215・204・188 である。S P188 と S P08 を結んだ軸は、N-22° -E を測る。柱間は、0.96～1.16m とばらつきがある。柱穴からの出土遺物はない。

SA04 (第 2 図)

B-6 区、C-6 区から検出された S P11・214・249 である。S P11 と S P249 を結んだ軸は、N

-21° 30′ -Eを測る。柱間は、S P249・214 間で 1.75m、S P214・11 間で 1.89mを測る。S P11 から、弥生土器か土師器の小片が出土した。

SA05 (第2図)

C-5区、D-5区から検出されたS P193・195・196・198・201・202・204 である。S P193 と S P202 を結んだ軸は、N-75° -Wを測る。柱間は、S P202・204 間が最も狭く 1.00mで、S P201・202 間が最も広く 1.21mを測り、ばらつきがある。柱穴からの出土遺物はない。

SA06 (第2図)

C-3・4区から検出されたS P113・141・106 である。S P106 と S P113 を結んだ軸は、N-8° 30′ -Eを測る。柱間は、1.35m、1.36mを測る。柱穴からの出土遺物はない。

2) 掘立柱建物跡 (SB)

SB01 (第3図)

D-3・4区、E-3・4区から検出された1間×1間の建物跡である。柱間は、S P338・108 間で 2.88m、S P336・135 間で 2.90m、S P336・338 間で 2.70m、S P135・108 間で 2.94mを測る。S P135 から、弥生時代後期と思われる土器の小片が出土した。

SB02 (第4図)

D-2区、E-1・2区から検出された1間×3間の建物跡で、長軸の方位は、N-10° -Wを測る。SB02 はSB03 と切り合うが、時期的な前後関係は明確ではない。柱間は、S P316・73 間で 2.84 m、S P276・265 間で 2.91m、S P276・307 間で 1.45m、S P307・310 間で 1.22m、S P310・316 間で 1.40m、S P265・270 間で 1.27m、S P270・70 間で 1.27m、S P70・73 間で 1.39mを測る。S P73 から 234 ページ第5図-1 が、S P265 から 18~19 世紀の磁器碗の破片が出土した。

SB03 (第5図)

D-1・2区、E-1・2区から検出された1間×3間の建物跡で、長軸の方位は、N-9° -Wを測る。柱間は、S P311・71 間で 2.68m、S P275・463 間で 2.82m、S P275・277 間で 1.06m、S P277・308 間で 1.20m、S P308・311 間で 3.11m、S P266・463 間で 1.20m、S P266・271 間で 1.07m、S P271・71 間で 1.22mを測る。S P266 から 234 ページ第5図-2 が出土した。

SB04 (第6図)

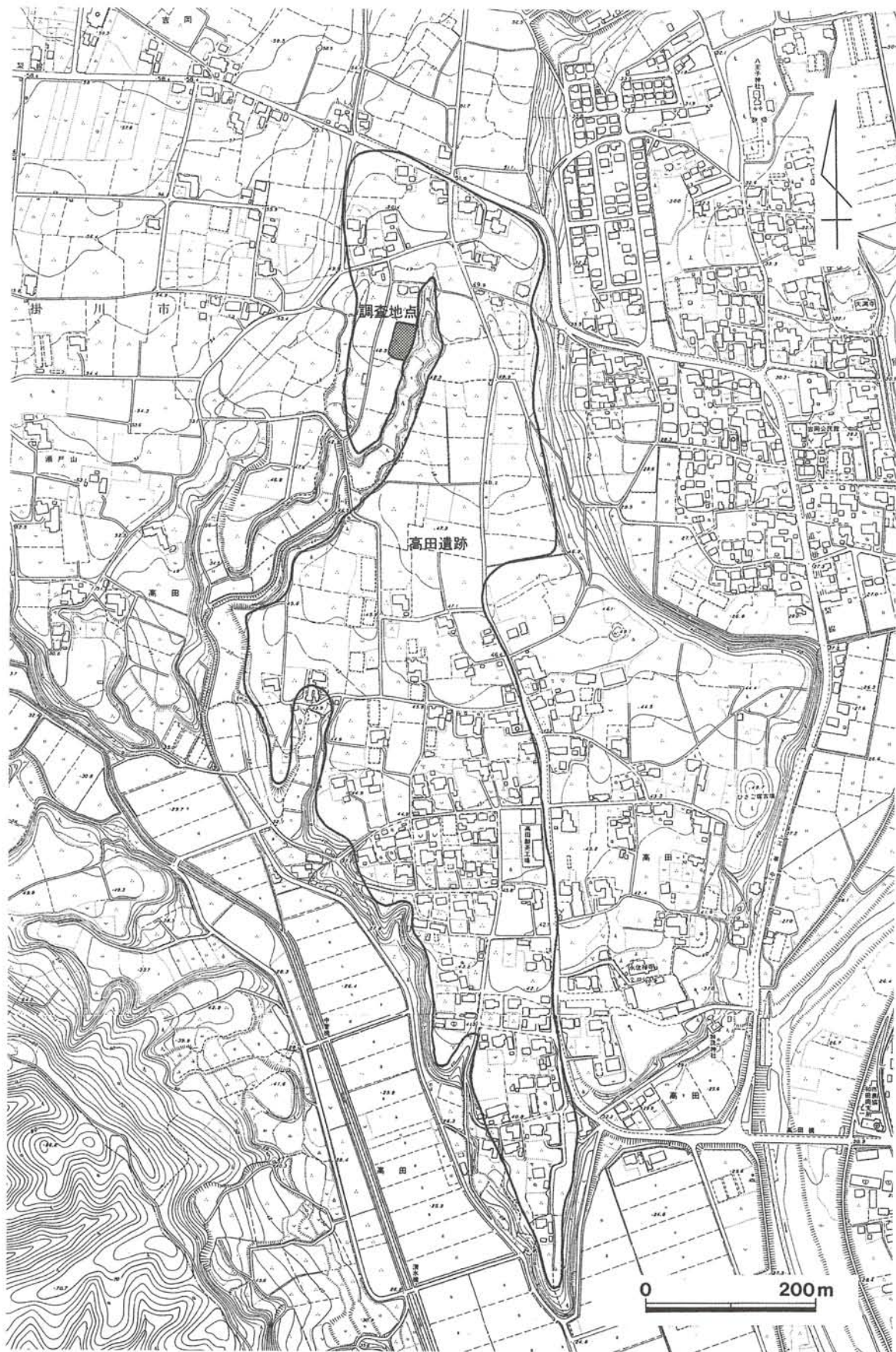
F-4・5区から検出された1間×1間の建物跡で、長軸の方位は、N-12° 30′ -Wを測る。柱間は、S P461・394 間で 2.54m、S P364・347 間で 2.37m、S P364・461 間で 2.92m、S P347・394 間で 2.92mを測る。S P347 から、弥生土器の壺と思われる小片が出土した。

ii) 遺物の概要

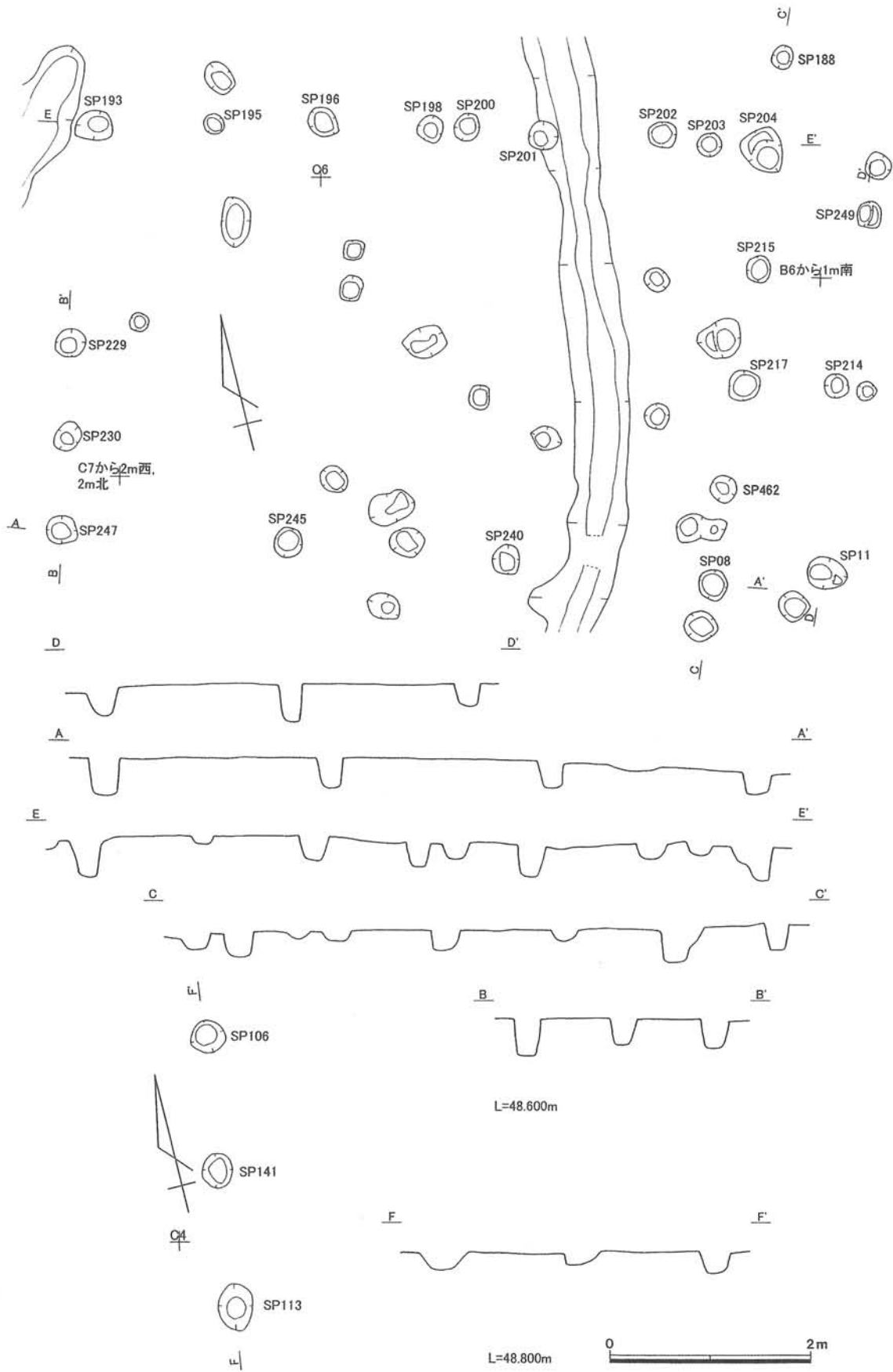
234 ページ第5図-1 は、弥生時代中期の嶺田式と考えられる土器片で、2 は、縄文時代中期中葉に位置付けられる。

4. まとめにかえて

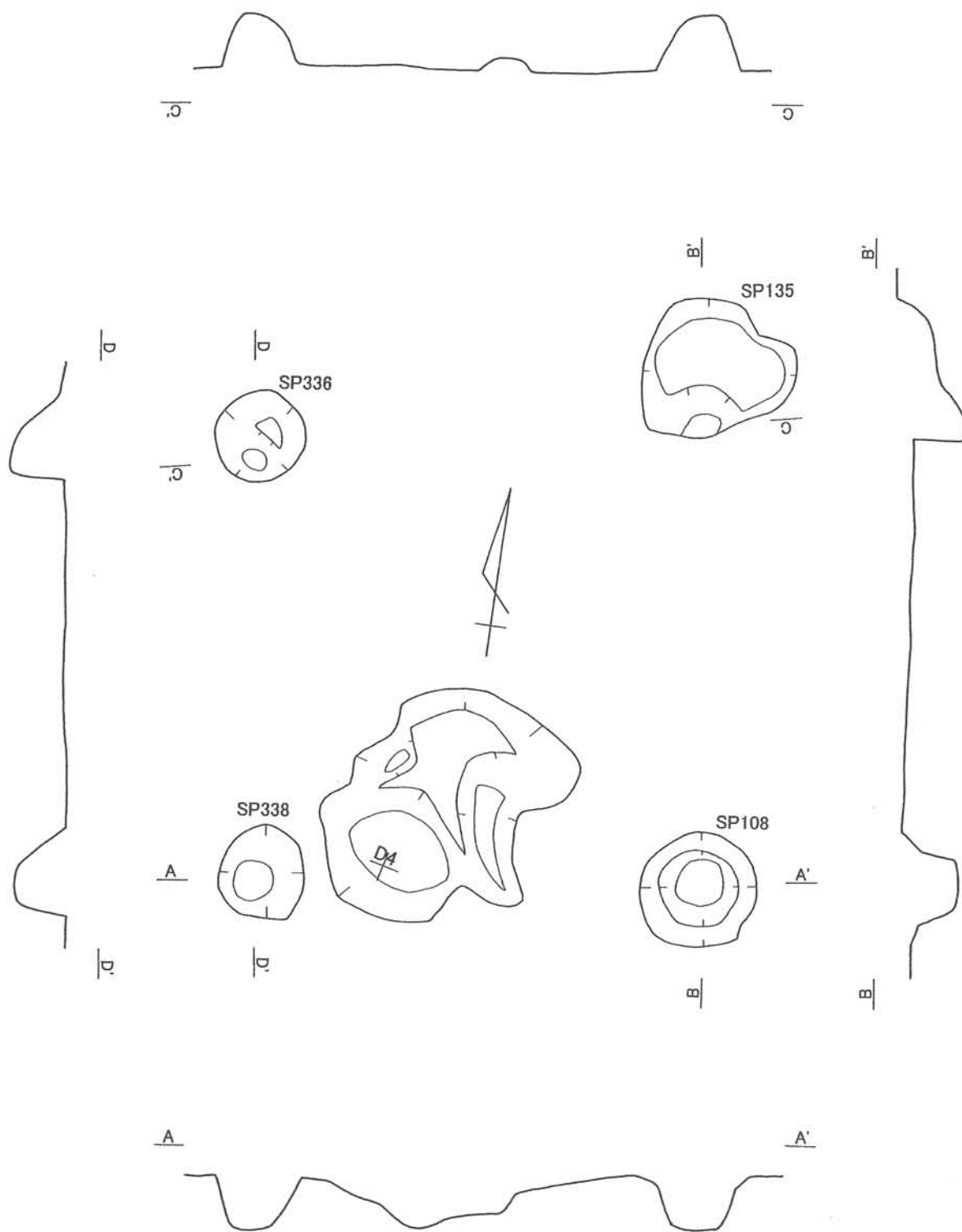
今回の調査地点は、耕作土の下に通常見られる包含層が存在せず、地山が現れた。調査地点全域から柱穴が確認され、等間隔で並ぶもの、一直線上に並ぶものがあり、それらを柵列として報告した。1間×1間の規模で、掘立柱建物跡として報告したものについては、周辺の調査例では検出されたことがなく、竪穴住居跡の主柱穴の可能性もある。今後の課題である。



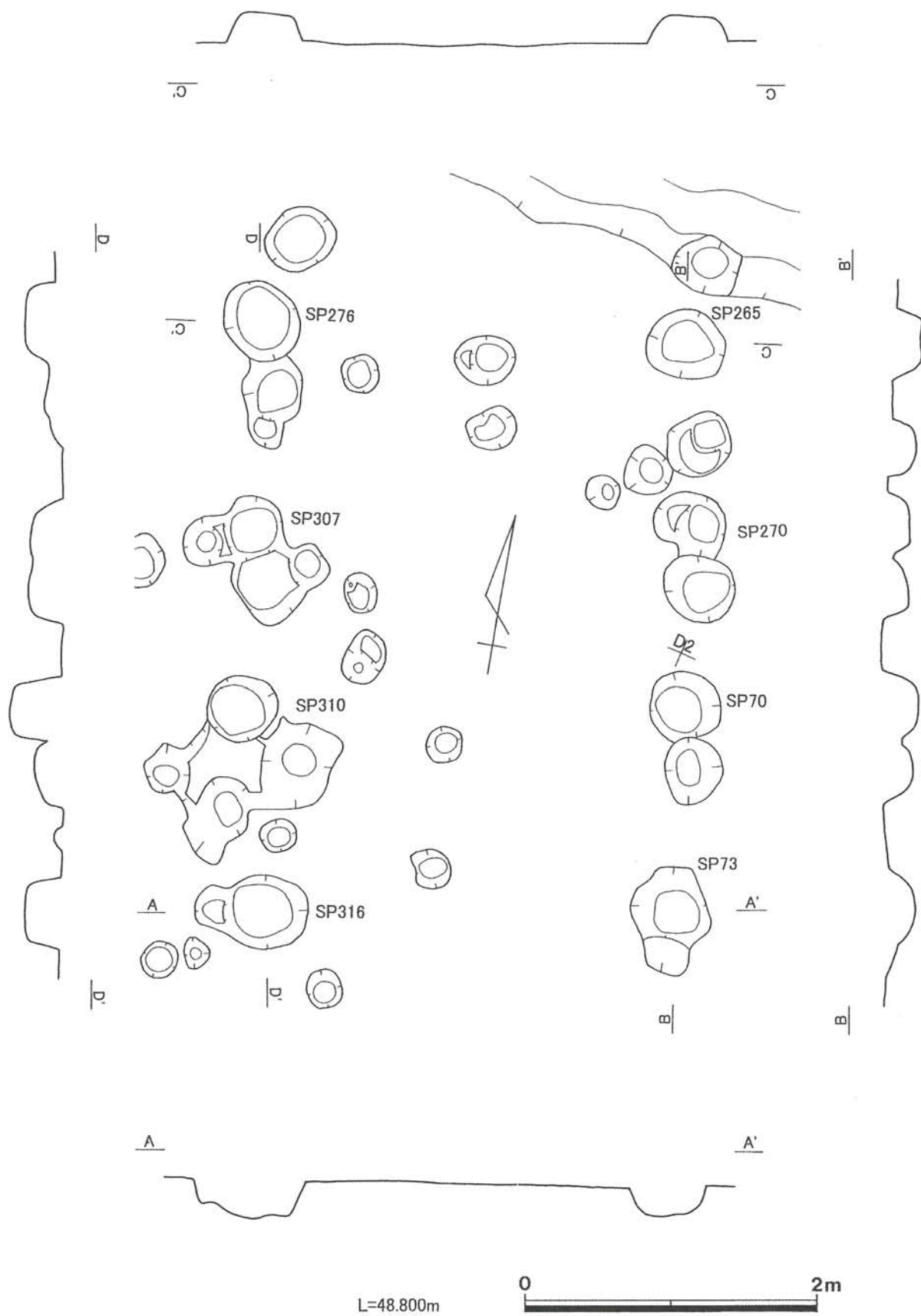
第1図 遺跡内における調査地点位置図



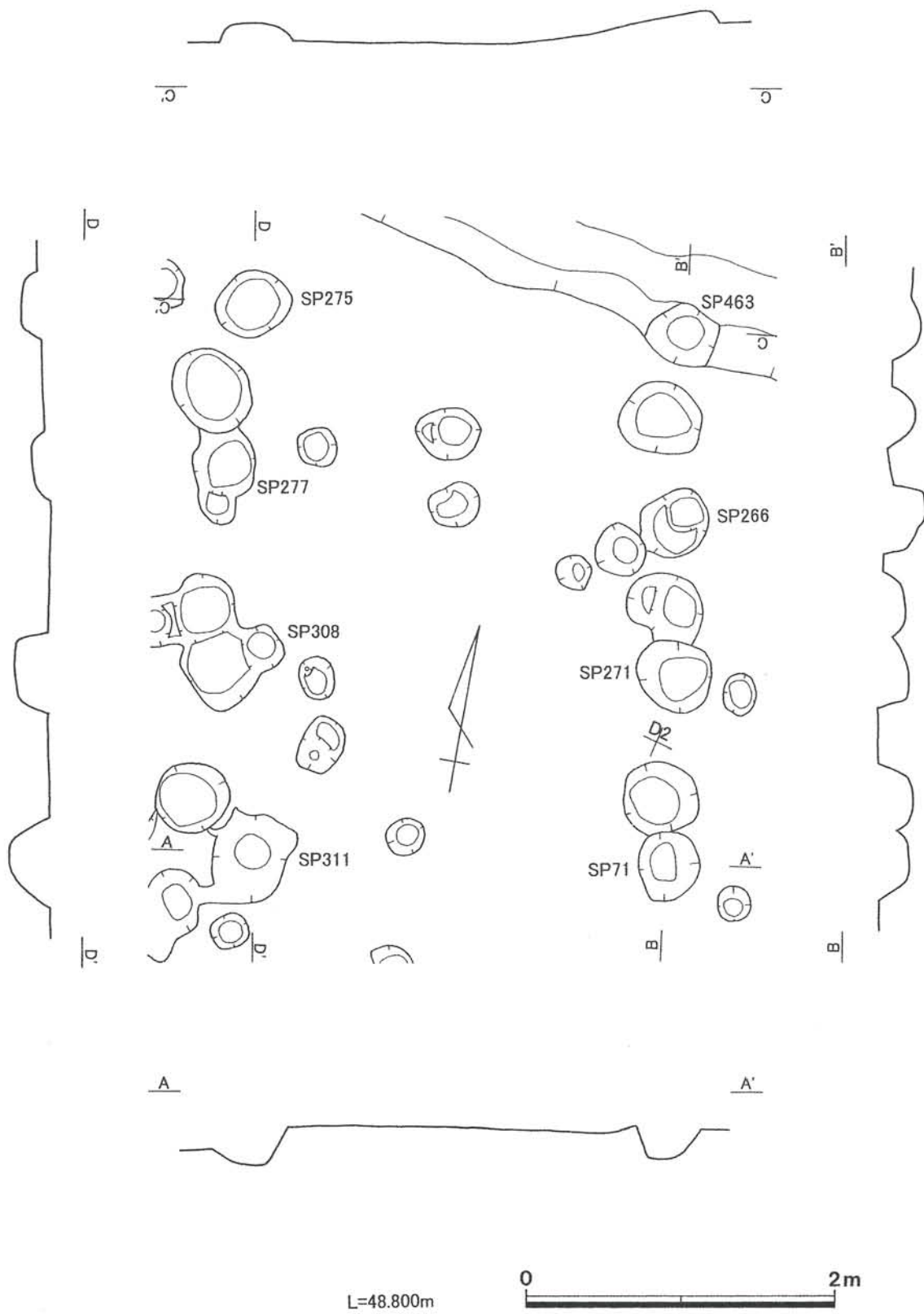
第2図 SA01~06実測図



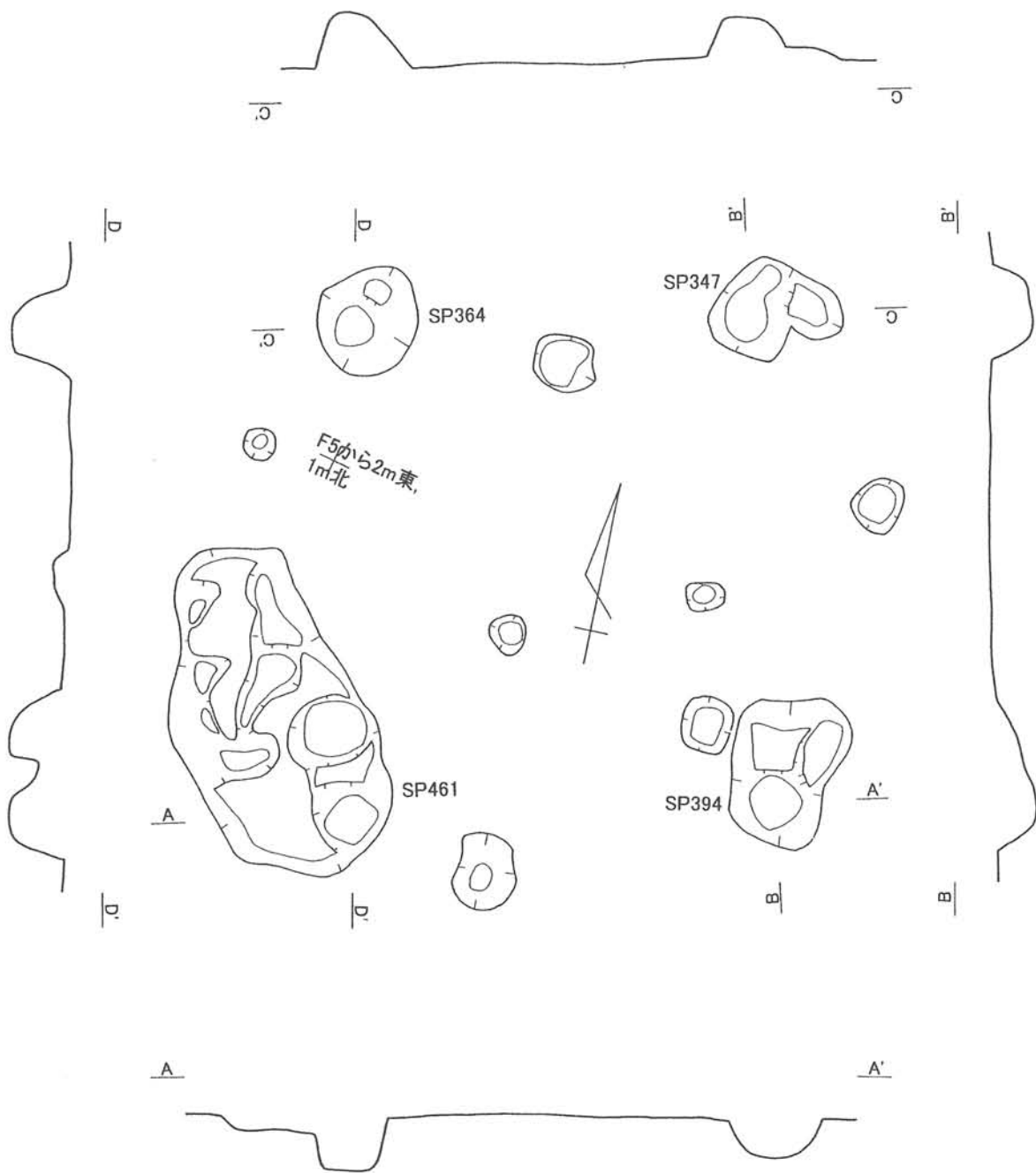
第3図 SB01実測図



第4図 SB02実測図



第5図 SB03実測図

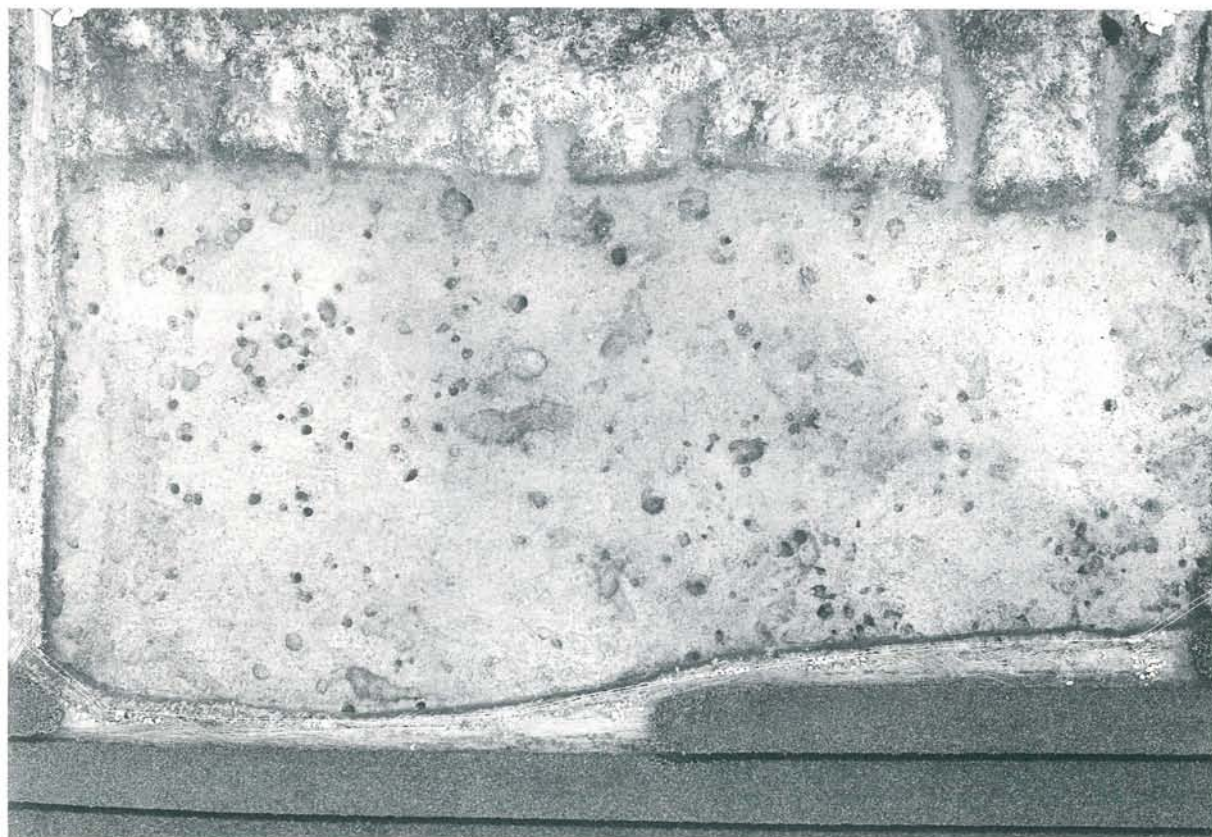


第6図 SB04実測図

図版 1



調査区東半全景 (空中写真)



調査区西半全景 (空中写真)

図版 2



SA01~05 (西から)



SB02・03 (南から)



SB04 (北から)

V 吉岡原遺跡第7次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成17年に茶園改植の計画があることを把握し、平成18年3月24日に確認調査を実施した結果、地表下25～55cmの深さから、古墳時代と考えられる竪穴住居跡等を検出し、土器が出土した。確認調査の結果を基に、耕作者と協議したが、遺構面までの深度が浅いことから、保護層を確保しての改植は困難との結論に達した。

そこで、平成18年5月12日に、記録保存のための本発掘調査が相当との副申を付けて「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。同年5月19日付けで、静岡県教育委員会から耕作者に対し、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」通知された。

そこで、記録保存のための発掘調査を実施するに至った。

2. 調査の方法と経過

調査は、対象地の形に合わせて5m方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。東西を西から1～6までの数字で、南北は南からA～Eまでアルファベットを付け、A-1区、A-2区という呼称にした。グリッドの南西に位置する杭にグリッドを代表させた。

現地での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1と10分の1を併用し、微細図は10分の1とした。写真撮影は、6×7カメラ1台（プロニー白黒用）と35mmカメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、排土置き場を確保する必要から、対象地を2分割し、平成18年8月31日に前半部分の機械掘削を開始した。11月16日から前半部分の埋め戻しと後半部分の機械掘削に入り、平成19年1月5日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために、基準点測量を実施した。

3. 調査の内容

調査では、柵列、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構、弥生土器等の土器、石器等が出土した。

ここでは、柵列、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、性格不明の遺構、土器、石器・石製品、ガラス玉について、概要を述べる。

i) 遺構の概要

1) 柵列 (SA)

SA01 (第3図)

B-3・4区から検出されたSP35・34・98で、SP35とSP98を結んだ軸は、N-4°-Wを測る。柱間は、SP35・34間で1.28m、SP34・98間で1.23mを測る。柱穴からの出土遺物はない。

SA02 (第3図)

B-3・4区から検出されたSP59・253・98も柵列の可能性を考えた。SP59とSP98を結んだ軸は、N-15°-Wを測る。柱間は、SP59・253間で1.54m、SP253・98間で1.74mを測る。柱穴からの出土遺物はない。

SA03 (第3図)

B-2・3区から検出されたSP37・238・236・223で、SP37とSP223を結んだ軸は、N-77°-Eを測る。柱間は、SP37・238間で1.94m、SP238・236間で1.82m、SP236・223間で1.74mを測る。SP236から土師器の小片が出土した。

SA04 (第3図)

B-2区、C-2区から検出されたSP200・204・205で、SP200とSP205を結んだ軸は、N-13°-Wを測る。柱間は、SP205・204間で1.61m、SP204・200間で1.72mを測る。SP205の底面は、南端が深くなっていることから、柱が抜き取られた可能性がある。SP200・204・205から、弥生～土師器の小片が出土した。

SA05 (第4図)

C-3区、D-3区から検出されたSP108・107・105・100で、SP108とSP100を結んだ軸は、N-5°-Wを測る。柱間は、SP100・105間で1.24m、SP105・107間で1.17m、SP107・108間で1.50mとかなりばらつきがある。SP105はSB03の柱穴SP106に切られている。SP107の土層観察で切り合いが確認されていて、SP100・105の底面に、SP107同様段差があることから、つくりかえの可能性が考えられる。SP100・105から、弥生～土師器の小片が出土した。

2) 掘立柱建物跡 (SB)

SB01 (第5図)

B-4区、C-4区、D-4区から検出された1間×2間の建物跡であるが、北東隅の柱穴は攪乱により掘りくぼめられていたためか、検出されなかった。SP38とSP40を結んだ軸の方位は、N-18°30'-Wを測る。柱間は、SP38・80間で2.56m、SP40・53間で2.81m、SP53・38間で2.94m、SP45・80間で2.98mを測る。SP38とSP80は、SH09を切っていると判断される。SP38・45・53・80から、弥生～土師器の小片が出土した。

SB02 (第6図)

D-5区、E-5区から検出された1間×3間の建物跡であるが、溝状の掘り込みと柱穴の位置が重なることと、SP83・255が長円形を呈することから、布掘り地業を伴う掘立柱建物跡の可能性が高い。長軸の方位は、N-18°-Wを測る。柱間は、SP47・90間で3.02m、SP78・85間で3.12m、SP78・47間で4.32m、SP85・90間で4.29mを測る。SH06・08と切り合いがある。SP47から、弥生～土師器の小片が出土した。

SB03 (第4図)

D-3区、E-3区から検出された1間×2間の建物跡で、SA05とSH11を切っている。長軸の方位は、N-3°-Eを測る。柱間は、SP103・106間で2.56m、SP102・55間で2.59m、SP102・101間で1.57m、SP101・103間で1.49m、SP55・104間で1.55m、SP104・106間で1.50mを測る。SP55・101・102・103から、弥生～土師器の小片が出土した。

SB04 (第7図)

D-2区、E-2・3区から検出された1間×2間の建物跡で、北側の調査区外に及んでいる可能性がある。SP216とSP232を結んだ軸は、N-3°-Eを測り、SB03と同一である。柱間は、SP216・232間で2.59m、SP208・220間で2.10mを測る。SP216・220はSH10の床面を切り、SP208はSH12を切っている。南東の柱穴はSH10の貯蔵穴と重なり、南西の柱穴は攪乱と重なっていて、SH10の床面では確認できなかった。

3) 竪穴住居跡 (SH)

SH01 (第8図)

A-1・2区から検出された炉跡と貼床である。貼床は、炉跡の周辺からSP19の南側にかけて検出された。住居跡の平面形、支柱穴等は明らかではない。

SH02 (第8図)

A-1・2区から検出された炉跡、炉跡周辺から検出された柱穴である。支柱穴は、SP02・08・01・07を想定している。支柱穴間の距離は、SP02・08間で3.01m、SP01・07間で2.98m、SP01・02間で2.11m、SP07・08間で2.14mを測る。SP19は、SH02の貯蔵穴の可能性はある。SH02の炉跡は、SH01の炉跡より4cm高いが、どちらもすでに削平を受けていると考えられることから、新旧関係は明らかではない。柱穴から、弥生時代後期の土器片が出土している。

SH03 (第9図・23図)

A-4・5区から検出された住居跡であるが、すでに削平を受けていた。そのため、炉跡は検出されず、貼床もSP15周辺とSP257周辺から確認されただけである。掘り方は皿状を呈し、土層の断面・平面の両方で、壁溝は確認されなかった。西壁際にテラス状の部分が存在することと、平面形が不整形であることから、住居跡の重複、建て替え等が考えられる。支柱穴は、SP257・256・28・15を想定している。支柱穴間の距離は、SP257・256間で2.93m、SP28・15間で2.90m、SP28・257間で2.19m、SP15・256間で2.22mを測る。住居から、第23図-1・2の土器が出土した。

また、床面から検出した炭化材は、樹種同定を行い、付載に結果を記載した。

SH04 (第14図・23図)

A-5区から検出された。ごく一部が調査されたのみで、大半が調査区外に及ぶ。土層の1層下端が床面と考えているが、10cm以上の傾斜があること、壁から急な傾斜で掘り方の底面に至り、約50cmの深度があることから、別の性格の遺構を想定する必要もある。第23図-3の土器が出土した。

SH05 (第10図～12図・23図・24図・26図)

A-5区、B-5・6区、C-5・6区から検出された住居跡で、南北長約8.2mを測る。土器に、弥生時代後期と古墳時代前期のものがみられること、住居跡の壁が南側から西側南半までが直線的で、北側から西側北半が湾曲していることから、2時期の住居跡が重複していると考えられる。古墳時代前期の住居跡は、2個検出された炉跡のうちの南のものと、SP65・64・72・66の支柱穴から成ると考えられる。SP65・64が南壁から約1.2m離れていることから、SP72・66の位置から北側壁の位置を推定すると、南北長は、約4.8mとなる。支柱穴間の距離は、SP65・64間で2.34m、SP72・66間で2.50m、SP72・65間で2.37m、SP66・64間で2.15mを測る。住居跡の南西隅から壁溝が確認された。住居内の南東隅から検出されたSP63、北西隅から検出されたSP71は、貯蔵穴と考えられる。SP63からは第23図-19・20、第24図-28、SP71からは第23図-16の土器が出土した。

弥生時代後期の住居跡は、2個検出された炉跡のうちの北のものと、SP70・79・258・89・259・91の支柱穴から成る。SP70とSP79、SP89とSP259は隣接していることから、建て替えが考えられる。SP89・259・91の壁からの距離を基に南側壁の位置を推定すると、南北長約5.2mとなる。

支柱穴間の距離は、SP70・258の壁際で2.78m、SP89・91の壁際で2.76m、SP89・70間で2.58mを測る。住居からは、第23図-4～26、第24図-27～29の土器、第26図-66の石器が出土した。

SH06 (第13図・24図)

C-5・6区、D-5・6区から検出された住居跡で、SB02と切り合いがあるが、時期的な前後関係は明らかではない。北側壁が湾曲し、西側壁・南側壁が直線的であること、弥生時代後期と古墳時代前期の遺物が出土していることから、住居跡の重複が考えられる。床面は残存していたが、炉は検出されなかった。住居から、第24図-30～35の土器が出土した。また、床面下から検出した赤色顔

料については、自然科学分析を行い、付載に結果を記載した。

SH07 (第14図・24図)

E-5・6区から検出された住居跡で、半分程度調査区外に及んでいると考えられる。東西長約4.4mを測り、南壁際から西壁際にかけて壁溝が確認された。炉跡は、調査区北端から検出され、SP260・77が主柱穴と考えられる。主柱穴間の距離は、2.52mを測る。住居から、第24図-36・37の土器が出土した。

SH08 (第15図・24図・26図)

D-4・5区、E-4・5区から検出された住居跡で、SB02と切り合いがあるが、時期的な前後関係は明らかではない。住居の形状が不整形であることから、他の性格の遺構と重複している可能性がある。住居の平面形とは合わないが、炉跡と主柱穴が検出された。主柱穴はSP263・262・56・261で、主柱穴間の距離は、SP263・262間で2.25m、SP56・261間で2.28m、SP56・263間で2.73m、SP261・262間で2.69mを測る。住居から、第24図-38～47の土器、第26図-68の砥石が出土した。

SH09 (第16図・24図・25図)

B-4・5区、C-4・5区から検出された住居跡で、SB01の柱穴に切られている。平面形は、東西約3.45m、南北約3.40mの円形を呈する。住居跡からは、炉1、炉2の2個所の炉跡が確認されたが、炉1は、床面上と考えられる第24図-49・50より上位から検出されている。この平面形に合う炉跡は、炉2と考えられる。主柱穴は確認されなかった。住居から、第24図-48～50、第25図-51の土器が出土した。

SH10 (第17図・18図・25図・26図)

D-1～3区、E-1～3区から検出された住居跡で、SB04に切られていて、西端は調査区外に及ぶ。規模は、南北約4.65m、東西長は約6m分を確認した。第17図は、床面で確認した炉跡と掘り方で検出した主柱穴を合成したものである。褐色土のブロックが混じり固くしまった黒褐色土を貼って床とし、炉跡は、住居中央の北西寄りに床から盛り上げてつくられていた。炉の北側を除く3方に、高さ1～2cmの土手状の高まりが存在した。主柱穴は壁から約1m離れた位置にあり、主柱穴間の距離は、SP232・229間で2.91m、SP233・230間で2.84m、SP233・232間で2.54m、SP230・229間で2.57mを測る。SP219は、貯蔵穴と考えている。住居から、第25図-52・53の土器、第26図-67の砥石が出土した。

SH11 (第19図)

D-2・3区、E-3区から検出された住居跡で、貼床がSH10の覆土中に及んでいたことから、SH10より新しいと考えている。東西方向の土層の観察では、8・9層が床面の3層を切っていると判断し、東側壁面が直線的にのびるのは攪乱の結果と考えた。しかし、南北方向の土層では、8・9層を覆土とする掘り方の上に3層が存在することから、この掘り方はSH11の掘り方と考えられる。SP207は、この住居に伴う可能性があるが、SP101・102は住居を切るSB03の柱穴である。壁面が直線的で、炉跡が確認できることから、古墳時代前期に位置づけておく。

SH12 (第14図・25図)

E-2・3区から検出された住居跡で、大半が調査区外に及ぶ。土層の4～6層の下端を結んだ線が床面である。西壁際に壁溝がめぐる。住居から、第25図-54が出土した。

SH13 (第20図)

C-2・3区、D-2・3区から検出された住居跡で、東側壁から北側壁部分と炉跡が残存してい

た。中央に掘り残された地山があり、その地山の東から北にかけて皿状に掘りくぼめられた掘り方がめぐる。炉跡は、掘り残された地山の西、8 cmほど下がったところから検出された。炉の中央寄りに1.5～3 cmの土手状の高まりが存在した。北側壁際には、部分的に壁溝が確認された。S P 251・264・249 が主柱穴となる可能性がある。掘り方内から、弥生時代後期の土器片が出土した。

SH14 (第21図・26図)

B-3区、C-3区にかけて検出された炉跡と壁溝である。炉跡は、SH15の壁溝に壊されている。壁溝が2本確認されたことから、住居の重複か建て替えが考えられる。住居の規模等ほとんど明らかではないが、わずかに残っていた床面から、第26図-69のガラス玉が出土した。他に弥生時代後期と考えられる土器片がごく少量出土した。

SH15 (第22図・25図)

A-2・3区、B-2・3区、C-2区から検出された住居跡である。床面はほとんど残存せず、削平を受けた炉跡2箇所と壁溝2本が確認された。主柱穴は、S P 06・202・206・227 が該当すると考えられる。主柱穴間の距離は、S P 06・202間で3.21m、S P 206・227間で3.25m、S P 206・06間で4.38m、S P 227・202間で4.33mを測る。住居から、第25図-55が出土した。

SH16 (第2図・25図)

C-4杭の西約60mの位置から検出された炉を、SH16とした。周辺から、第25図-62が出土したが、炉以外については明確ではない。

4) 性格不明の遺構 (SX)

SX01 (第2図・25図)

C-4区、D-4区から検出された、短径約1.15m、長径約2.45m、確認面からの深さ約25cmを測る土坑である。断面形は皿状を呈し、第25図-58～60が出土した。

ii) 遺物の概要

1) 土器 (第23図～25図)

1は、壺か高坏の口縁部と思われ、2は、口径19.9 cmを測る脚付きの鉢である。これらは、弥生時代後期に位置づけられる。

3は口径20.9 cmを測る、壺か高坏の口縁部である。口縁端部に棒状浮文を、内面にハケ、波状文を施す。弥生時代後期前半に位置づけられる。

4～7は、壺か高坏の口縁部である。8～11は、壺の口縁部～体部上半である。9は、棒状工具による条痕文を施し、甕の可能性もある。12・13は、壺の体部下半～底部である。14～17は、甕の口縁部～体部の破片である。17の口縁端部外面にはキザミが施されるが、14・16にはキザミはない。15は、体部最大径28.6 cmを測り、16は口径16.2 cm、体部最大径19.9 cmを測る。18～20は、甕の台である。18が底径10.0 cm、19は底径9.5 cmを測る。23～25は、高坏である。23の口縁端部外面にはキザミが、24の接合部には刺突による羽状文が施される。26は器台で、口径12.0 cmを測り、口縁部の内外面を横ナデ、体部外面にミガキを施す。27～29は鉢で、28・29の体部外面はミガキであるが、27の外面は、ナデである。27は、口径10.2 cm、28は、器高6.5 cm、口径7.7 cm、体部最大径8.3 cm、29は、器高4.8 cm、口径6.7 cm、体部最大径6.9 cmを測る。4～8・17・21～25は、弥生時代後期前半に位置づけられ、10～12・14～16・26～29は、古墳時代前期に位置づけられる。9は、弥生時代中期中葉の丸子式と考えられ、混入した可能性が高い。

30～32は、甕の破片である。31の口縁端部外面にはキザミがあるが、30の外反気味に開く口縁端

部には、キザミはない。33・34は、壺か高坏の口縁部と考えられる。35は、高坏の脚端部の破片である。

31・33・35は、弥生時代後期前半に位置づけられる。30の甕の口縁部は、古墳時代前期以降に位置づけられる。

36は壺の体部で、最大径25.4cmを測り、外面の上半に縄文を、中程から下はミガキを施す。37の口縁端部外面にキザミを、内面にミガキを施す。36は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

38～42は、壺である。38は、口径10.0cmを測り、肩部に竹管文を巡らせる。39の外面は、刺突による格子文を、内面はミガキを施す。40は、器高現存4.8cm、体部最大径11.0cmを測る。42は、口径14.2cmを測り、口縁端部外面にキザミを施す。43・47は、高坏で、43の口縁端部外面にはキザミが、体部の外面と内面にはミガキが施される。47は、底径10.6cmを測り、接合部に刺突による羽状文を施し、裾部の外面にハケ、脚部にミガキを施す。これらの土器は、弥生時代後期前半～中葉に位置づけられる。

48・49は、壺である。48は、最大径13.4cmを測り、肩部には、刺突による羽状文が巡る。49は、最大径22.4cmを測り、外面に縄文が施される。50・51は、甕である。50は、口径20.4cm、体部最大径21.8cmを測り、口縁端部外面にキザミを施す。肩部から下に煤が付着する。これらの土器は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

52は、壺の底部で、53は高坏の脚部片である。53は、弥生時代後期に位置づけられる。

54は、台付き甕の接合部である。

55は、甕の口縁部破片で、端部にキザミを施し、外面に粗いハケ目を施す。

56は、A-3区から出土した壺の底部である。57は、D-5区から出土した甕で、口径16.8cm、体部最大径18.2cmを測る。61は、C・D-2区の掘削中に出土した鉢である。63の壺と65の甕は、調査後半部分の機械掘削中に出土し、64の甕は前半部分の掘削中に出土した。63は、最大径21.2cmを測り、64は口径13.8cm、体部最大径15.1cm、65は口径20.4cm、体部最大径22.0cmを測る。63・65は、弥生時代後期後半に、64は後期前半に位置づけられる。

58・59は、台付き甕である。58の接合部外面に貼り付けられた粘土紐には、指頭痕が残る。60は、内外面にミガキが施されるが、器種は不明である。これらは、弥生時代後期に位置づけられる。

62の片口の鉢は、古墳時代前期に位置づけられる。

2) 石器・石製品 (第26図)

66は、頁岩製の使用痕のある剥片で、340gを測る。67は、砂岩製の砥石で、3面に使用痕が残る。68の砥石も砂岩製で、3面に使用痕が残る。

3) ガラス玉 (第26図)

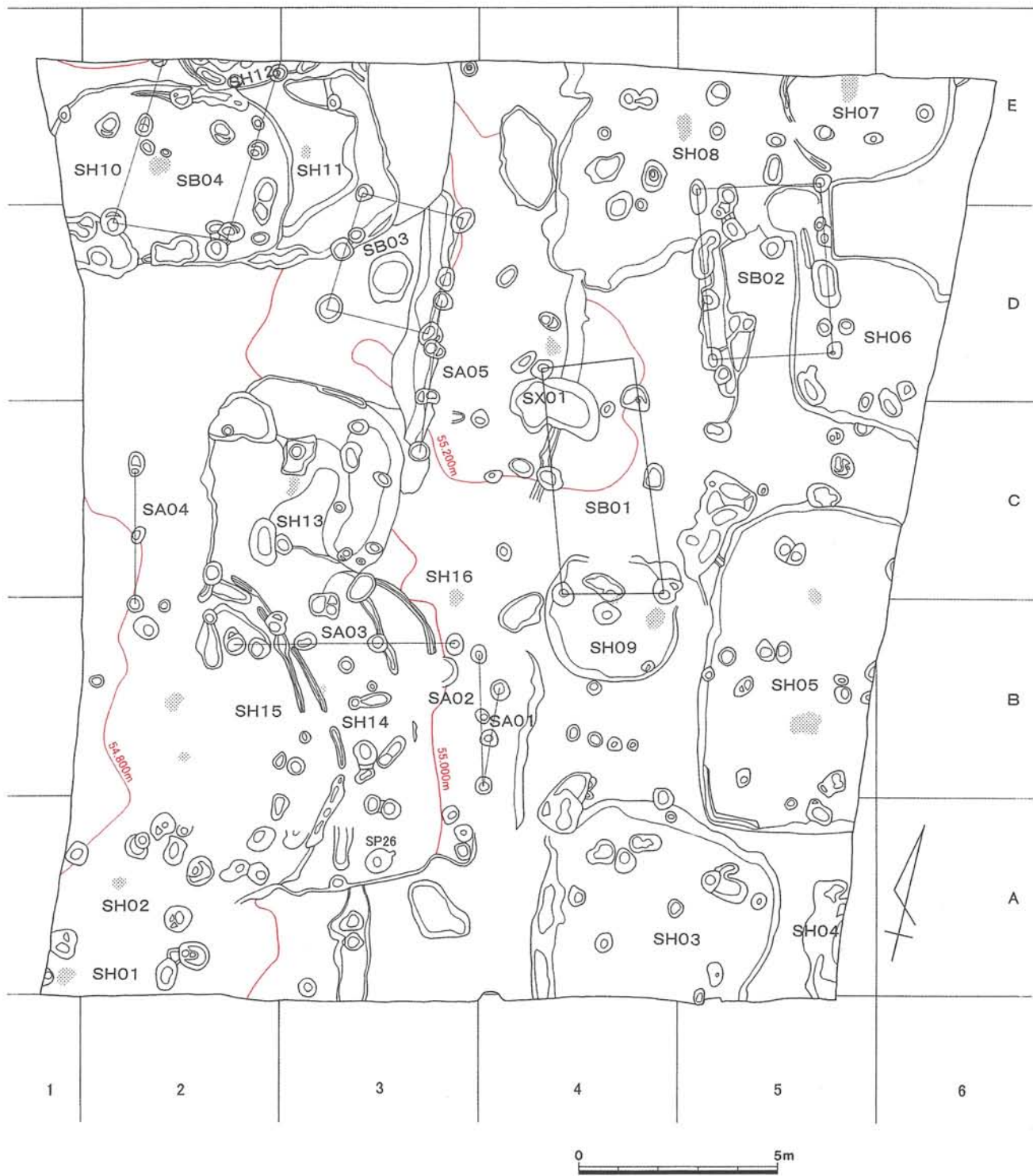
69は、水色を呈するガラス玉で、直径5.5mm、厚さ2.5～3mmを測り、1.5～2mmの大きさの円孔が開く。

4. まとめにかえて

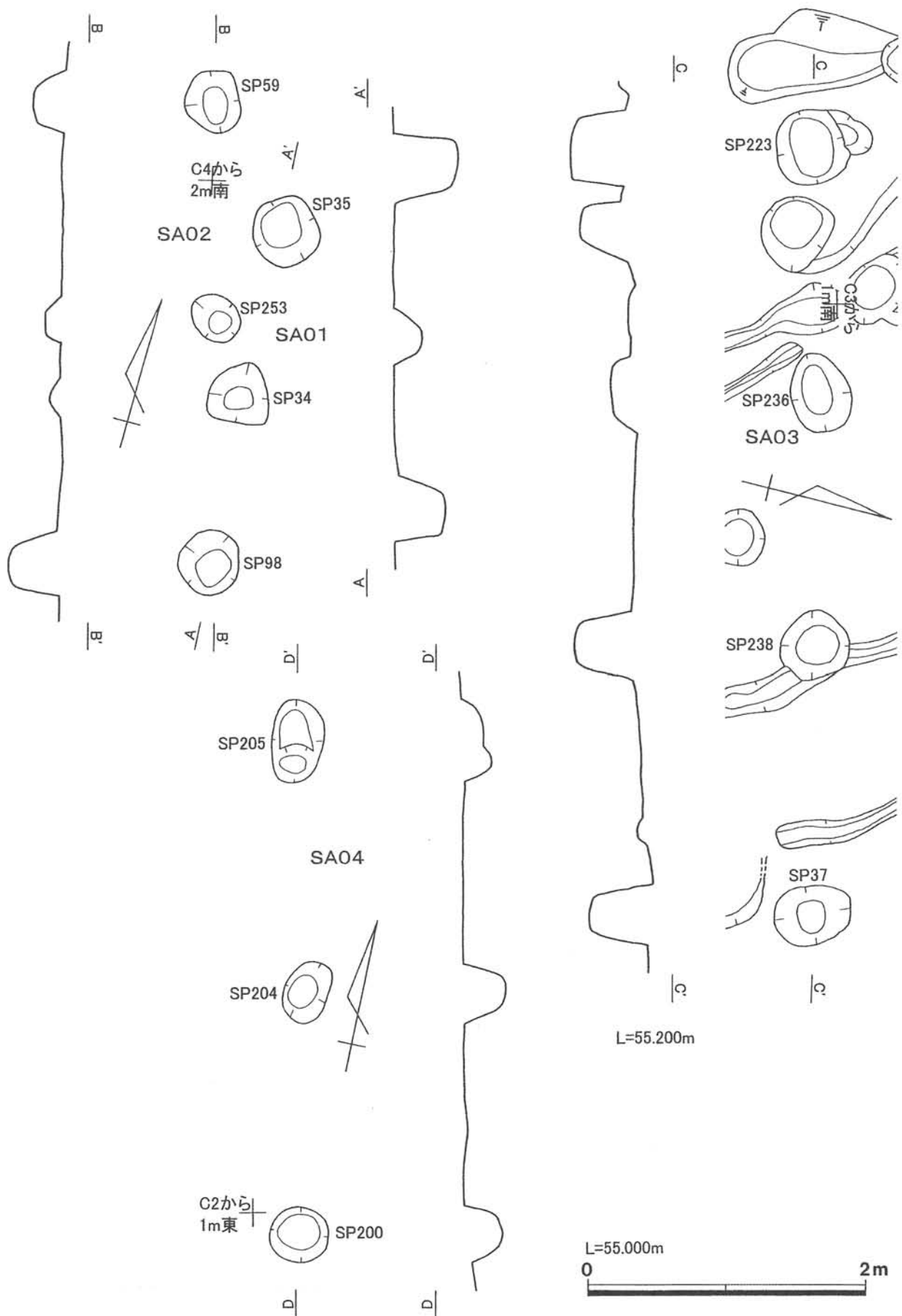
今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期に渡る集落跡が検出された。弥生時代中期中葉の土器片が出土したことから、集落の始まりが中期にさかのぼる可能性がある。弥生時代後期の竪穴住居には、SH03・05・06・07・08・09・10・13・14・15等があり、SH08・10からは砥石が出土していて、この時期に鉄器が普及していたことの傍証となるものである。



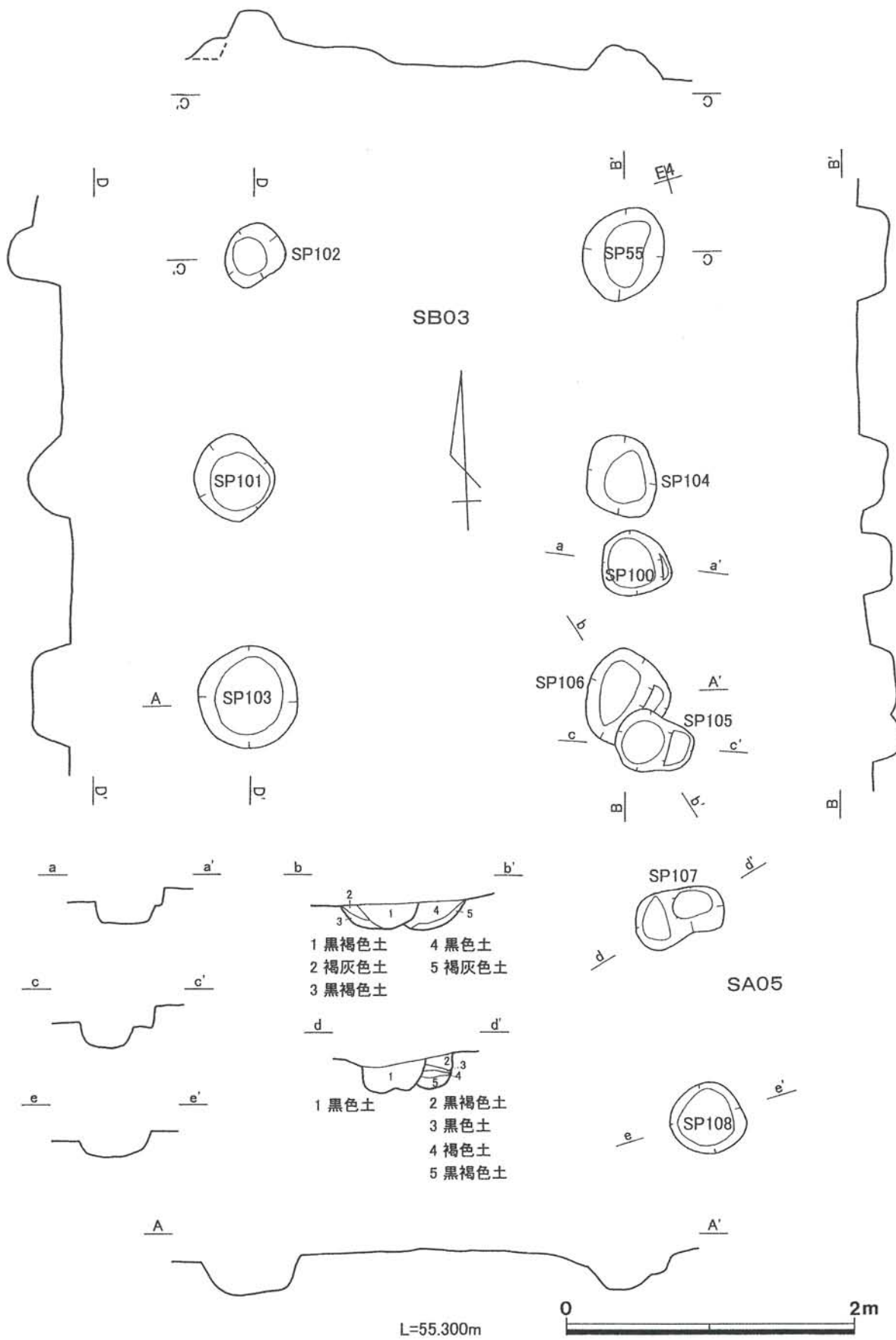
第1図 遺跡内における調査地点位置図



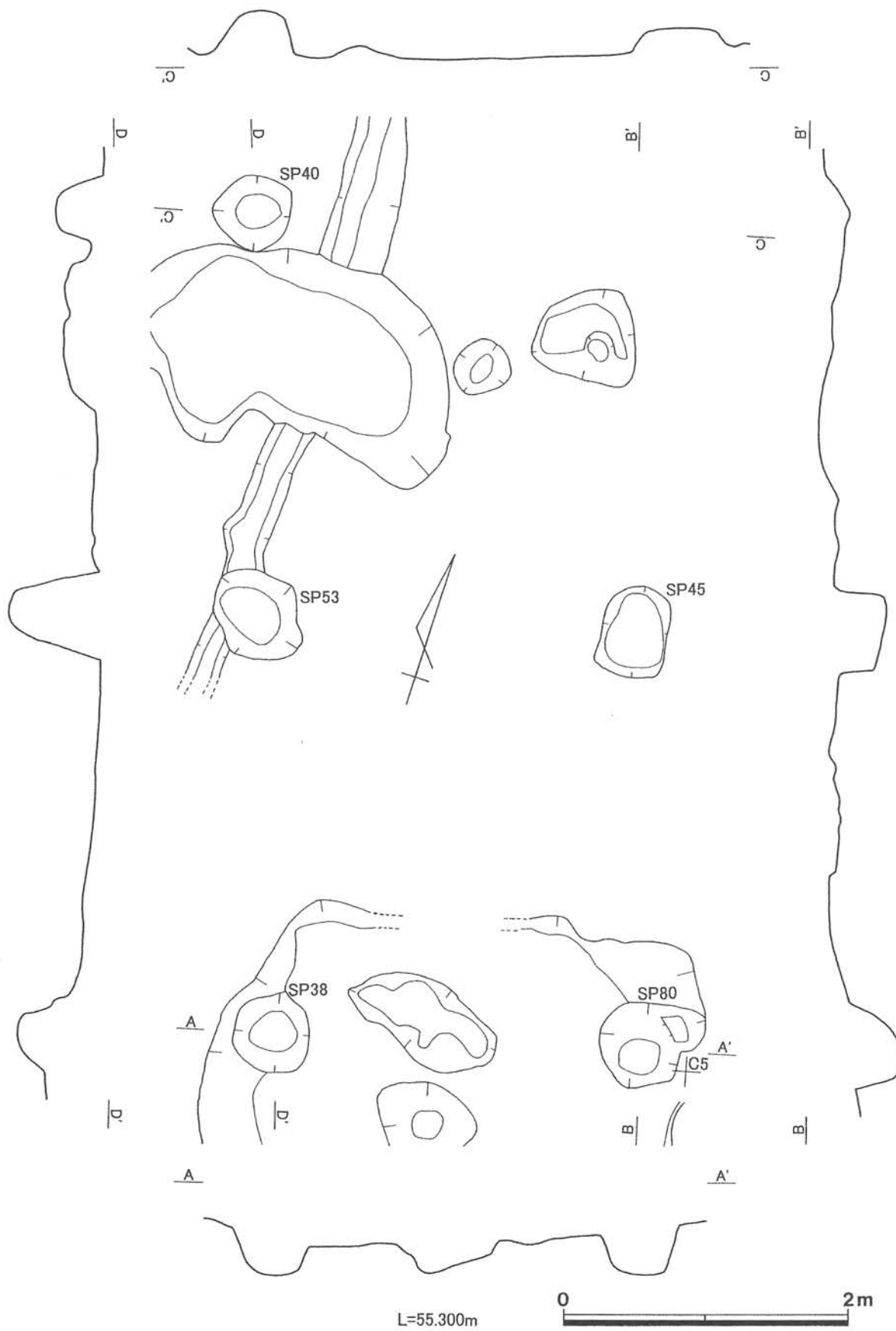
第2図 遺構全体図



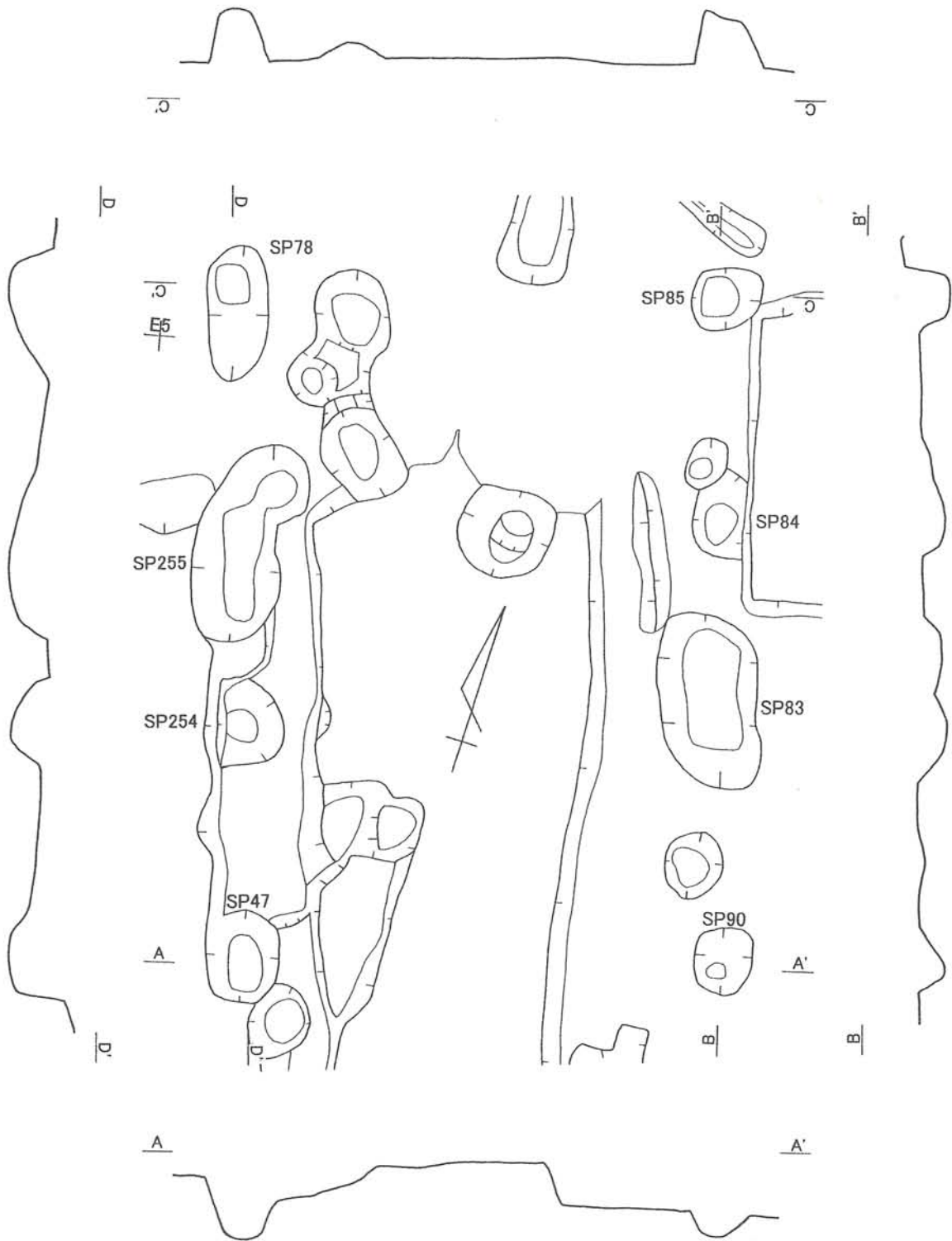
第3図 SA01~04実測図



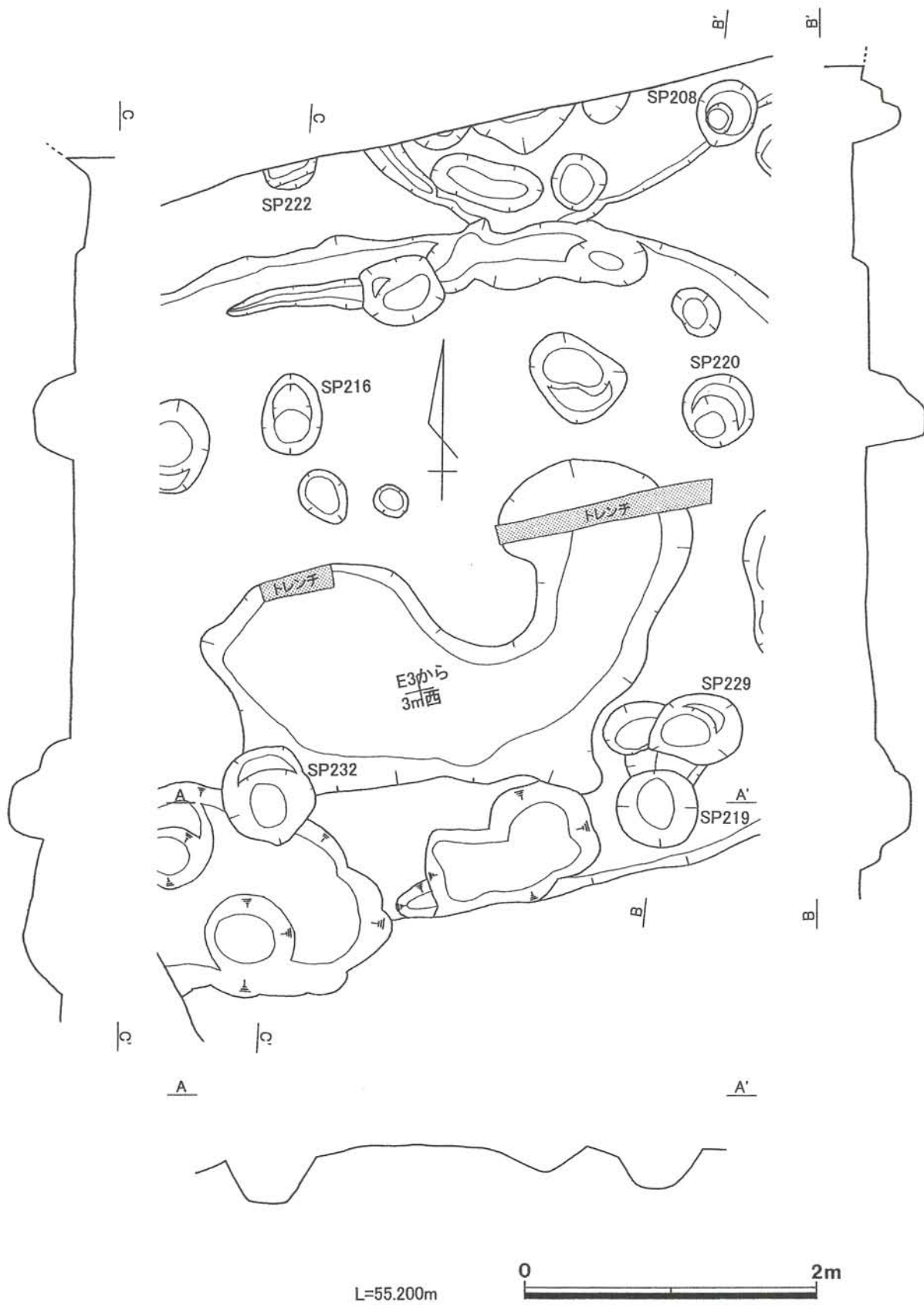
第4図 SA05,SB03実測図



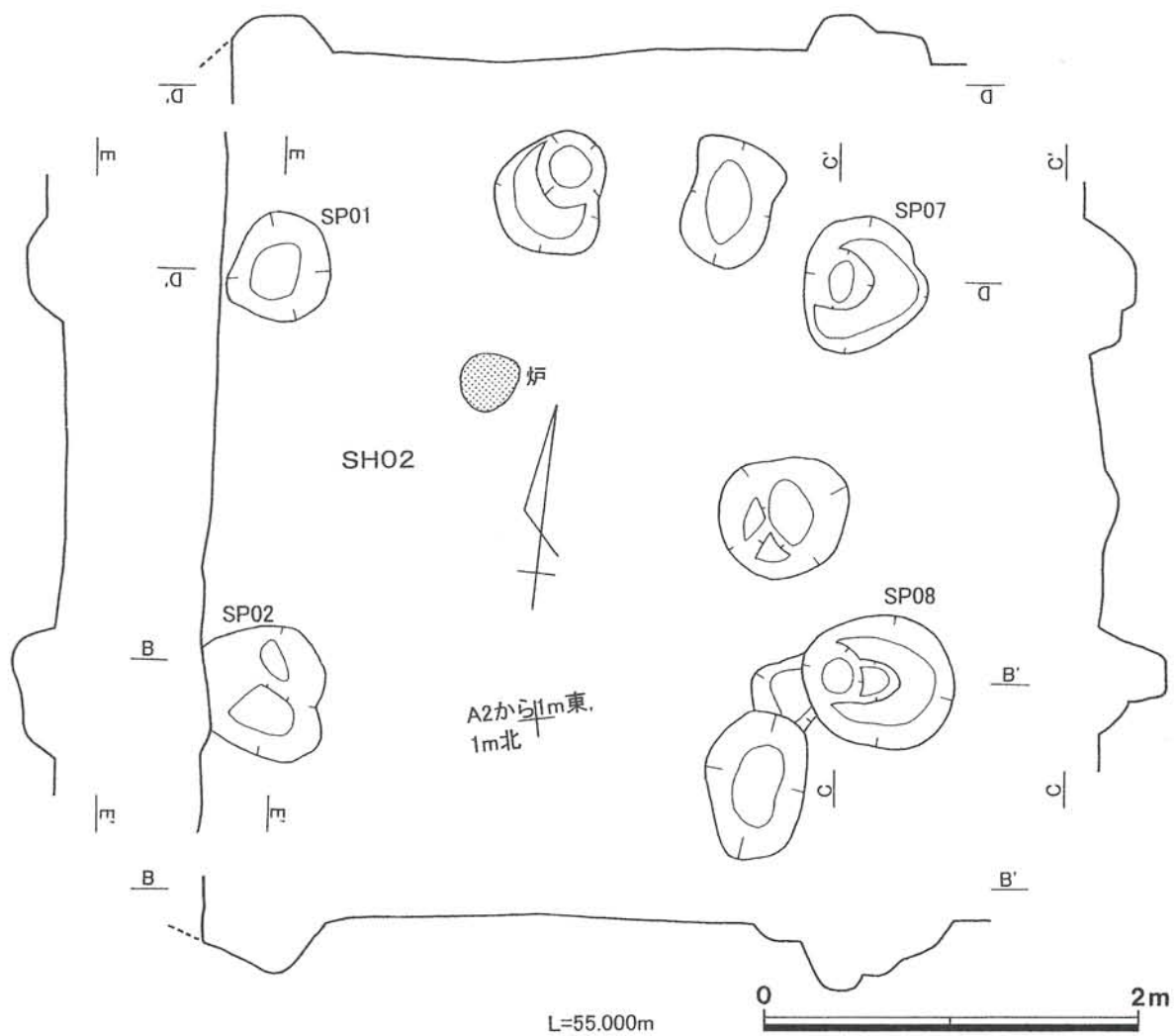
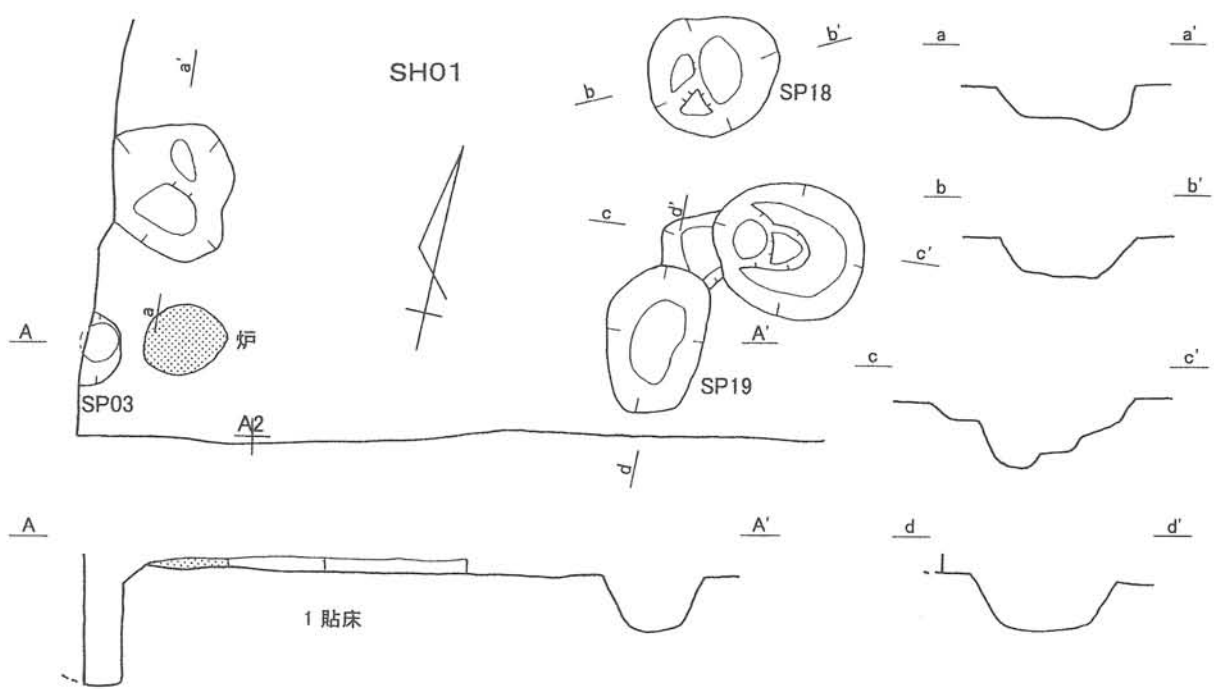
第5図 SB01実測図



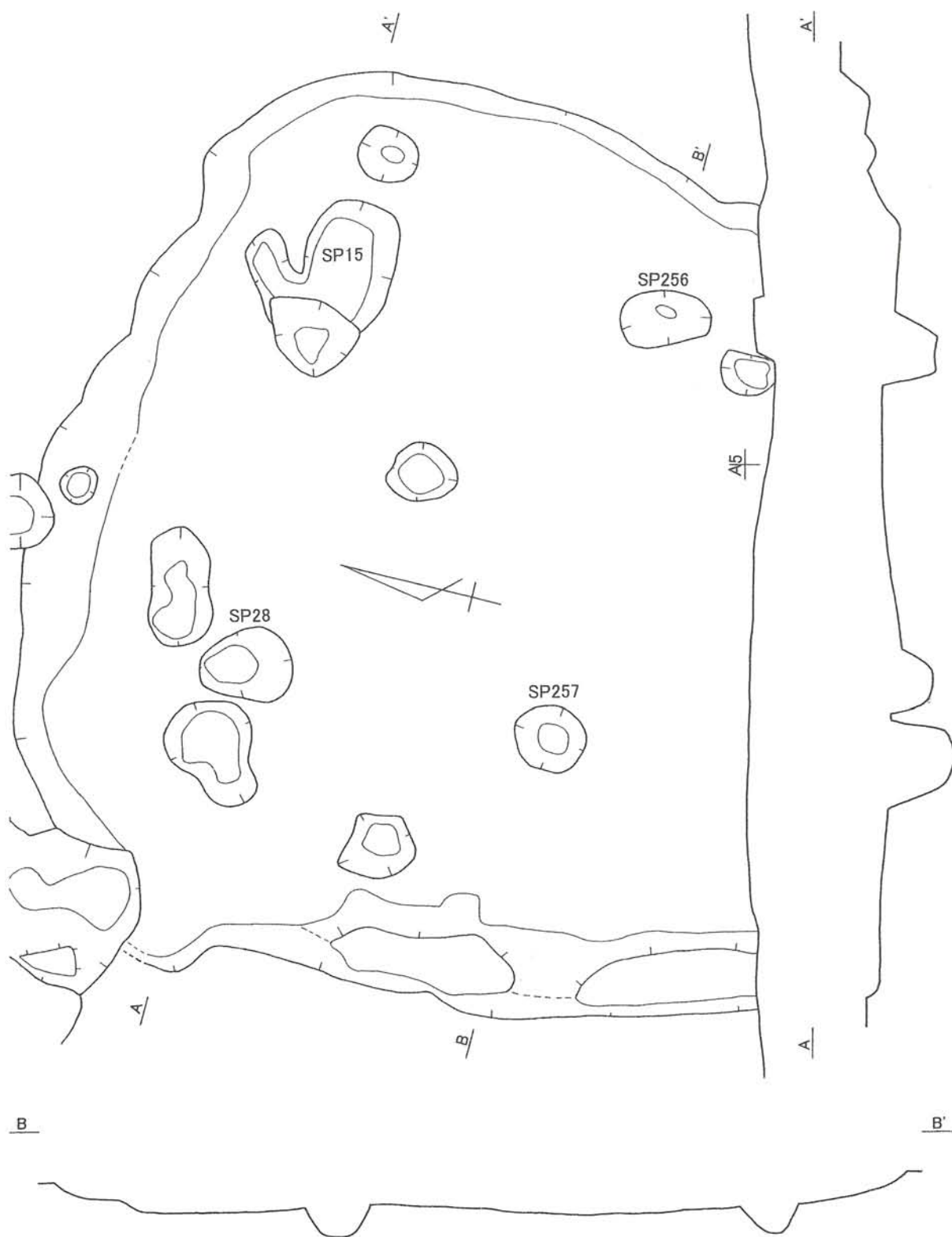
第6図 SB02実測図



第7図 SB04実測図



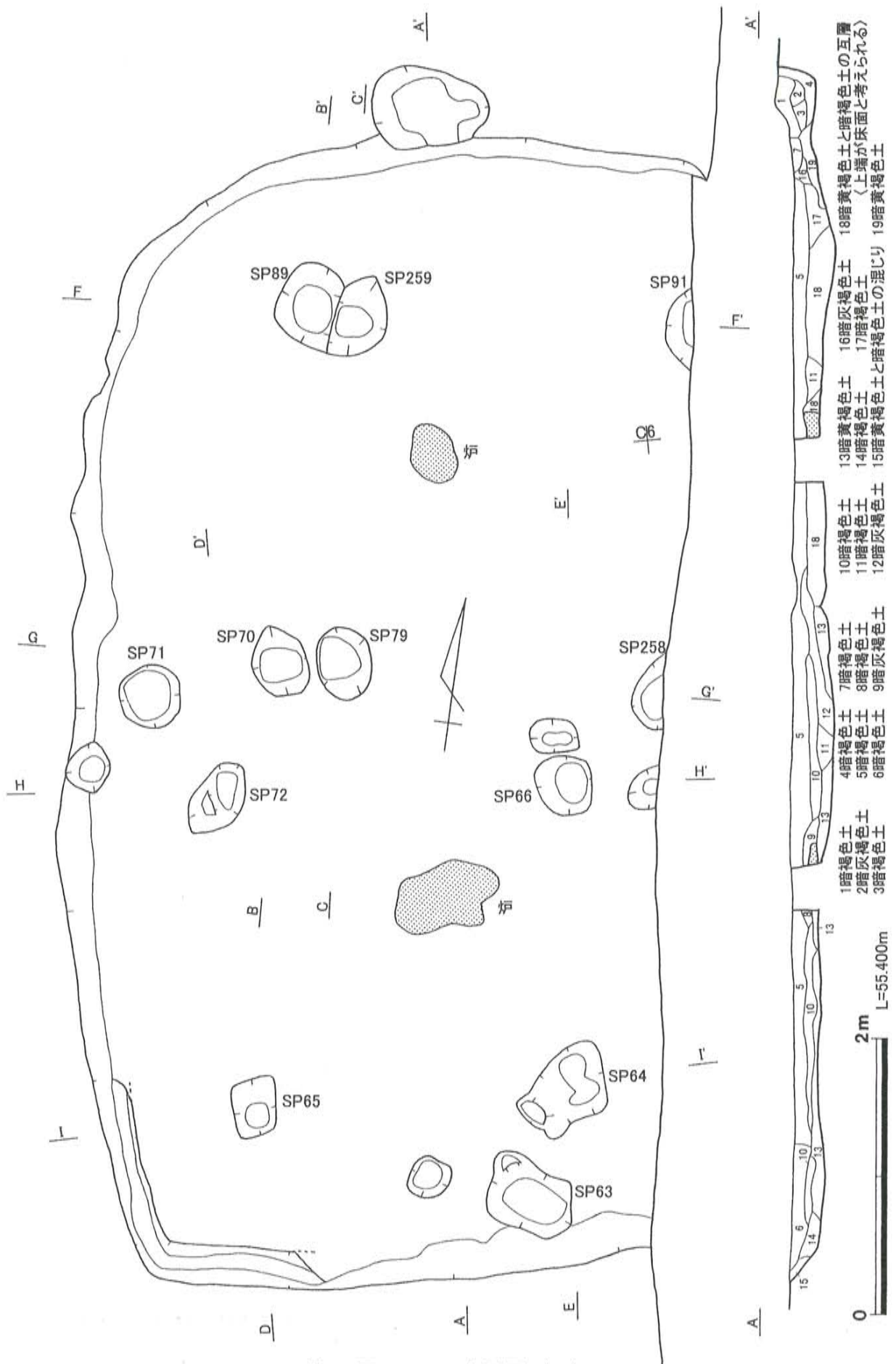
第8図 SH01・02実測図



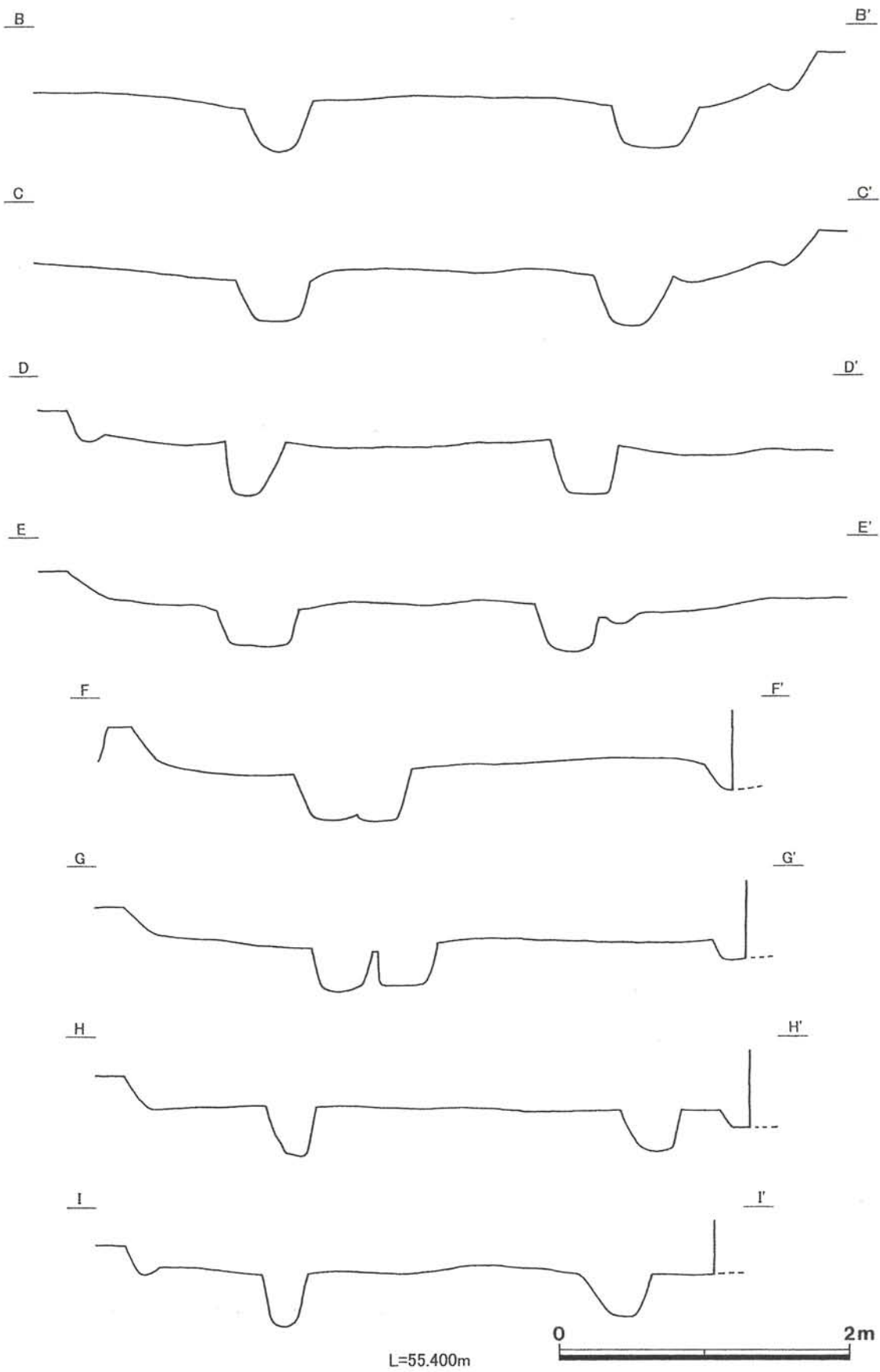
L=55.400m



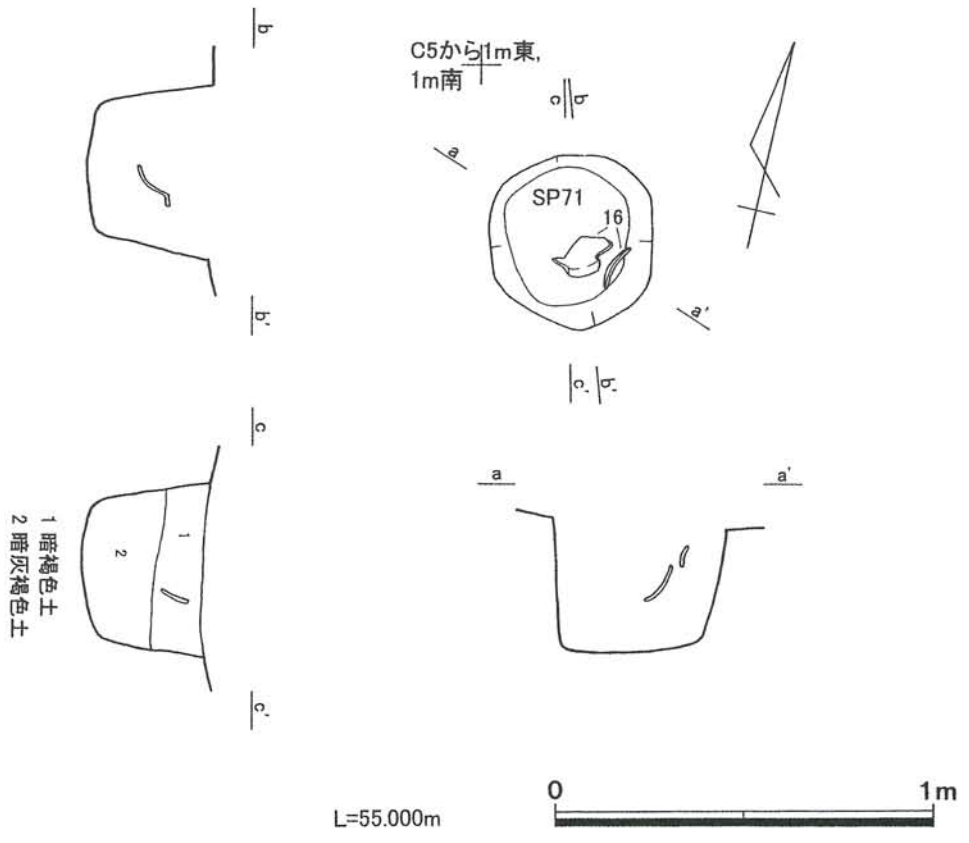
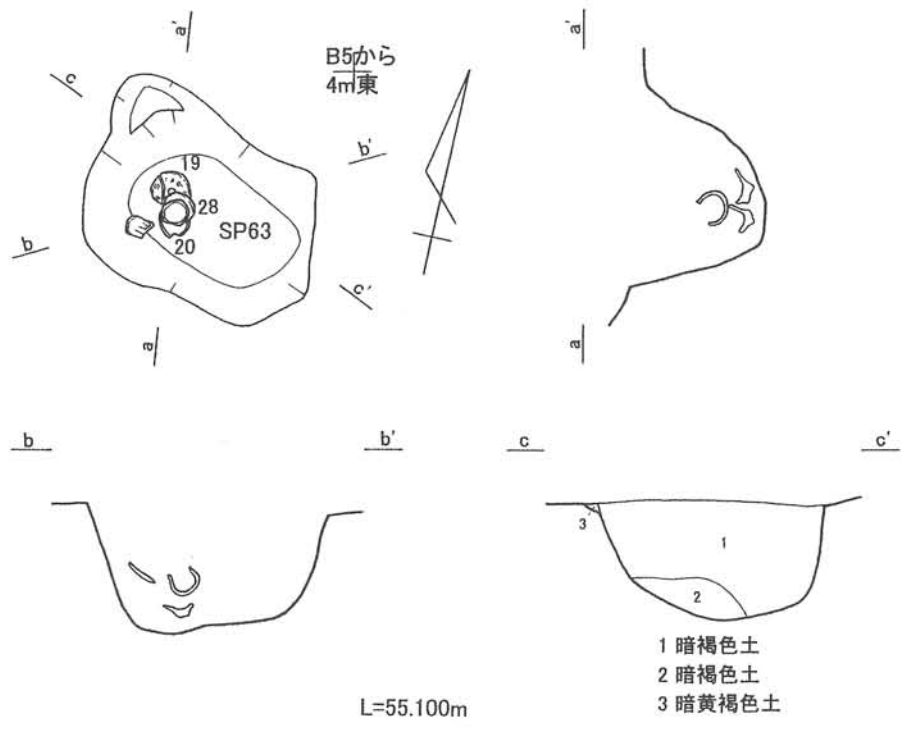
第9図 SH03実測図



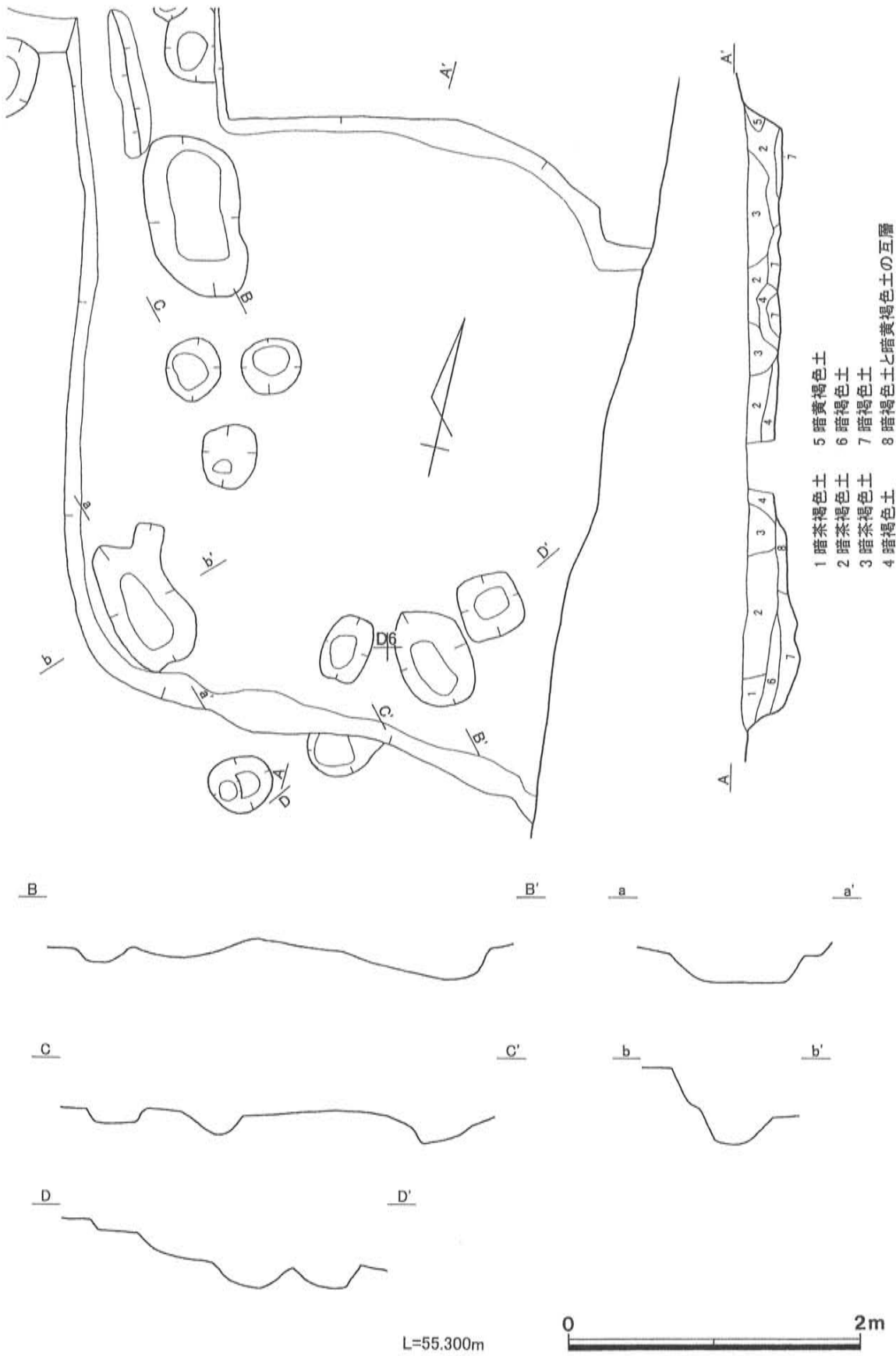
第10図 SH05実測図 (1)



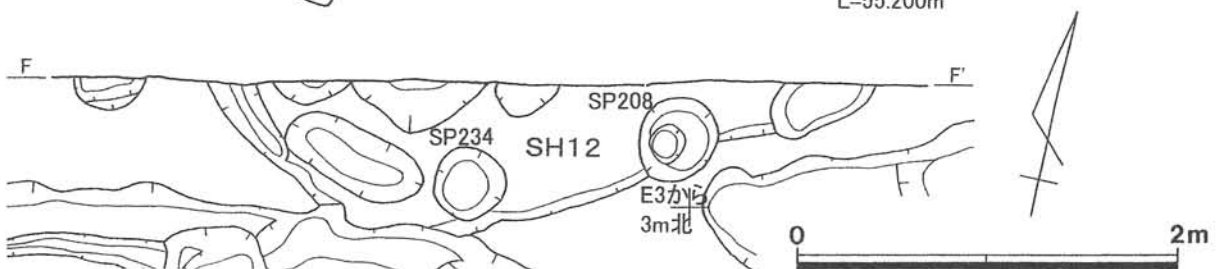
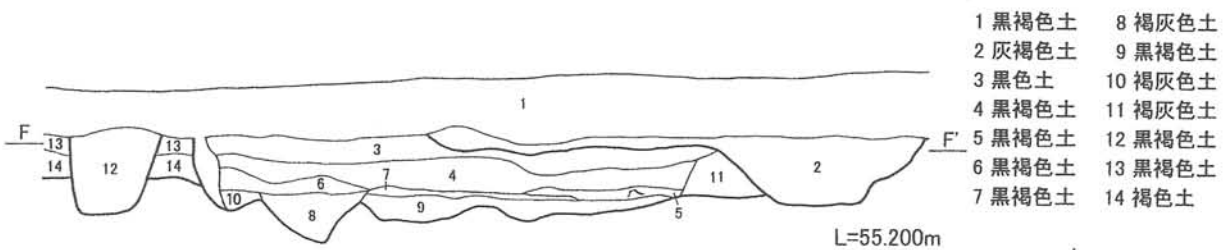
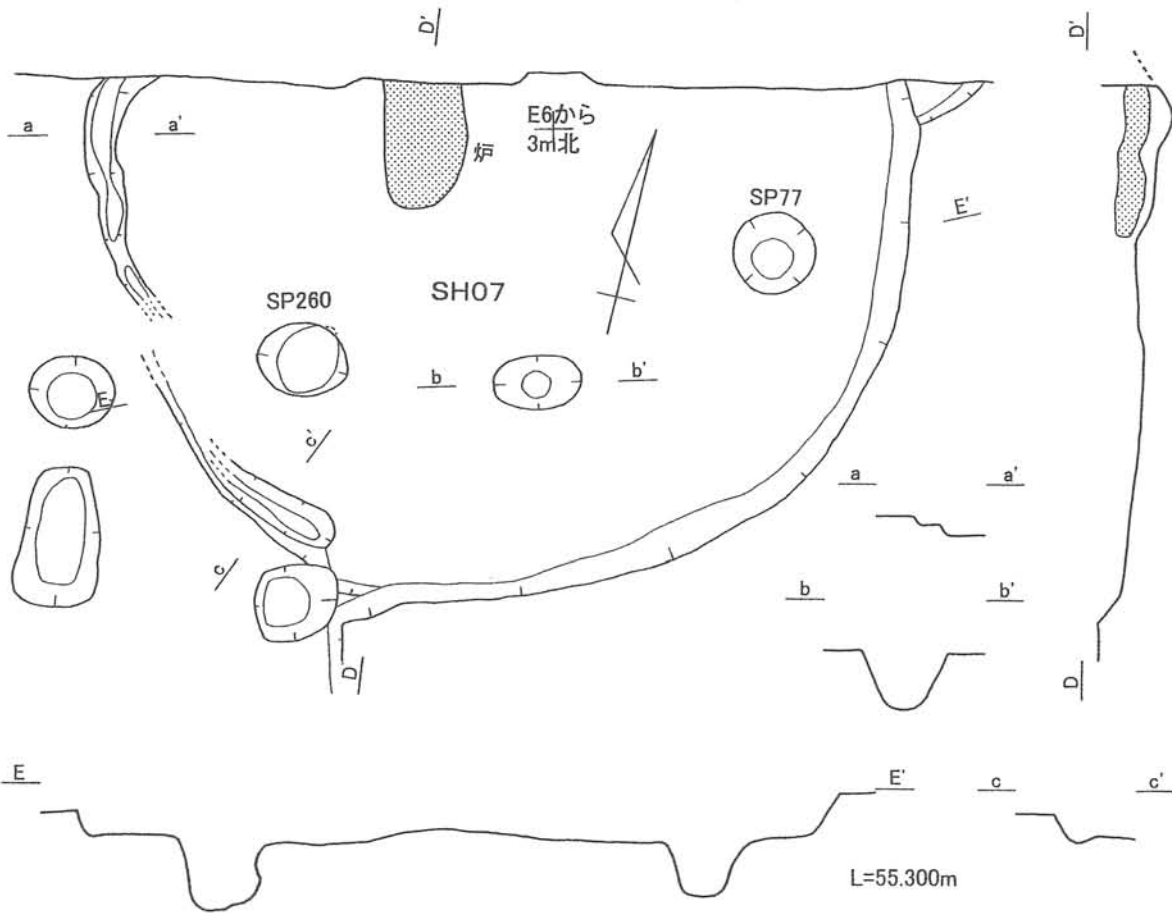
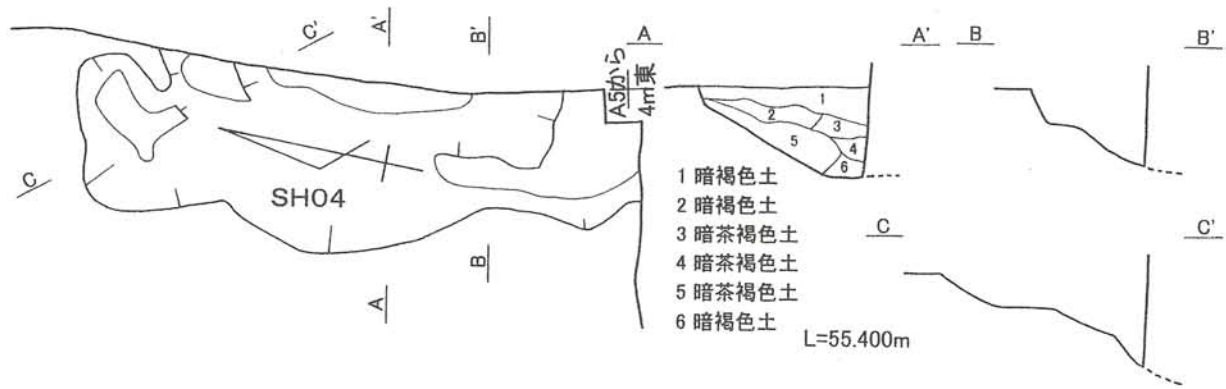
第11図 SH05実測図 (2)



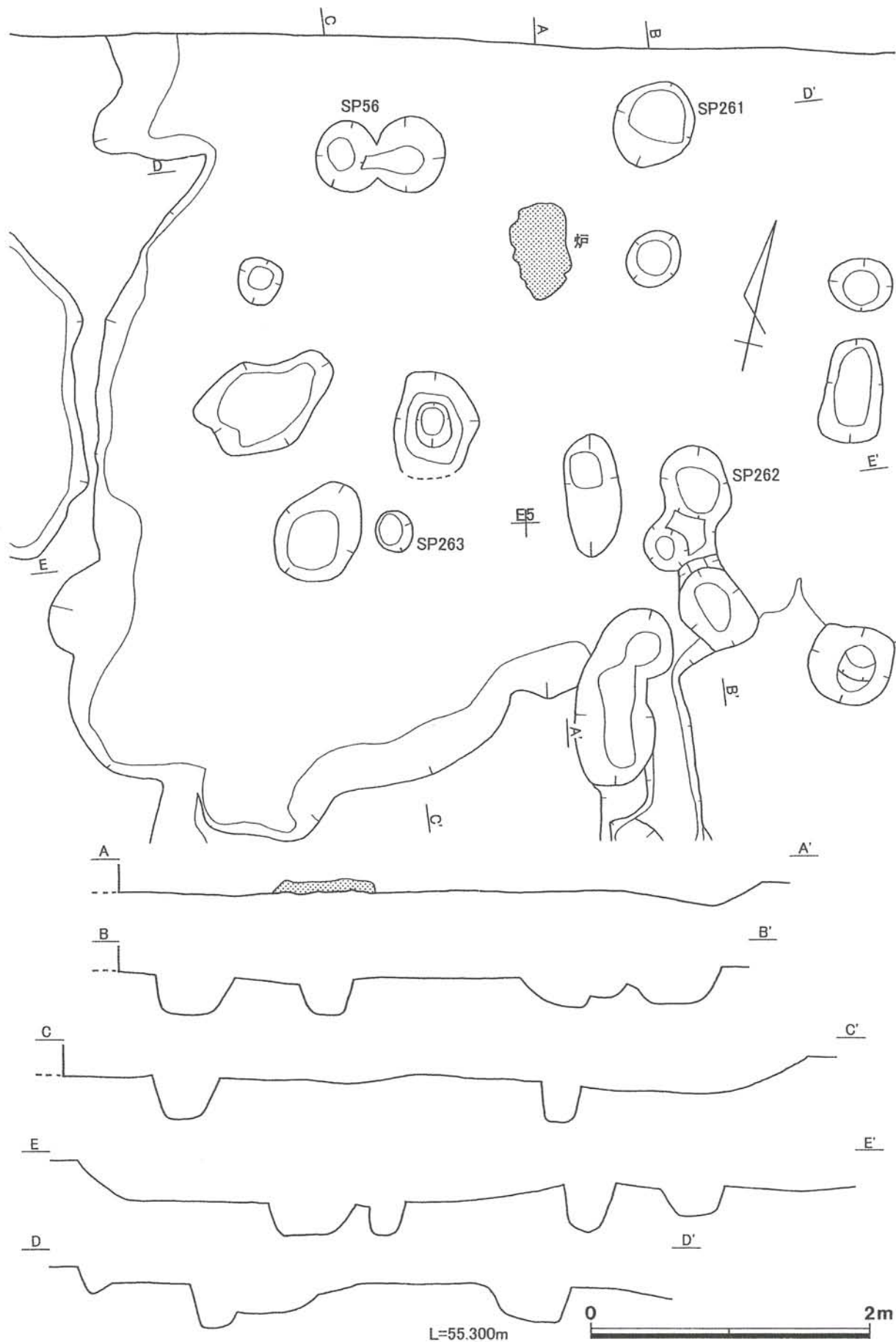
第12図 SH05内ピット実測図



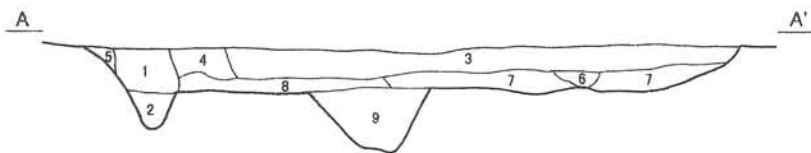
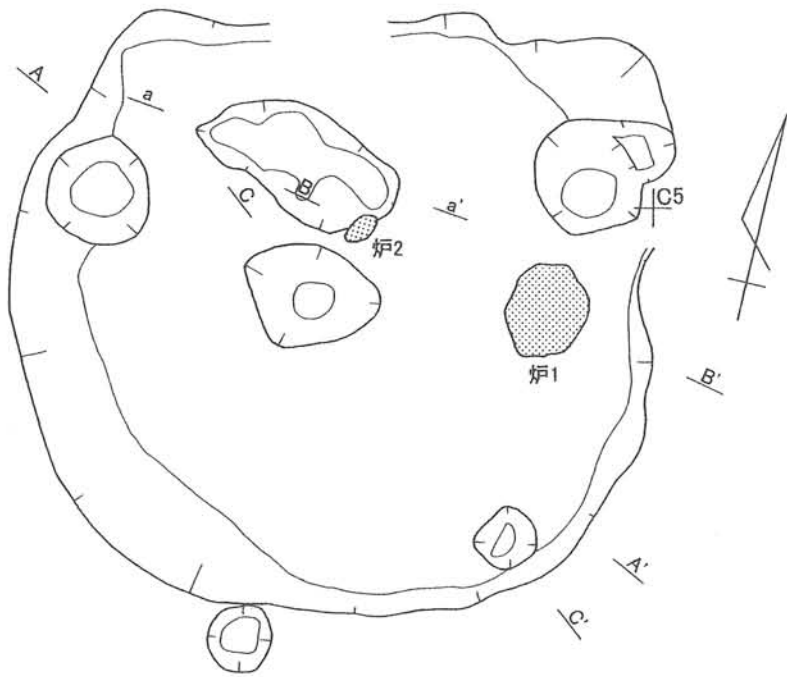
第13図 SH06実測図



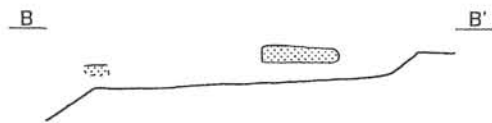
第14図 SH04・07・12実測図



第15図 SH08実測図



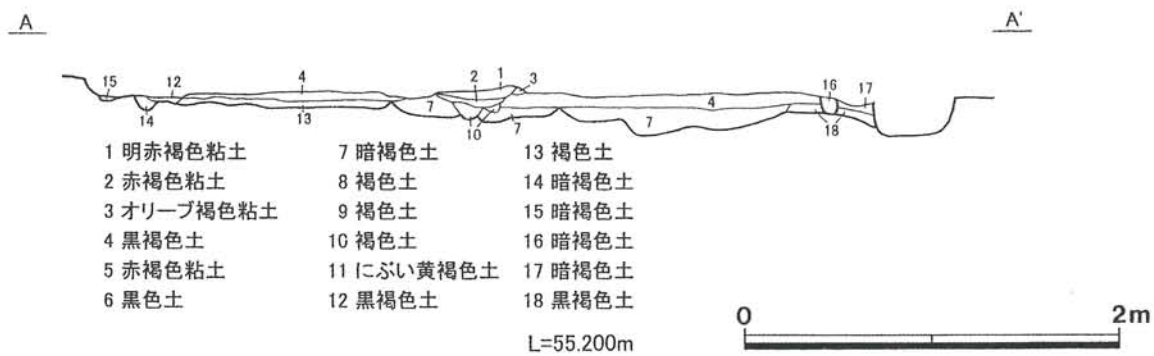
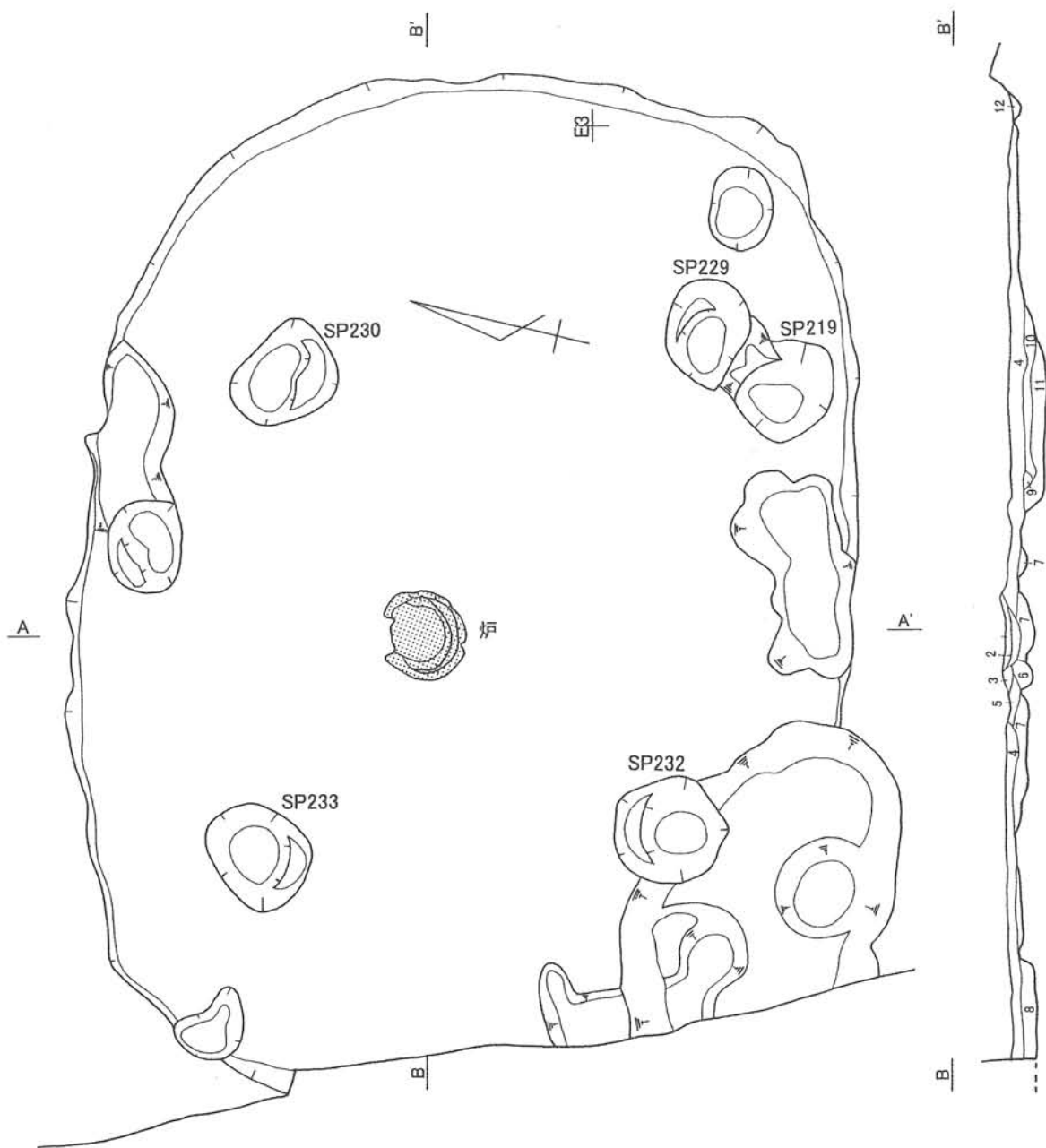
- | | | |
|---------|---------|-----------------|
| 1 暗褐色土 | 4 暗褐色土 | 7 暗褐色土と暗黄褐色土の互層 |
| 2 暗灰褐色土 | 5 暗黄褐色土 | 8 暗黄褐色土 |
| 3 暗灰褐色土 | 6 暗褐色土 | 9 暗黄褐色土 |



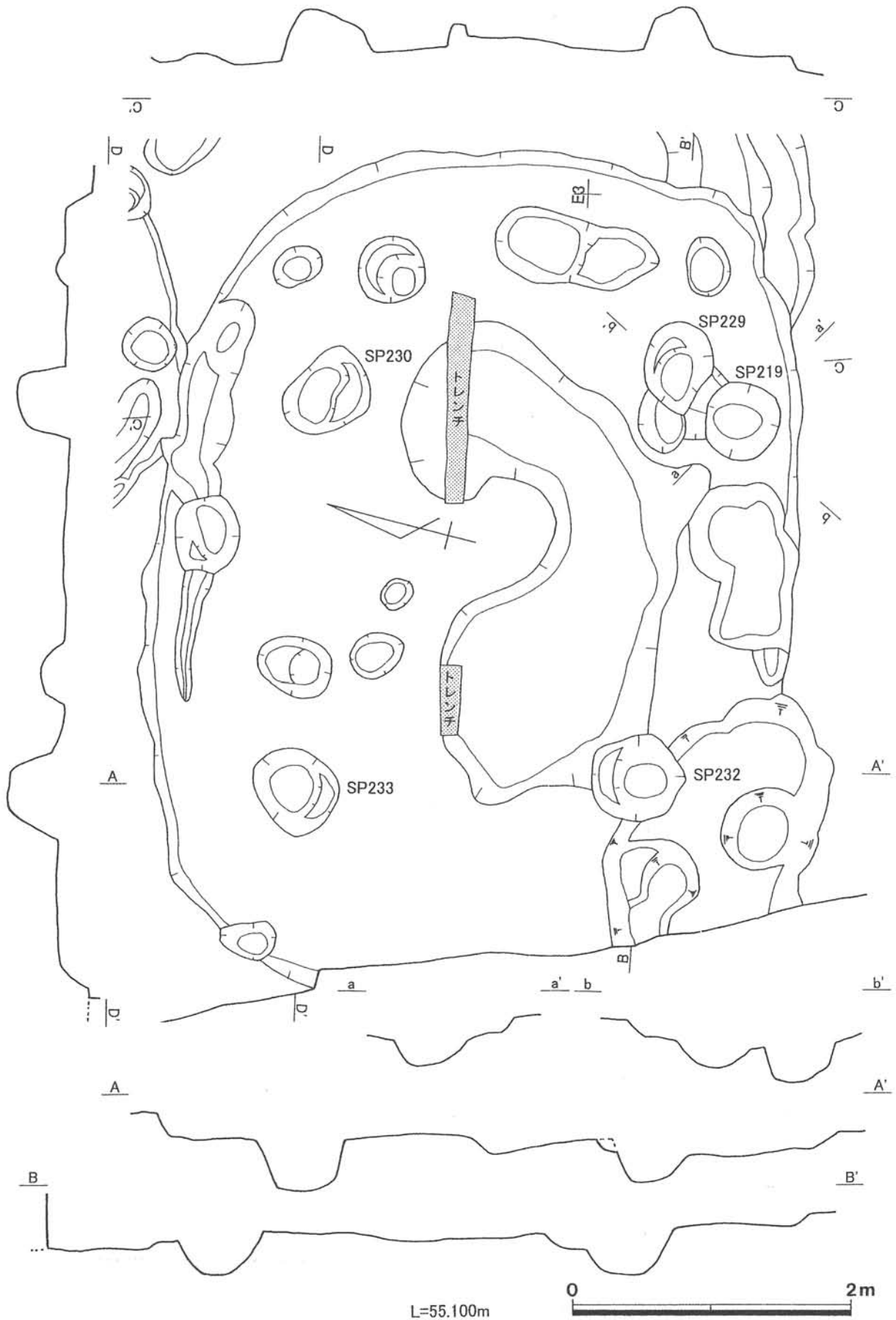
L=55.200m



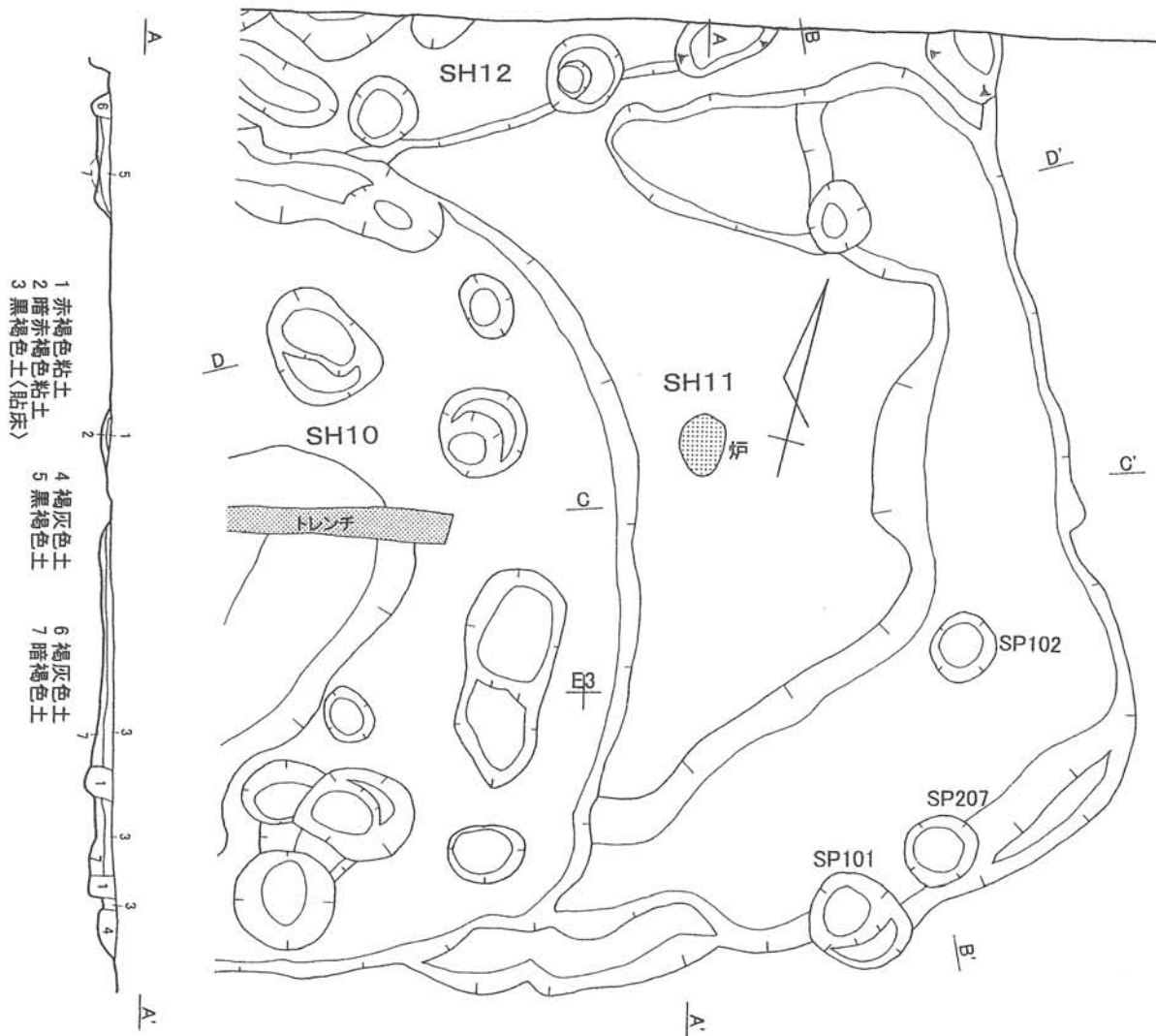
第16図 SH09実測図



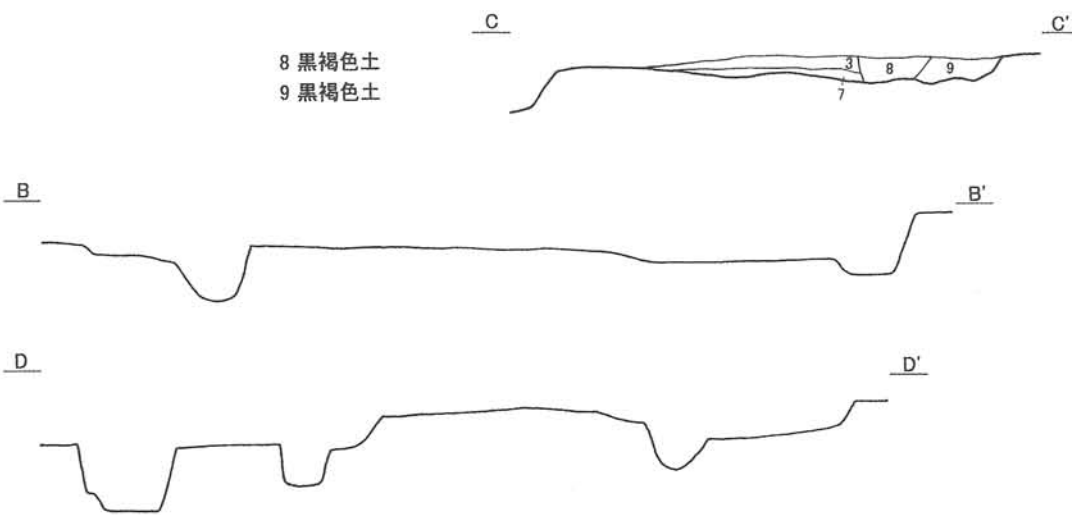
第17図 SH10実測図 (1)



第18図 SH10実測図 (2)



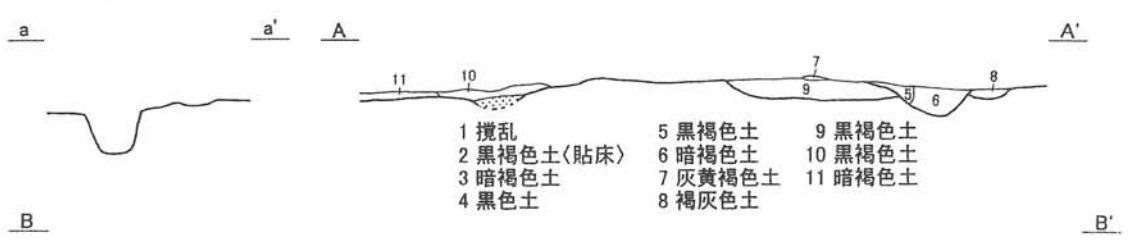
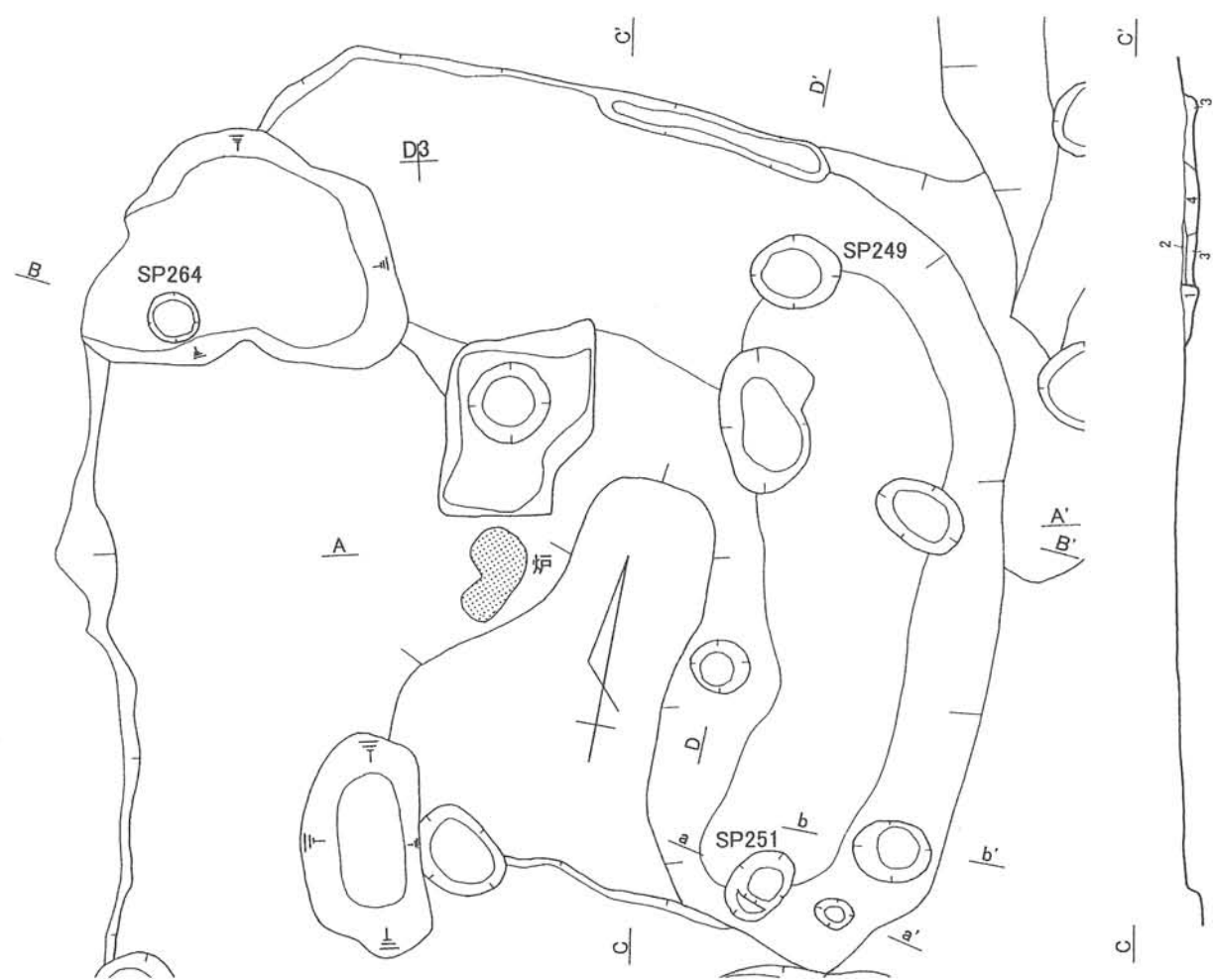
8 黒褐色土
9 黒褐色土



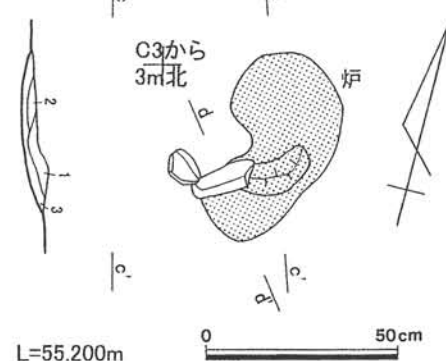
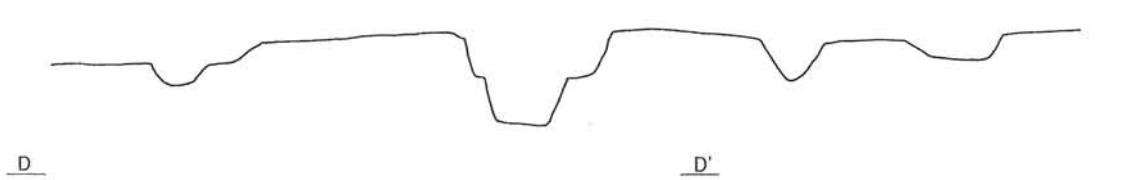
L=55.200m



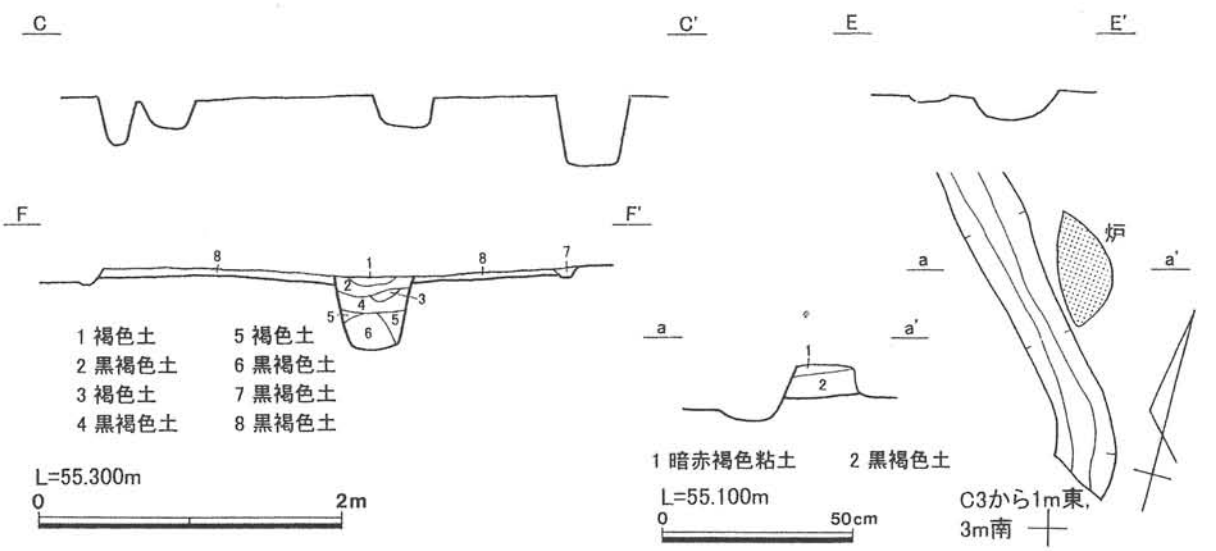
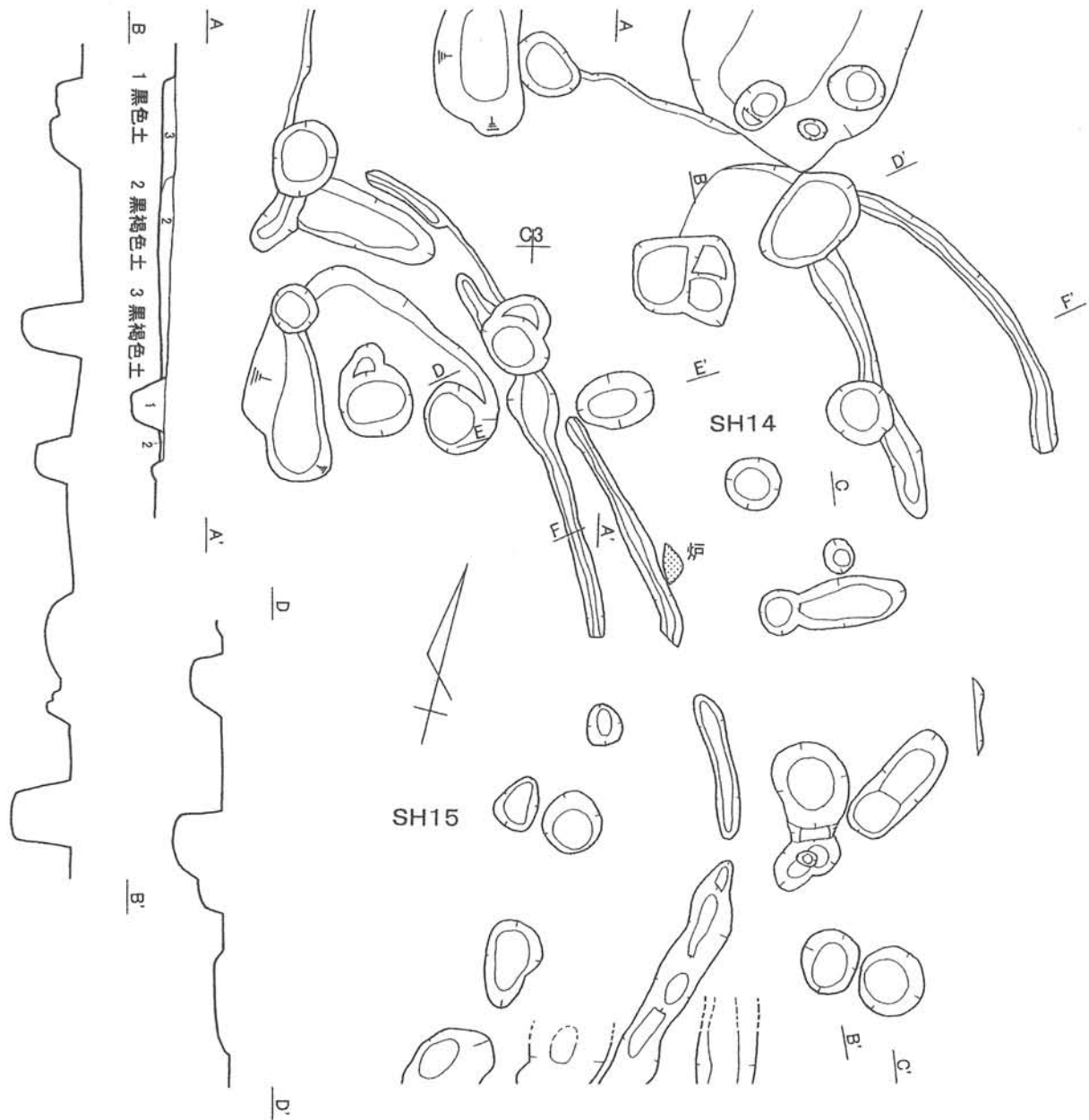
第19図 SH11実測図



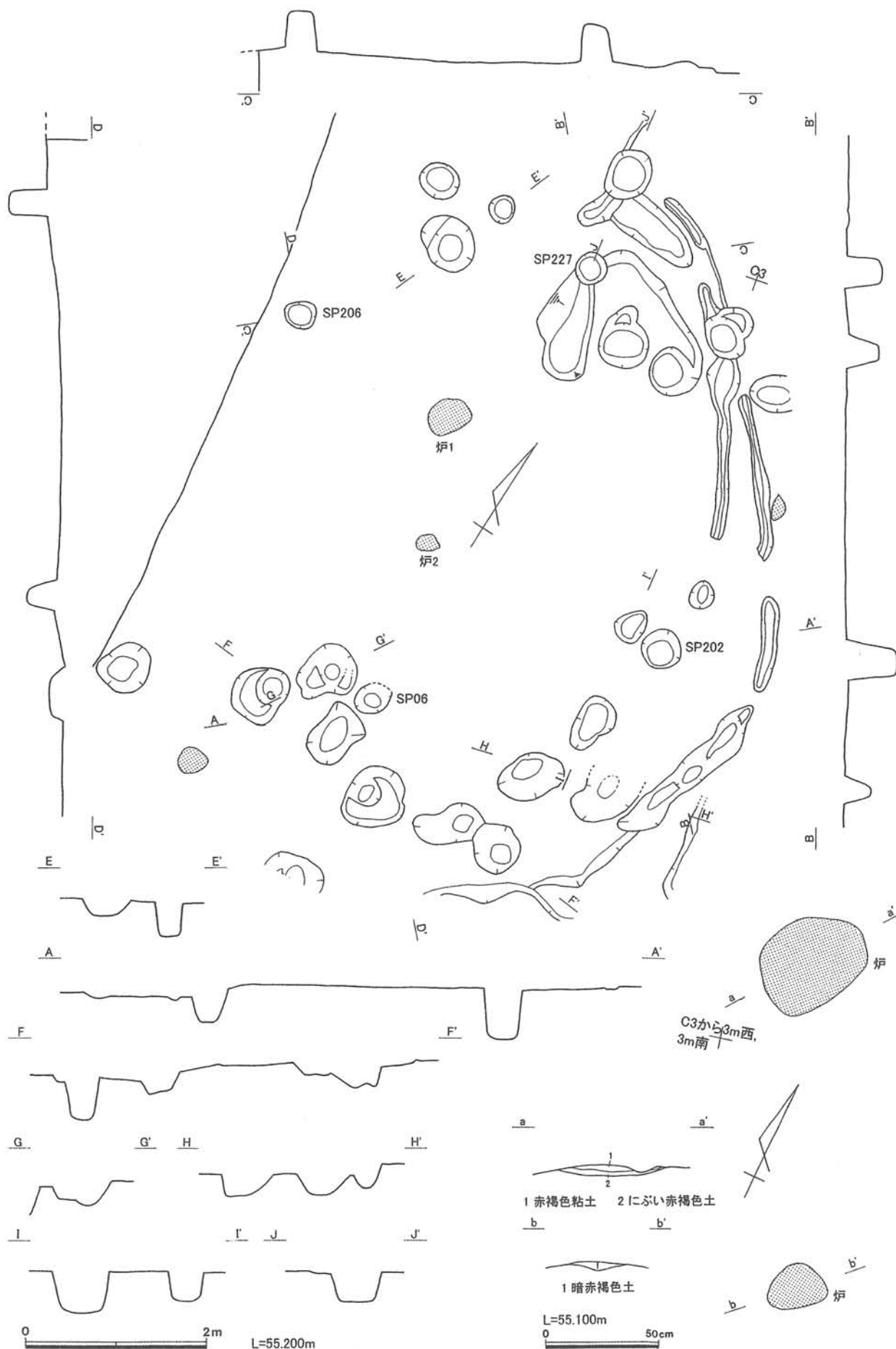
- 1 攪乱
- 2 黒褐色土(貼床)
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土
- 5 黒褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 灰黄褐色土
- 8 褐灰色土
- 9 黒褐色土
- 10 黒褐色土
- 11 暗褐色土



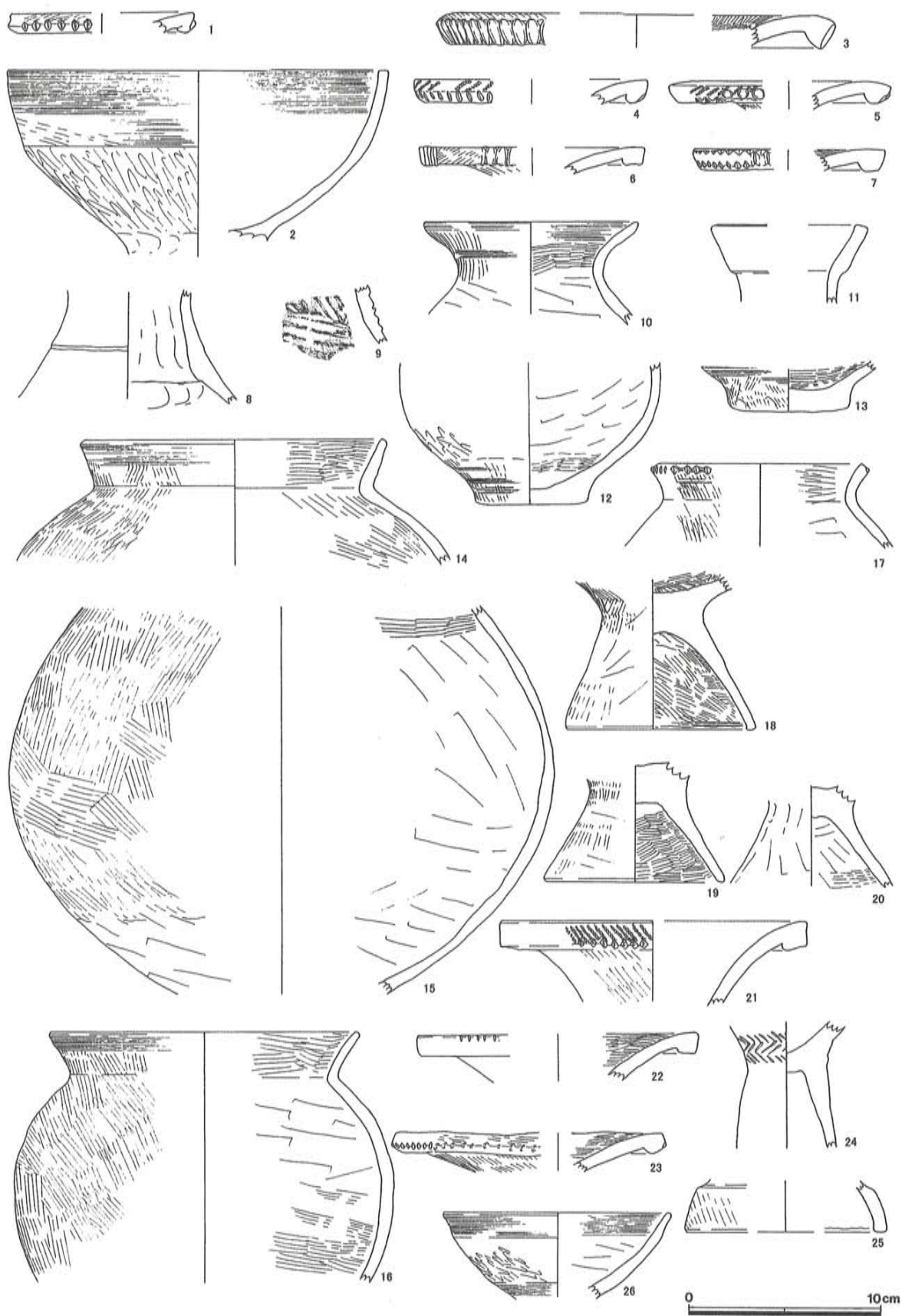
第20図 SH13実測図



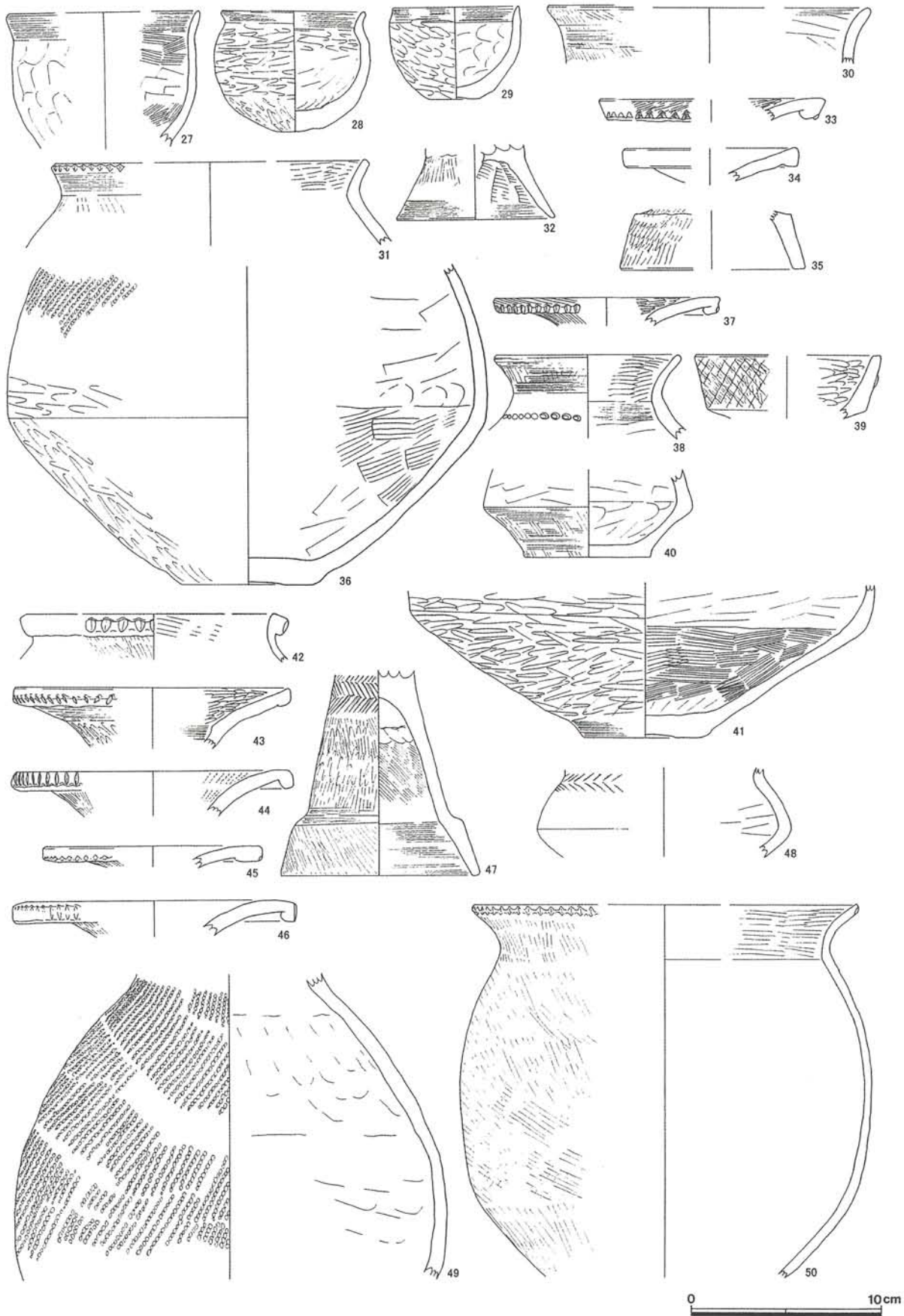
第21図 SH14実測図



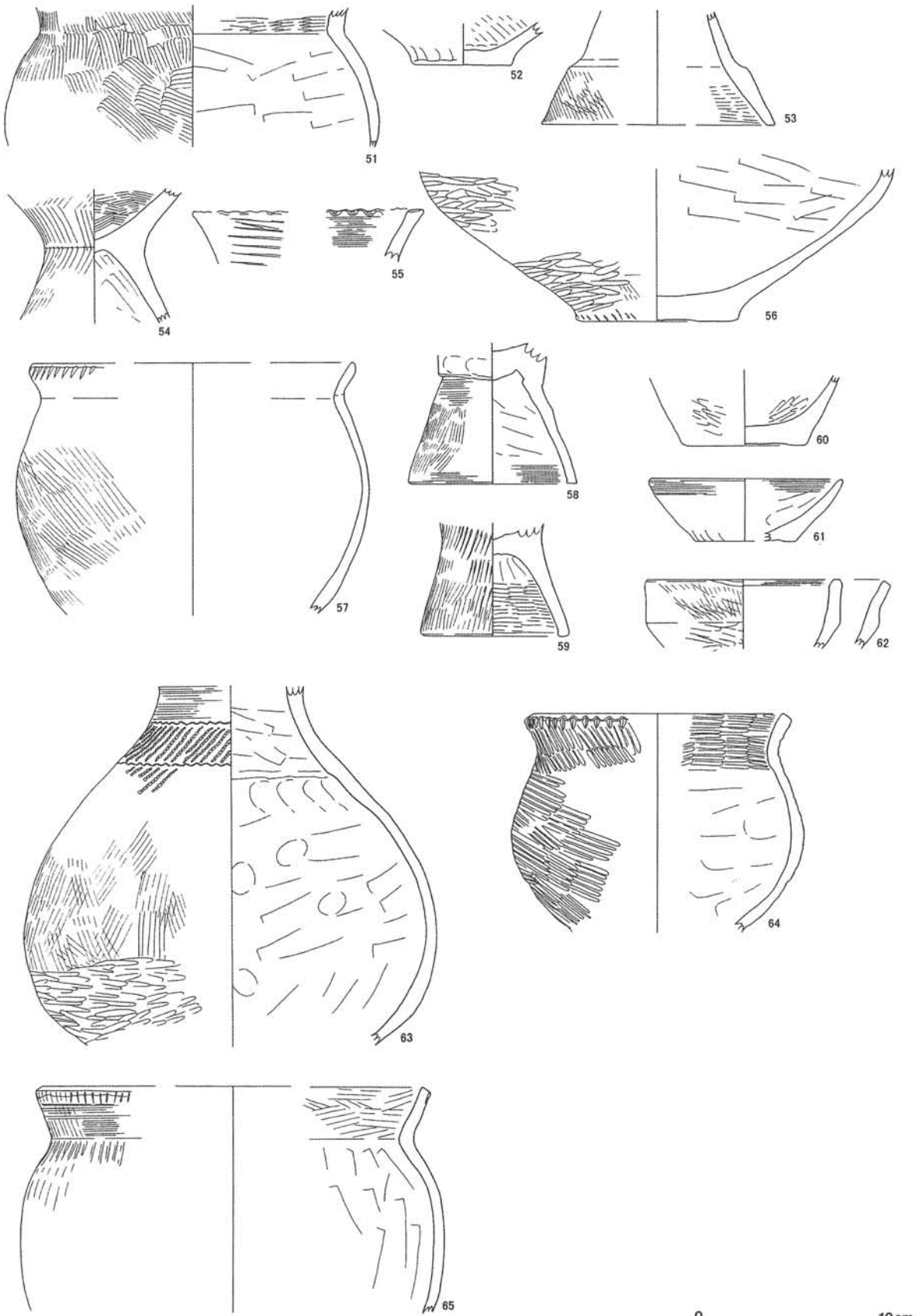
第22図 SH15実測図



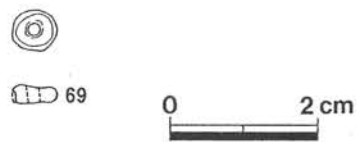
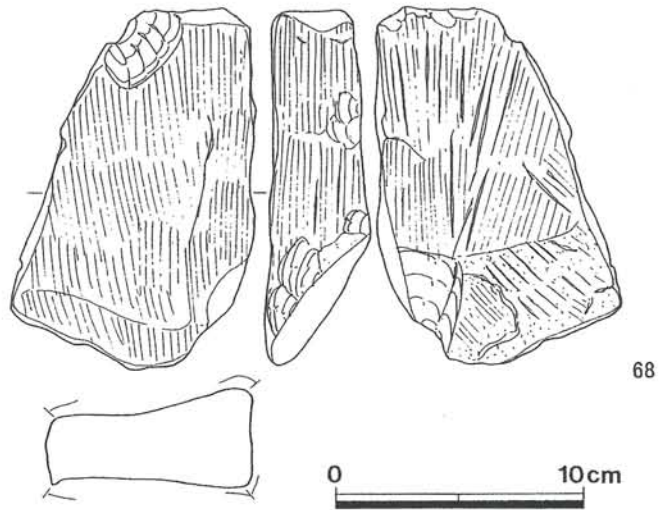
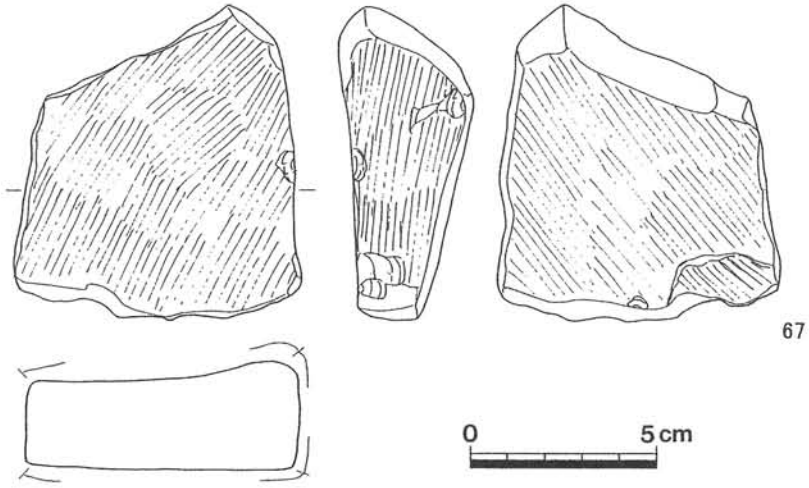
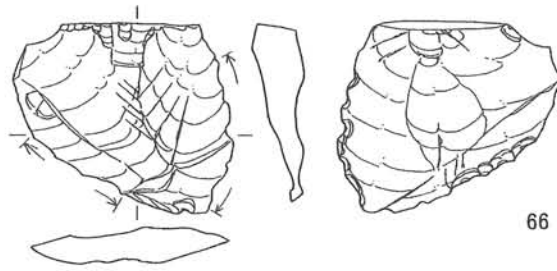
第23図 遺物実測図 (1)



第24図 遺物実測図 (2)



第25図 遺物実測図 (3)



第26図 遺物実測図(4)

図版 1

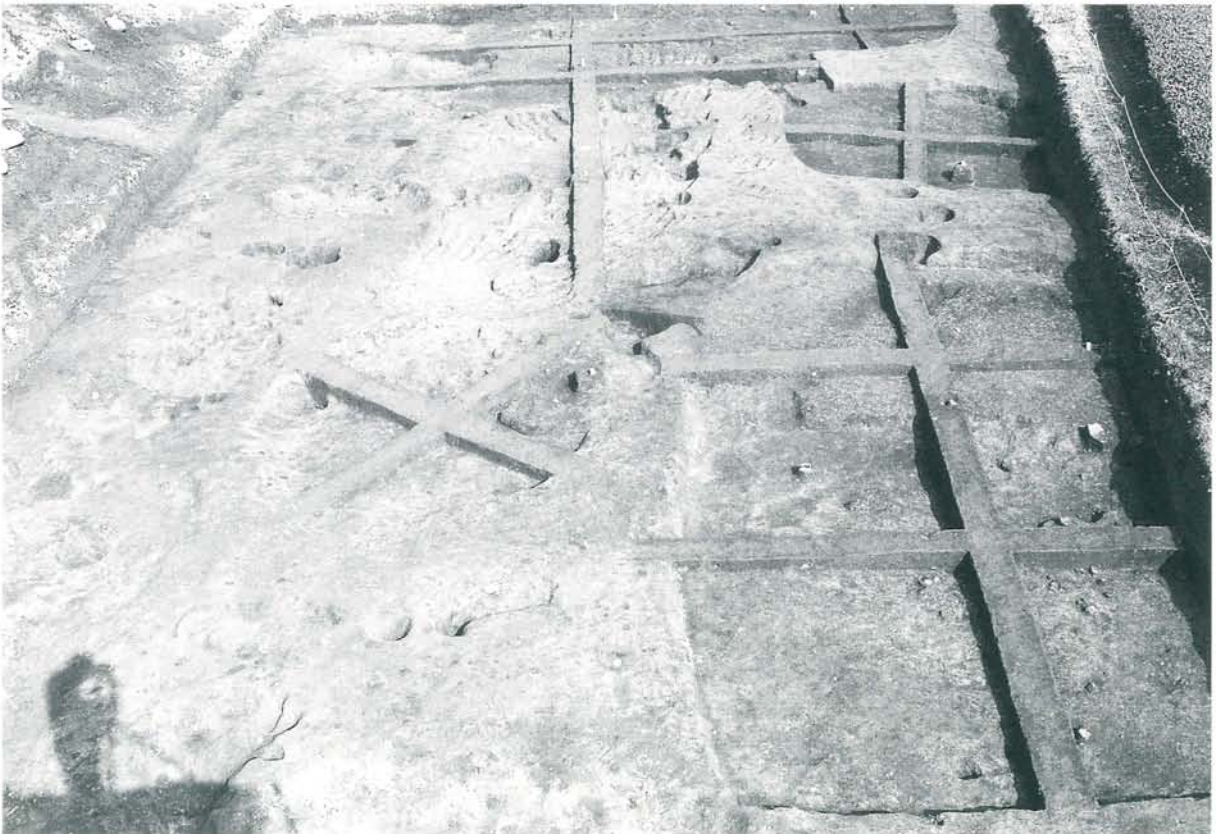


調査区東半全景 (空中写真)

図版 2



調査区西半全景 (空中写真)



SH05~09床面 (南から)

図版 3



SA04 (東から)

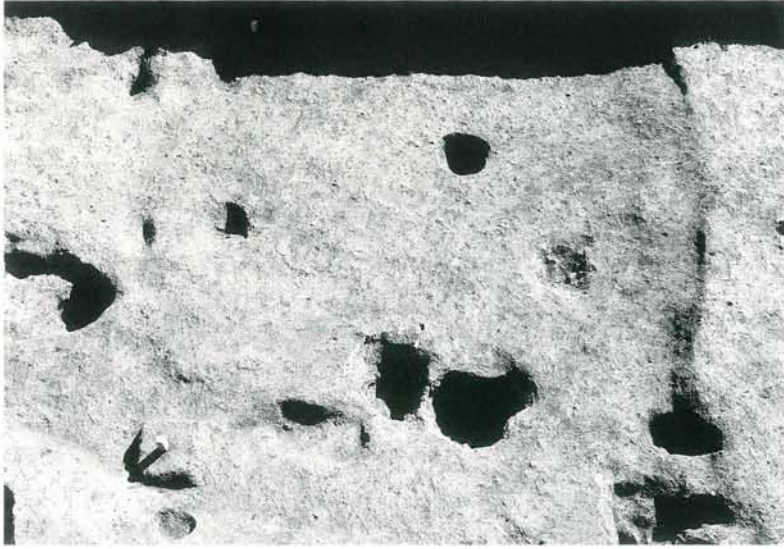


SB03 (南から)

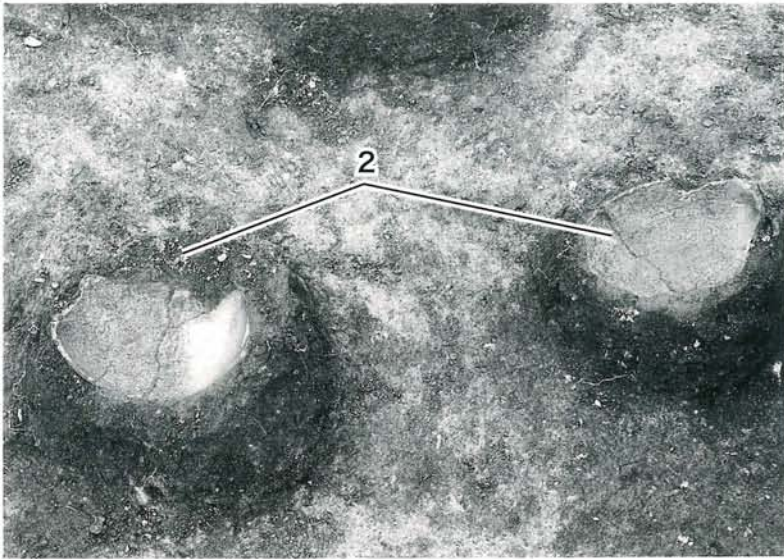


SH03・04完掘 (西から)

図版 4



SH03完掘 (北から)

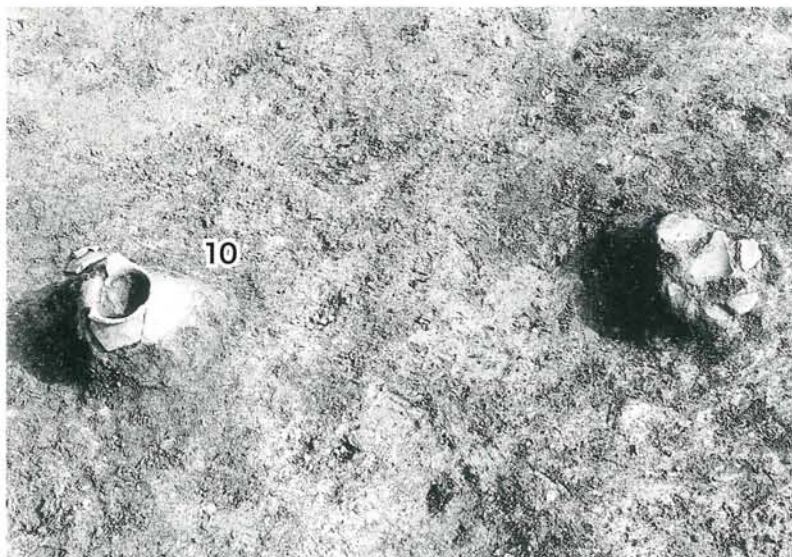


SH03内遺物 (西から)



SH05完掘 (北から)

図版 5



SH05内遺物 (西から)

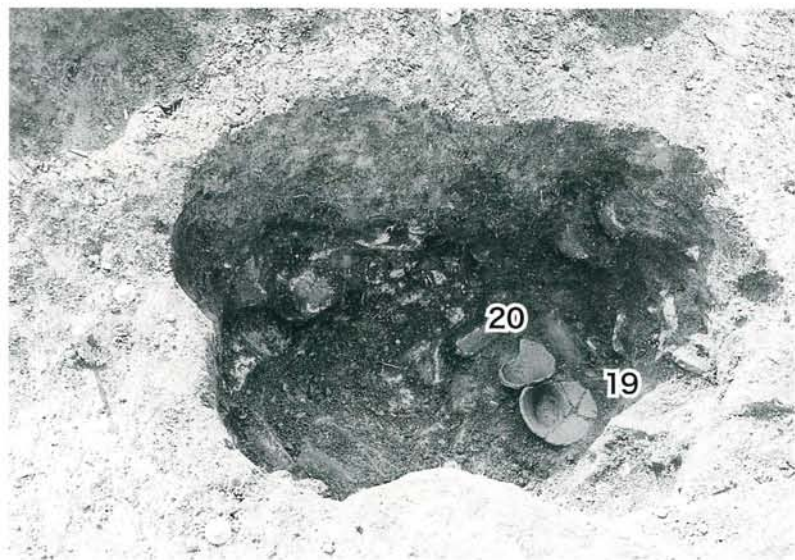


SH05内遺物 (南から)

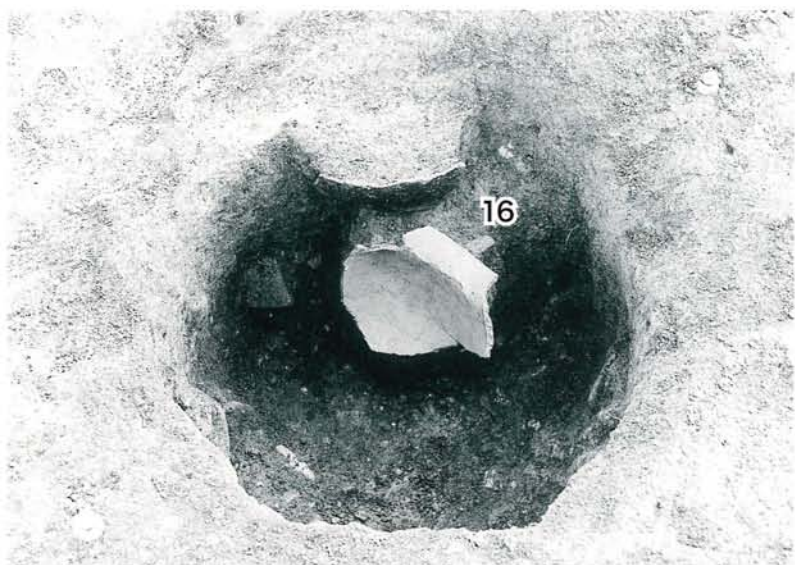


SH05 SP63内遺物 (北から)

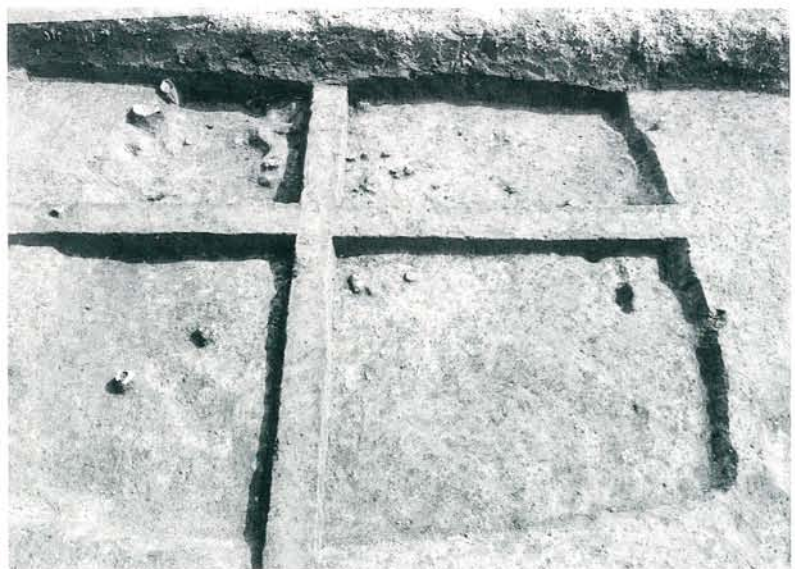
図版 6



SH05 SP63内遺物 (北から)

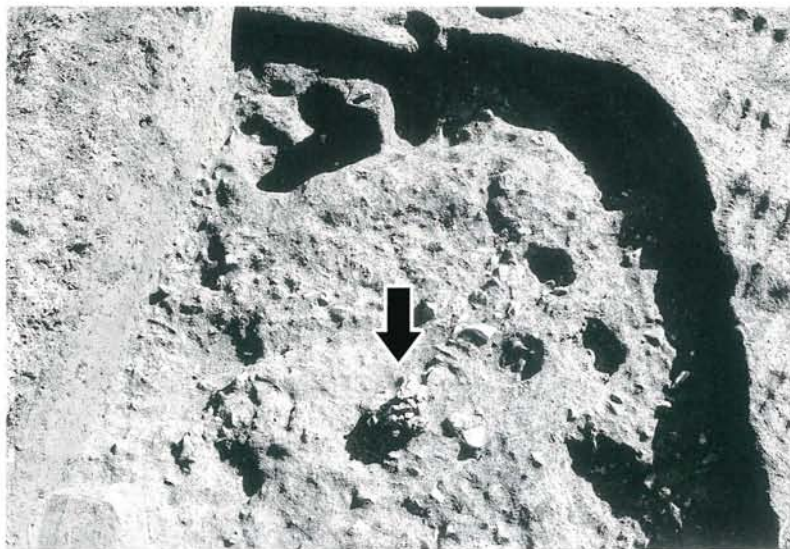


SH05 SP71内遺物 (西から)

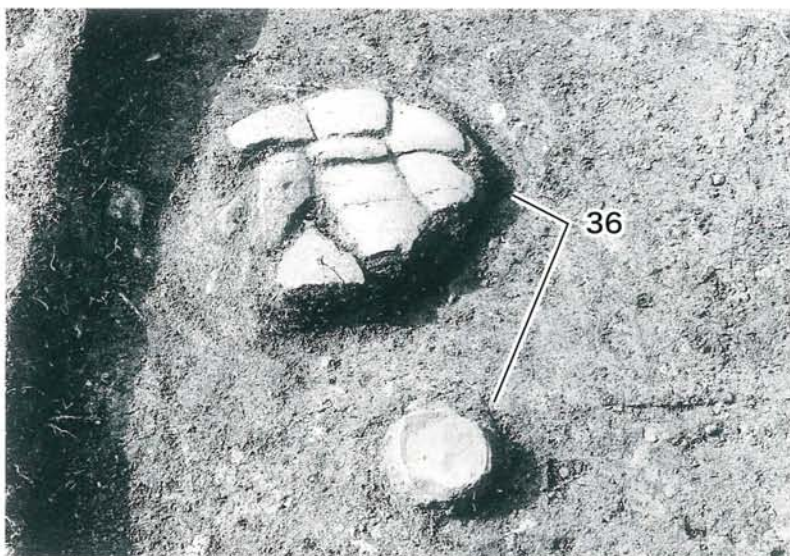


SH06床面 (西から)

図版 7



SH06
ベンガラ付岩のブロック (北から)



SH07内遺物 (北から)



SH08内遺物 (北から)

図版 8



SH08内遺物 (東から)



SH09炉跡と遺物 (東から)



SH10~12完掘 (東から)

図版 9



SH10完掘 (南から)



SH10床面 (南から)



SH10炉跡 (西から)

図版 10



SH11完掘 (南から)

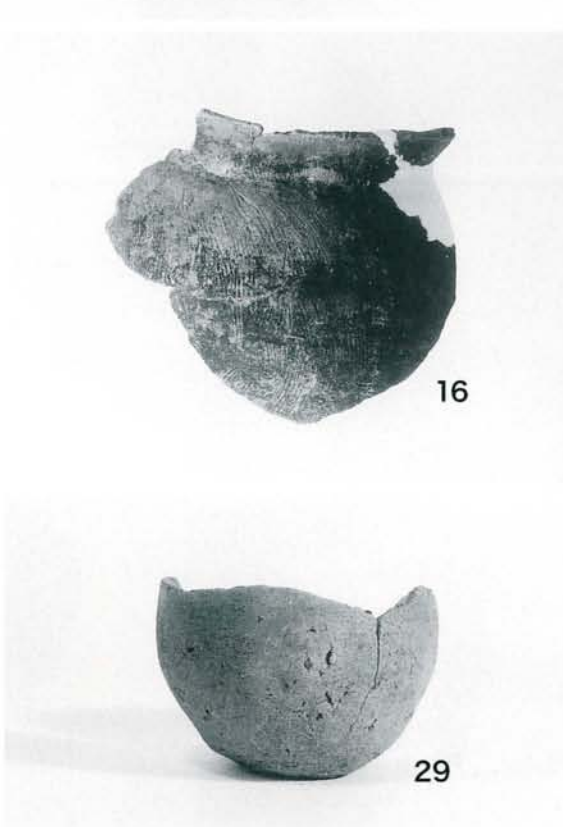
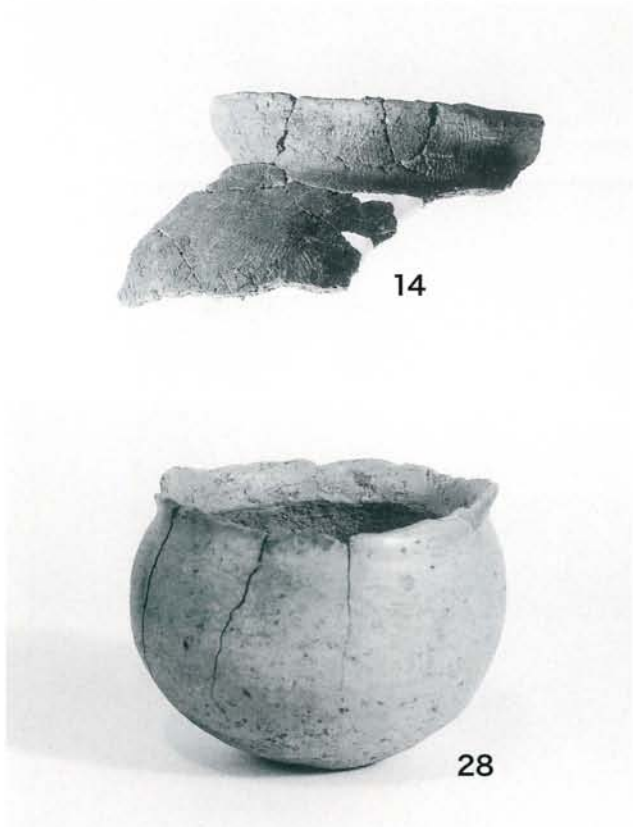


SH13完掘 (北から)

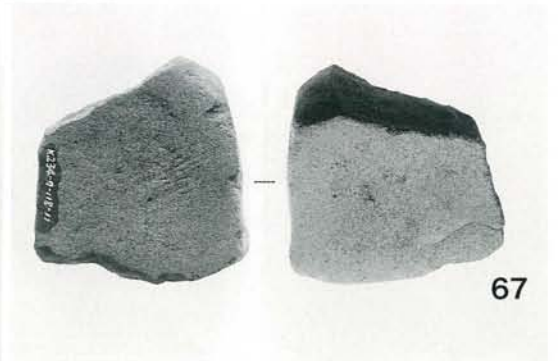
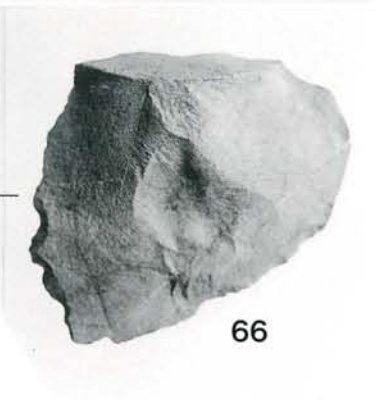
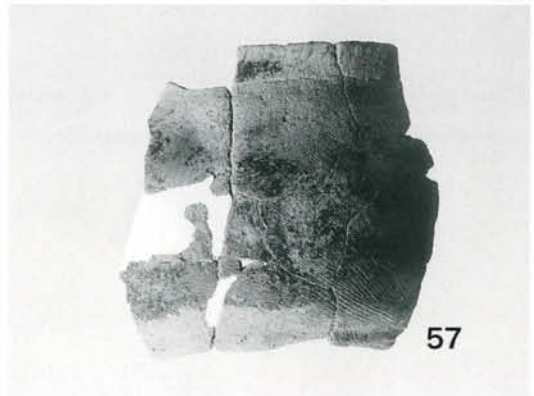
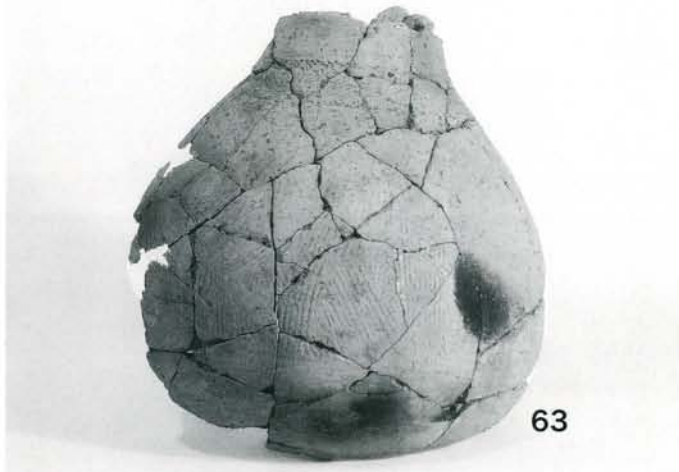
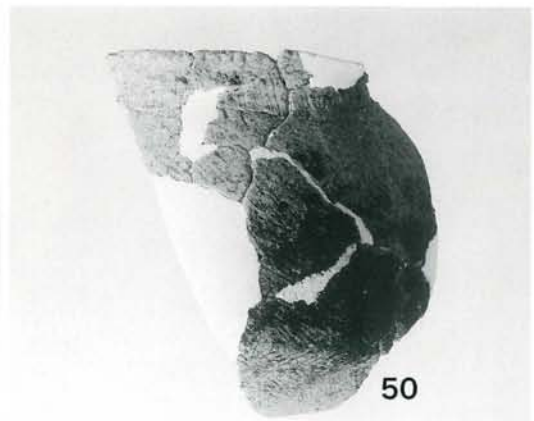
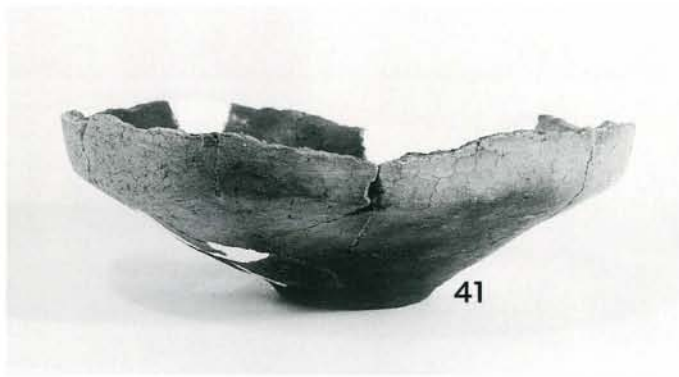


SH14・15完掘 (北から)

図版 11



図版 12



VI 女高 I 遺跡第 11 次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成 18 年 8 月、遺跡内で茶園の改植を行いたいという話を茶農家から寄せられ、9 月 28 日に確認調査を実施した。その結果、地表下 40～70 cm の深さから、竪穴住居跡・溝跡等の遺構ともに、弥生時代～古墳時代中期の土器が出土した。その後、遺跡の保護・保存について協議したが、遺構面までの深度が浅いことから、保護層を確保しての改植は困難との結論に達した。

平成 18 年 11 月 10 日に、記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。11 月 21 日付けで、静岡県教育委員会から耕作者に対し、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」通知された。

そして、記録保存のための発掘調査の実施に至った。

2. 調査の方法と経過

調査は、対象地の形に合わせて 5 m 方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。グリッドは、東西を東から A, B, C, D とし、南北は北から 1, 2, 3・・・を付け、1 A 区、2 A 区という呼称にした。グリッドの北東に位置する杭にグリッドを代表させた。

現地での図面作成は、遺構図を縮尺 20 分の 1 と 10 分の 1 を併用し、微細図は 10 分の 1 とした。写真撮影は、6×7 カメラ 1 台（ブローニー白黒用）と 35 mm カメラ 2 台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、排土置き場を確保する必要から、対象地を 2 分割し、平成 18 年 12 月 1 日に前半部分の機械掘削を開始した。平成 19 年 1 月 30 日から前半部分の埋め戻しと後半部分の機械掘削に入り、3 月 9 日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために、基準点測量を実施した。

3. 調査の内容

調査では、柵列、掘立柱建物跡、溝状遺構、竪穴住居跡、方形周溝墓等の遺構が検出され、弥生土器、石製品等が出土した。

ここでは、遺構、遺物の順に概要を述べる。

i) 遺構の概要

1) 柵列 (SA)

SA01 (第 3 図)

5 C・6 C 区から検出された S P 199・200・201 である。S P 199 と S P 201 を結んだ軸は、N-1°-E を測る。柱間は、S P 199・200 間で 1.80m、S P 200・201 間で 1.94m を測る。出土遺物はない。

SA02 (第 3 図)

5 C・6 C 区、6 D 区から検出された S P 110・97・95 である。柱穴の直径が 39～45cm と大きいことから、調査区外に及ぶ掘立柱建物跡の可能性が高い。S P 110 と S P 95 を結んだ軸は、N-8°-E を測る。柱間は、S P 110・97 間で 1.66m、S P 97・95 間で 1.56m を測る。柱穴から、土器の小片が出土した。

SA03 (第4図)

1C・2C区から検出されたSP145・77・76である。SP145はSF02を壊している。SP145とSP76を結んだ軸は、N-29°30′-Eを測る。柱間は、SP145・77間で1.05m、SP77・76間で1.42mを測る。柱穴から、弥生時代後期の土器片が出土した。

SA04 (第4図)

1B区、1C区から検出されたSP75・83・01である。SP75とSP01を結んだ軸は、N-26°-Eを測る。柱間は、SP75・83間で1.51m、SP83・01間で1.30mを測る。柱穴から、弥生時代後期の土器片が出土した。

2) 掘立柱建物跡 (SB)

SB01 (第5図)

3B・4B区、3C・4C区から検出された1間×2間の建物跡で、長軸の方位は、N-4°30′-Eを測る。SP55・54はSH02の床面で確認され、SP130はSB02の柱穴SP129を切り、SP202は方形周溝墓SZ01の周溝SD01に切られる。このSB01は、SH02・SB02より新しく、SZ01より古いと考えられる。柱間は、SP130・38間で2.79m、SP203・54間で2.68m、SP203・202間で1.94m、SP202・130間で1.86m、SP54・55間で1.61m、SP55・38間で1.83mを測る。

SB02 (第6図)

4C・5C区から検出された1間×2間の建物跡で、長軸の方位は、N-14°30′-Wを測る。SP96はSH13の壁溝を切り、SP122はSD02に、SP129はSP130に切られる。したがって、SH13より新しく、SD02・SB01より古いと考えられる。柱間は、SP96・106間で3.15m、SP132・129間で3.15m、SP132・122間で2.31m、SP122・96間で2.54m、SP129・123間で2.15m、SP123・106間で2.55mを測る。すべての柱穴において版築状の土層を確認し、SP96では直径18cmの丸柱の柱痕跡を確認した。

SB03 (第7図)

3C区、3D・4D区から検出された2間×4間の総柱建物跡で、SP104とSP141を結んだ長軸の方位は、N-80°-Eを測る。SP101は、SH06の炉を壊しているため、SH06より新しく、SP141の上面でSD01内の遺物が確認されていることから、SB03は方形周溝墓SZ01より古いと考えられる。北西隅の柱穴は、SH11の貯蔵穴と重なり、明確ではない。柱間は、SP104・101間で1.56m、SP181・141間で1.76m、SP141・139間で1.58m、SP181・208間で0.96m、SP208・144間で1.57m、SP144・189間で1.54m、SP141・185間で2.61m、SP185・166間で1.48m、SP166・104間で1.55m、SP139・164間で1.15m、SP164・163間で1.34m、SP163・85間で1.64m、SP85・101間で1.60mを測る。南側柱にSP163、北側柱にSP144を想定したが、それぞれの柱穴の東に位置するSP98、SP165の可能性がある。柱穴内に版築状の土層はみられない。

SB04 (第8図・34図)

2C区、1D・2D区から検出された1間×2間の建物跡であるが、南西隅の柱穴は検出されなかった。SP148・155はSH10を切り、SP204は78に切られる。SP204とSP155を結んだ長軸の方位は、N-72°30′-Wを測る。柱間は、SP155・74間で2.60m、SP155・148間で2.53m、SP148・204間で2.26m、SP74・84間で2.64mを測る。柱穴内に版築状の土層はみられない。SP84から、第34図-1が出土した。

SB05 (第9図)

1C区、1D区から検出された建物跡で、2間×1間分を確認したが、大半が調査区外に及ぶ。柱

間は、SP103・80間で1.91m、SP152・192間で2.14m、SP192・205間で1.83m、SP205・80間で1.90mを測る。SP192がSP176に切られていて、SP152・80の柱穴底面に段差が存在することから、建て替えの可能性がある。柱穴に版築状の土層はみられない。

3) 溝状遺構 (SD)

SD01

方形周溝墓SZ01の周溝SD01については、SZ01の項で報告する。

SD02 (第10図・34図)

5A区、5B区、5C区、5D区にかけて検出された、東西方向の溝である。SK02・SB02の柱穴SP122を切る。確認面の幅1.05~1.61m、底面の幅23~66cmを測る。底面は、5C杭から西がほぼ水平で、5C杭から東は、わずかに東に傾斜する。覆土中から、第34図-2・3が出土した。

SD03 (第10図・34図)

4B区、4C区、4D区から検出された、東西方向の溝状遺構で、SD01から東では確認されなかった。確認面の幅46~78cm、底面の幅20~36cmを測る。覆土中から、第34図-4が出土した。

SD04 (第11図・34図・42図)

3B区、3C区からSH02に接するように検出された、南西方向から北東方向を向く溝状遺構で、南西端はSD01の西側では確認されず、北東端はSK01から先では確認されていない。C-C'断面では、1・2層が3層を切っていると考えられるので、溝の重複か掘り直しがあったものと推定される。覆土中から、第34図-5の土器、第42図-135の石器が出土した。

4) 埋葬土坑 (SF)

SF01 (第12図)

1C・2C区から検出された土坑で、北端をSP171に、南端近くをSP146に壊される。SP77との切り合いは、明らかではない。全長約2.3mと推定され、確認面の幅56~66cm、底面の幅は、南端近くで46cm、SP171の南側で56cmを測る。深さは、確認面から10~15cmを測る。長軸の方位は、N-6°30'-Eを測る。土坑内から、弥生時代後期と思われる土器の小片が出土した。

SF02 (第13図)

2C区、SF01の南45cmから検出された土坑で、南端近くをSP179に、北端をSP145に壊される。確認面の長さ2.64m、幅70~86cm、底面の幅は、南端で45cm、中央で61cm、北端で40cmを測る。深さは、北端で14cm、南端で27cmを測る。長軸の方位は、N-14°30'-Eを測る。土坑内から、弥生時代後期と思われる土器の小片が出土した。

SF03 (第14図・34図)

2D区から検出された土坑で、南端の壁をSP84に切られている。確認面の長さ1.25m、幅49~58cm、底面の幅は両端で36cmを測る。深さは、確認面から23cmを測る。長軸の方位は、N-17°-Wを測る。土層の1・2層が棺内の堆積と思われ、棺の幅は35cm前後と推定される。1層中には、弥生時代後期~古墳時代前期の土器片が多く混入した。覆土から、第34図-6・7が出土した。

5) 竪穴住居跡 (SH)

SH01 (第15図・16図・34図・42図)

1B・2B区から検出された住居跡で、南西隅をSD01に、東端をSH03に切られ、北端はSH05を切る。確認面の規模は、東西約4.5m、南北約4.7mを測り、平面形は、隅円方形を呈する。主柱穴は、SP58・59・51・52である。主柱穴間の距離は、SP58・59間で2.60m、SP51・52間で2.62m、SP51・58間で2.80m、SP52・59間で2.90mを測る。掘り方は、中央が高く、壁近くをくぼ

ませている。掘り方上に10～15cm程度の厚さで、黒褐色土・褐色土・暗褐色土を入れて床をつくっていた。床面は、炉の周辺から壁際に向かって緩く傾斜していて、褐色土のブロックが多く混じり固くしまっていた。炉は、北西隅を除く3方に2～4cmの土手状の高まりが存在した。SP58・59のほぼ中間に、入り口の施設に係わると考えられるSP53がある。SP59の南には、貯蔵穴と考えられるSP60がある。住居から、第34図-8～13の土器、第42図-137の石器が出土した。

SH02 (第17図・34図)

3A・4A区、3B・4B区から検出された焼失家屋で、4分の1程度が調査区外に及ぶ。確認面の規模は、東西約5.4m、南北約7mを測り、平面形は小判形を呈する。支柱穴はSP68・66・67が確認された。支柱穴間の距離は、SP66・67間で2.83m、SP66・68間で3.57mを測る。壁際に幅22～38cmの壁溝がめぐる。掘り方は、ほぼ水平で、黒褐色土が2～4cmの厚さで入れられ床がつくられていた。炉は、住居の中央北寄りから検出されたが、精査中に削平してしまっただけのため、詳細は不明である。住居内から、第34図-13～15が出土した。また、住居内から検出された炭化材の樹種について分析を行い、付載に結果を記載した。

SH03 (第18図・34図・35図)

1A・2A区、1B・2B区から検出された住居跡で、SH01・05を切る。確認面の規模は、一辺約3.2mを測り、平面形は、方形を呈する。SH01を切る場所では壁溝を断面で確認したが、平面では検出できなかった。壁溝が全周するものと思われる。掘り方の上に2～4cmの厚さで褐色土を入れ、その上に2～4cmの厚さで黒褐色土を入れて床をつくる。炉は壁から約40cmの位置につくられ、床は炉の周辺が最も高くなっていた。支柱穴は、確認されなかった。住居内から、第34図-16～20、第35図-21が出土した。

SH04 (第18図)

5B区から検出された住居跡で、炉跡と掘り方の一部が検出されただけで、詳細は明らかではない。炉は、すでに削平を受けていた。掘り方内の暗褐色土は、固くしまっていた。

SH05 (第19図)

1B区から検出された住居跡で、SH01・03に壊されている。残存状況は良好ではなく、確認面から7～9cmで床面に達した。炉は、南東部分にかすかに土手状の高まりがある。西壁近くにある浅いピットは、床面下から検出された。

SH06 (第20図・35図)

3C・4C区、3D・4D区から検出された住居跡で、西側の調査区外に及ぶ。SH14を壊し、SH11に壊されている。壁溝の北端はSH11に切られ、南端はSP132から先が確認されなかった。壁溝の残存部分が6.10mを測る、大型の住居跡である。支柱穴は、壁から約1.3m離れた位置にあるSP206・191を想定している。支柱穴間の距離は、3.62mを測る。掘り方は、東壁から1.3mまでは水平で、そこから西が約6cm低くなる。掘り方内に黒褐色土を入れ、床面をつくっていた。SH14の壁溝は、この黒褐色土の下から検出された。炉跡は、周囲に2cm程度の土手状の高まりをめぐらせていて、断面形は浅い皿状を呈する。住居内から、第35図-22・23が出土した。

SH07 (第19図・35図)

1D・2D区の調査区西端から検出された住居跡で、大半が調査区外に及ぶ。壁溝は、床面から9cmの深さがある。住居内から検出された柱穴は、SH07を切る。第35図-24が出土した。

SH08 (第21図)

1B区、1C区、1D区から検出された、SH09に切られると判断される住居跡である。東側壁と

壁溝は明らかであるが、西側壁は明瞭ではない。炉跡は検出されず、支柱穴は抽出できなかった。

SH09 (第21図・35図)

1C・2C区、1D・2D区から検出された住居跡で、炉跡から南はSH10の覆土内にあたり、平面で捉えることはできなかった。土層断面、遺物の分布範囲から推定される規模は、東西約4.5m、南北約5mで、楕円形を呈すると考えられる。炉跡が北に寄っていることと、後述するSX01の中に焼土が多くみられたことから、炉跡が複数存在した可能性がある。土層断面図の4層はSX01、5～7層はSP176・192で、15・16層の上端が、SH09の床面である。SX01の南側では、床面を把握できなかった。炉跡は、43×49cmの大きさで、周囲に1～3cmの土手状の高まりがある。住居内から、第35図-25～28が出土した。

SH10 (第22図・35図・36図)

1C・2C区、1D・2D区から検出された住居跡で、確認面の規模が約3.95m×4.60mを測り、平面形は楕円形を呈する。土層断面図の11・12層の上端が床面であり、掘り方まで達しない壁溝が確認できる。炉跡は、西端をトレンチで切断してしまっただが、直径35cm程度と推定され、断面形は、中央が周囲から1～2cm低くなる皿状を呈する。SP148・192・176は、SH10の廃絶後の掘立柱建物跡の柱穴で、この住居跡に伴う支柱穴は確認されなかった。住居内から、第35図-29、第36図-41が出土した。

SH11 (第23図・35図・42図)

2D・3D区から検出された住居跡で、大半が調査区外に及ぶ。確認面での南北の長さ約7.2mを測る、大型の住居跡である。第23図は完掘時の平面図で、6層上端の床面の時点では、SH06と重なる部分を除き、壁溝が確認された。SP160は、SH11に切られる柱穴である。SP167・183は断面形と深さから、この住居に伴う貯蔵穴と考えられるが、時期的な前後関係は不明である。住居内から、第35図-30～34、第42図-144・145が出土した。34は床面から、144・145は床面から少し浮いた高さから出土した。

SH12 (第24図・35図・42図)

6B・7B区、6C・7C区から検出された住居跡で、南側の調査区外に及ぶ。住居の規模は不明であるが、西側・北側・東側に直線的な壁面がみられることから、方形か長方形を呈する住居跡と考えられる。住居内から炉跡は検出されたが、支柱穴を抽出することはできなかった。炉跡は、攪乱を受けて原形をとどめていないが、西端に半円形に約4cm低いところがある。住居内の床面から第35図-35～38の土器が、掘り方から第42図-138の石錘が出土した。

SH13 (第25図・35図)

5C・6C区、5D・6D区にかけて検出された住居跡で、西側の調査区外に及ぶ。SB02の柱穴SP96に壊される住居の北側の壁溝は明瞭であったが、住居の南壁、支柱穴など明確ではない。また、2箇所検出された炉跡も削平を受けている。北側の壁溝内から、第35図-39が出土した。

SH14 (第26図・36図)

3C区、3D・4D区から検出された住居跡で、壁溝がSH06の炉跡の下から検出されていることから、SH06より古い。壁溝は、攪乱とSD01によって東半を壊されている。壁溝は、SH13同様幅広く、32～52cmを測る。炉跡は検出されなかったため、すでに削平されたものと考えられ、支柱穴は抽出できなかった。第36図-40は、壁溝内から出土した。

6) 土坑 (SK)

SK01 (第11図・36図)

2B・3B区から検出された土坑で、SD01に壊されている。確認面での規模は、東西約2.2mを測り、南北は現存部分で約1.65mを測る。確認面からの深さは、最深部分で62cmを測る。覆土は、底面近くに褐色土、褐灰色土が堆積し、上層に黒褐色土が堆積する。

SD04が、このSK01に接続することから、両者は関連すると考えられる。遺構の性格については、屋外の貯蔵穴を想定している。遺物は、第36図-42がある。

SK02 (第27図・36図)

5B区から検出された土坑で、SD02に上端を壊されていると考えられる。規模は、確認面で幅約40cm、長さ約70cm、底面で幅約27cm、長さ約49cmを測る。平面形は隅円の長方形を呈する。壁は、垂直に近い角度で、覆土の上半から土器片が出土した。土坑内から、第36図-43～45が出土した。

SK03 (第27図・42図)

4C区から検出された土坑で、南半をSD03に削平されている。覆土中に落ち込むか、投げ入れられたような状況で、石斧と礫が検出された。土坑が存在し、後に石斧と礫が混入する遺構が掘られた可能性もある。土坑内から、第42図-136が出土した。

7) 柱穴

柱穴群 (第28図)

調査区の北西隅、1D・2D区から検出された柱穴である。掘立柱建物跡の可能性が高いが、調査区外に及ぶため、規模は明らかではない。SP160はSH11に切られ、SP78はSB04の柱穴SP204を切る。SP81はSP94とSP170を切ると考えられる。これらの柱穴は、SB04・05と方位を同一にすることから、SB04・05と近い時期の建物跡と考えられる。

8) 方形周溝墓 (SZ)

SZ01 (第29図～32図・36図～39図・41図・42図)

2A～5A区、2B～5B区、2C～4C区にかけて検出された方形周溝墓であるが、主体部は検出されなかった。方台部の規模は、南北約8m、東西は確認部分で約8mを測り、平面形は長方形を呈すると考えられる。周溝は全周するが、溝底のレベルは一定ではない。最も浅い北西コーナーは、確認面からの深さ16cmで、42.68m、次に浅いのが北東部分で42.53mである。逆に深くなるのは、南東部分と北西コーナーで、南東の5B杭の西側で42.00m、北西コーナーでは42.13mを測る。

周溝が幅広くなるf-f'、g-g'付近は、平面では確認されなかったが、土層断面をみると、周溝の掘り直しを窺わせる。周溝内からは、土器の他に砥石・石製模造品・ガラス玉が出土した。周溝内出土の甕のなかには、外面に煤が付着した使用済みのものが含まれていた。砥石も破損していて、捨てられたようである。

周溝内からの遺物は、第36図-46～第39図-108、第41図-133、第42図-139～143がある。

9) 性格不明の遺構 (SX)

SX01 (第33図・39図・41図)

2C区内のSH09の覆土中から、長径7～30cmの礫が25点、土器片とともに検出された。平面形は確認できなかったが、土層断面では南北方向に約1.6m、深さ47cmの掘り込みが確認された。東西方向の幅は、検出された礫の範囲から約1mと推定される。出土遺物は、第39図-109、第41図-132がある。

SX02 (第2図・39図)

1A区のSH03の北東から検出された直線的に延びる掘り込みである。確認面の長さ約1.7m、深さは最深部で37cmを測る。第39図-110が出土した。

ii) 遺物の概要

1) 土器・土製品 (第 34 図～40 図)

1 は器台の脚で、古墳時代前期に位置づけられる。

2 は、TK208 に位置づけられる須恵器の甕である。3 は、S 字甕の口縁部破片である。

4 は高坏の脚部破片で、古墳時代前期に位置づけられる。

5 は高坏の坏部で、内外面にミガキを施す。弥生時代後期後半に位置づけられる。

6・7 は壺で、6 は体部外面に、7 は口縁部外面に 2 本の粘土紐が貼り付けられる。古墳時代前期に位置づけられる。

8・9 は壺で、8 の鋭く屈曲する頸部から上はハケ、下は縄文が施される。9 の口縁部～体部外面には、ミガキが施される。10 は、高坏の坏部の可能性がある。11・12 は鉢で、11 は、口径 8.2 cm、最大径 9.0 cm を測る。12 は、器高 2.9 cm、口径 7.8 cm を測り、外面に赤彩が施される。9～12 は、古墳時代前期に位置づけられる。8 は、弥生時代後期に位置づけられ、混入と考えられる。

13 は、細頸壺の口頸部で、口縁端部の外面と内面に縄文が施される。14 の壺は、器壁を厚くつくり、肩に中央をくぼませた幅広の凸帯が巡る。15 の甕は、口縁端部にキザミが施される。これらの土器は、弥生時代後期に位置づけておく。

16・17・19 は、高坏の坏部で、18・20 は高坏の脚部である。21 の甕は、器高 28.9 cm、口径 14.2 cm、最大径 24.2 cm を測り、最大径付近に煤が付着する。これらは、古墳時代中期中葉と考えられる。

22 は高坏の坏部で、弥生時代後期に、23 は高坏の脚部で古墳時代に位置づけられる。

24 は器台の脚で、古墳時代前期に位置づけられる。

25～27 は壺で、25 の肩には三角の凸帯がめぐり縄文が施される。26 の体部外面は、幅広のハケが施される。28 の口縁端部には、キザミがある。これらの土器は、弥生時代後期前半に位置づけられる。

29 は、高坏の脚部、41 は壺で、どちらも弥生時代後期前半に位置づけられる。

30 は壺の体部、31 は壺の底部である。32 は甕の口縁部、33 は高坏の脚部である。34 の円盤状土製品は、直径 3.35 cm、厚さ 1.35 cm を測る。2mm の間隔を開けて、直径 5～6mm の円孔が並ぶ。中央の穴が変形していることから、中央を先に穿孔したことがわかる。これらの遺物は、古墳時代中期に位置づけられる。

35 は、体部外面にハケ、ナデ、ミガキを施した壺である。36～38 は甕で、37・38 の体部外面のハケは、粗く強い。これらの土器は、古墳時代前期に位置づけられる。

39 は高坏の坏部で、弥生時代後期に位置づけられる。

40 の壺は、外面にナデ、結節縄文、単節縄文を施し、弥生時代後期後半に位置づけられる。

42 の鉢は、底径 7.7 cm を測り、体部外面にナデを施す。弥生時代後期に位置づけられる。

43～45 は壺である。44 の肩には、刺突羽状文が 2 条施され、弥生時代後期前半に位置づけられる。

46～52 の壺のうち、48・50 が南側の周溝内で、他は北側周溝内である。49 は、器高現存 16.0 cm、最大径 13.7 cm を測る。53～59 は甕で、53・59 が南側周溝内で、他は北側周溝内である。56 の外面には、煤が付着する。60～66 は高坏で、すべて北側の周溝内から出土した。60 の内外面にはミガキが施され、口径 17.4 cm を測る。67～75 は、北側周溝内から出土した。67・68 は器台、75 は器種不明のミニチュア土製品である。76 は、南側周溝内から出土した、つまみである。77～86 は、西側周溝内から出土した壺である。79 の口縁部は、受口状を呈する。84 は、器高 7.5 cm、最大径 7.9 cm を測り、85 は最大径 6.6 cm を測る。87～94 は、西側周溝内から出土した甕で、87・91・92・94 は煤が付着している。91 は、器高 25.9 cm、口径 17.0 cm、最大径 24.0 cm、92 は、器高 22.7 cm、口径 14.7 cm、最大径

21.2 cmを測る。94は、最大径29.0 cmを測る。95は、西側周溝内から出土した小型甕で、体部外面の下半に煤が付着する。96～103は、高坏である。96は、器高12.55 cm、口径20.4 cm、97は、器高12.7 cm、口径15.8 cmを測る。102の脚の円形透かしは3方、103の円形透かしは2方である。104～108は、西側周溝内出土である。104の高坏の脚は3方透かし、105の器台の脚も3方透かしである。106・107は器台で、108は壺である。SZ01の周溝内出土遺物は、古墳時代の前期から中期中葉までの幅がある。

109の鉢は、口径27.8 cmを測り、体部外面にミガキを、口縁部はハケ目調整を施す。弥生時代後期に位置づけられる。

110は、高坏の坏部で、弥生時代後期前半に位置づけられる。

111～115・117～121は、遺構確認時にグリッドで取り上げた遺物であるが、111～114はSZ01の北側周溝の覆土上端、115・117～121は西側周溝覆土上端と考えられる。111は壺、112はS字甕、113・114・118～120はミニチュア土器である。

116は、SP15から出土した器台で、古墳時代前期に位置づけられる。

122～126は縄文土器で、122～125が中期後葉に、126は中期後葉末に位置づけられる。122は、SH12の床面下、123はSH02の覆土、124・125はSD01覆土、126はSH10の覆土に混入していた。

127～131は、TK208に位置づけられる須恵器の甕でSH12の覆土中から出土した。127は、頸部で、128・129は体部上半、130・131は体部下半と考えられる。

2) 石器・石製品 (第41図・42図)

132は、砂岩製で、2面に敲きの痕跡と直径1.5～2.5 cmの凹みが見られる。

133は、砂岩製の砥石で、表面に金属による「十」字状の傷が付く。139は、塩基性変成岩製の磨製石斧の基部である。140は、片岩製の石製模造品で、全長5.0 cm、最大幅1.7 cmを測り、全面に擦痕が付く。141は、黒曜石製の石鏃である。142は、頁岩製のスクレーパーである。139・141・142は、縄文時代の遺物で、SD01に混入したものと考えられる。

134は、SD01掘削時の排土中から発見された砂岩製の砥石である。3面が使用されている。

135は片岩製で、磨製石斧の未製品と考える。

136は塩基性変成岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。刃部は、使用により摩滅している。

137は砂岩製の剥片石器で、刃部を磨いている。

138は、泥岩製の石錘である。

3) ガラス玉 (第42図)

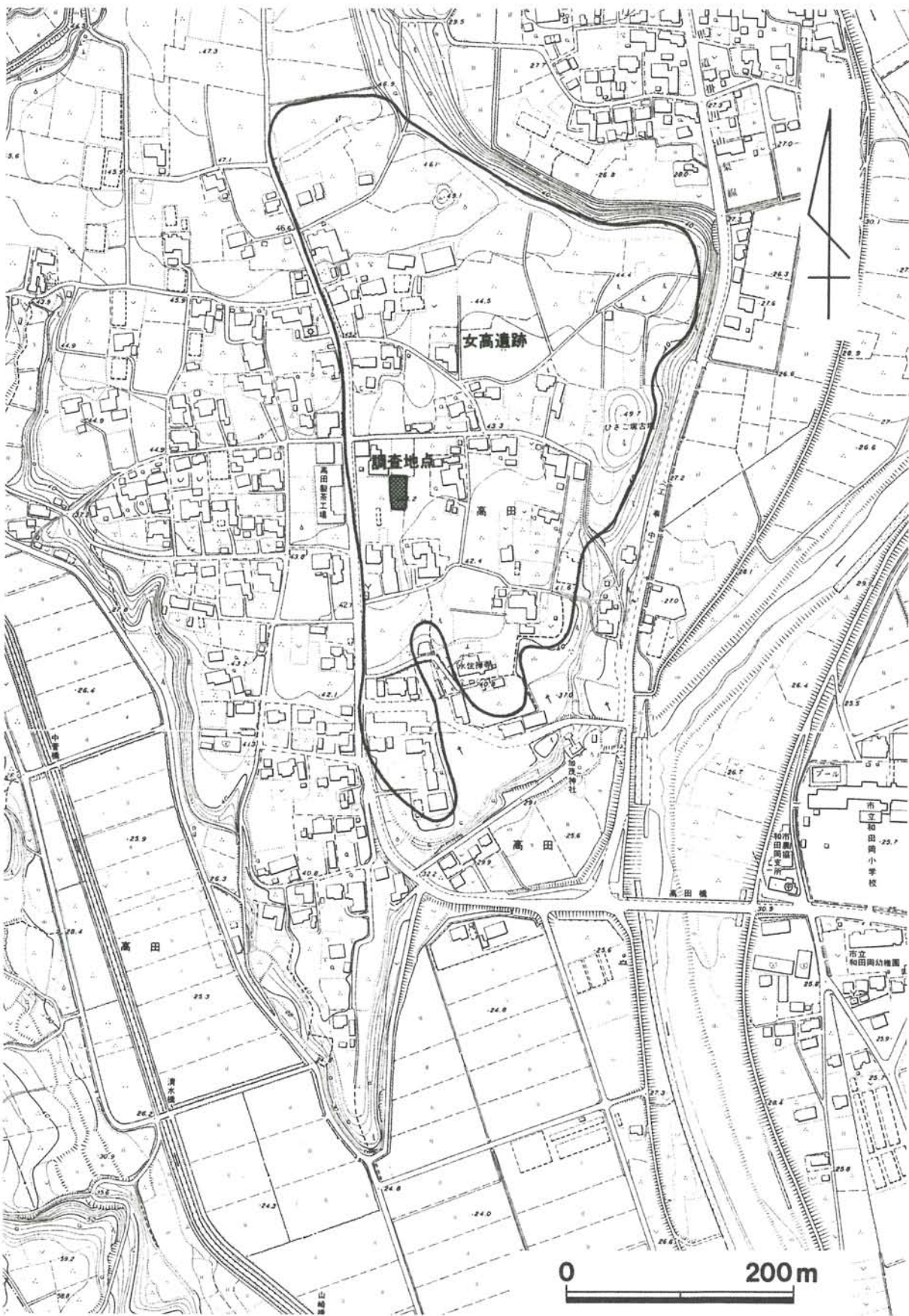
143はコバルト色のガラス玉で、直径5 mm、厚さ3.5 mmを測り、直径2 mmの穴が開く。

4) 金属器 (第42図)

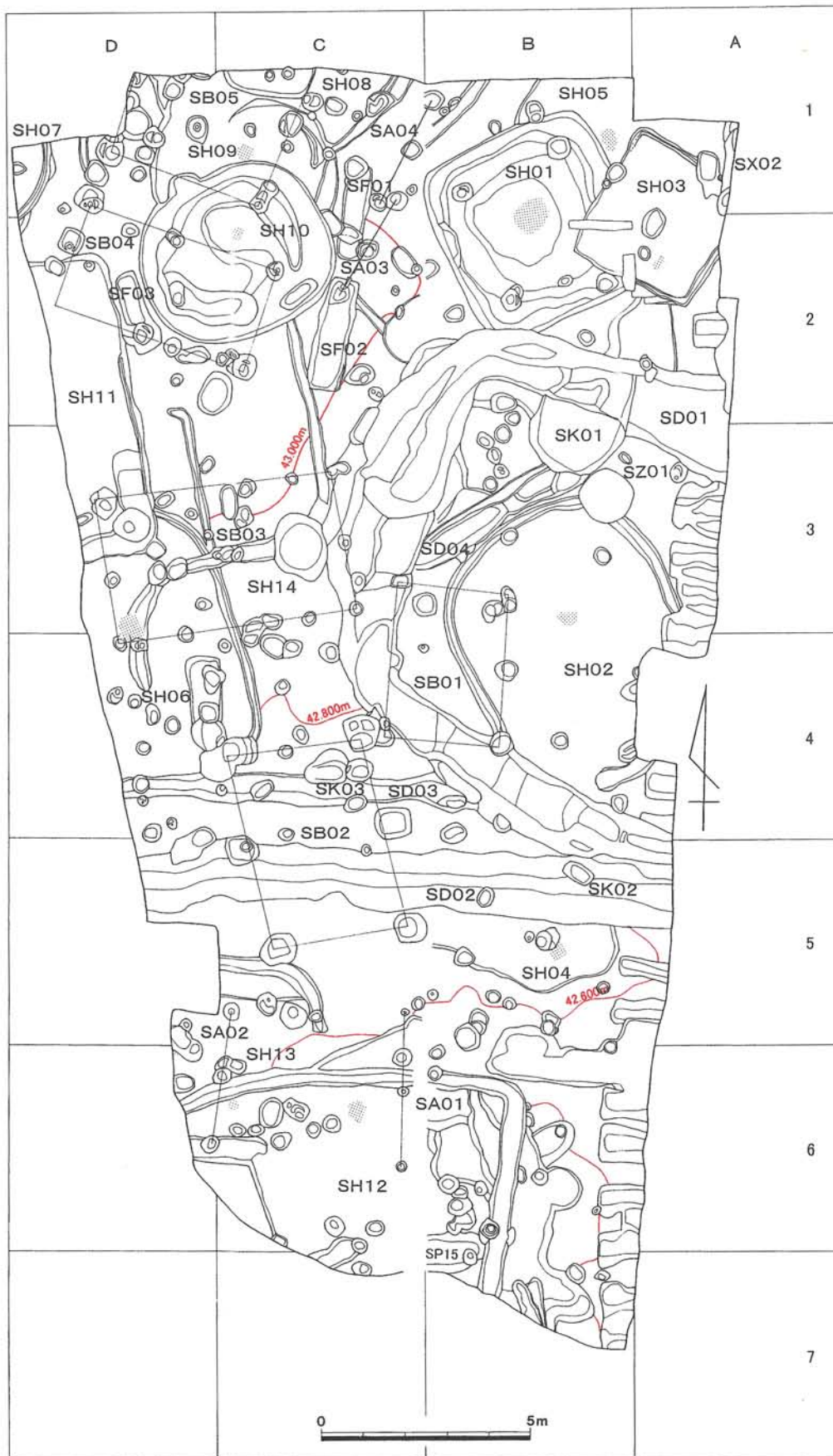
144は、現存長6.75 cm、厚さ4 mmを測る。平造りの柳葉形の鉄鏃の鏃身と考えられる。145は、全長8.8 cmを測る。全体が錆に覆われているが、直刃の鉄鏃と考えられる。

4. まとめにかえて

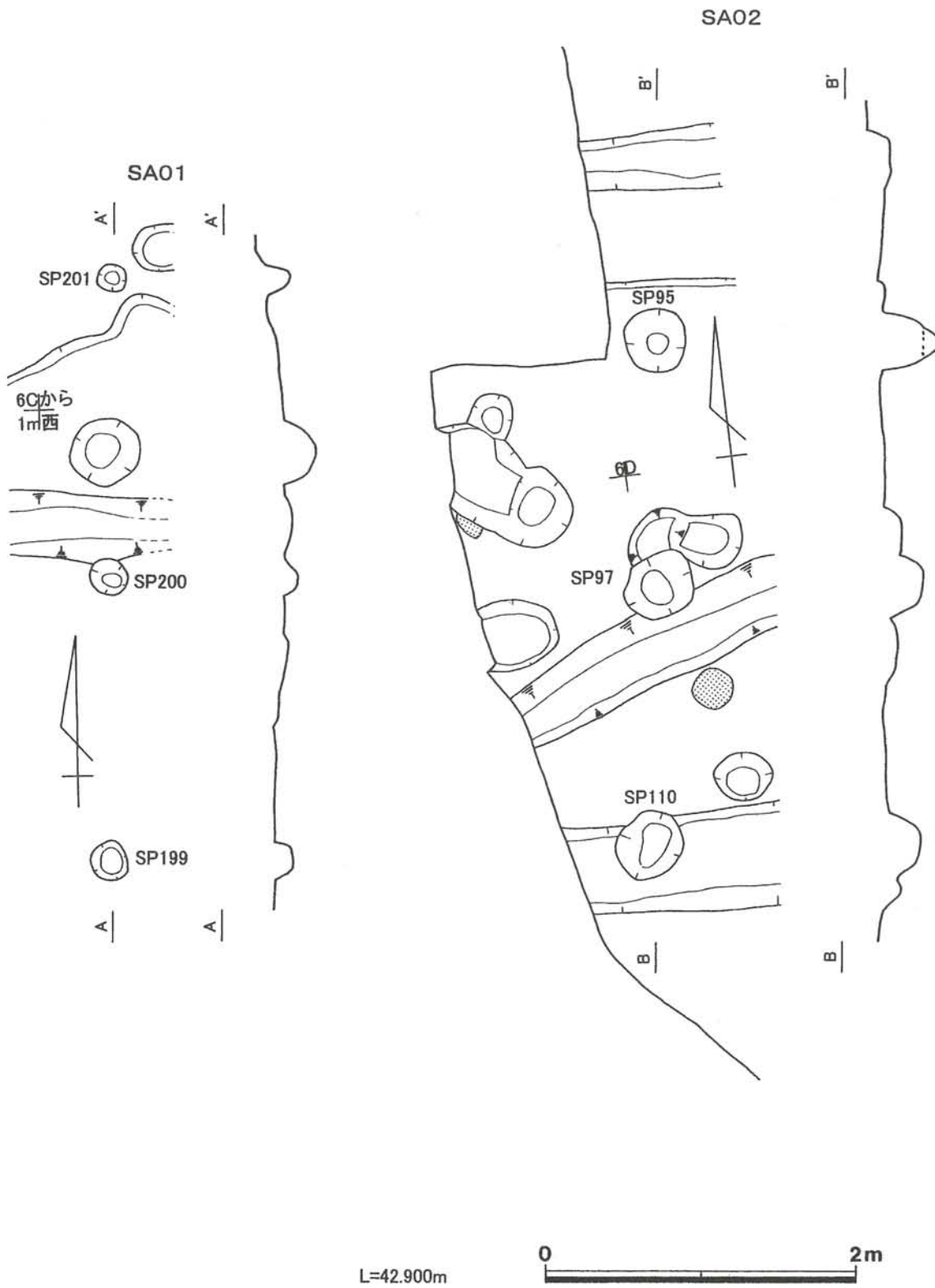
今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代中期までの竪穴住居跡、弥生時代後期から古墳時代前期と推定される掘立柱建物跡、古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代中期の溝跡等、遺構を多数検出した。竪穴住居跡出土の土器は、当地方における弥生時代後期から古墳時代中期に至る土器の編年に寄与するものである。また、方形周溝墓は、調査例の少ない古墳時代のものであり、古墳と周溝墓との関連を研究する上で貴重な資料であると考えられる。



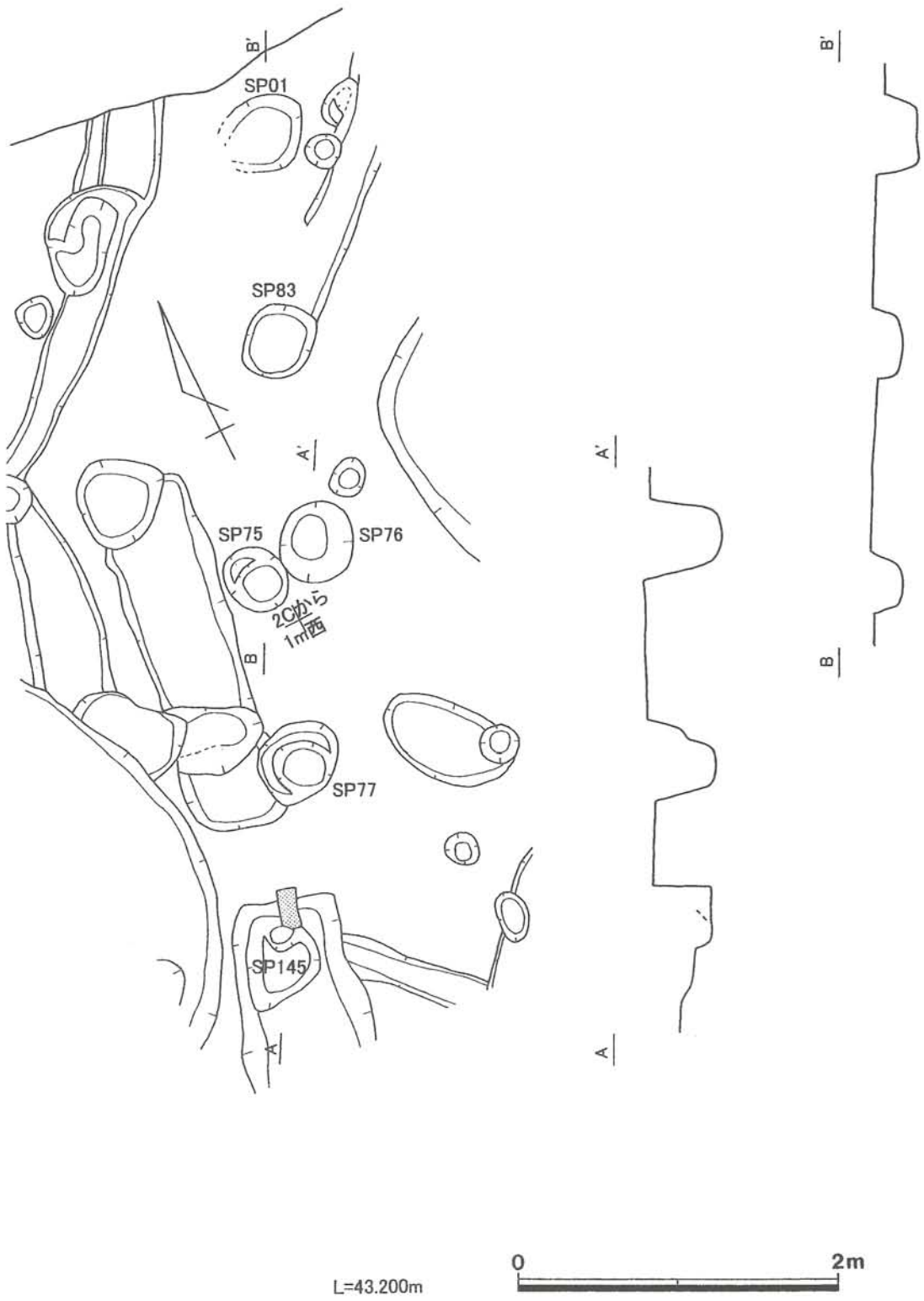
第1図 遺跡内における調査地点位置図



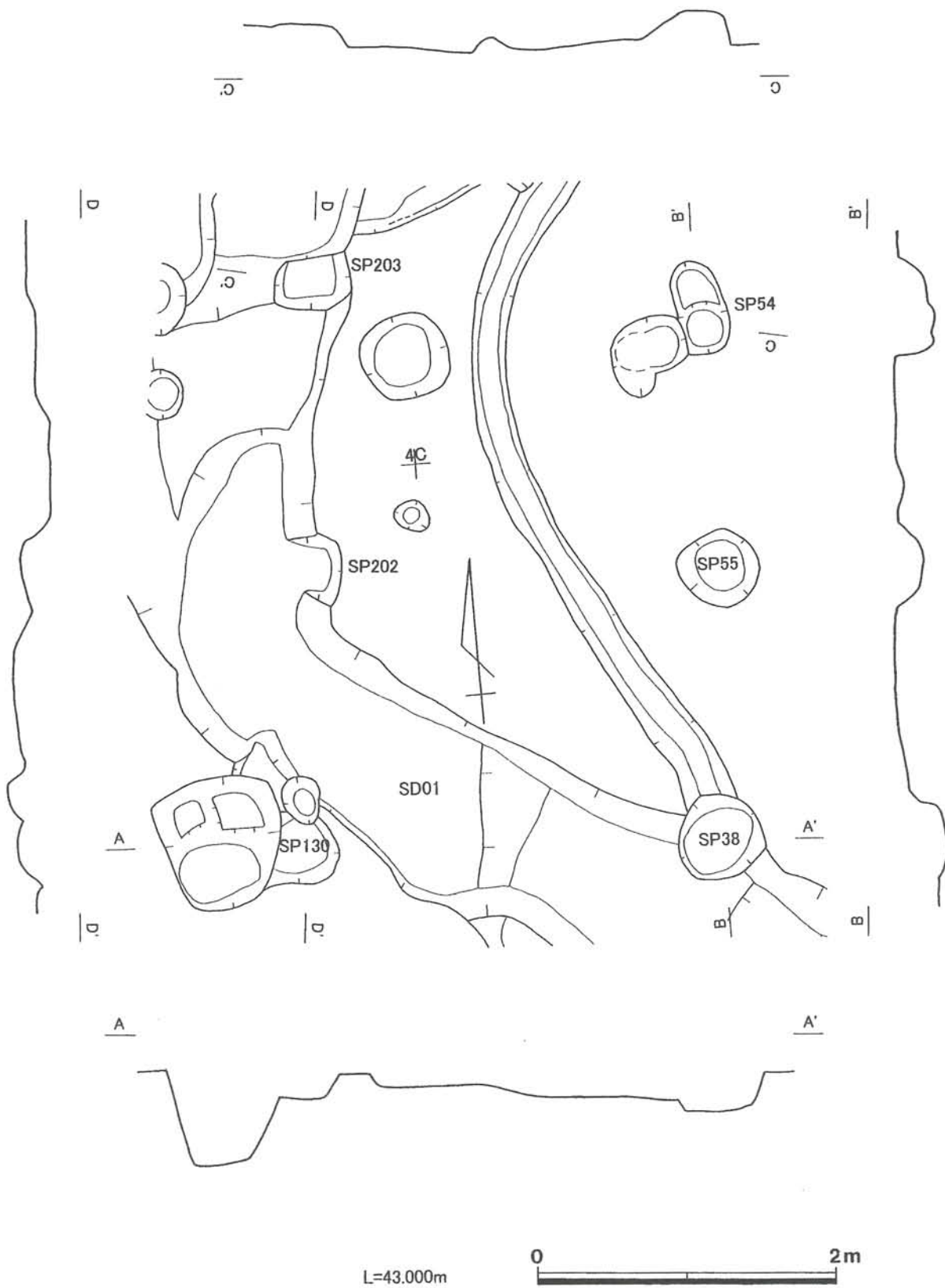
第2図 遺構全体図



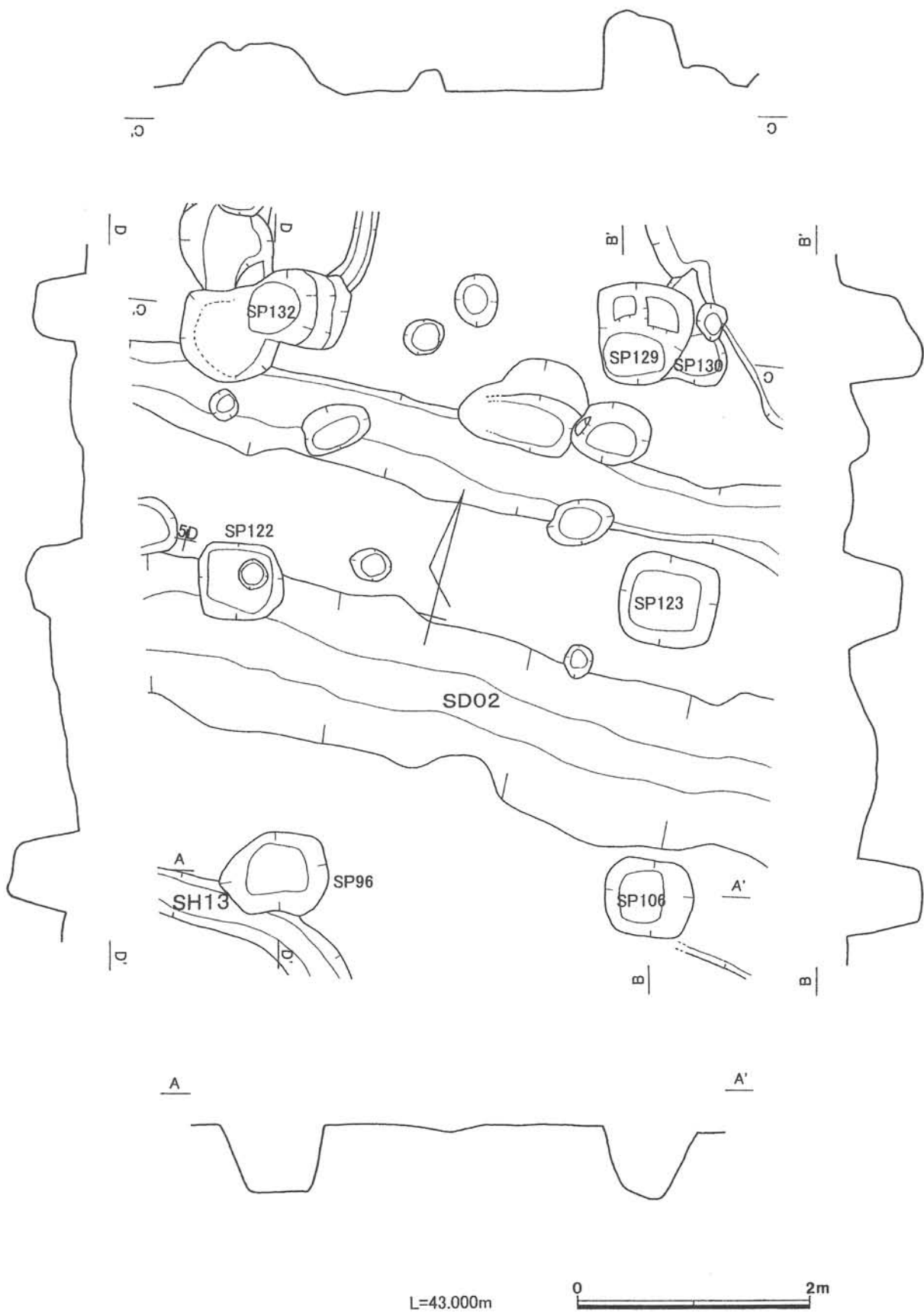
第3図 SA01・02実測図



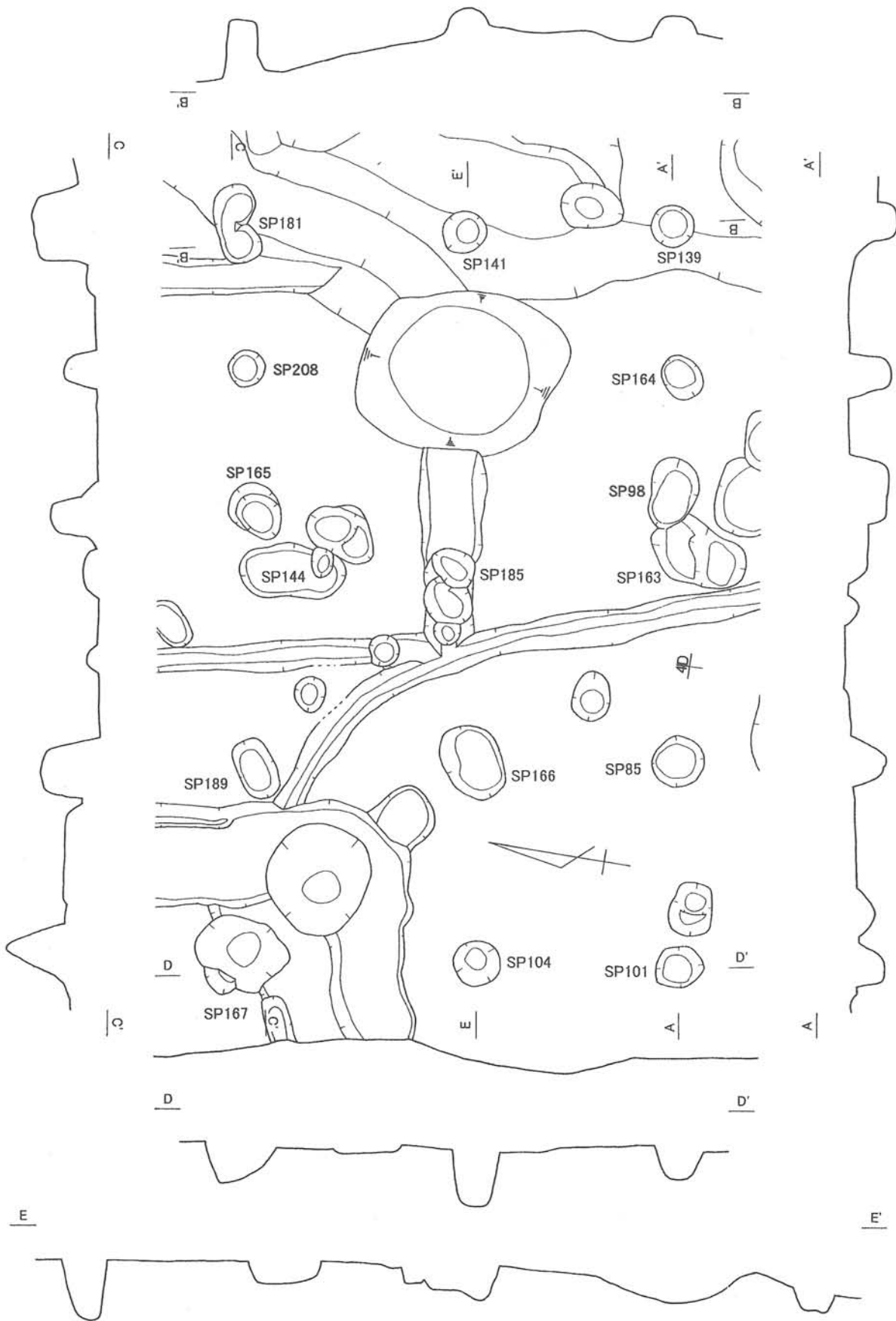
第4図 SA03・04実測図



第5図 SB01実測図



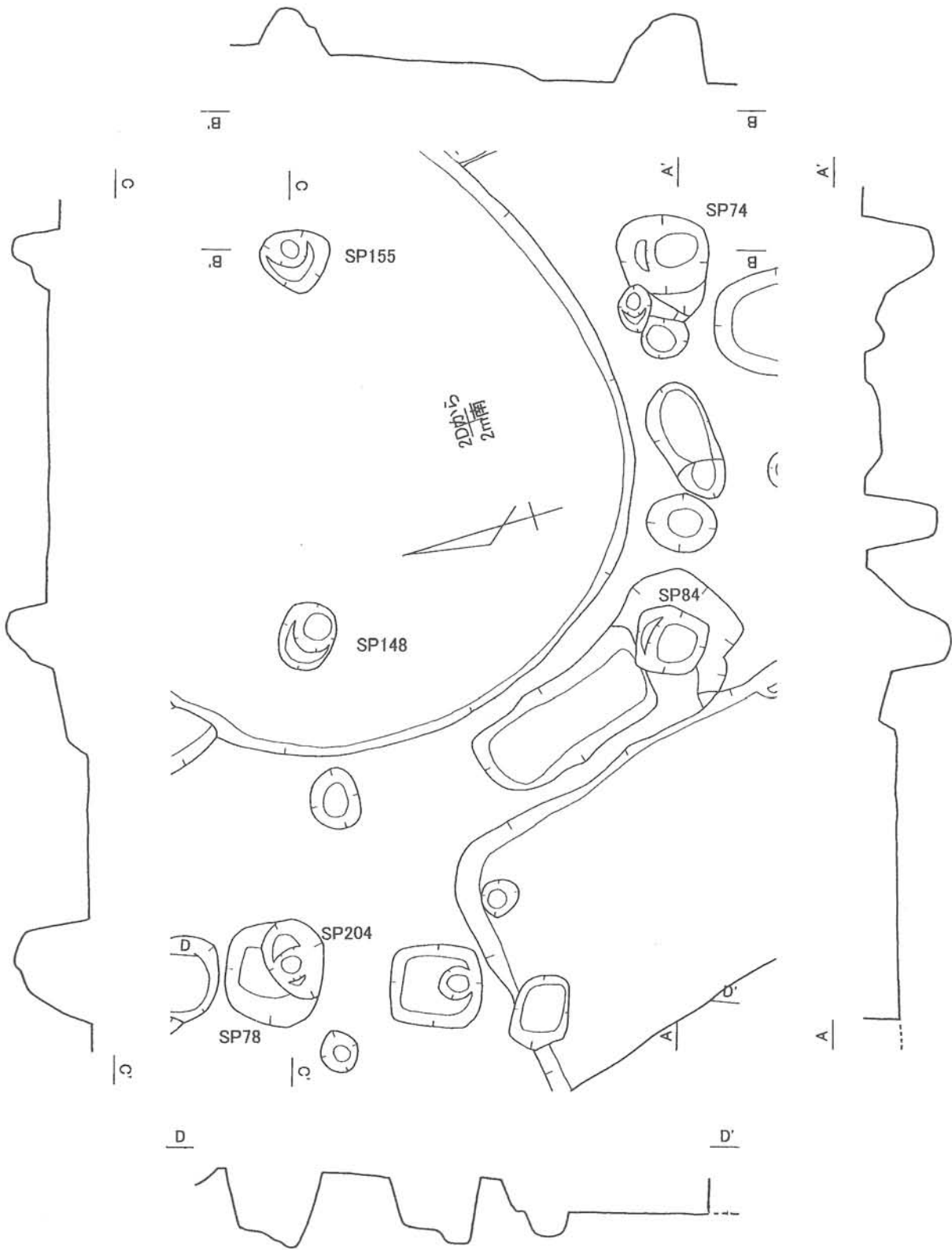
第6図 SB02実測図



L=43.100m



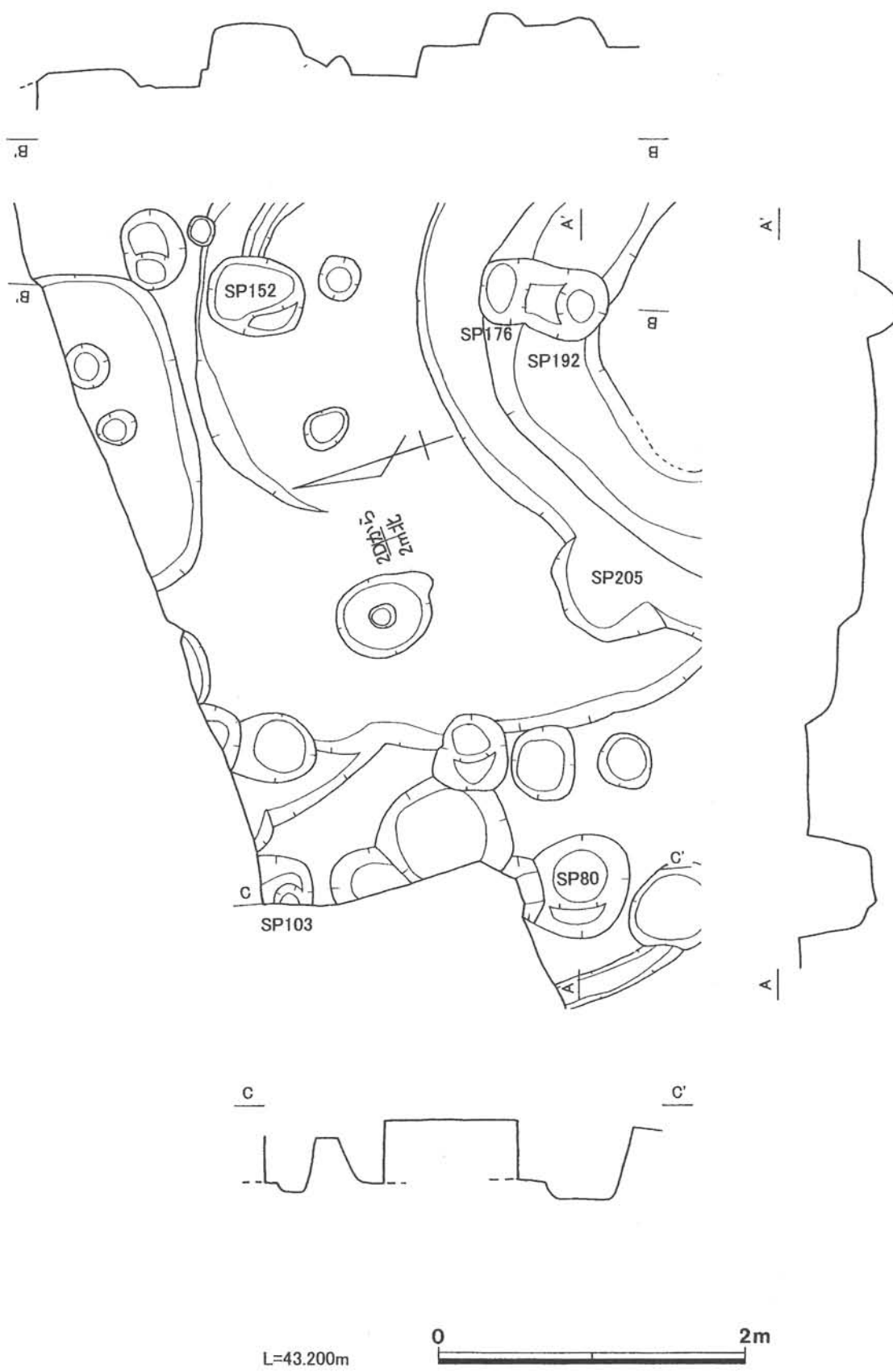
第7図 SB03実測図



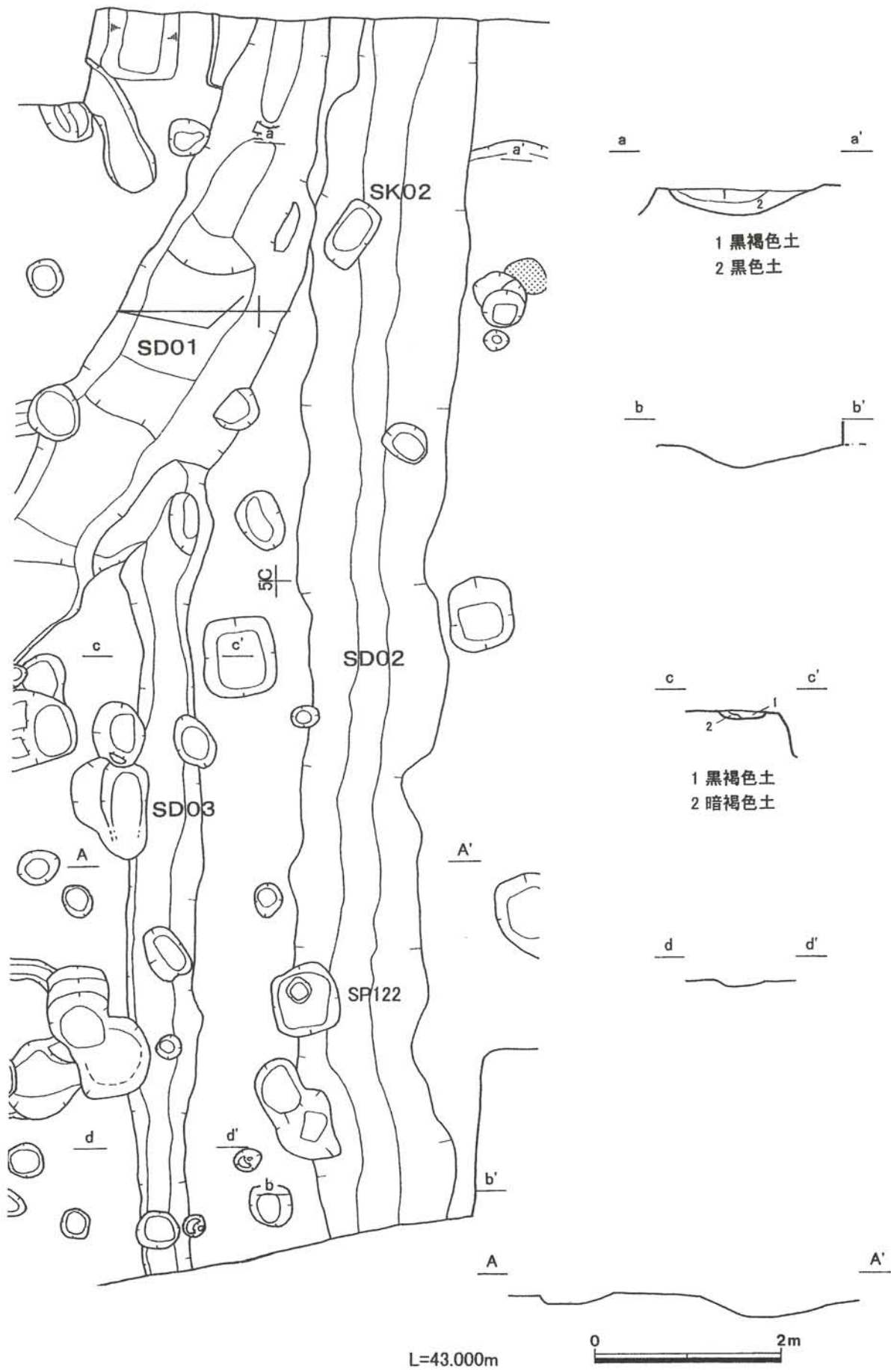
L=43.200m



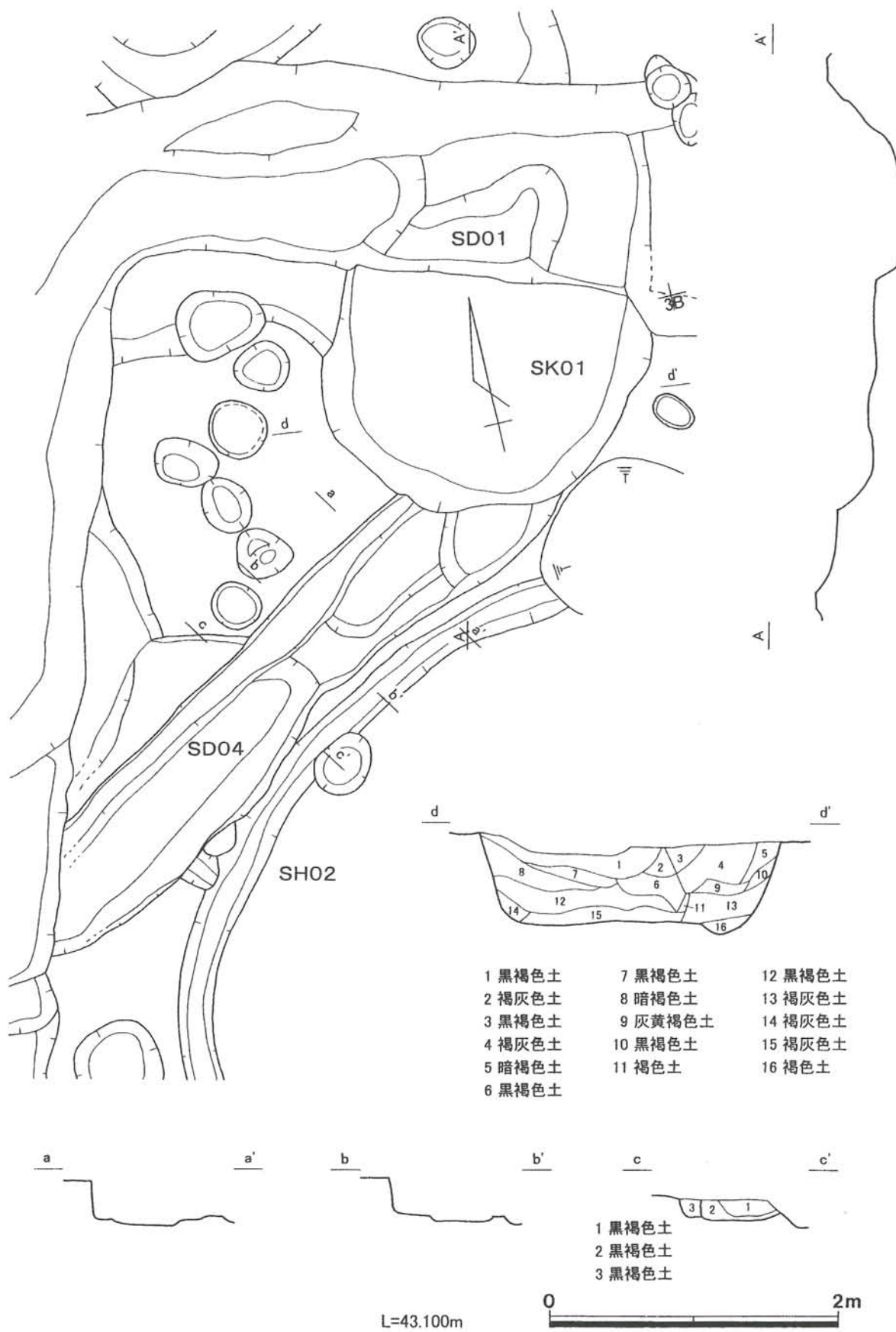
第8図 SB04実測図



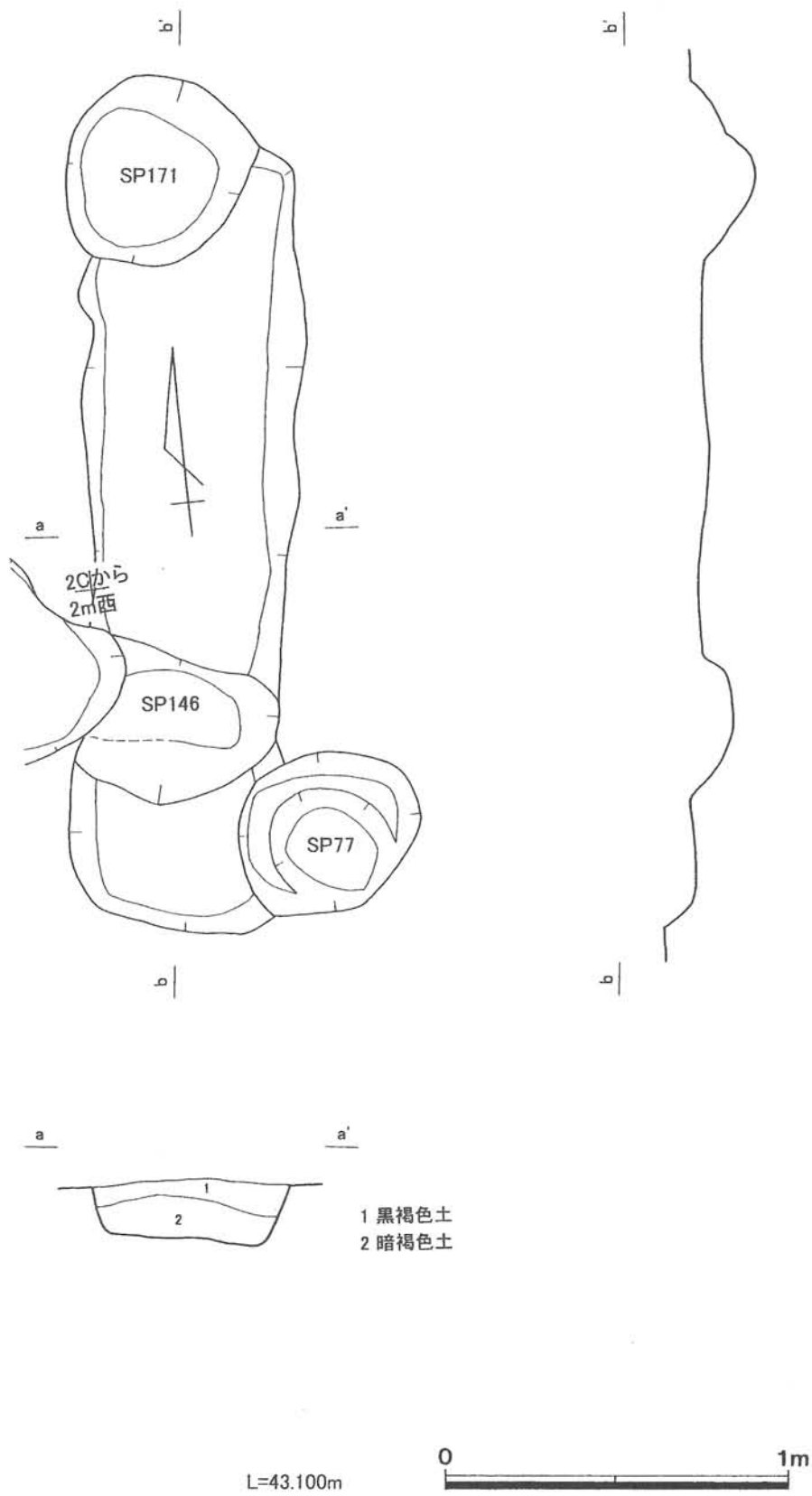
第9図 SB05実測図



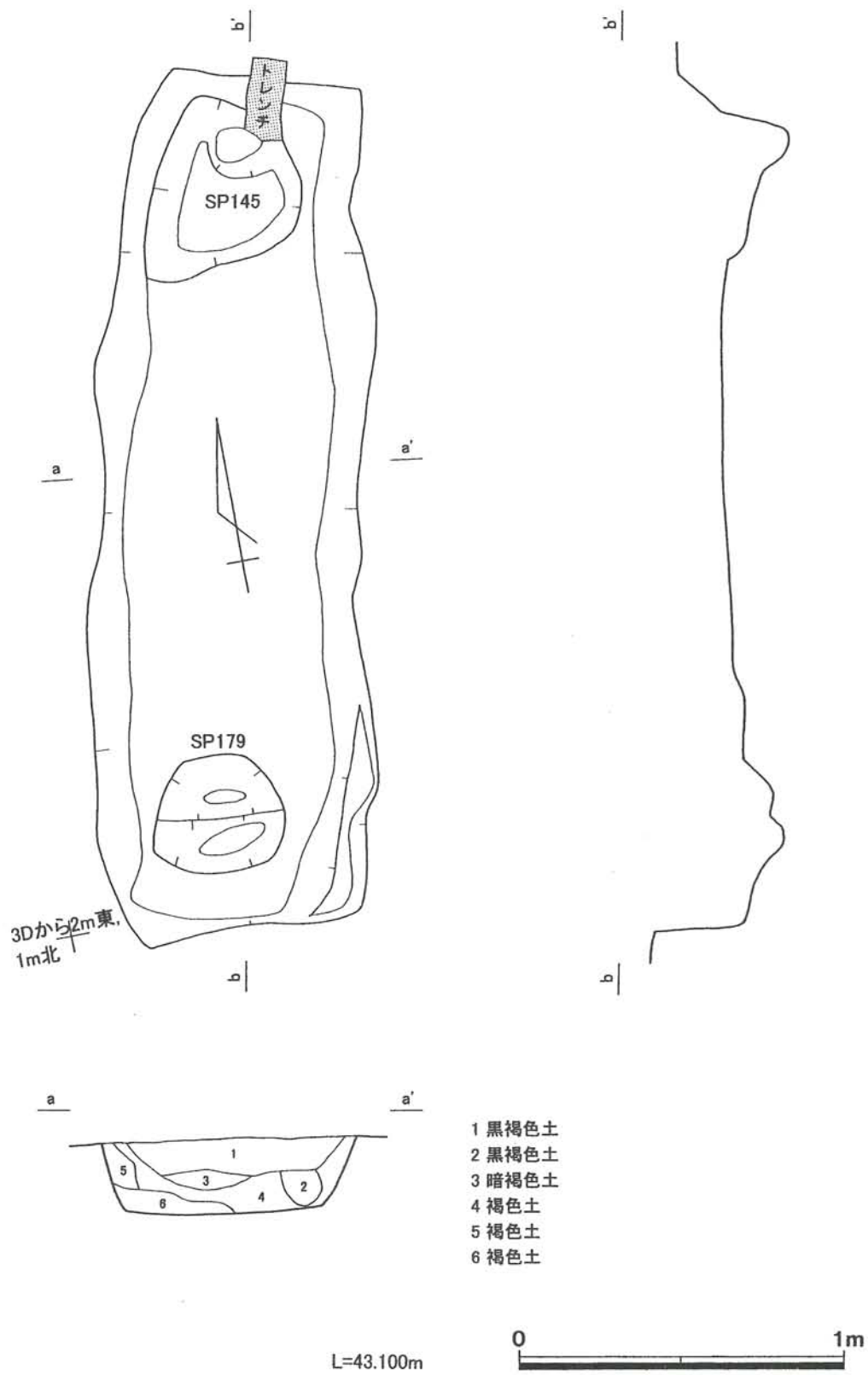
第10図 SD02・03実測図



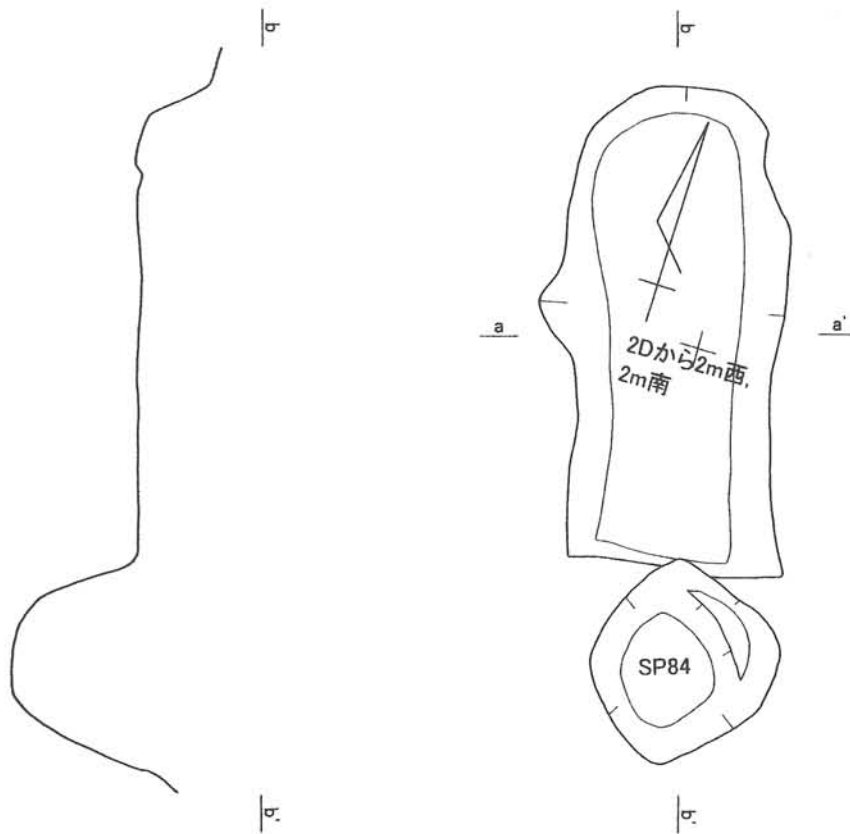
第11图 SD04,SK01实测图



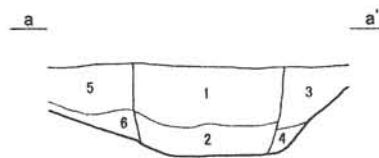
第12図 SF01実測図



第13図 SF02実測図



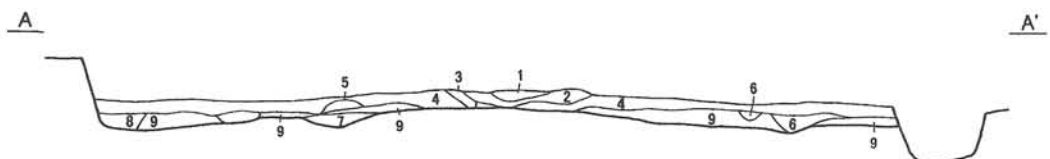
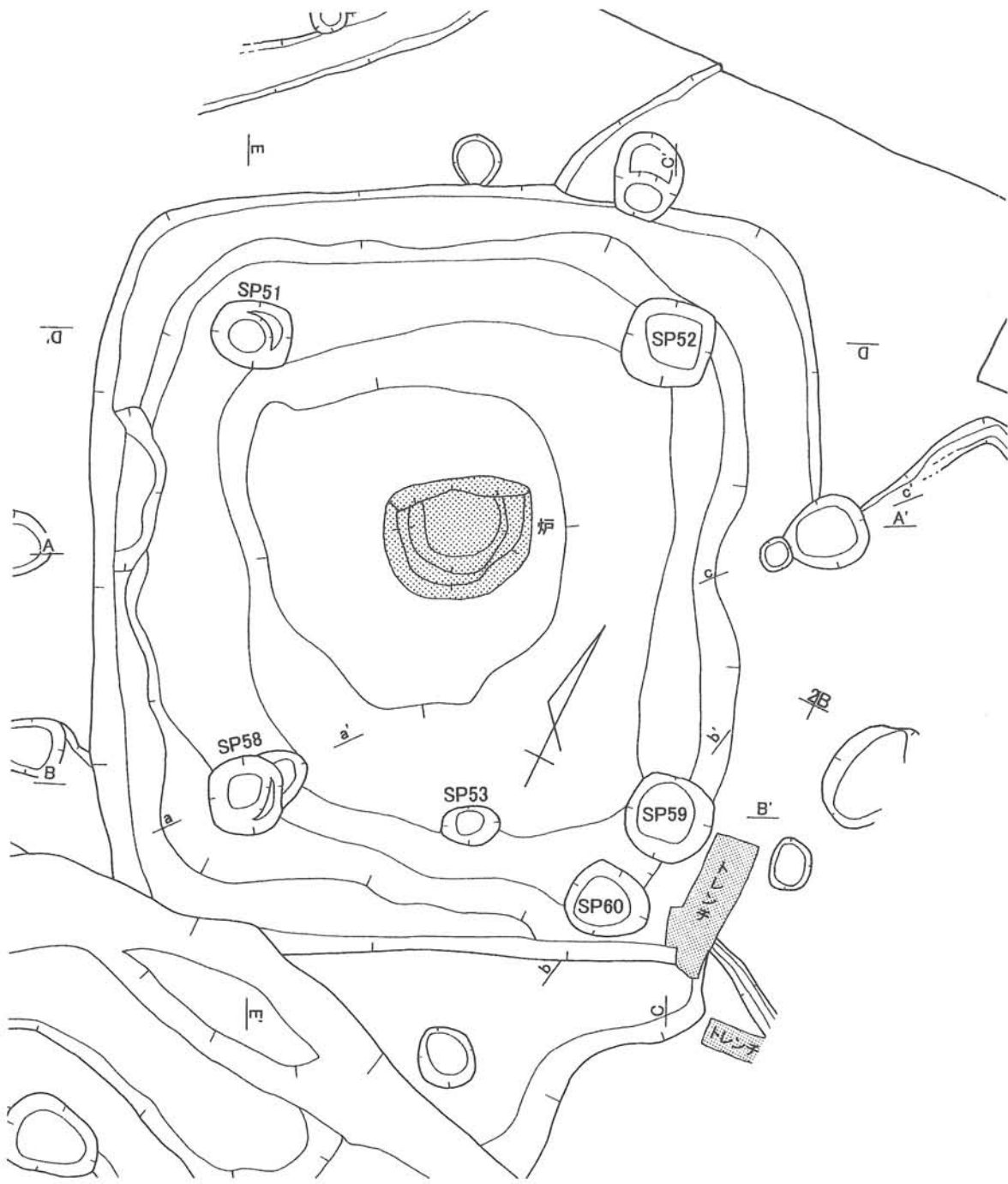
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 暗褐色土



L=43.100m



第14図 SF03実測図

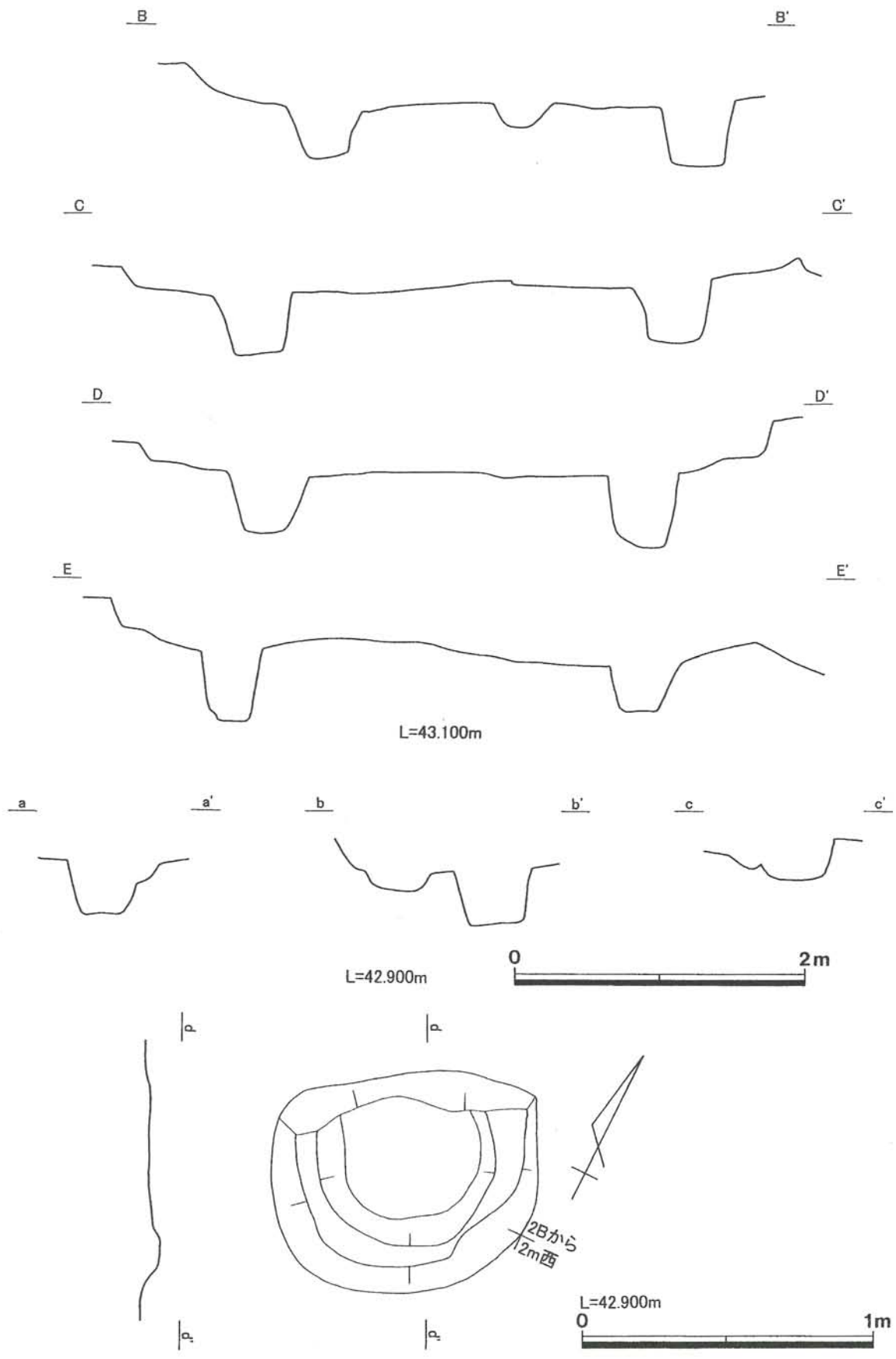


- | | | |
|------------|--------|--------|
| 1 赤褐色粘土 | 5 褐色土 | 8 黑褐色土 |
| 2 褐色粘土 | 6 暗褐色土 | 9 褐色土 |
| 3 黑褐色土 | 7 黑褐色土 | |
| 4 黑褐色土(粘床) | | |

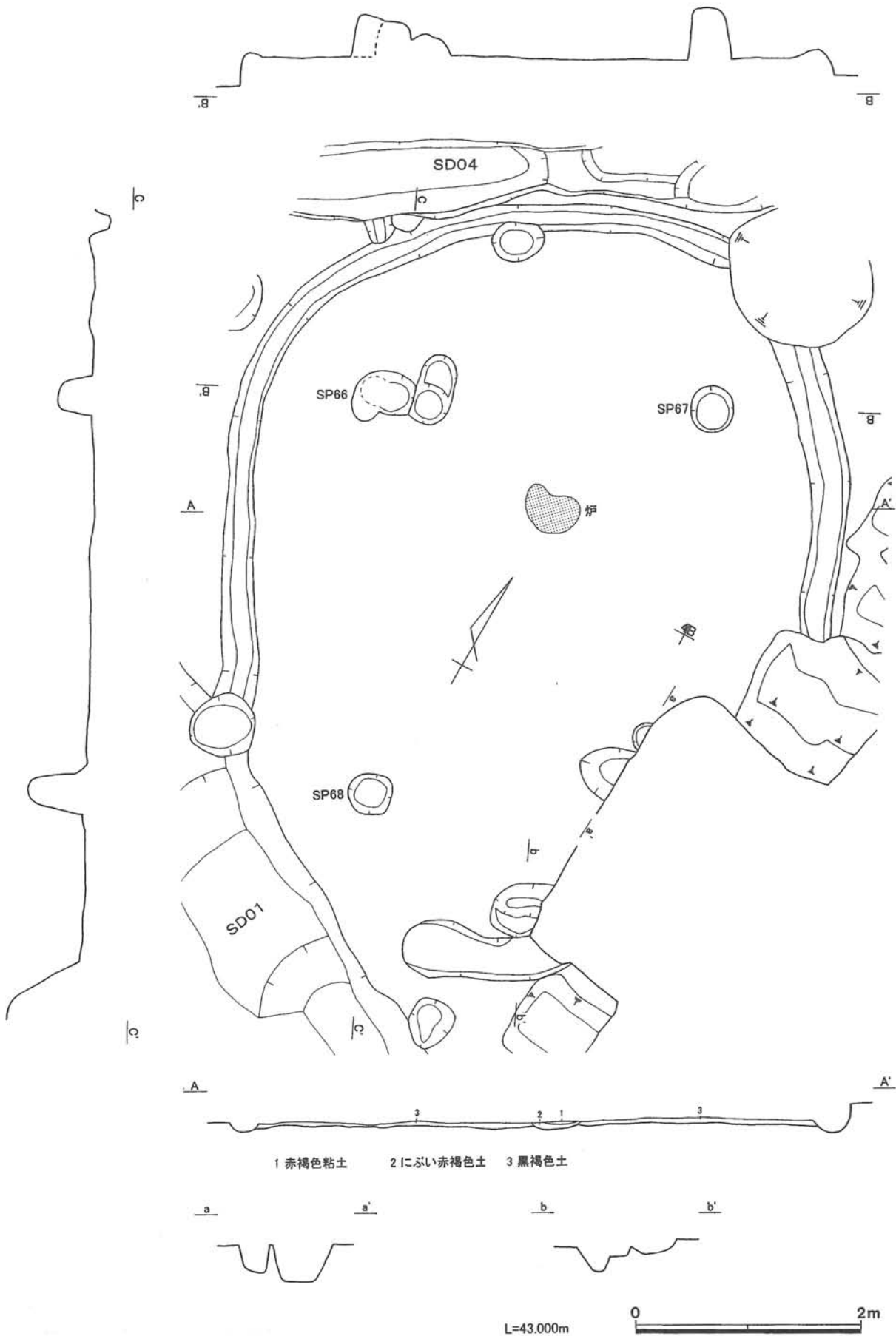
L=43.100m



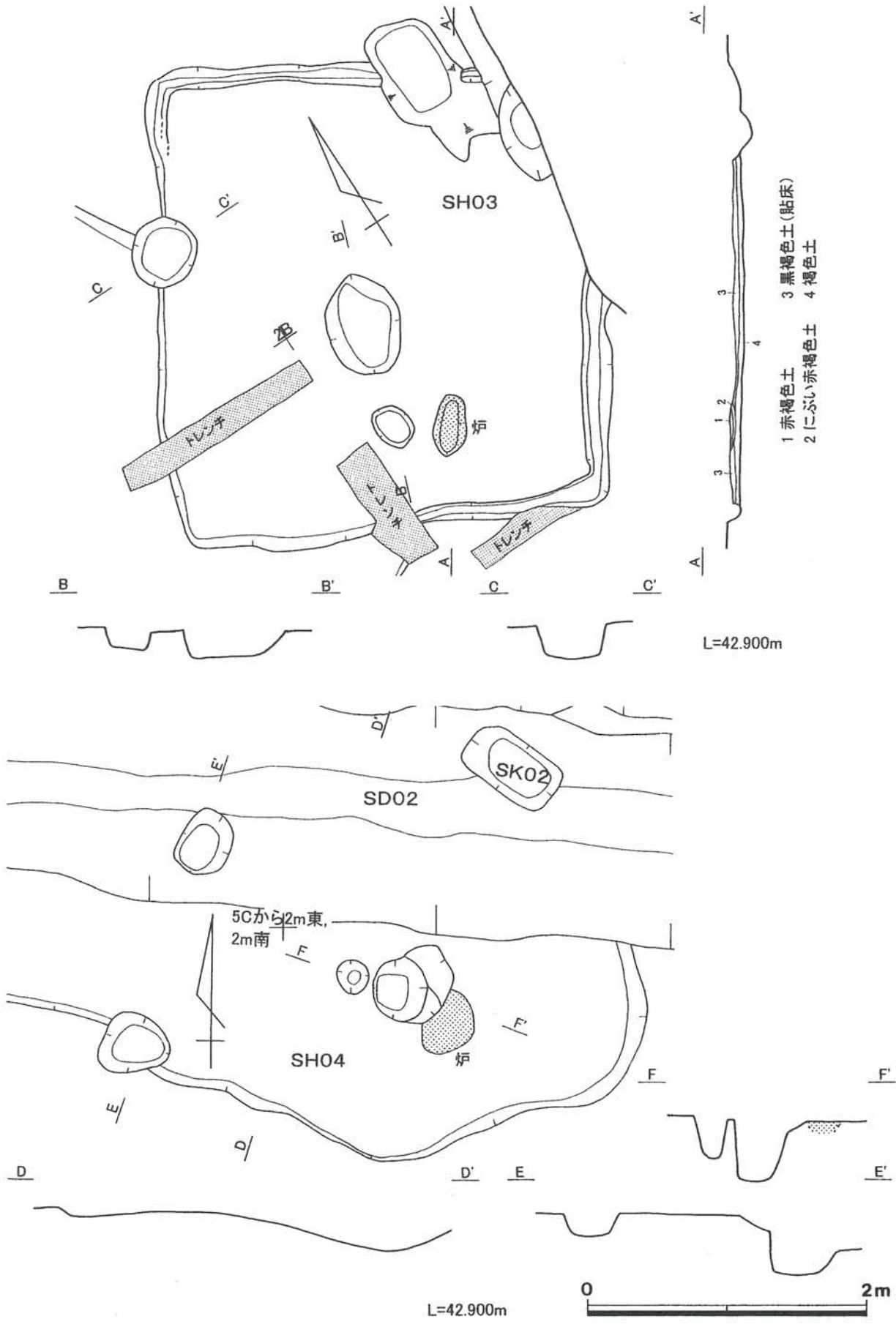
第15図 SH01実測図(1)



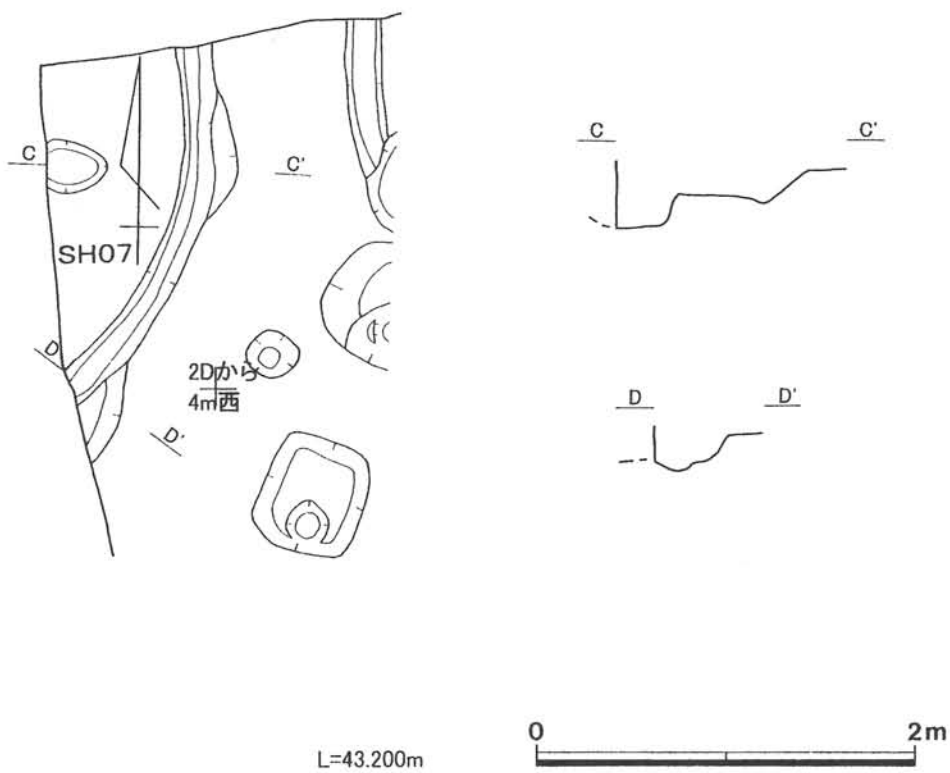
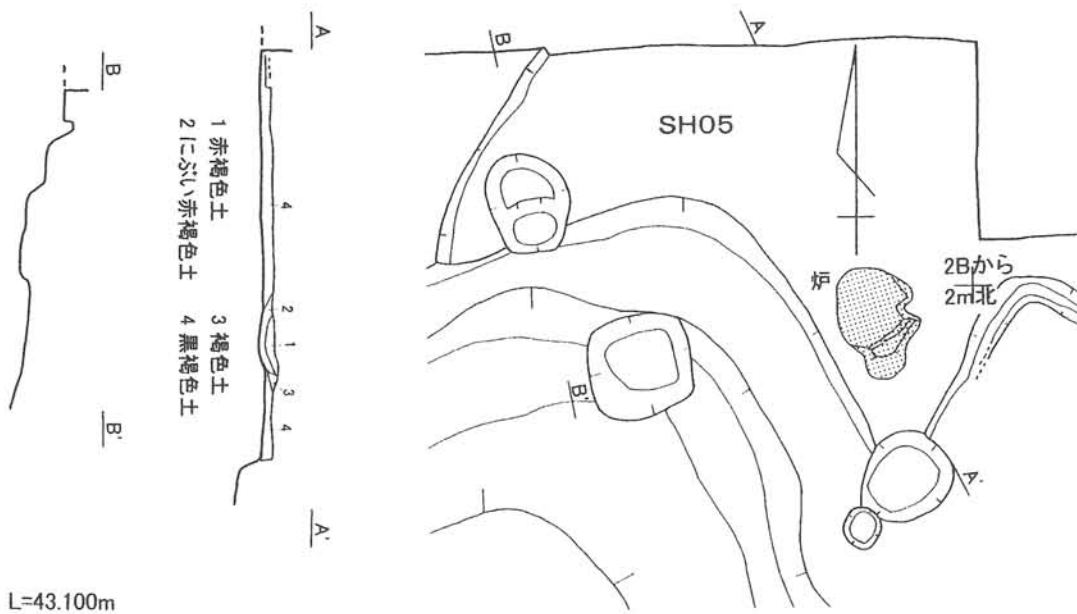
第16図 SH01実測図(2)



第17図 SH02実測図



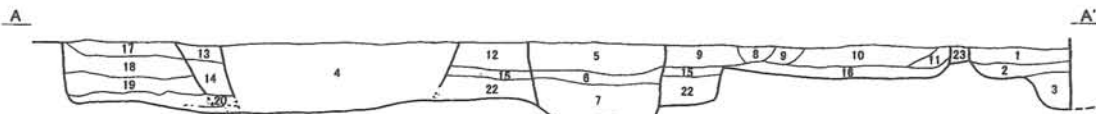
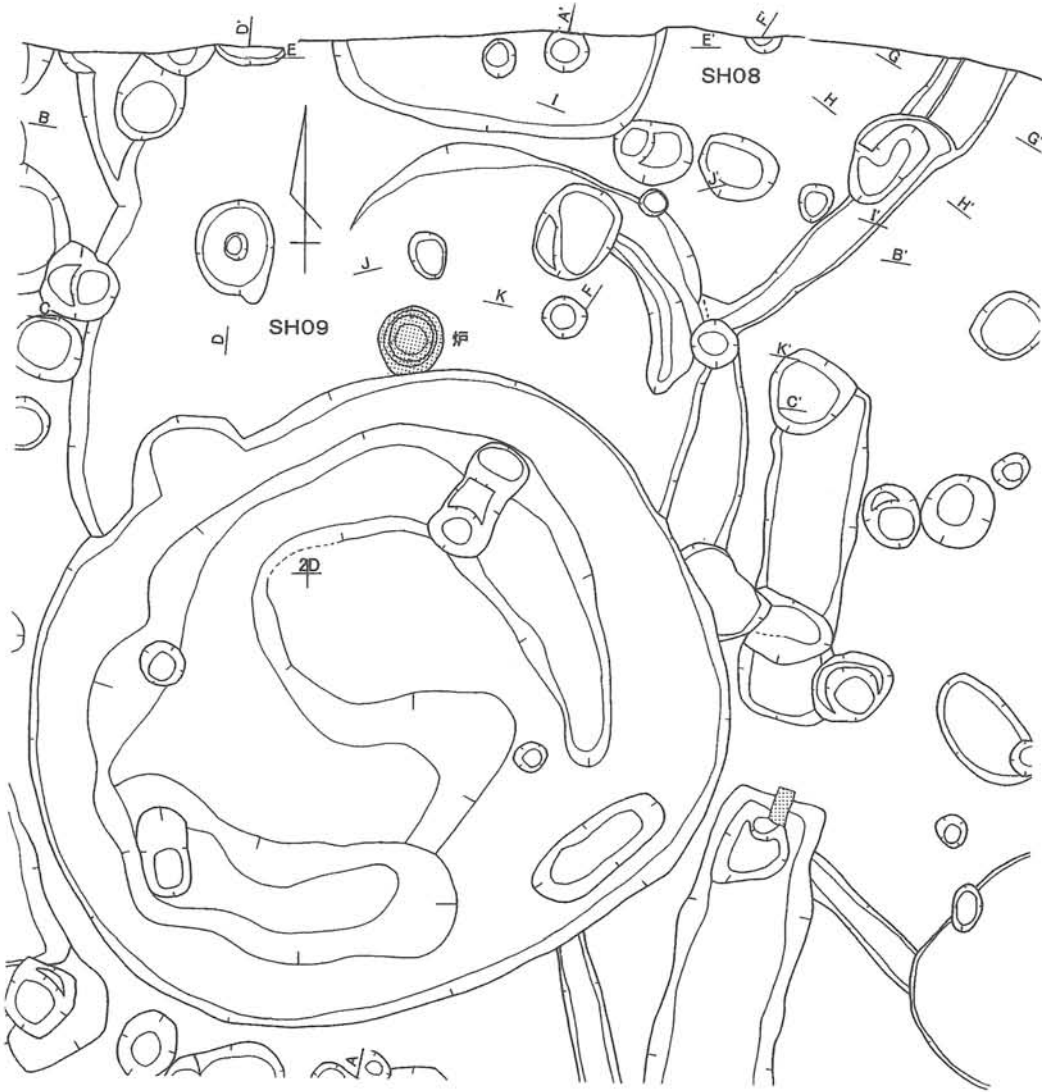
第18図 SH03・04実測図



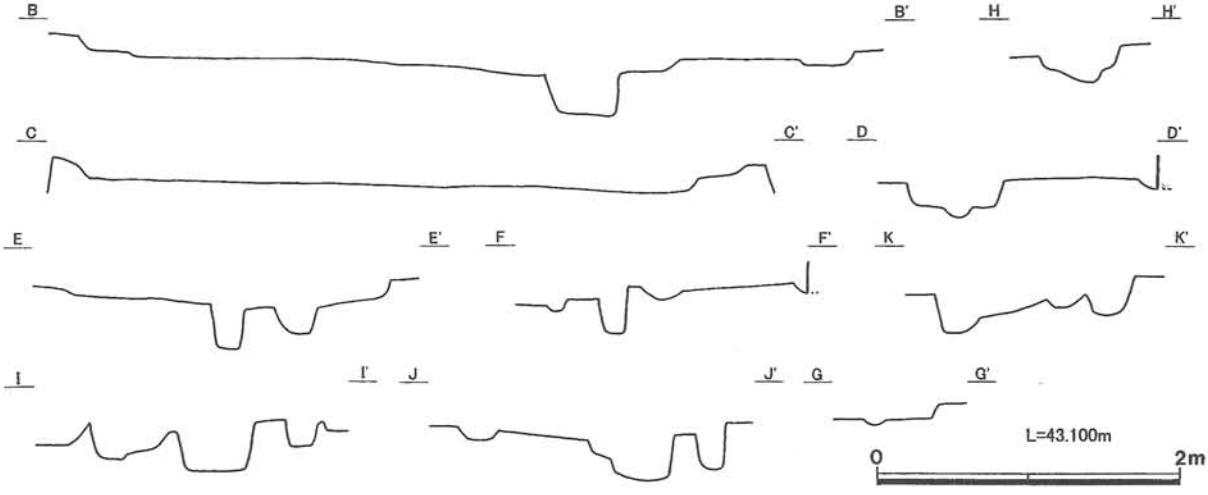
第19図 SH05・07実測図



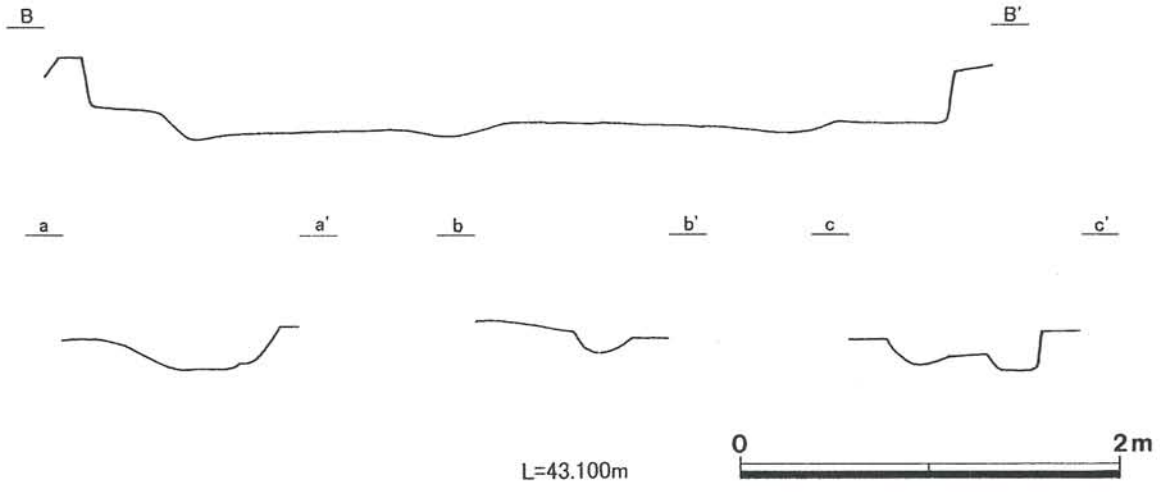
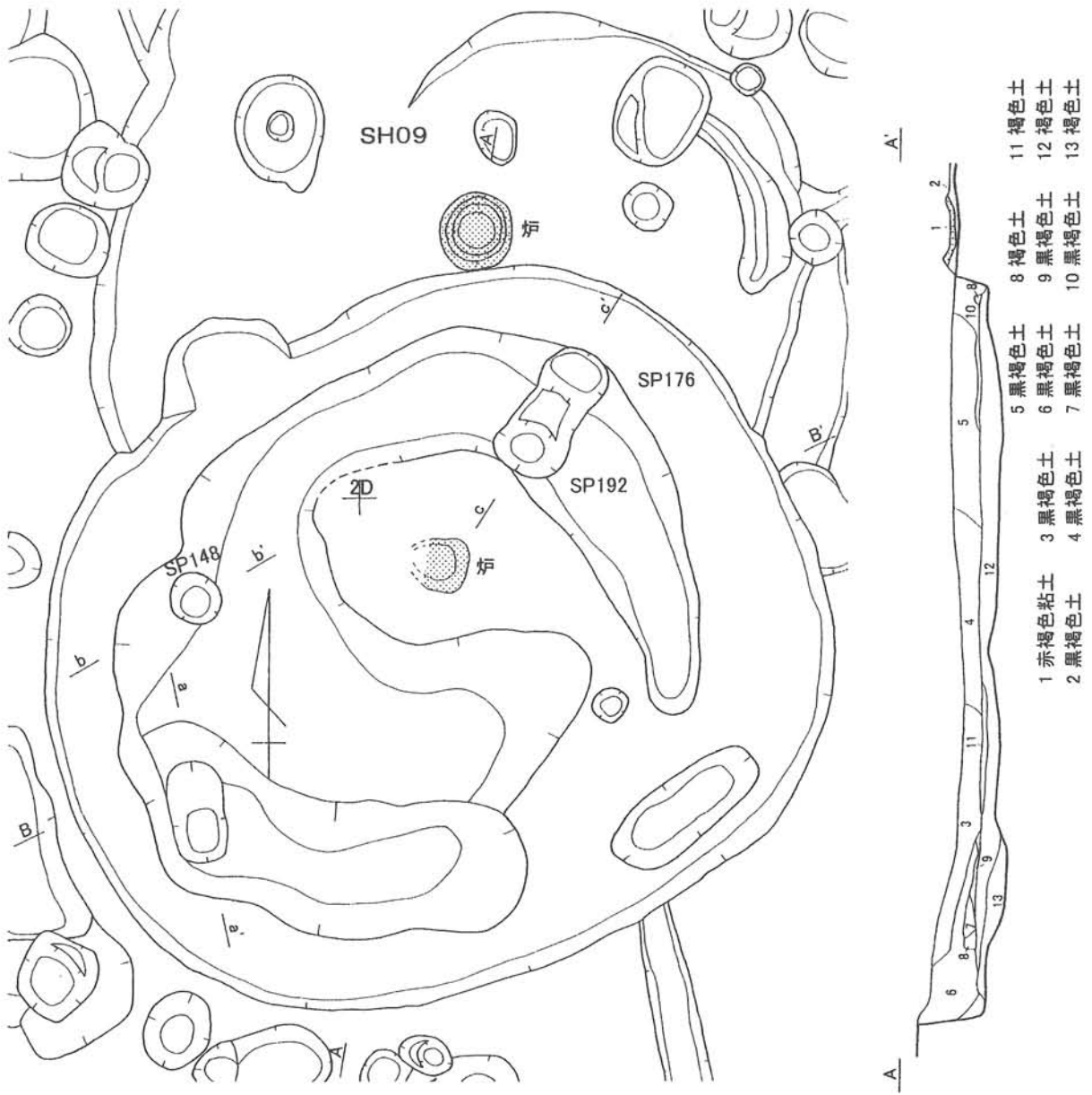
第20図 SH06実測図



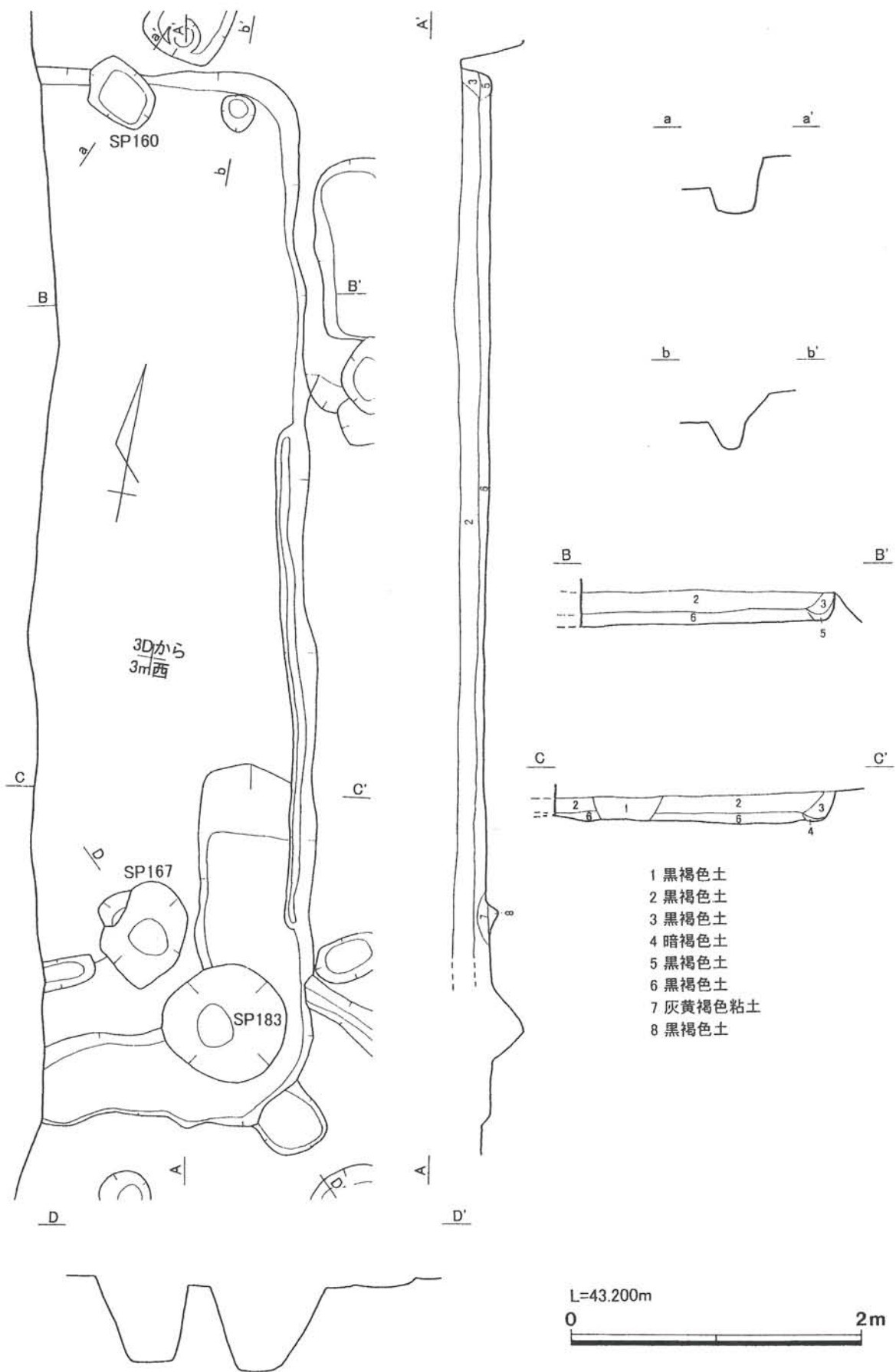
- | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1 黑褐色土 | 4 黑褐色土 | 7 黑褐色土 | 10 黑褐色土 | 13 黑褐色土 | 16 暗褐色土 | 19 黑褐色土 | 22 黑褐色土 |
| 2 黑褐色土 | 5 黑褐色土 | 8 黑褐色土 | 11 黑褐色土 | 14 暗褐色土 | 17 黑褐色土 | 20 褐色土 | 23 黑褐色土 |
| 3 暗褐色土 | 6 黑褐色土 | 9 黑褐色土 | 12 黑褐色土 | 15 黑褐色土 | 18 黑褐色土 | 21 暗褐色土 | |



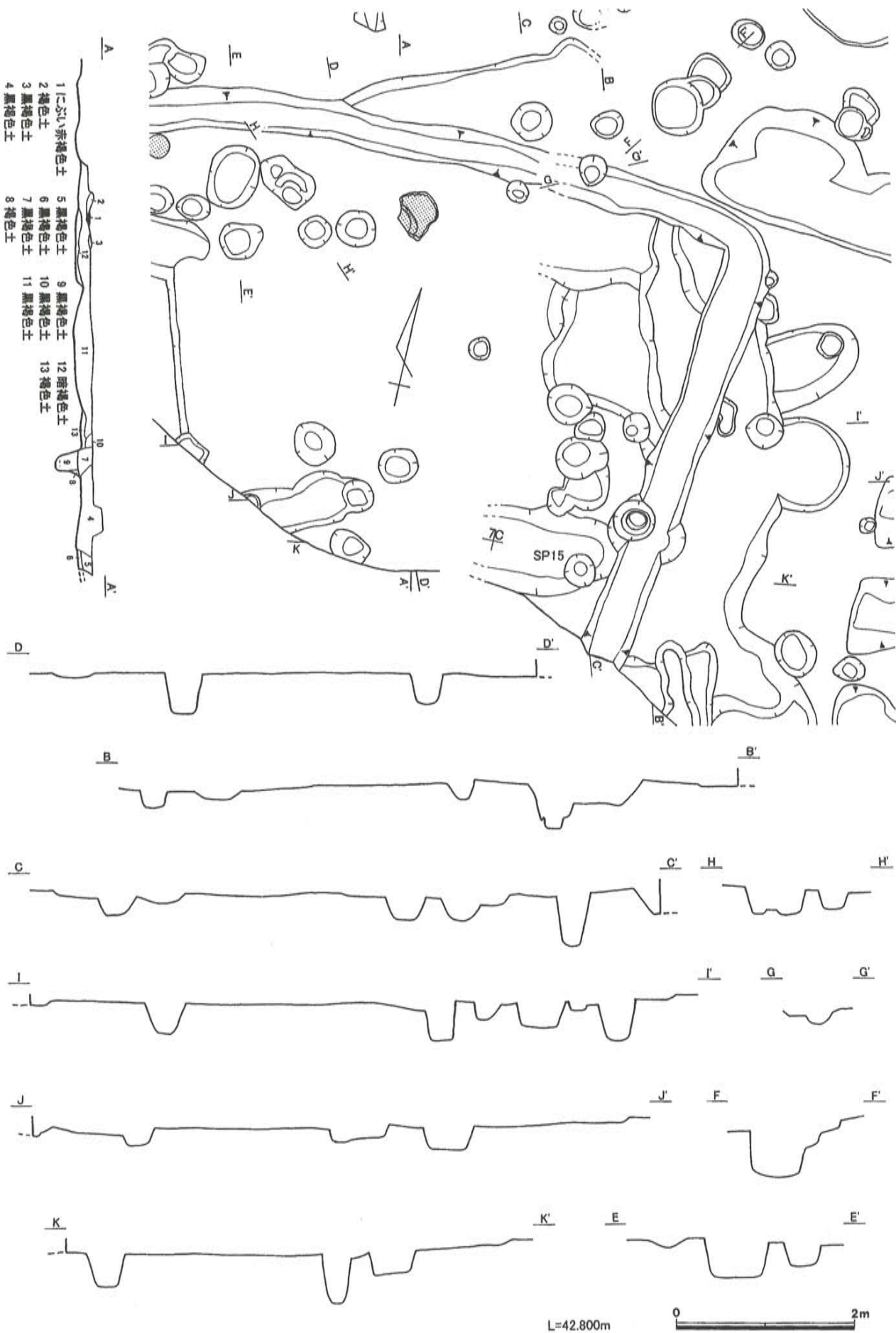
第21图 SH08·09实测图



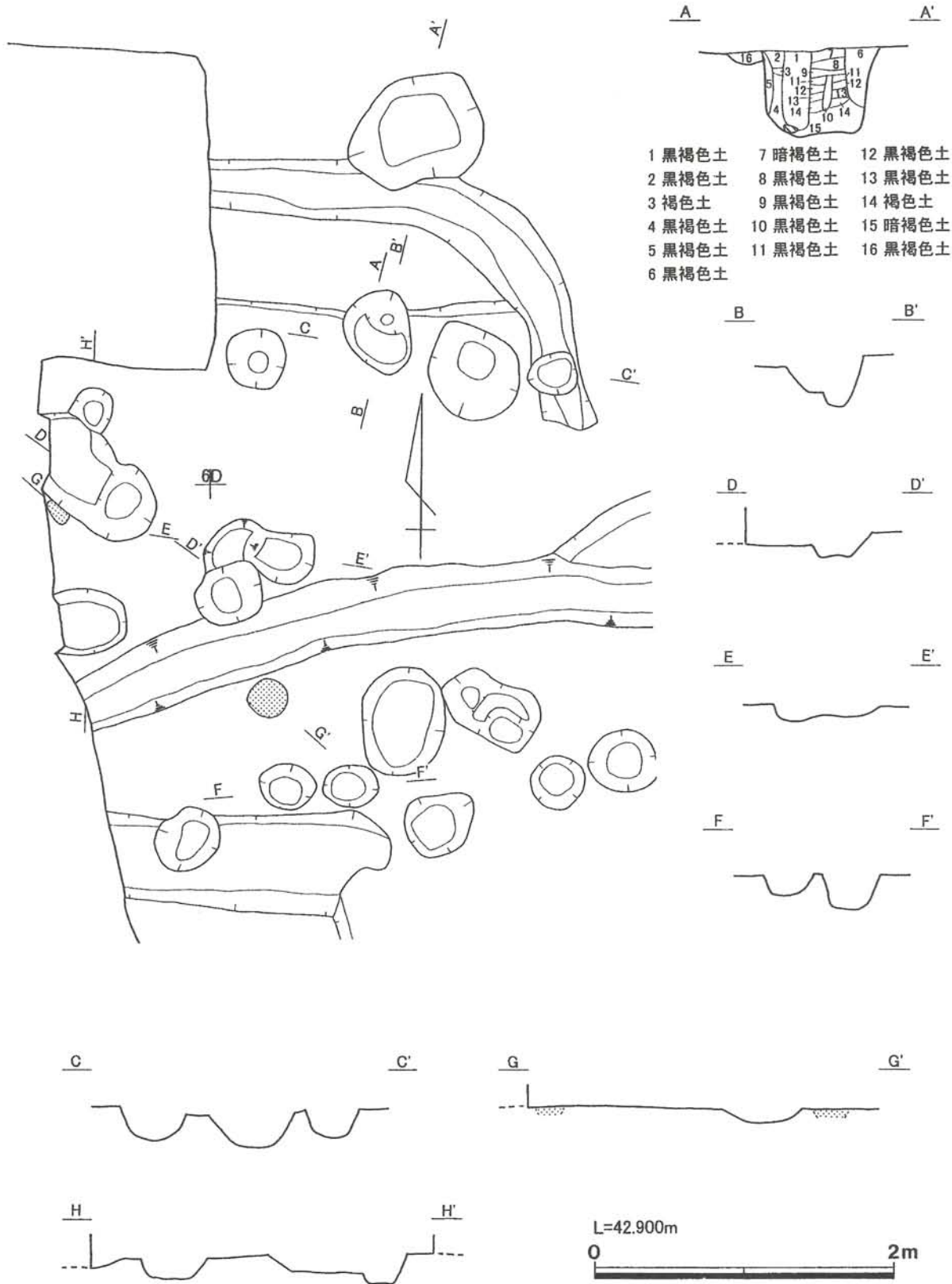
第22图 SH10实测图



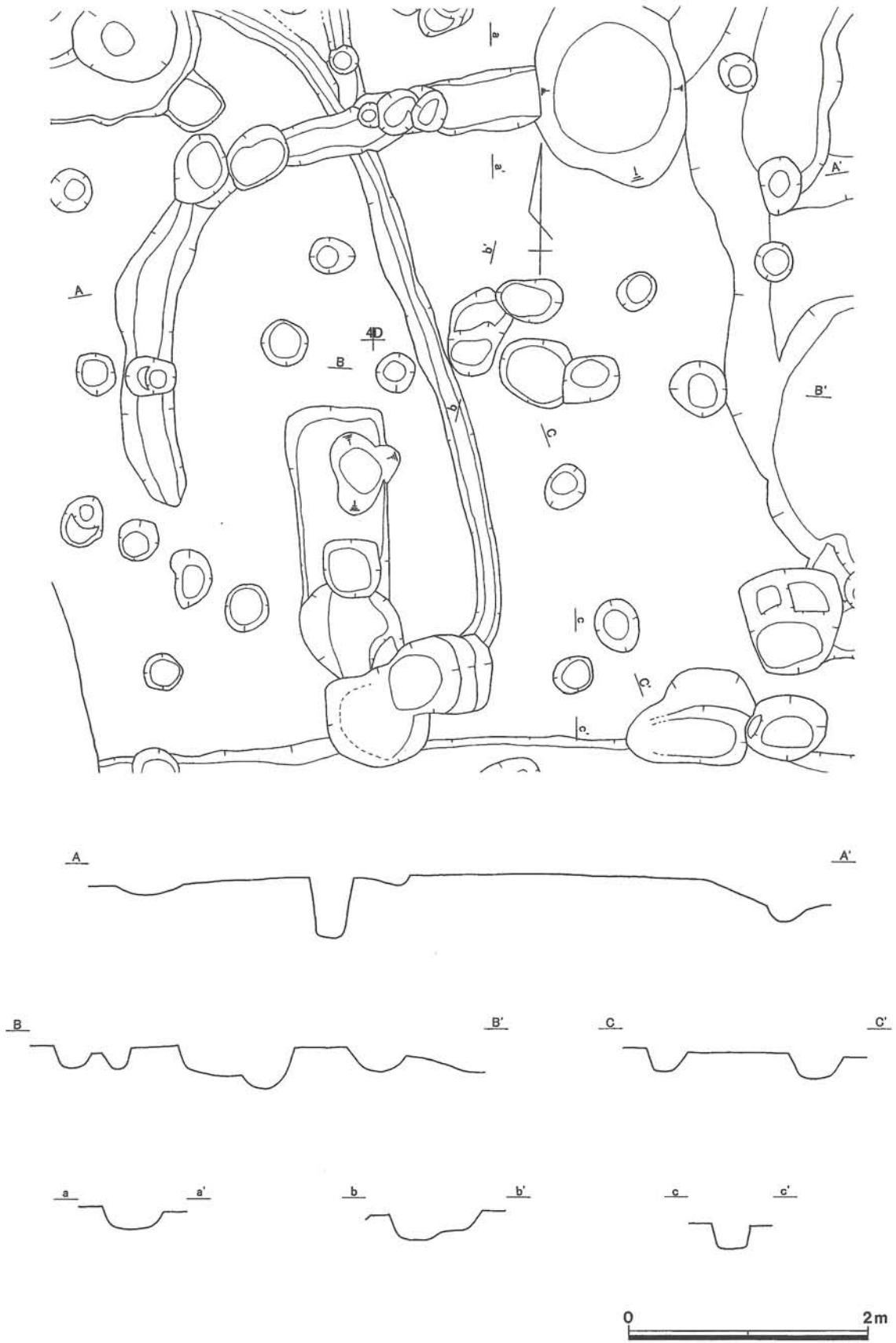
第23図 SH11実測図



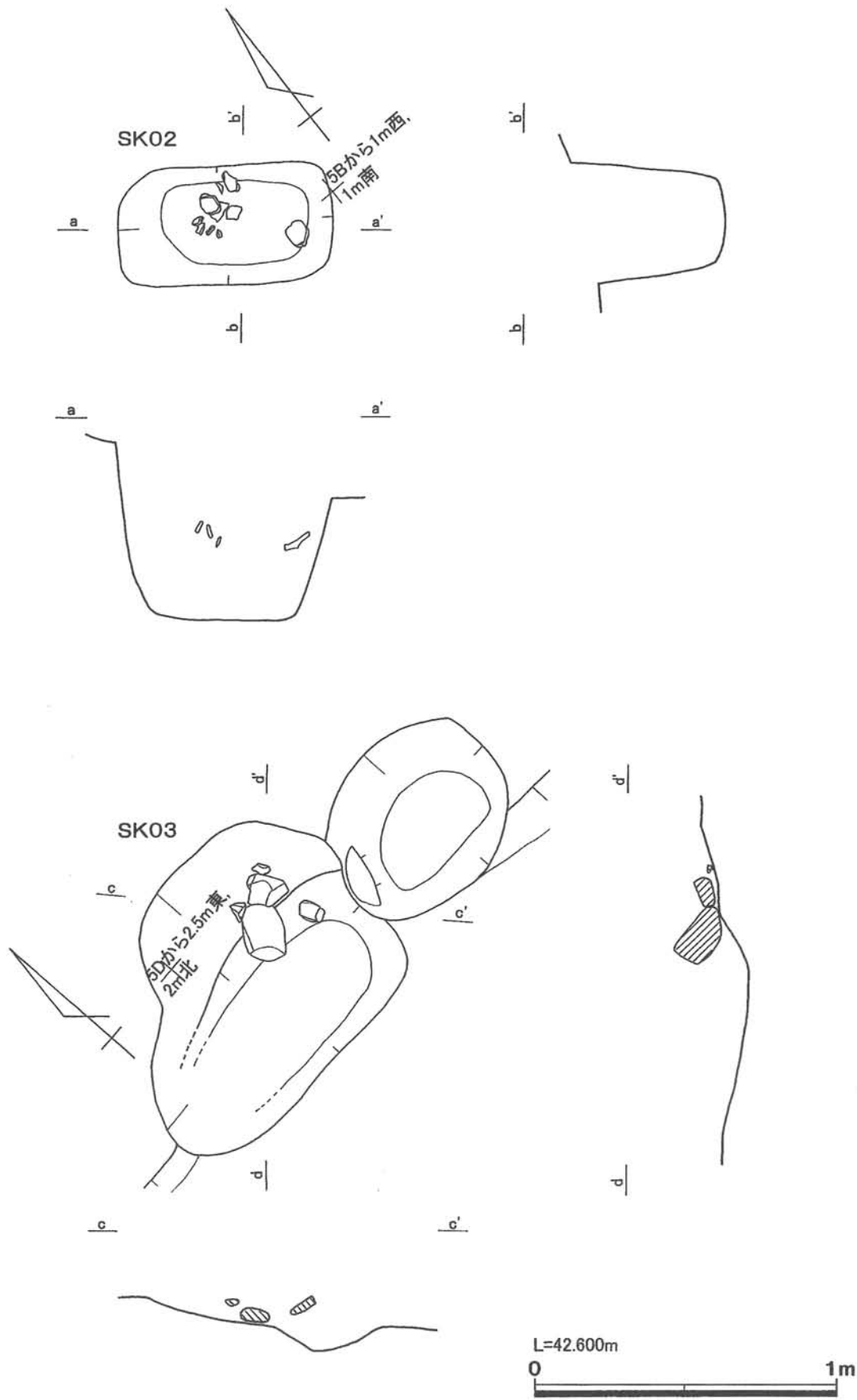
第24図 SH12実測図



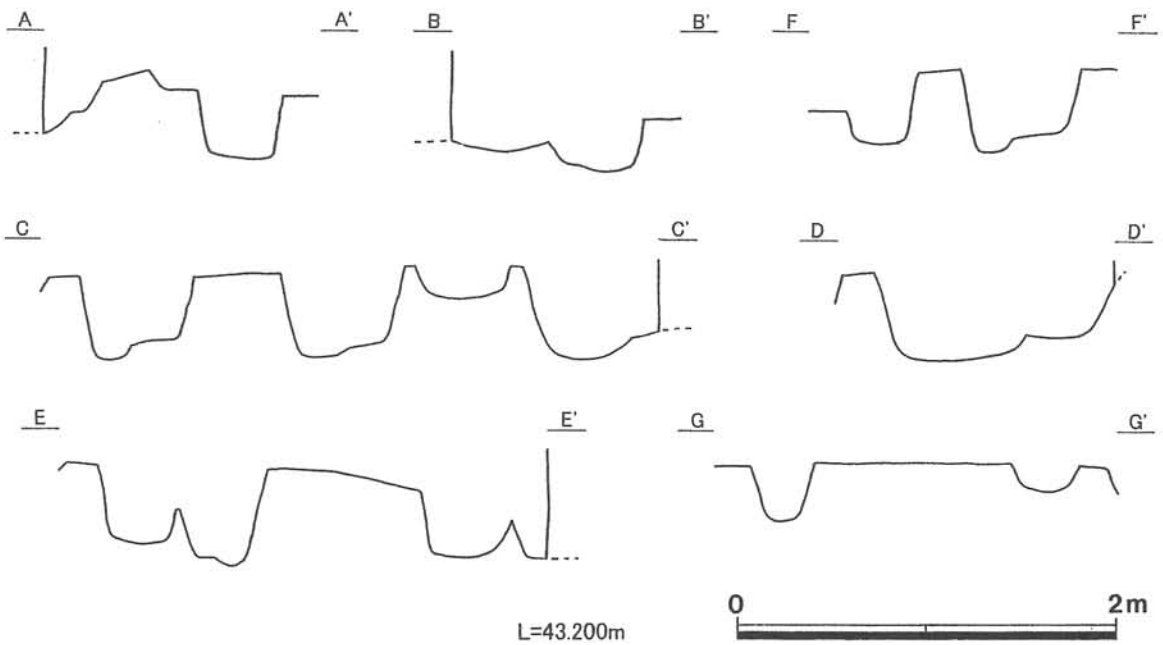
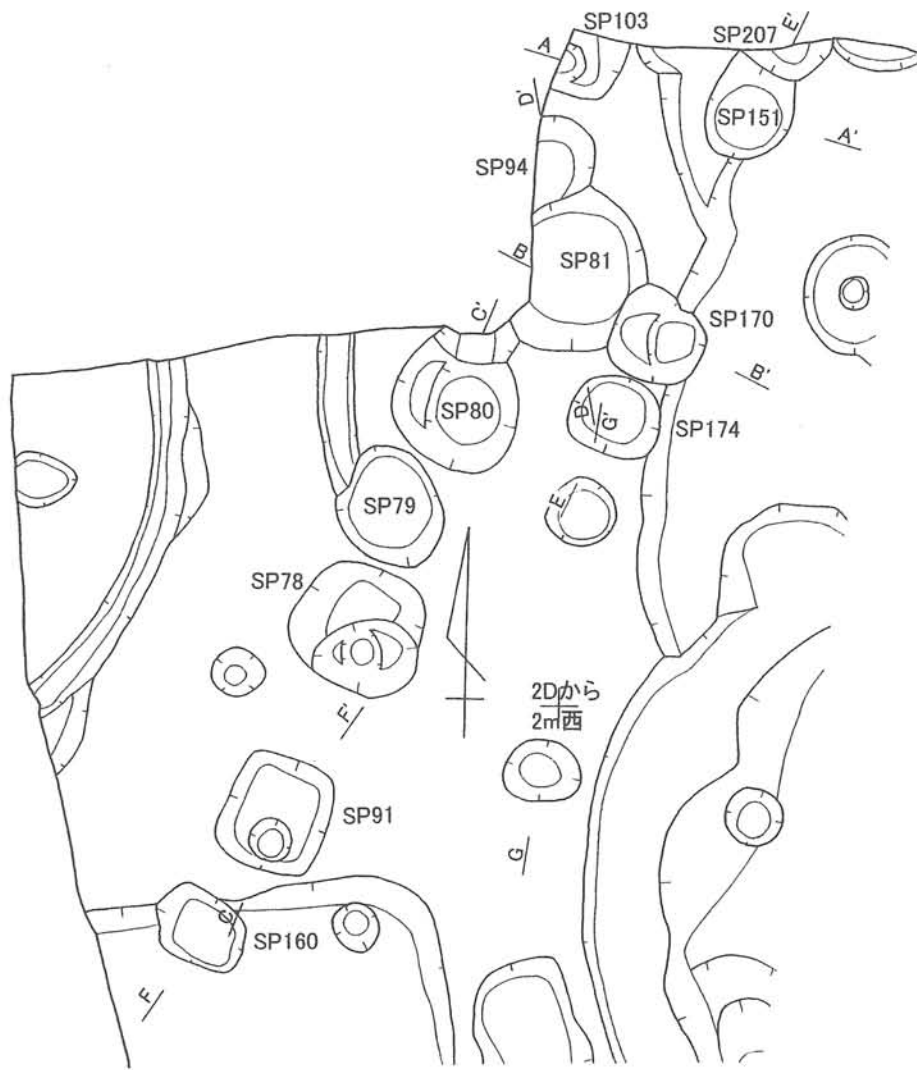
第25图 SH13实测图



第26図 SH14実測図



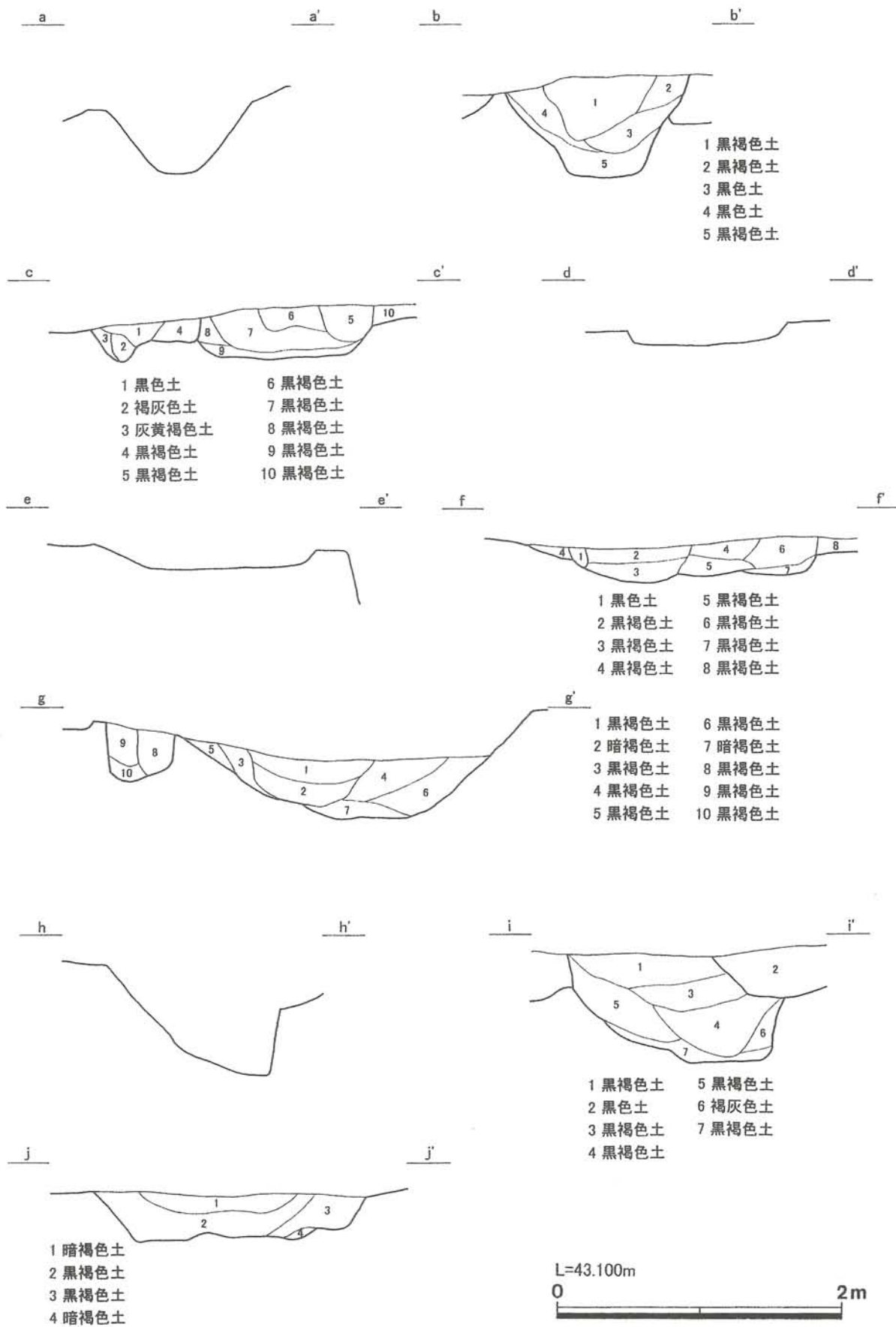
第27図 SK02・03実測図



第28図 柱穴群実測図



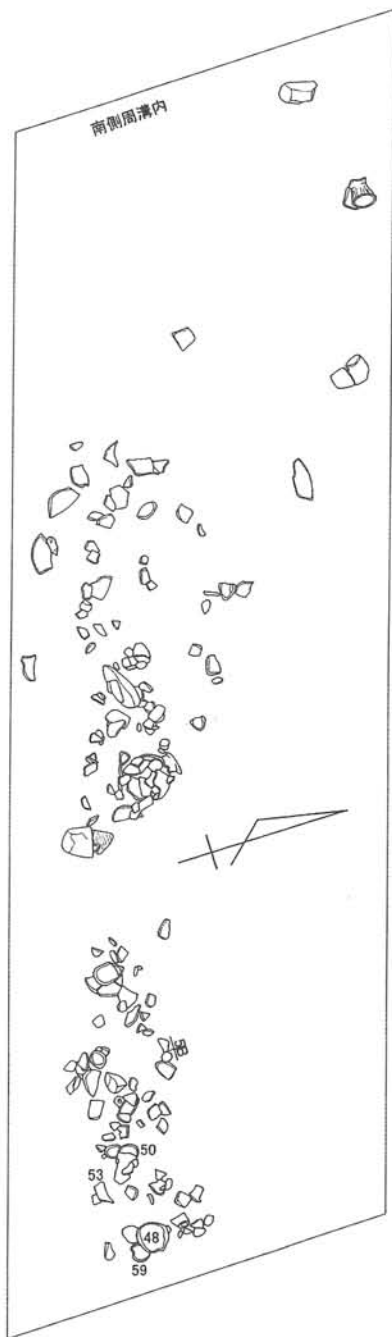
第29図 SZ01実測図



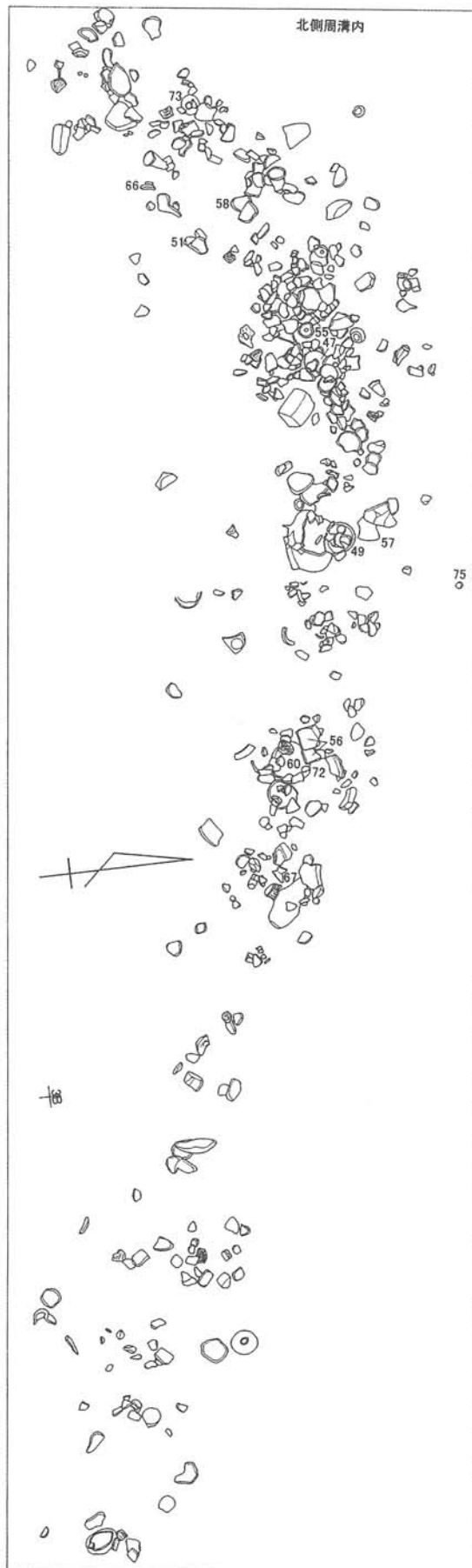
第30图 SZ01周沟断面图



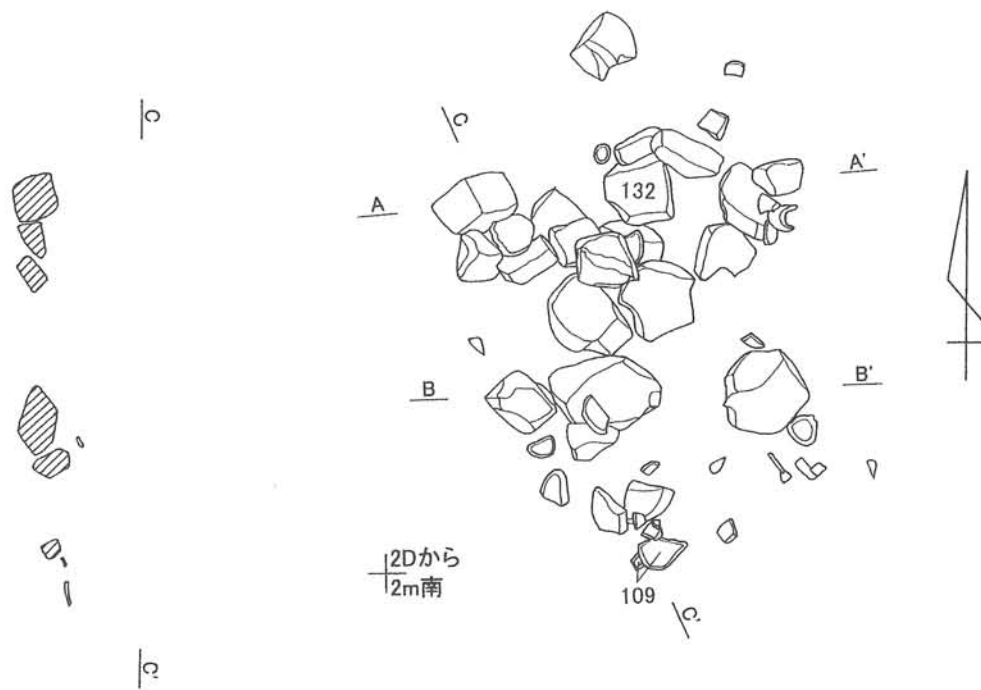
第31図 SZ01周溝内遺物出土状況図(1)



0 1m



第32図 SZ01周溝内遺物出土状況図(2)



2Dから
2m南

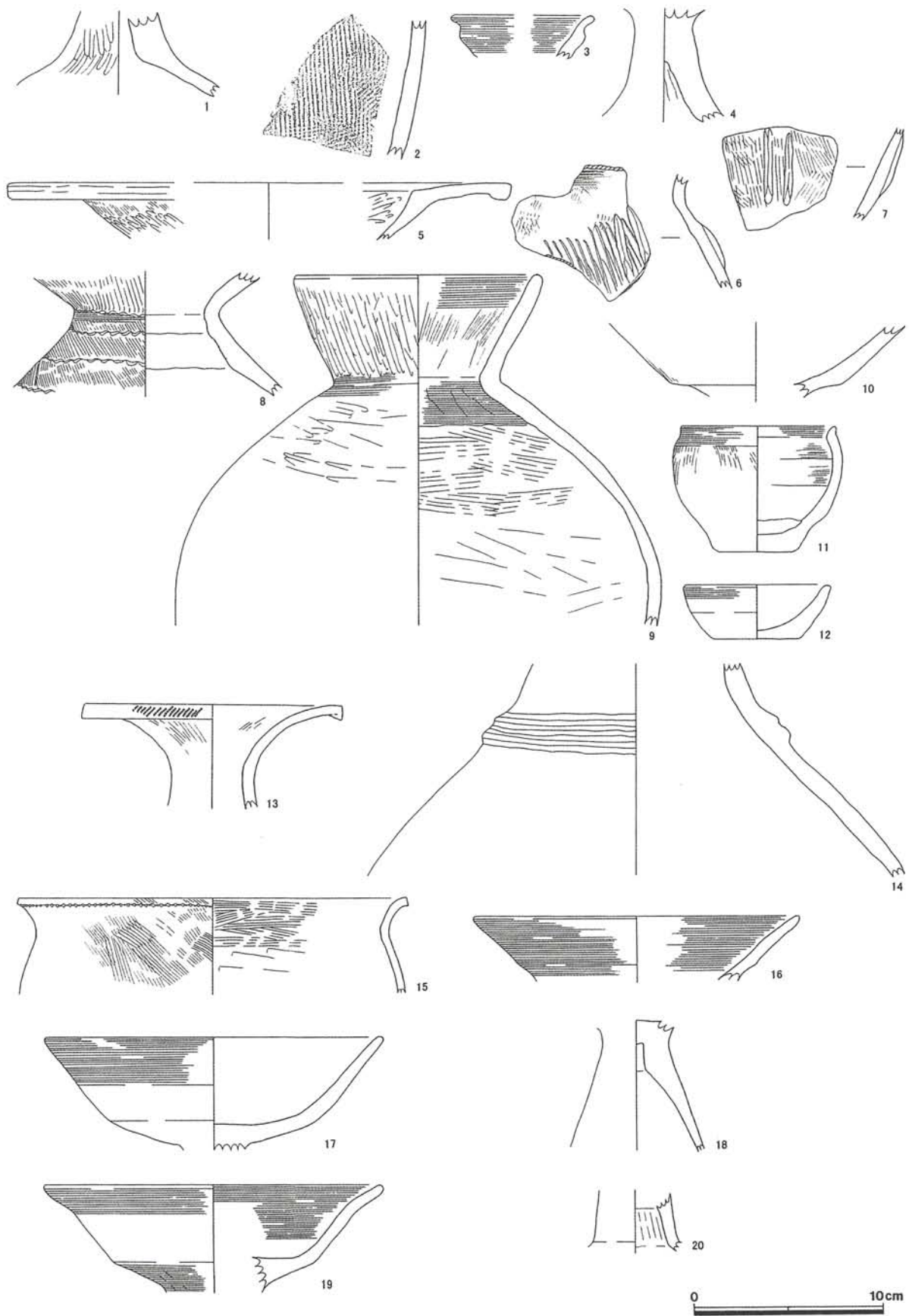
A A'



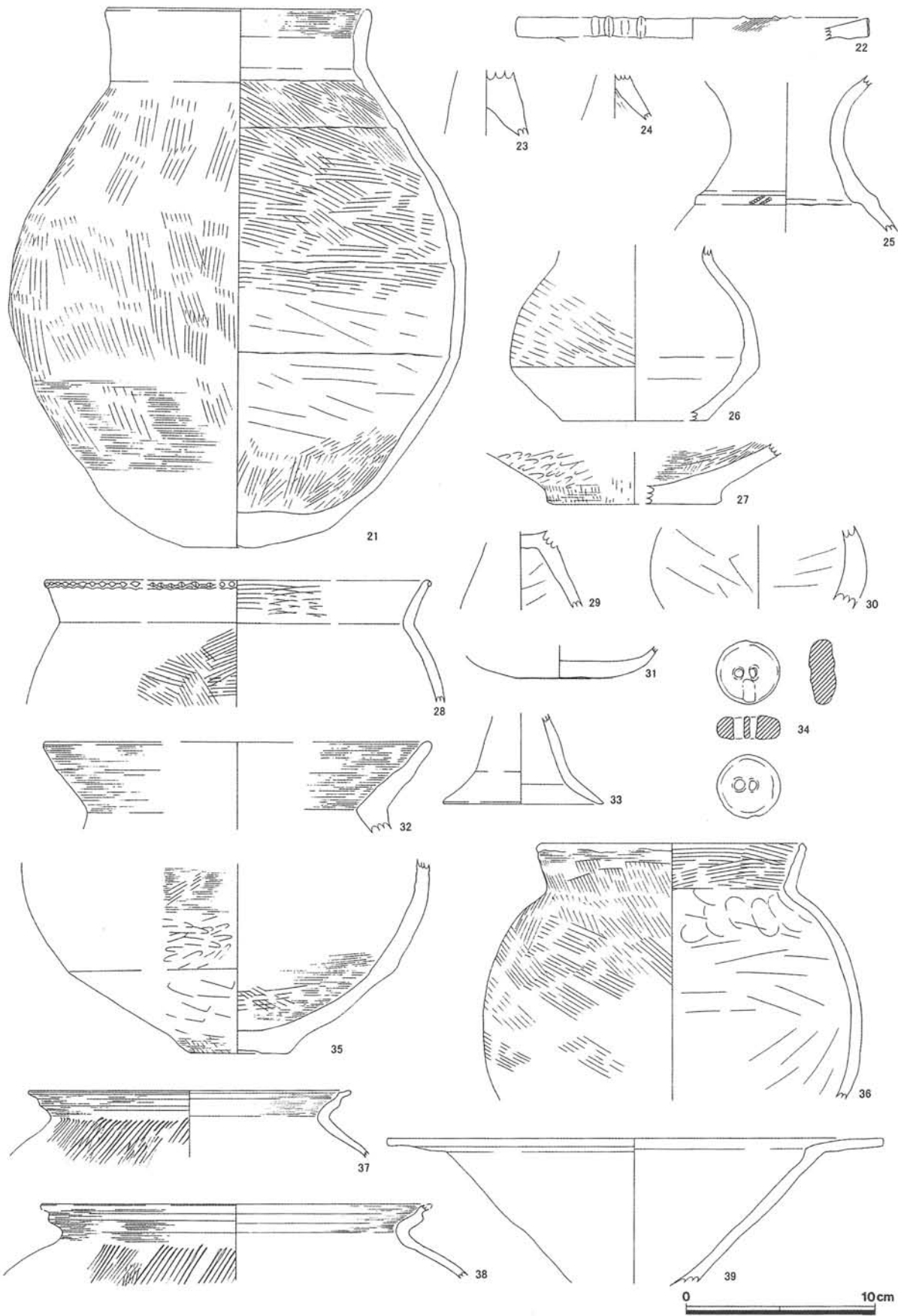
B B'



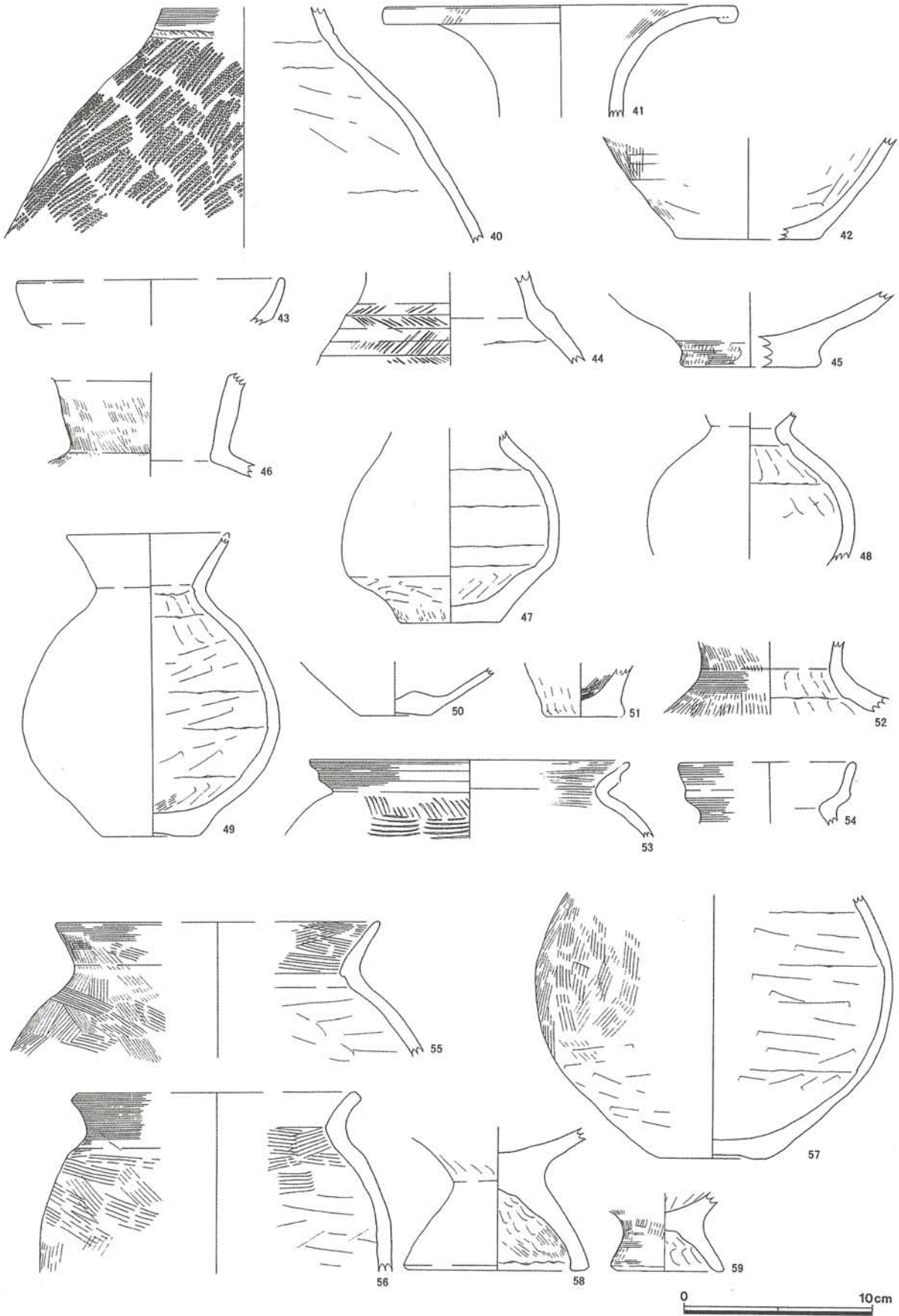
第33図 SX01実測図



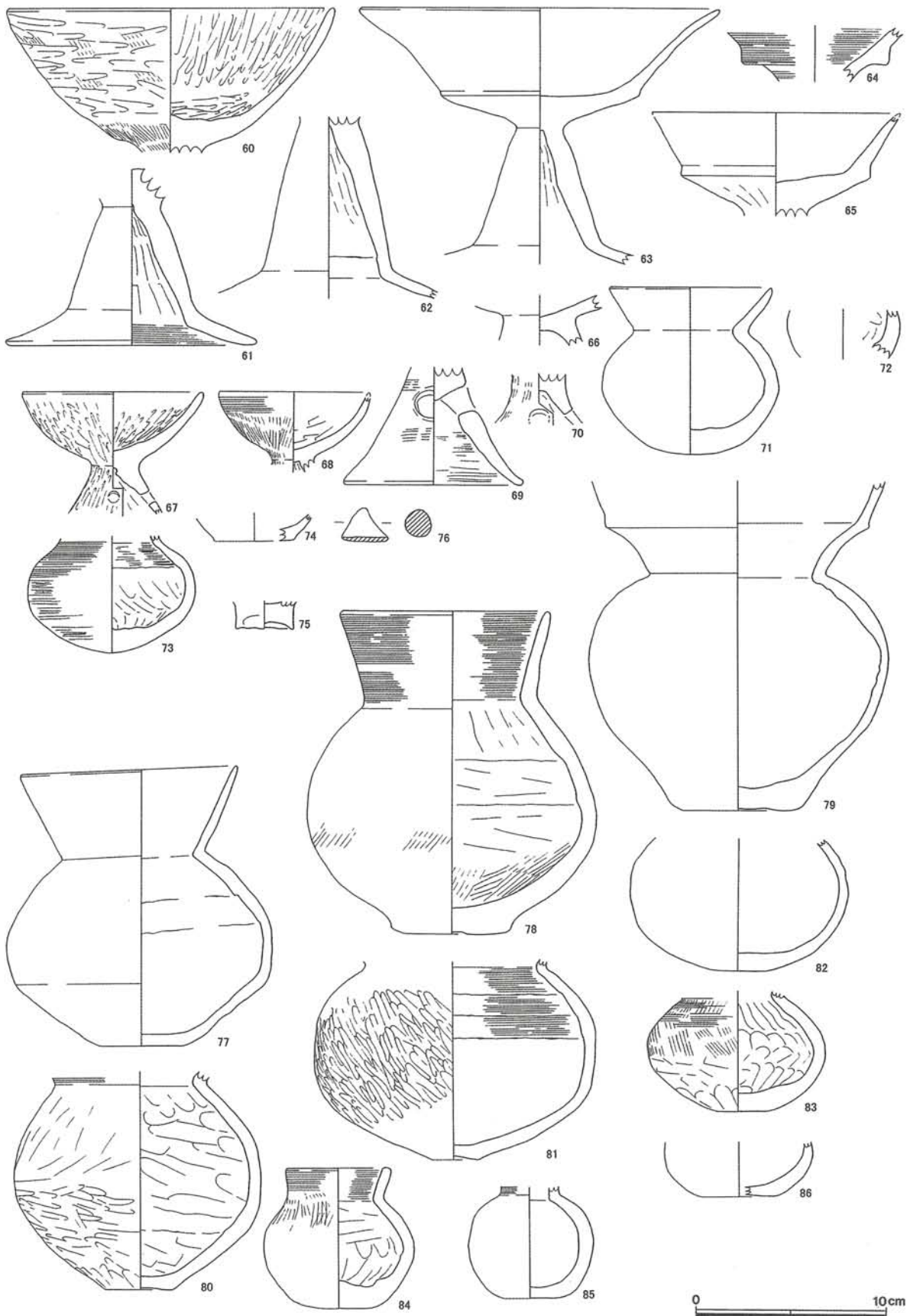
第34図 遺物実測図(1)



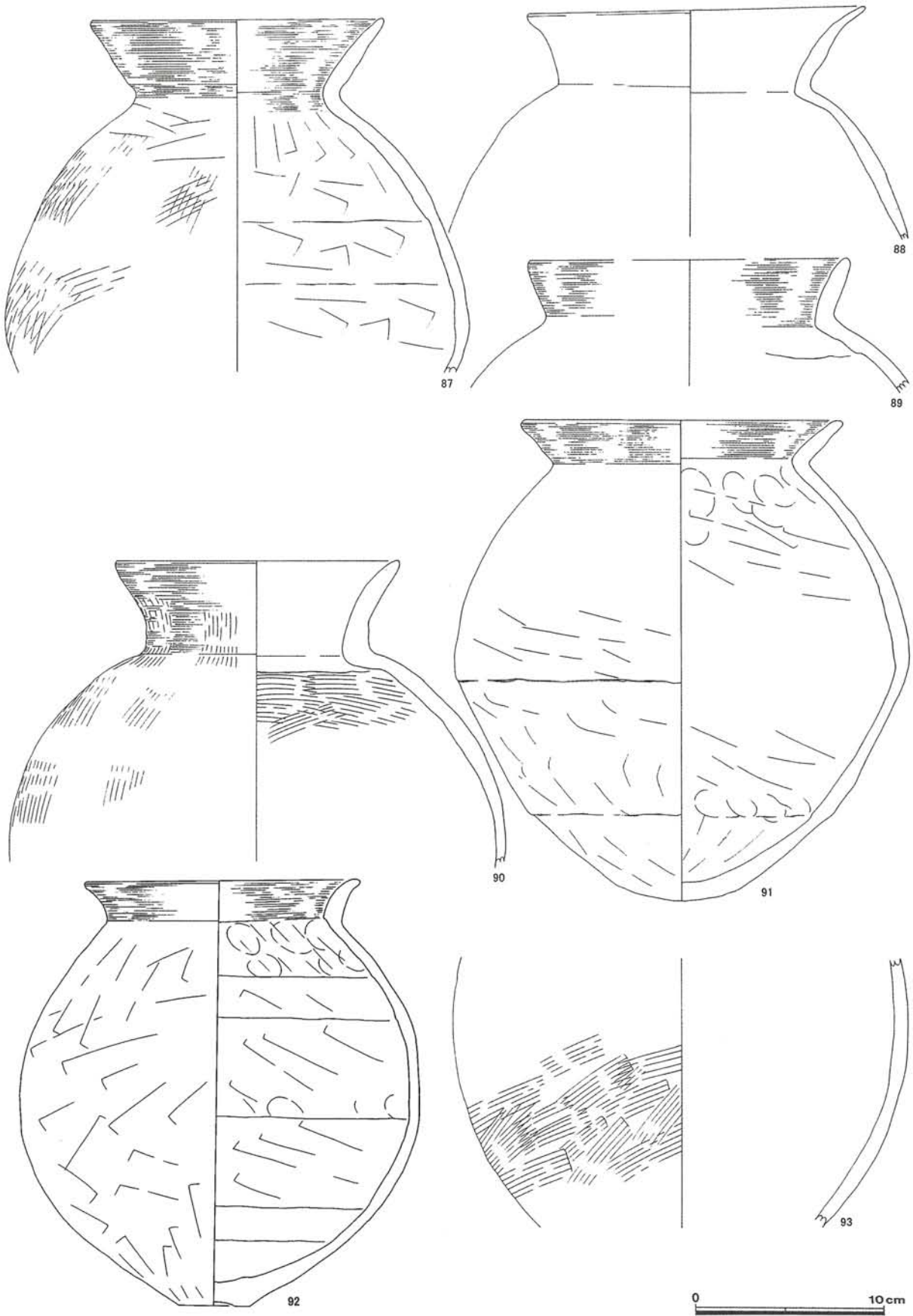
第35図 遺物実測図 (2)



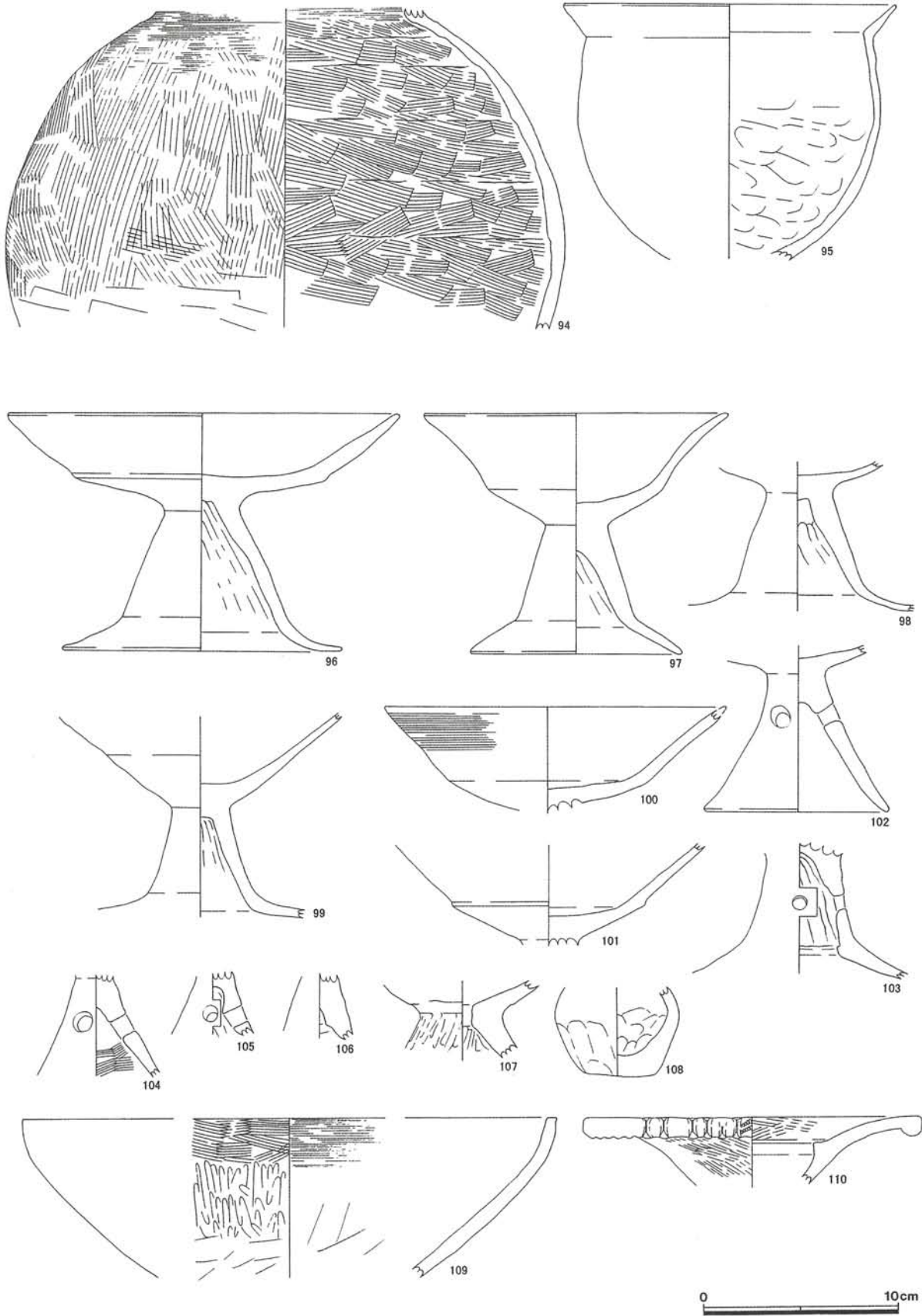
第36図 遺物実測図 (3)



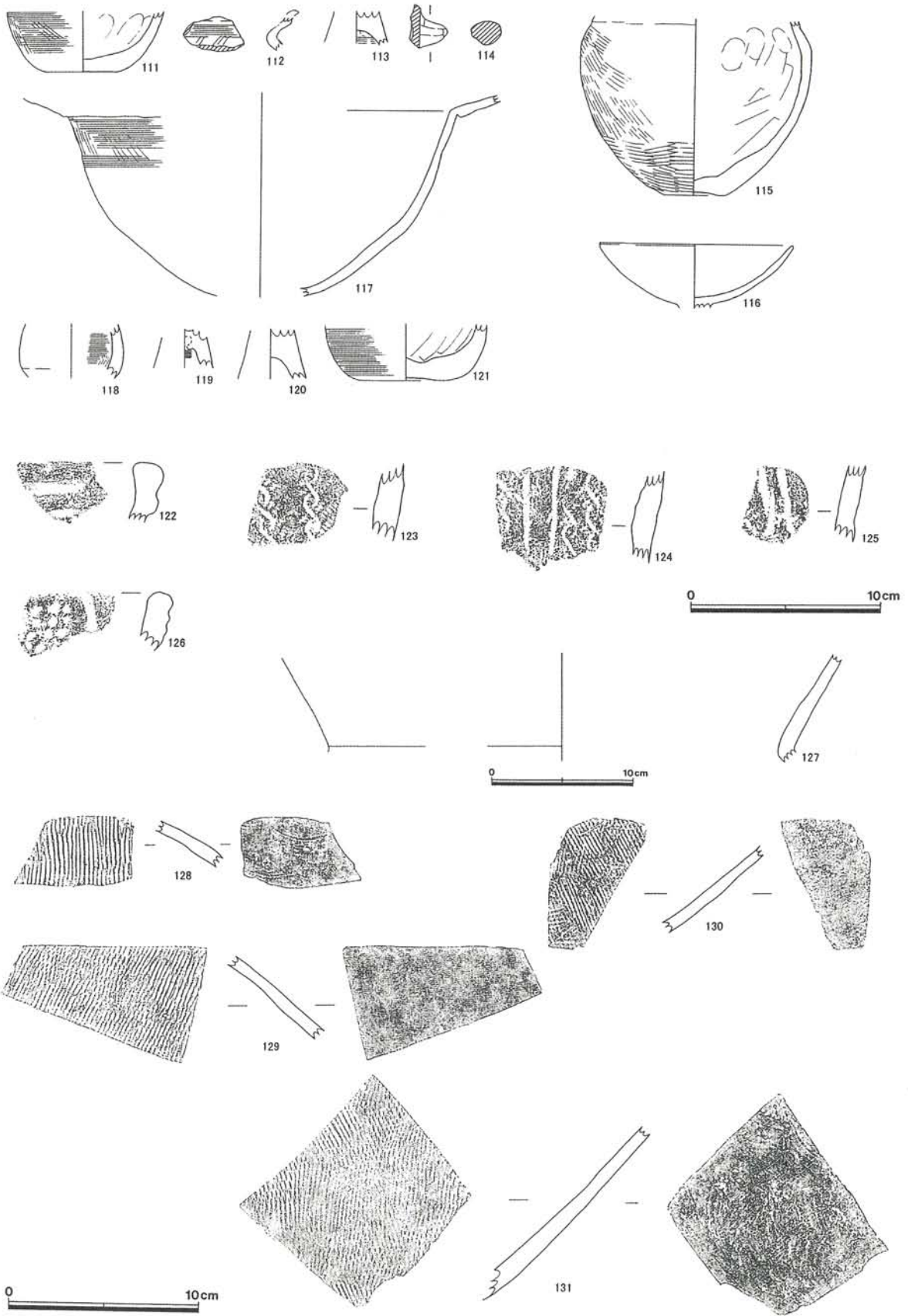
第37図 遺物実測図 (4)



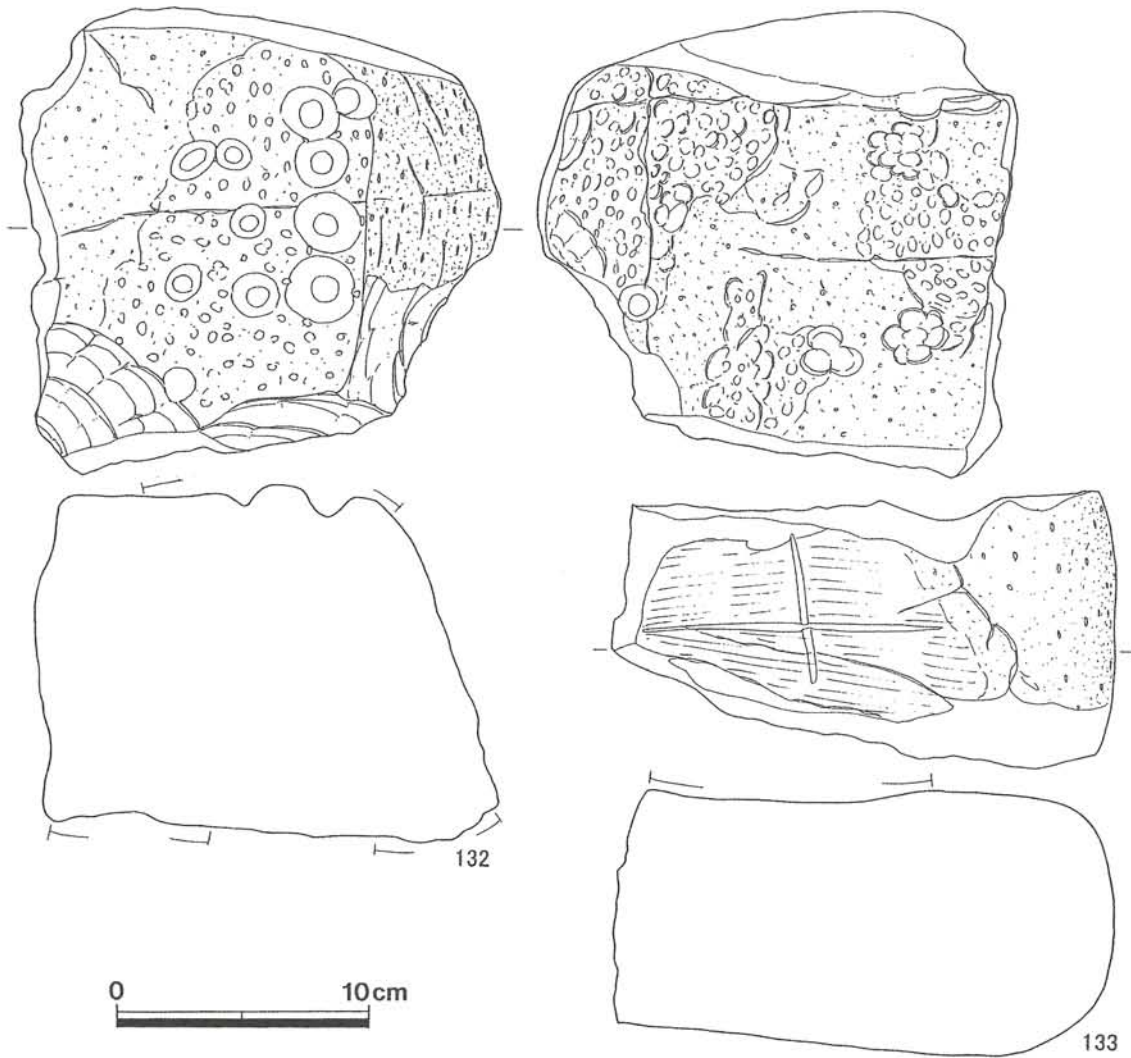
第38図 遺物実測図 (5)



第39図 遺物実測図 (6)



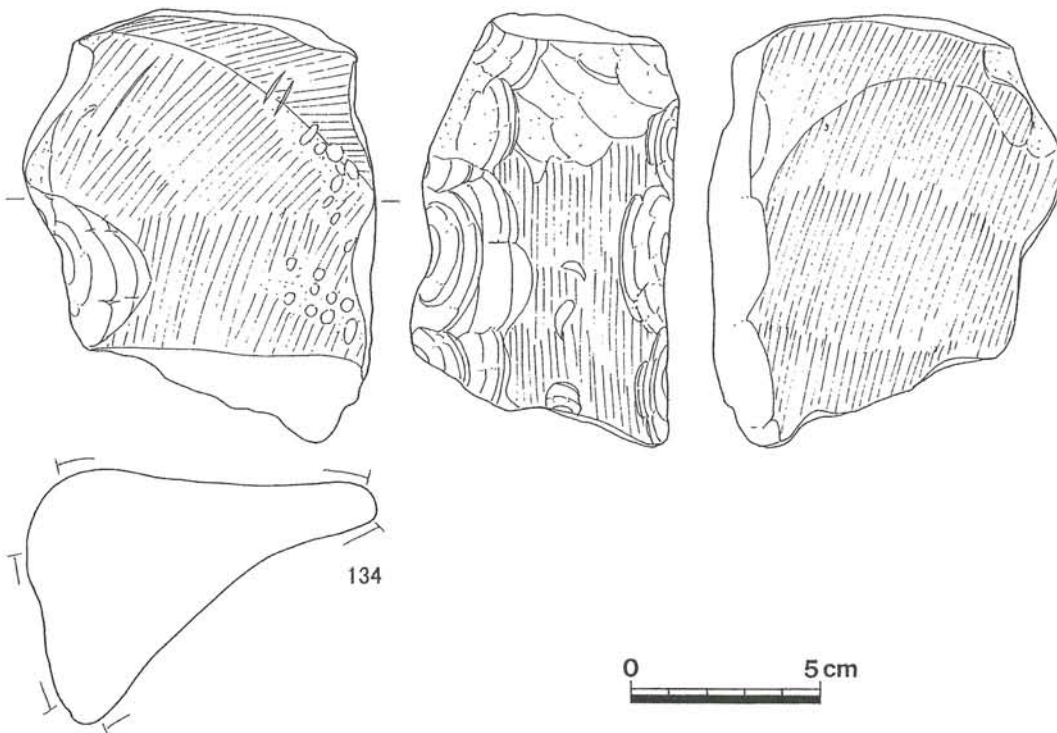
第40図 遺物実測図 (7)



132

133

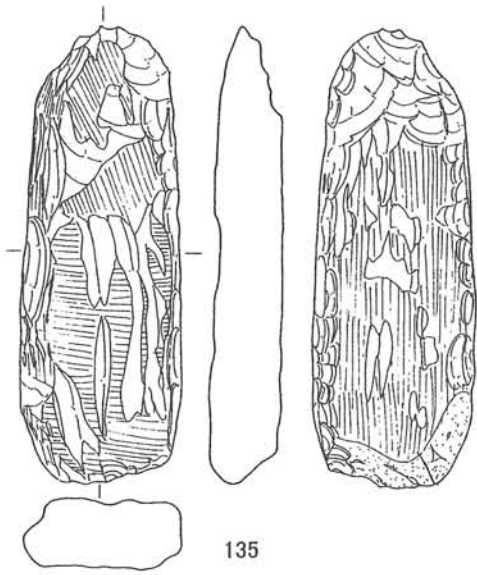
0 10cm



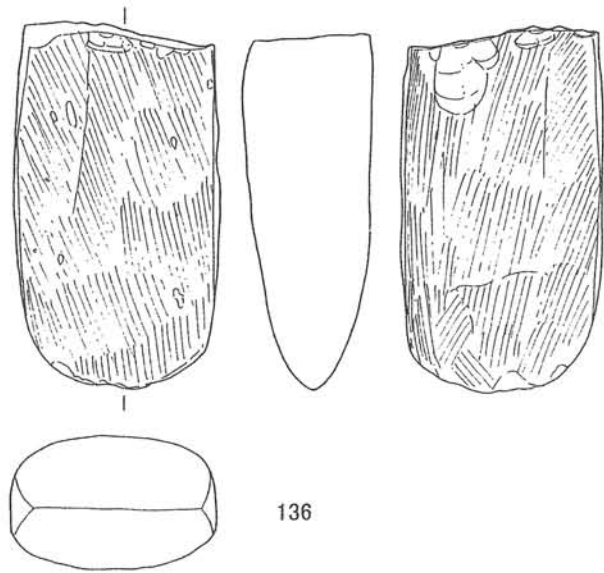
134

0 5cm

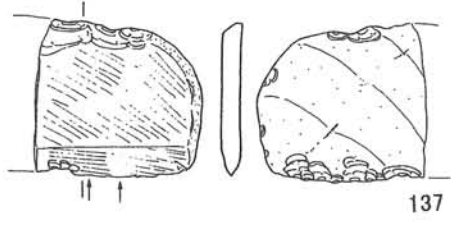
第41図 遺物実測図 (8)



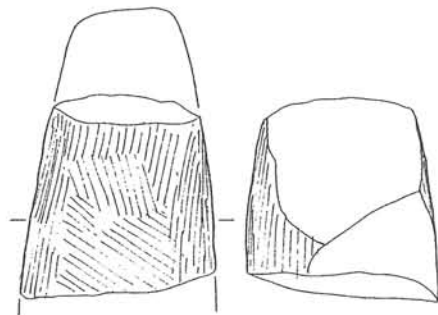
135



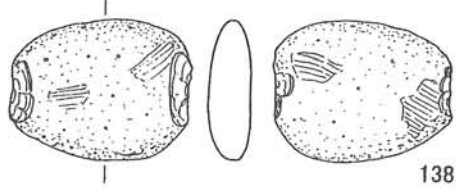
136



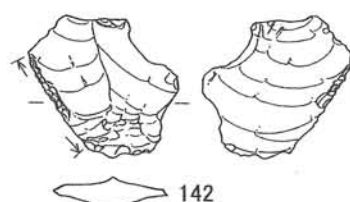
137



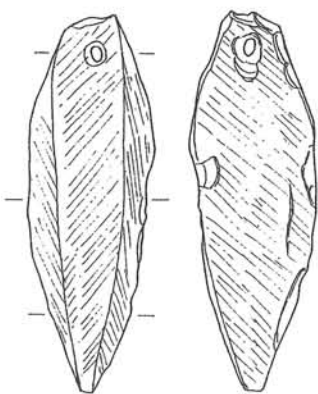
139



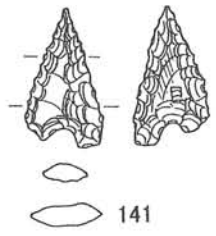
138



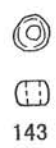
142



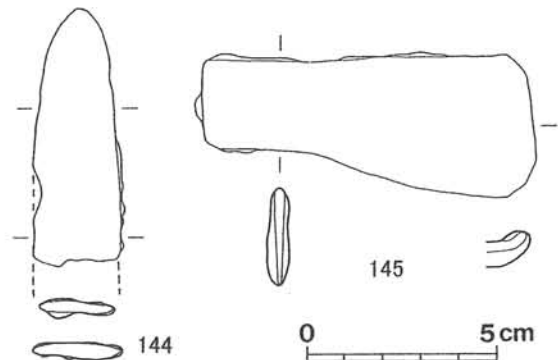
140



141



143



145



第42図 遺物実測図 (9)

図版 1



SH01・02全景 (南から)



調査区西半全景 (北から)

図版 2



SA02,SH13完掘 (北から)



SB02,SD02・03 (北から)



SB04・05,SH10完掘
(南から)

図版 3



SD01・02東半 (東から)



SD04,SH02完掘,SK01,SZ01
(北から)



SF01・02,SH10 完掘
(南から)

図版 4



SF01 (東から)

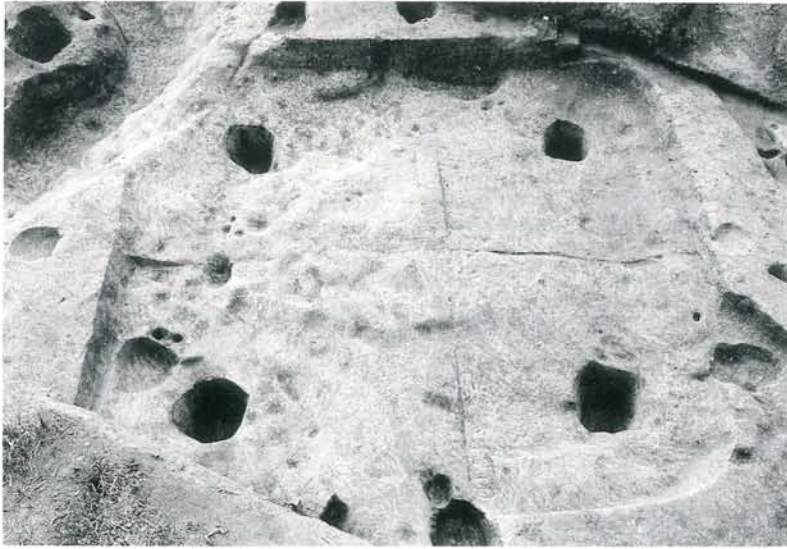


SF02 (東から)

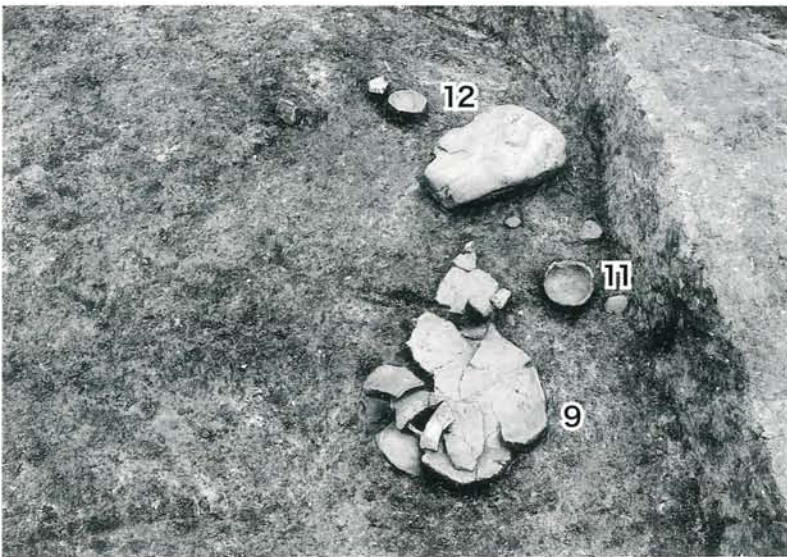


SF03 (東から)

図版 5



SH01完掘 (東から)

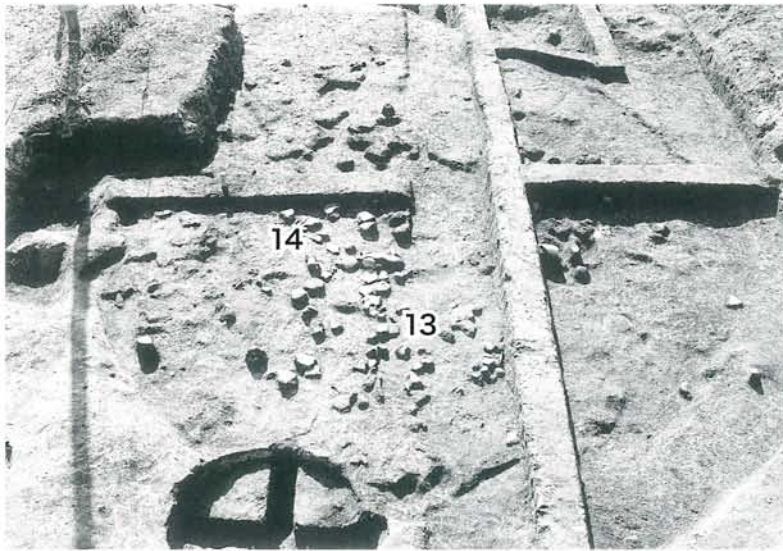


SH01床面北壁際遺物
(東から)



SH02完掘 (北から)

図版 6



SH02床面 (北から)

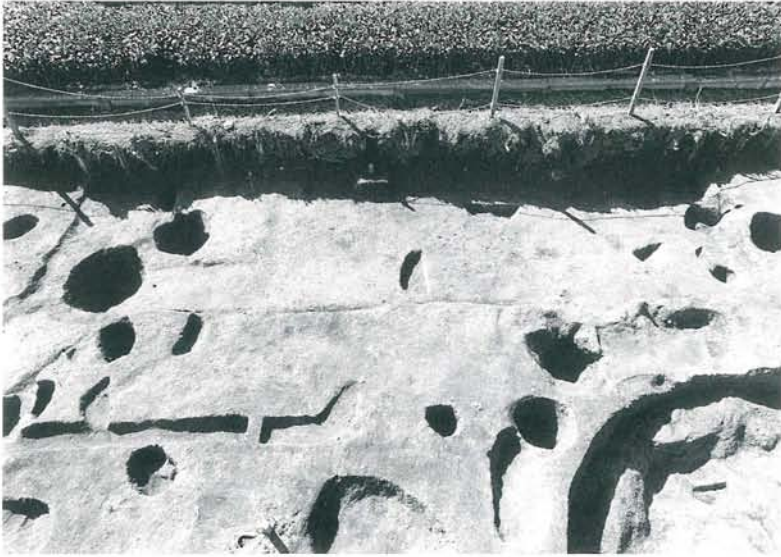


SH03床面 (北から)



SH06床面 (東から)

図版 7



SH11完掘 (東から)



SK01土層断面 (南から)



SK03内遺物 (東から)

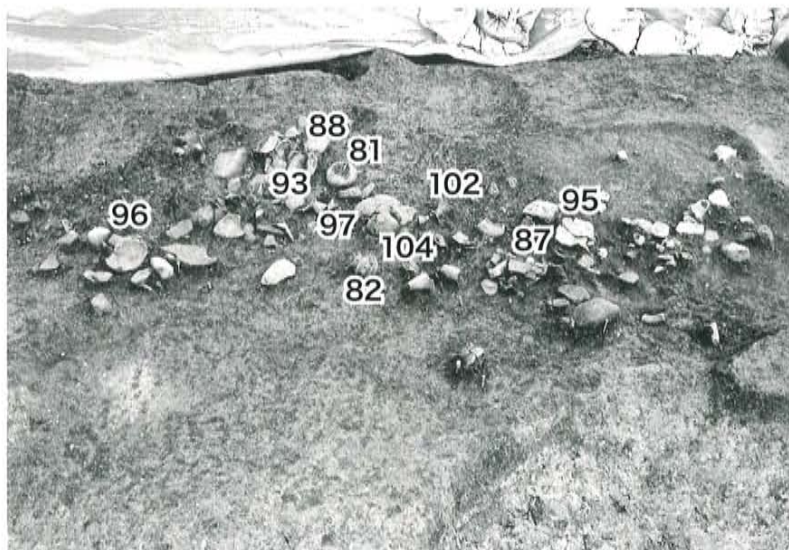
図版 8



SZ01 西側周溝完掘
(北から)



SZ01 北側周溝完掘
(東から)



SZ01 西側周溝内遺物
(西から)

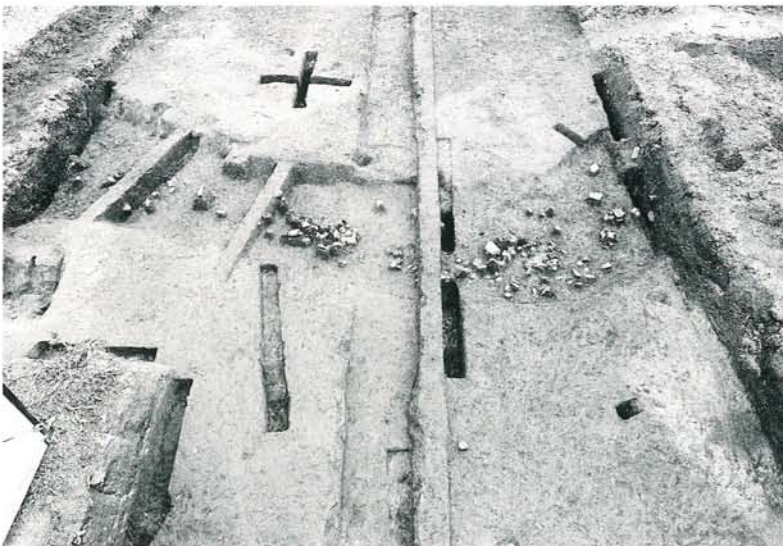
図版 9



SZ01 南側周溝内遺物
(西から)



SZ01 南側周溝内遺物
(北から)

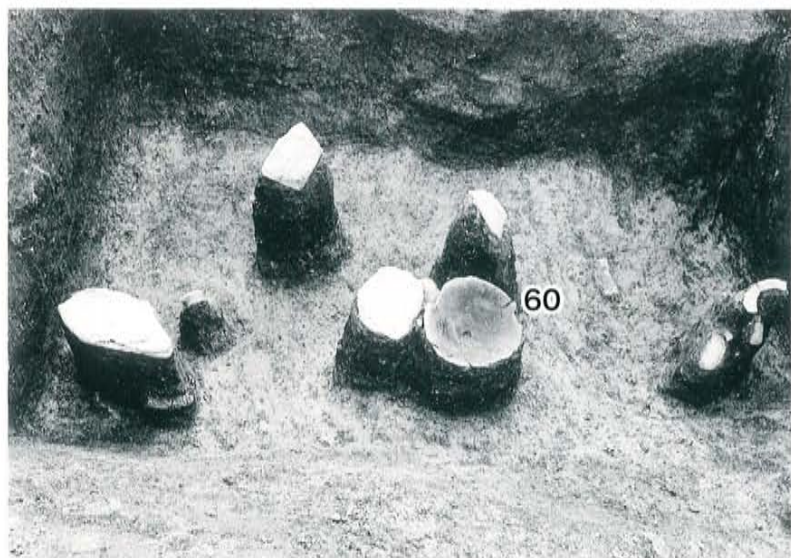


SZ01 北側周溝内上層遺物
(北から)

図版 10



SZ01 北側周溝内下層遺物
(北から)

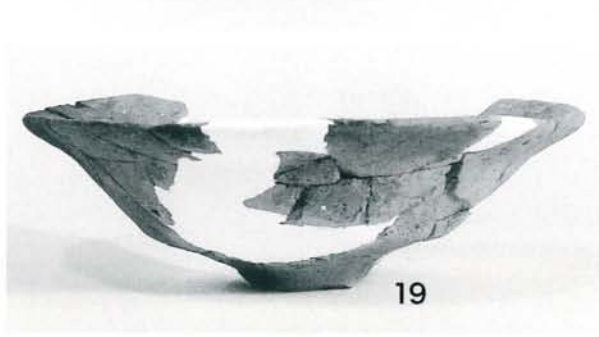
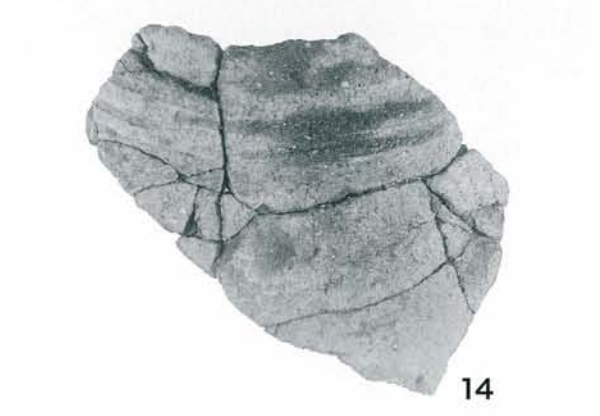
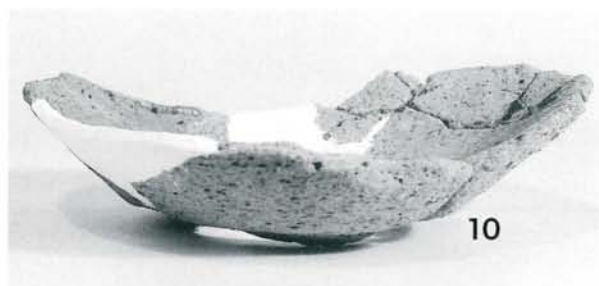
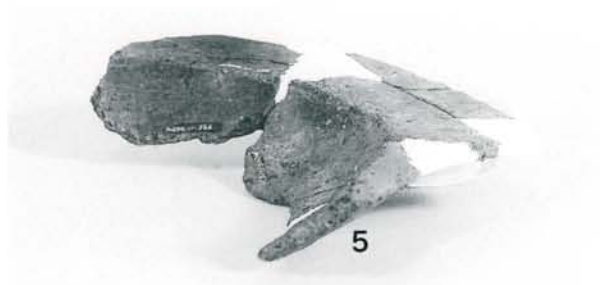


SZ01 北側周溝内最下層遺物
(北から)

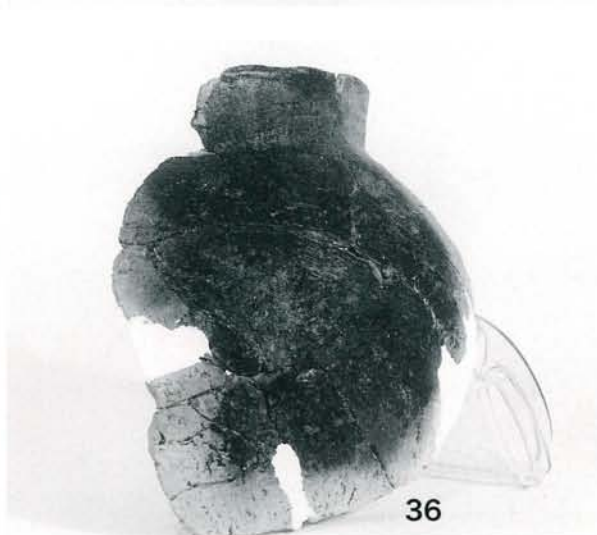
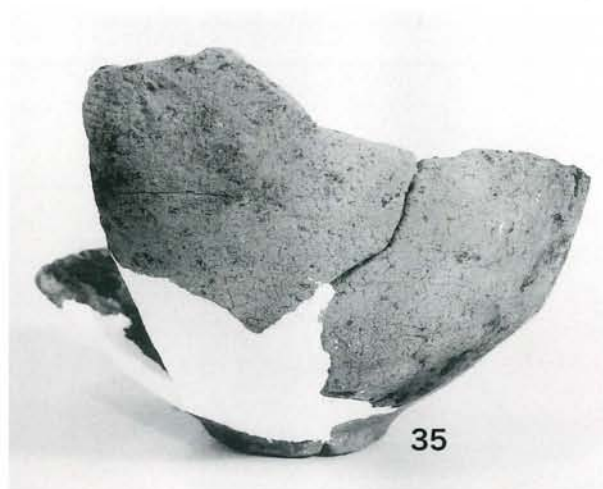
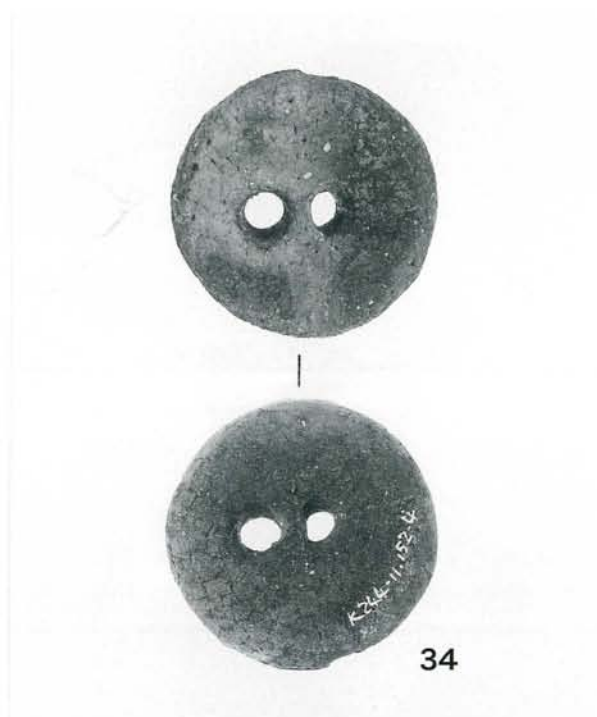


SX01 (北から)

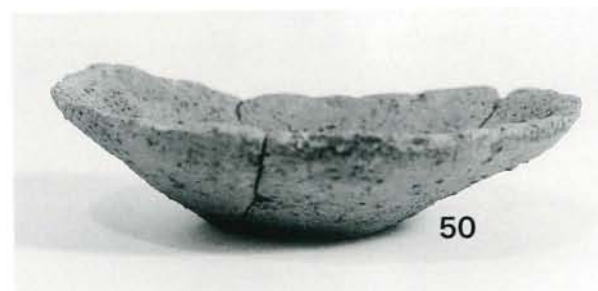
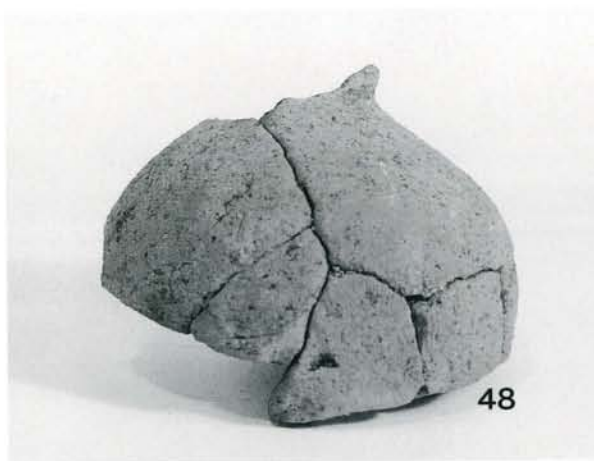
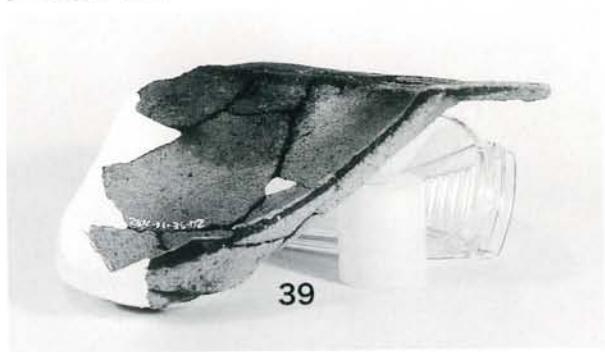
図版 11



図版 12



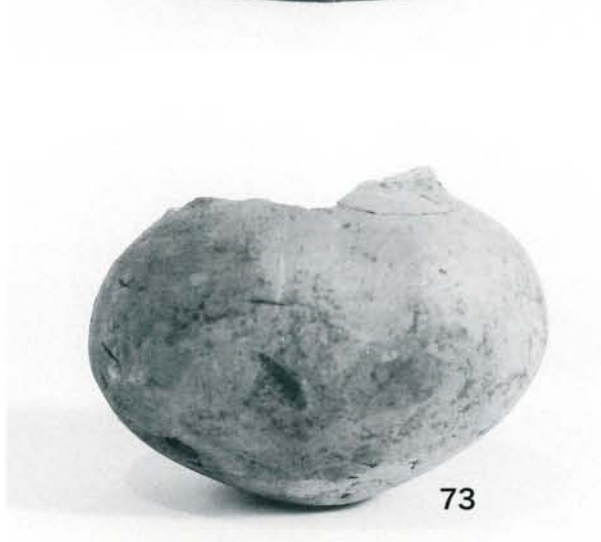
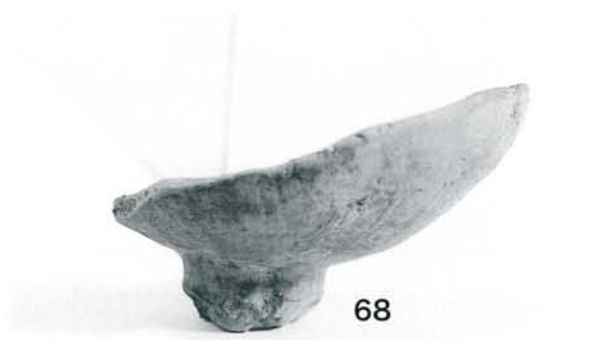
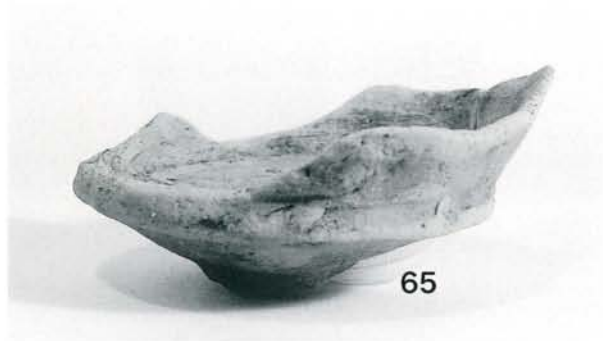
図版 13



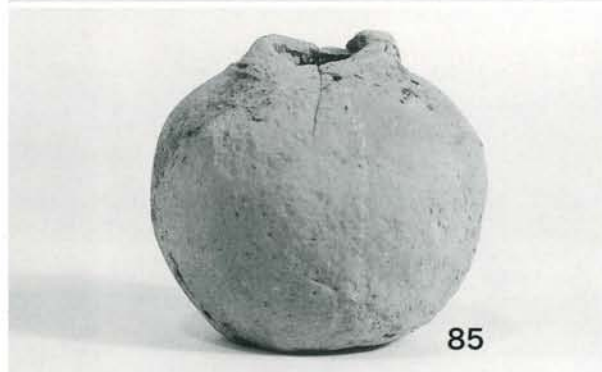
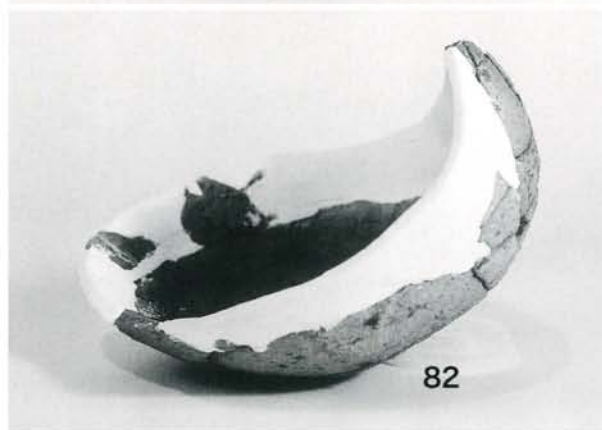
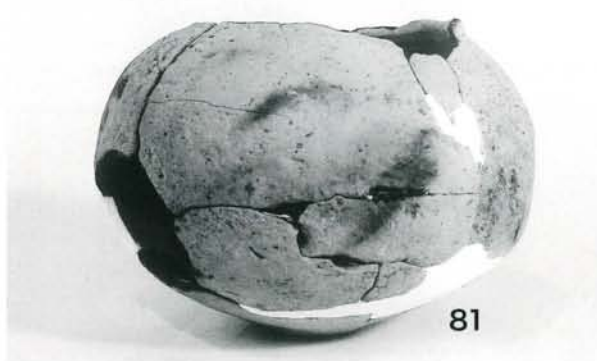
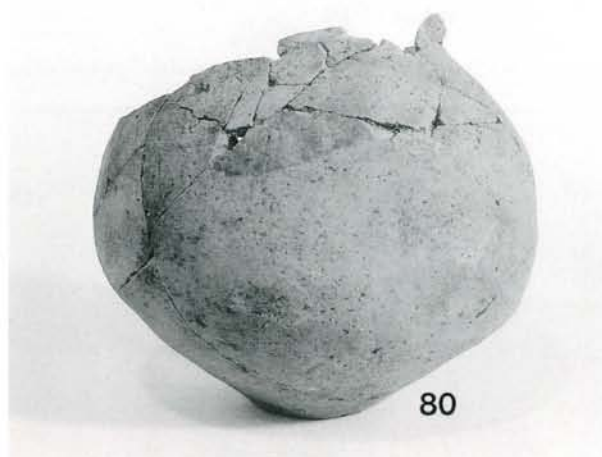
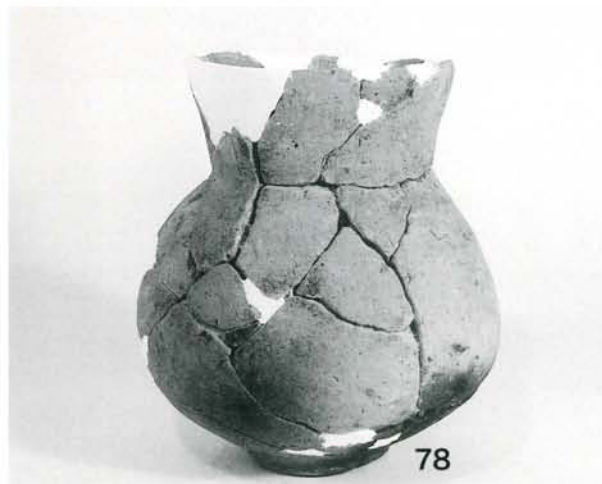
图版 14



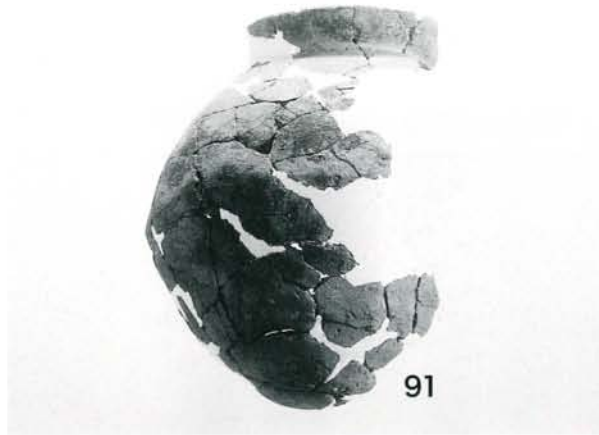
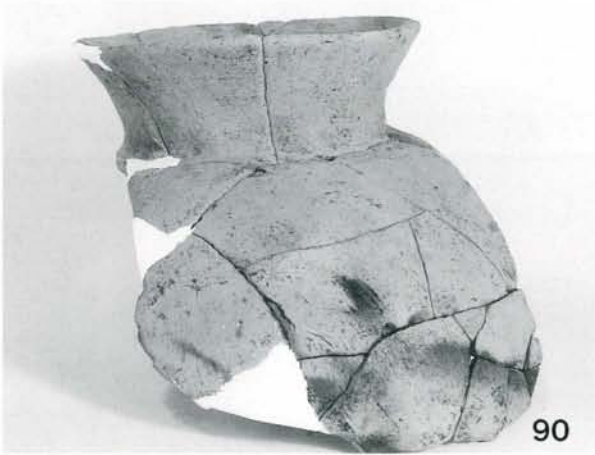
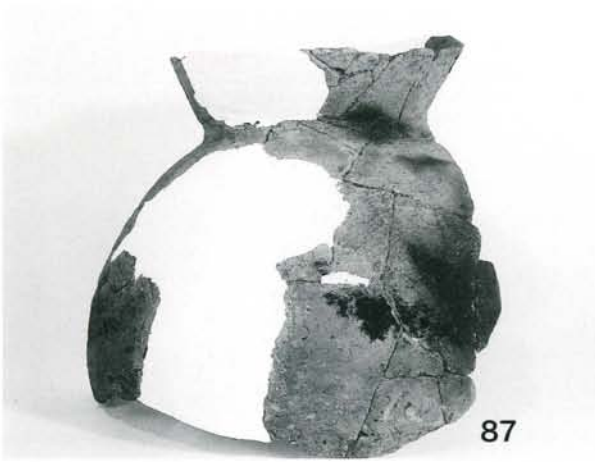
図版 15



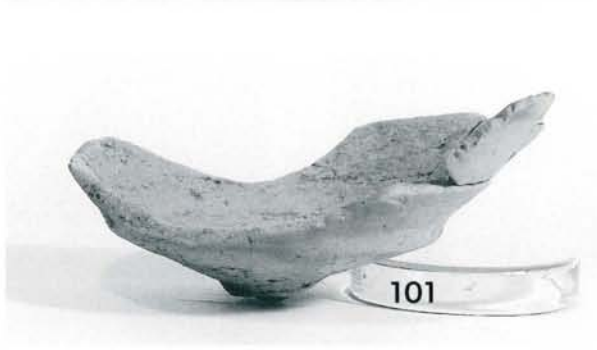
图版 16



図版 17



図版 18



图版 19



122



123



124



125



126



132



133

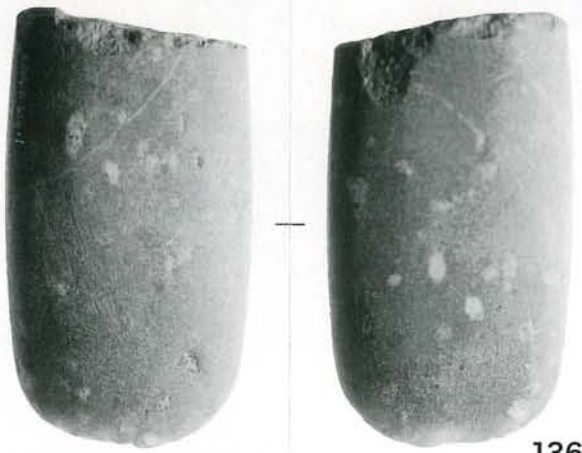


134

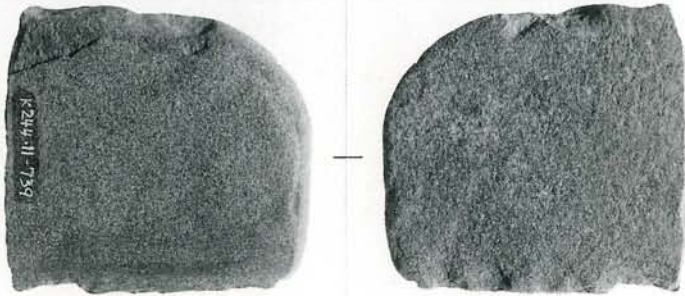
図版 20



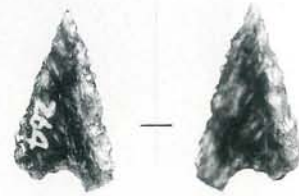
135



136



137



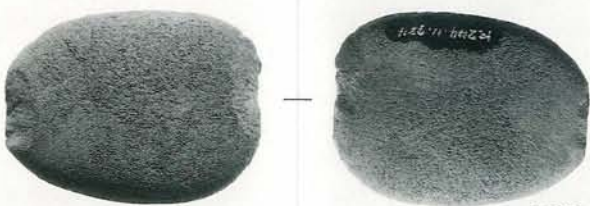
141



139



140



138



142

Ⅶ 吉岡原遺跡第6次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成18年4月、遺跡内で住宅の敷地を拡張するための農地転用申請書が提出され、5月30日に確認調査を実施した結果、地表下45cmから溝状遺構が検出された。平成18年6月15日に、記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。6月16日付けで、静岡県教育委員会から事業者に対し、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」通知された。

2. 調査の方法と経過

調査対象地が「L」字状を呈し、遺構の密度が低いことから、平面実測用の杭は打ったが、グリッドは設定しなかった。調査区の名称は、南北方向調査区、東西方向調査区とした。

現地での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1で行った。写真撮影は、35mmカメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。平成18年6月28日に耕作土除去のための機械掘削から開始した。7月12日に実測・写真撮影を終了し、現地調査を完了した。

3. 調査の内容

調査では、溝状遺構、柱穴を検出し、弥生土器、土師器が出土した。

i) 遺構の概要

1) 溝状遺構 (SD)

SD01 (第3図)

南北方向調査区のはぼ中央から検出された溝で、底面は北東方向から南西方向に緩く傾斜する。覆土から、234ページ第5図-3が出土した。

SD02 (第3図)

南北方向調査区のはぼ中央から検出された溝で、SD01・SP01を切る。覆土から、弥生土器か土師器か区別のつかないほどの小片が出土した。

SD03 (第3図)

南北方向調査区の南端近くから検出された溝で、底面は南東方向から北西方向に緩く傾斜する。覆土から、刺突による羽状文を施した壺の破片が出土した。

2) 柱穴 (SP)

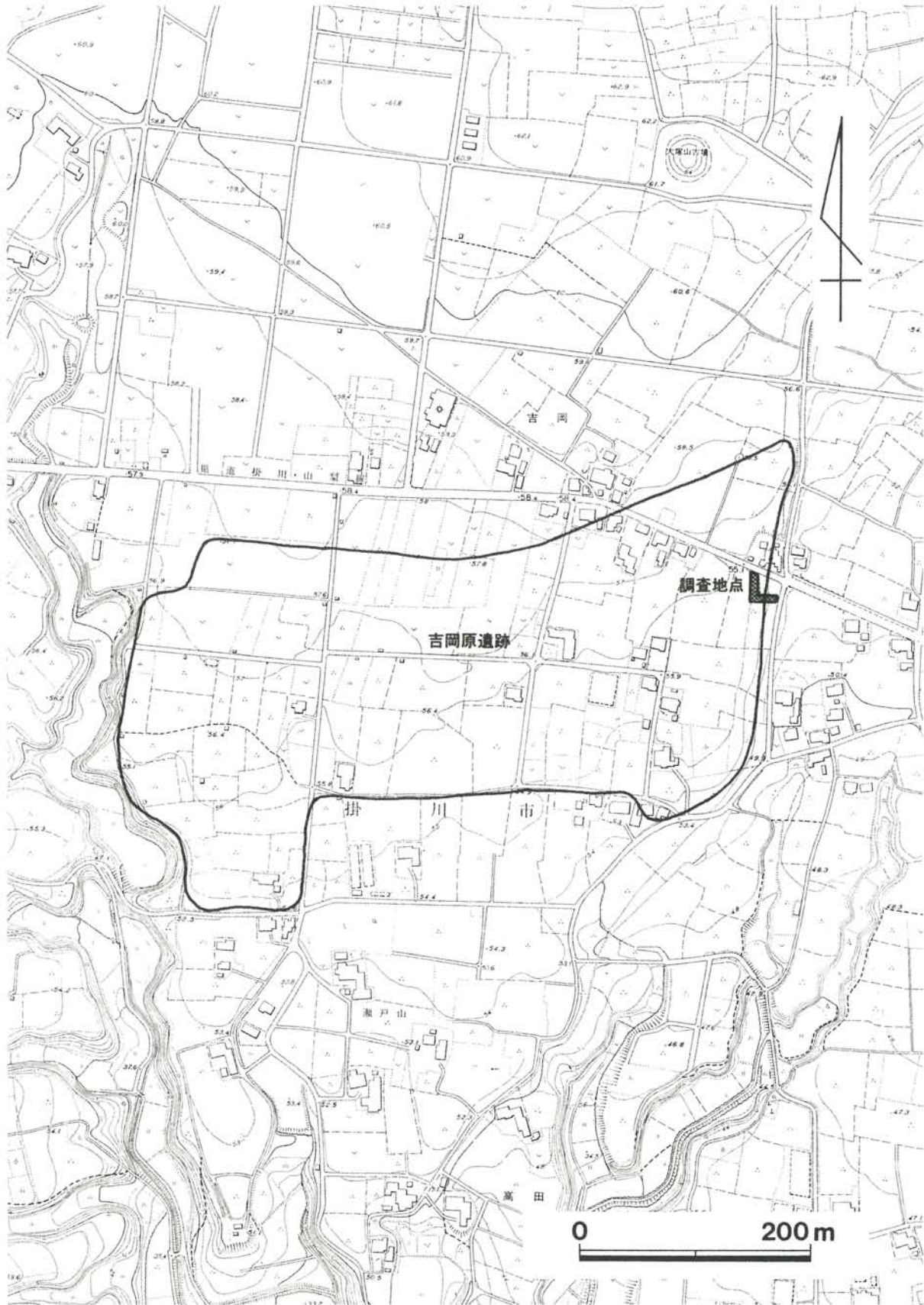
南北方向調査区の南端から、柱穴が3個検出された。これらは、確認面の直径約30cm、深さ24～34cmを測る。SP02から、弥生土器か土師器か区別のつかないほどの小片が出土した。

ii) 遺物の概要 (234ページ第5図)

234ページ第5図-3は、壺の頸部である。4は、表採されたS字甕で、口径14.0cmを測る。

4. まとめにかえて

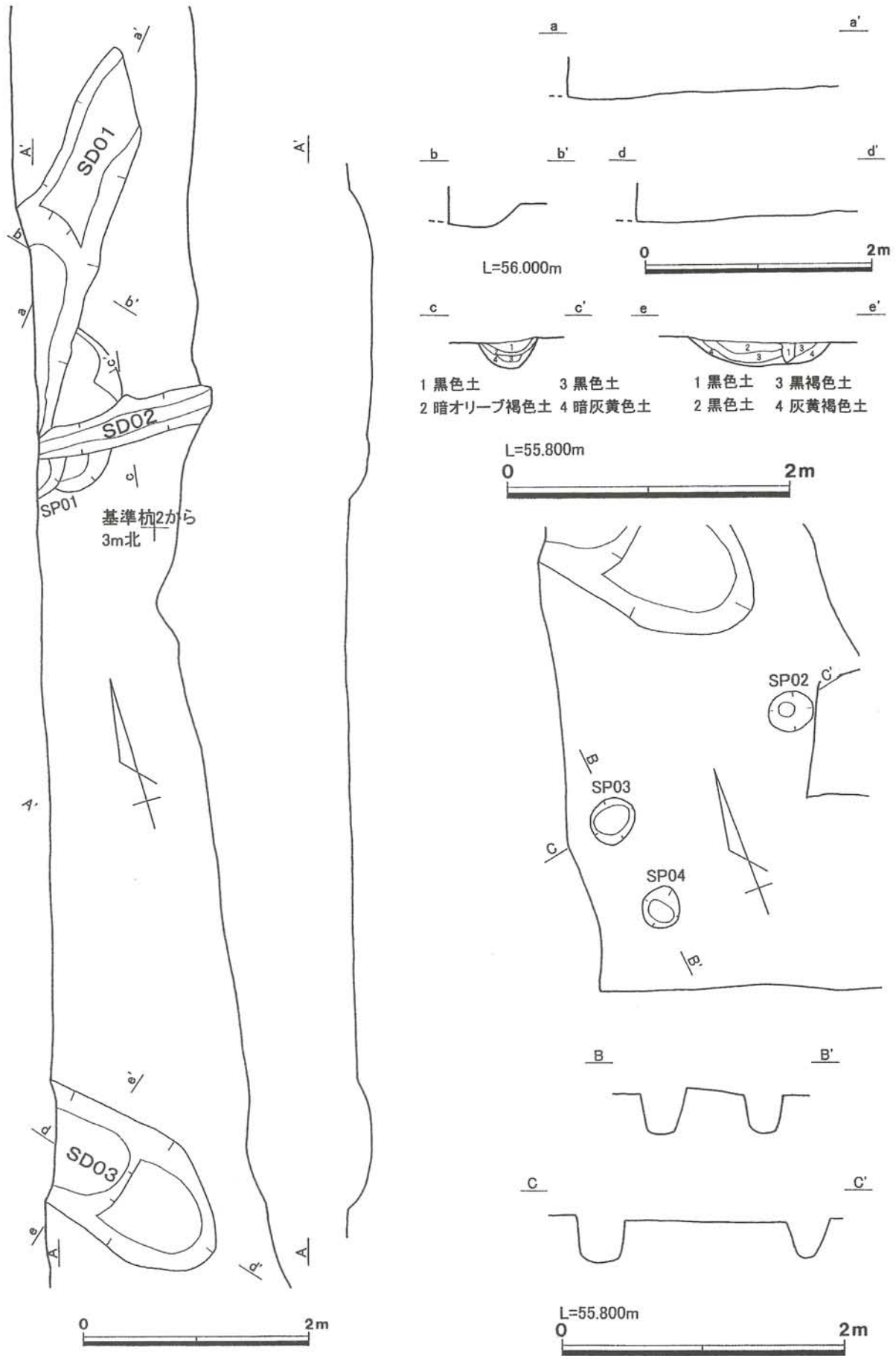
SD01・03は、方形周溝墓の周溝と考えられ、方台部の規模は、4.4m以上×7.8m以上と推定される。時期は、弥生時代後期に位置づけられる。



第1図 遺跡内における調査地点位置図



第2図 遺構全体図



第3図 SD01~03・SP実測図

図版 1



SD01・02,SP01完掘
(南から)



SD03,SP02完掘 (南から)



SP02~04完掘 (南から)

図版 2



SD01土層断面（北から）



SD02土層断面（東から）



SD03土層断面（東から）

Ⅷ 吉岡下ノ段遺跡第6次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成18年4月、遺跡内で住宅建築の計画に伴い、農地転用の申請書が提出された。5月31日に確認調査を行い、地表下50～60cmから溝状遺構等が検出された。6月15日、保護層が確保されない住宅部分と遺構が破壊されるスロープ部分については、本発掘調査が適当との副申を付けて、「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。6月15日付けで、静岡県教育委員会から事業者に対し、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」通知された。

2. 調査の方法と経過

調査対象地が、住宅部分とスロープ部分に分かれるため、住宅部分を北区、スロープ部分を南区とした。現地での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1で行った。写真撮影は、6×7カメラ1台（プロニー白黒用）と35mmカメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。6月30日に機械掘削から開始し、8月7日に機械による埋め戻しを行い、現地調査を終了した。

3. 調査の内容

調査では、土坑、柱穴、方形周溝墓を検出し、弥生土器、土師器が出土した。

i) 遺構の概要

1) 土坑 (SF)

SF02 (第3図・5図)

北区の中央北寄りから検出された土坑で、0.75m×1.2mの長円形を呈し、中央を南北方向の溝が切る。溝の覆土から、第5図-14の壺が出土した。

2) 柱穴 (SP)

調査区全域から柱穴状のものが検出されたが、不定形で浅いものが多く、遺構と断定できるものは少ないが、北区の北東から検出されたSP10・11・26は遺構の可能性が高い。SP10・11は、方形周溝墓の周溝覆土中で確認されたことから、方形周溝墓より新しい時期のものである。

3) 方形周溝墓 (SZ)

SZ01 (第4図・5図)

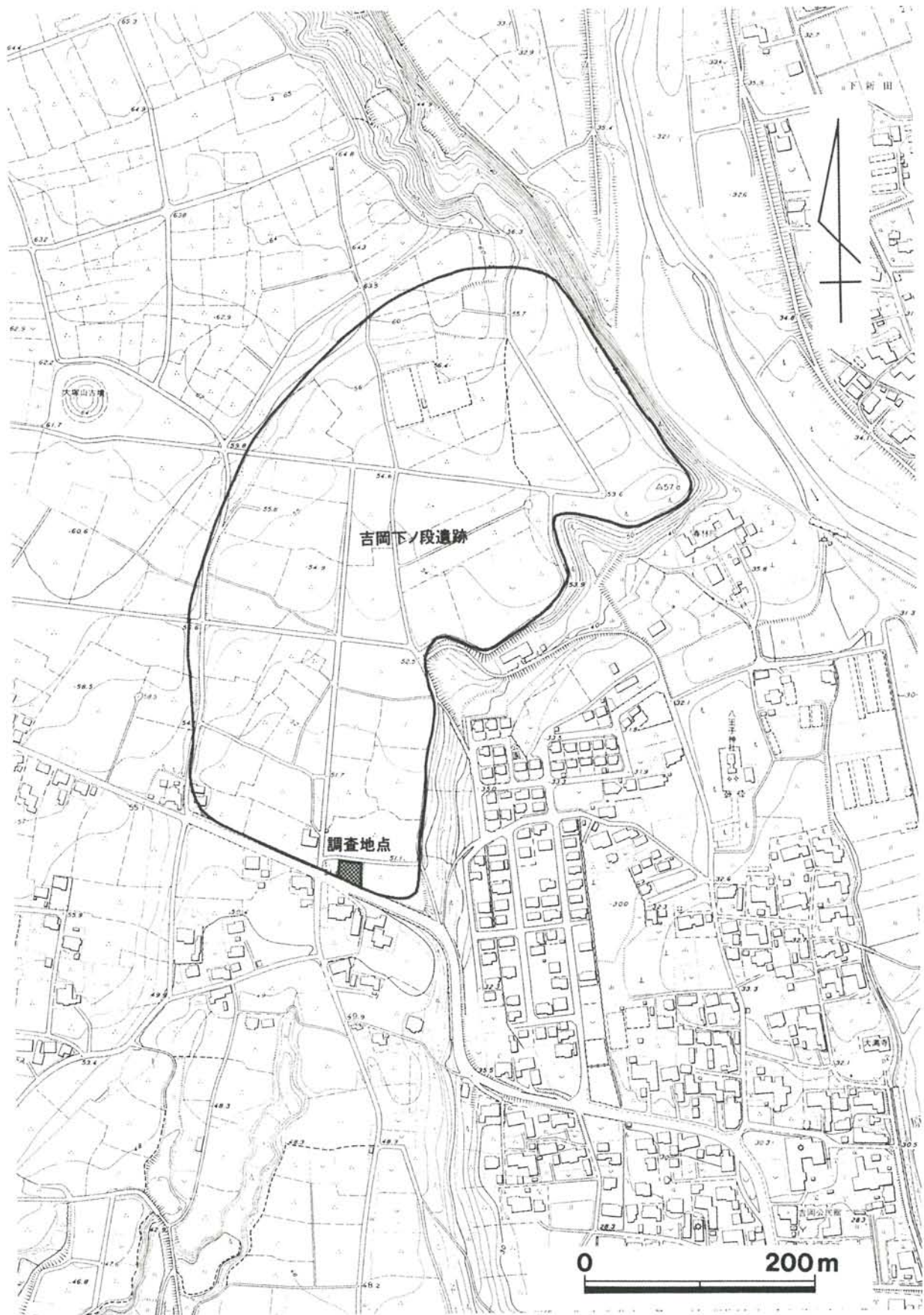
北区の東半から検出された方台部と周溝で、全容は不明である。周溝は、漸移層と考えられる黒褐色土(13層)を切って掘られている。周溝の方台部側の壁は鋭角で、外側の壁は緩やかに立ち上がる。周溝のコーナーの底面は、浅くなる。周溝の覆土から、第5図-5～13が出土した。

ii) 遺物の概要 (第5図)

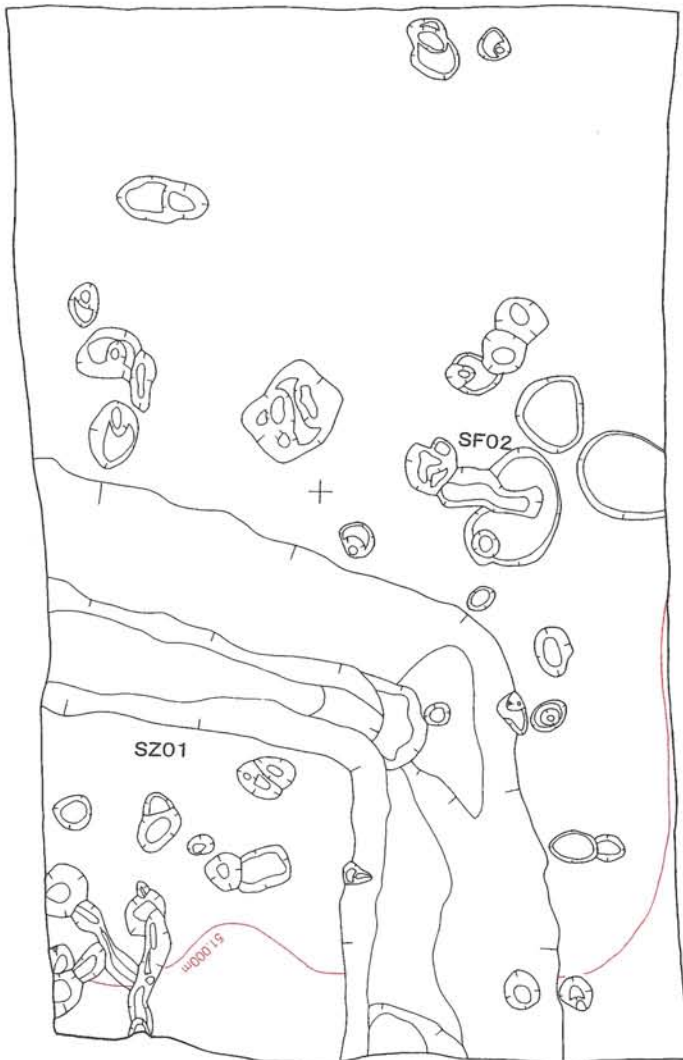
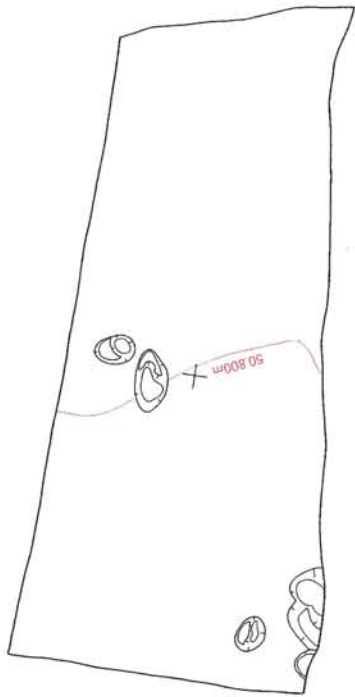
5～11は壺で、12・13は甕である。5の壺は、肩に形骸化した刺突羽状文が施される。5は古墳時代前期に、6～11・14は弥生時代後期に位置づけられる。

4. まとめにかえて

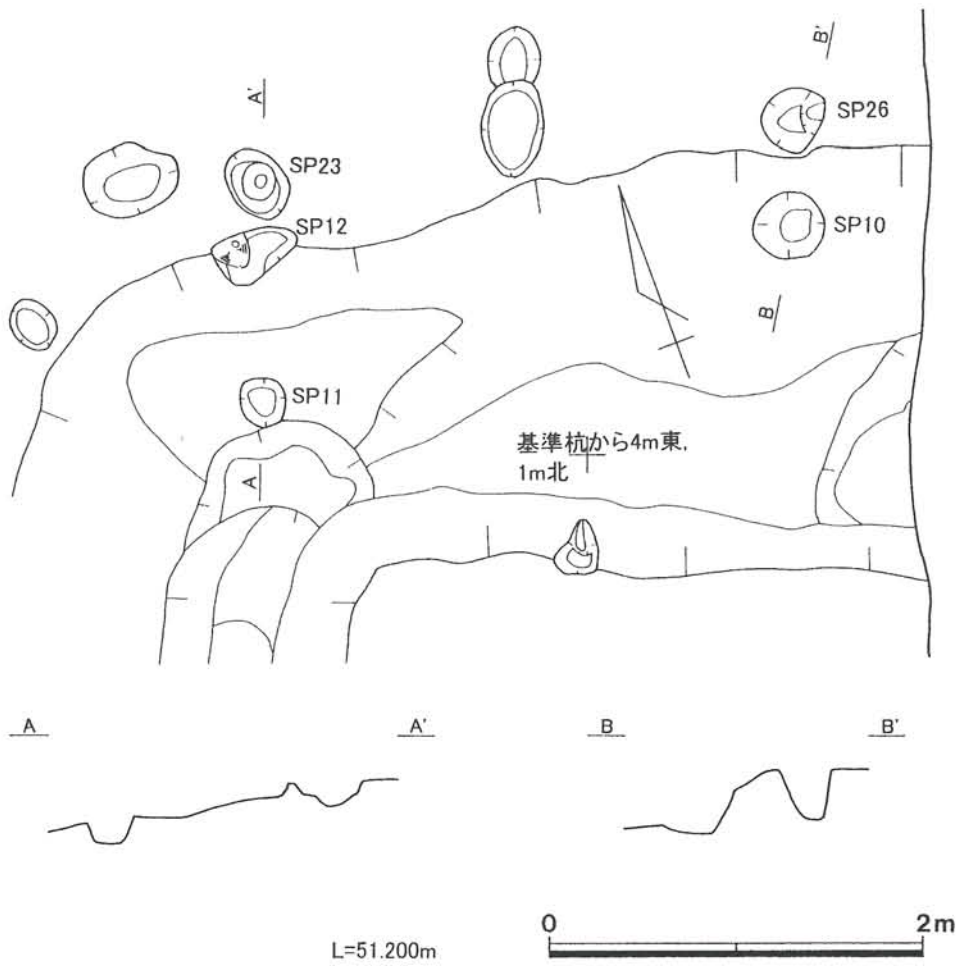
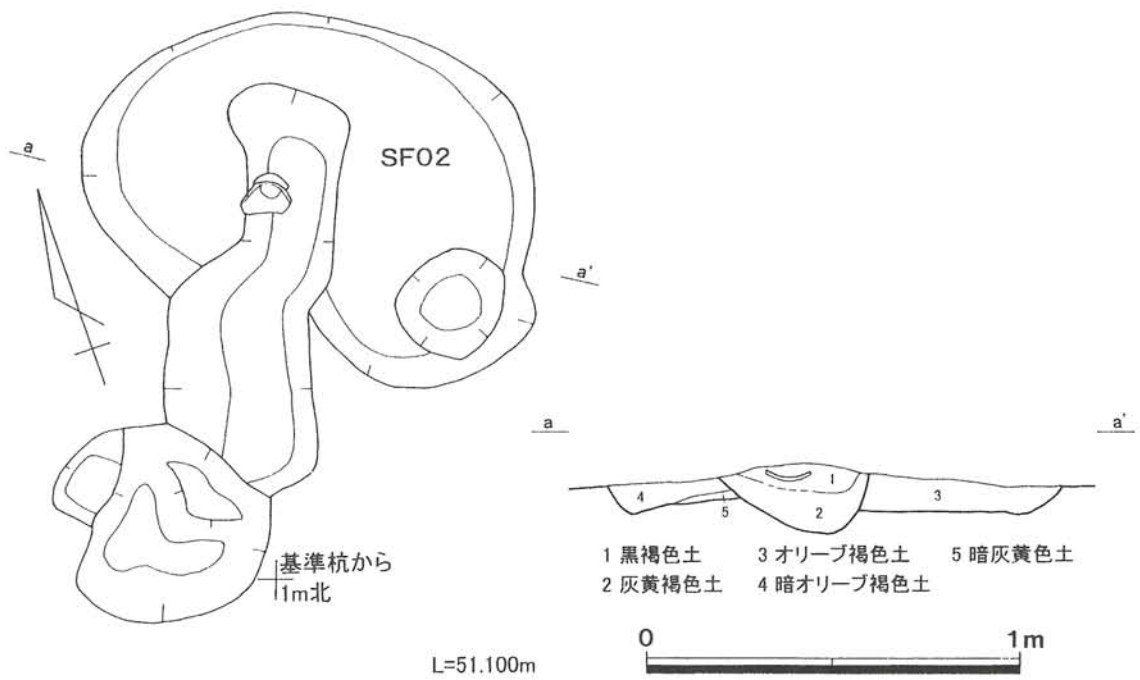
今回の調査では、柱穴の検出はわずかで、方形周溝墓が検出された。このことは、調査区周辺が、弥生時代の後期に墓域であった可能性が高いことを示していると考えられる。



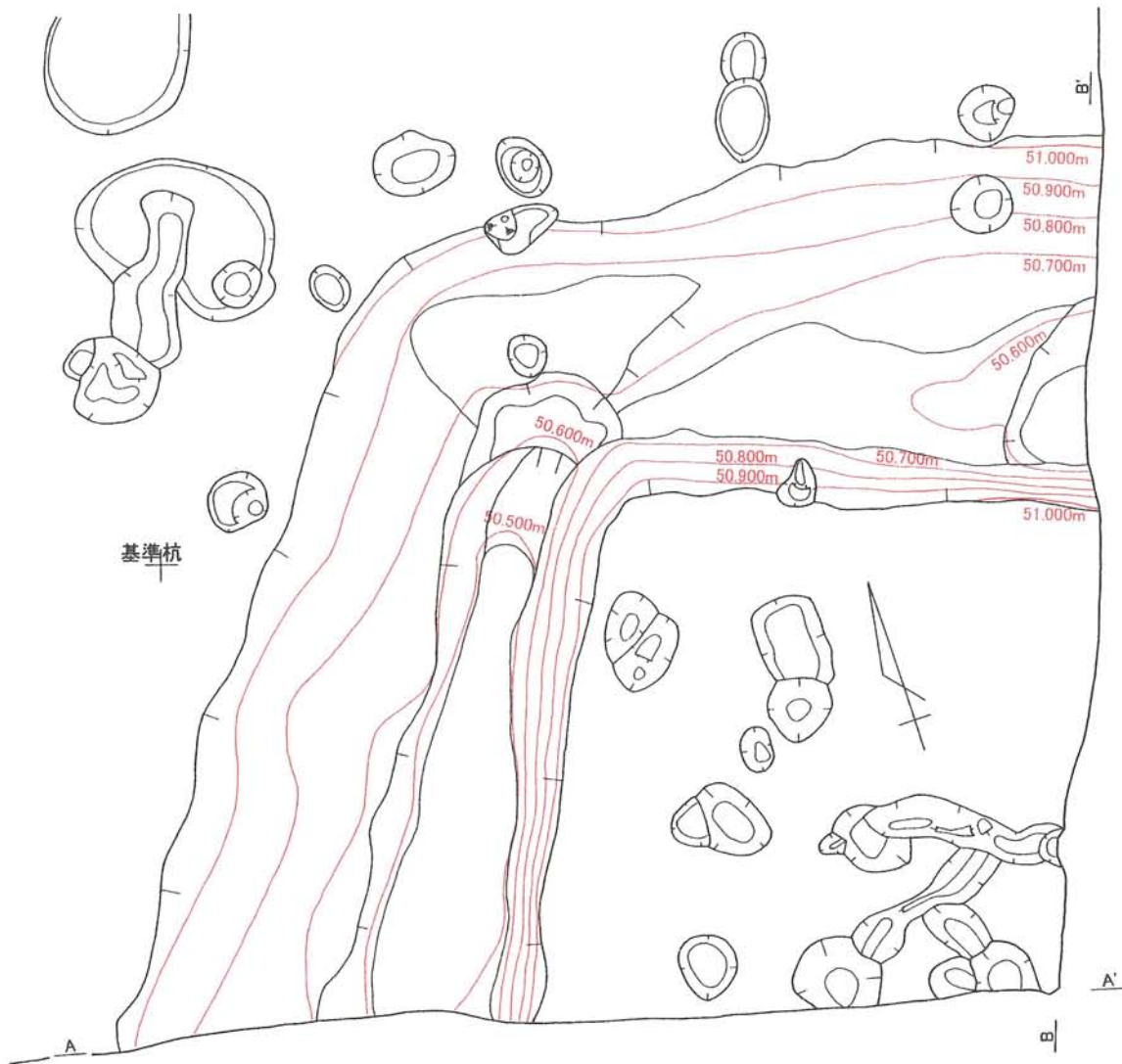
第1図 遺跡内における調査地点位置図



第2図 遺構全体図

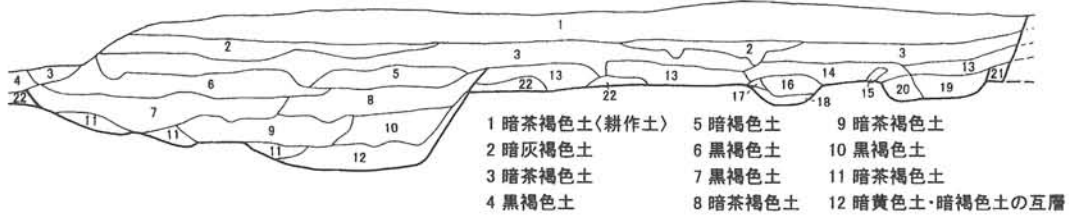


第3図 SF02,SP実測図



A

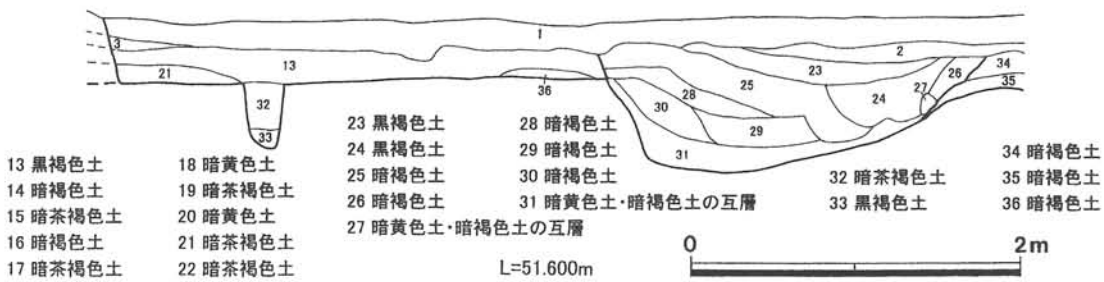
A'



- | | | |
|--------------|---------|-----------------|
| 1 暗茶褐色土(耕作土) | 5 暗褐色土 | 9 暗茶褐色土 |
| 2 暗灰褐色土 | 6 黒褐色土 | 10 黒褐色土 |
| 3 暗茶褐色土 | 7 黒褐色土 | 11 暗茶褐色土 |
| 4 黒褐色土 | 8 暗茶褐色土 | 12 暗黄色土・暗褐色土の互層 |

B

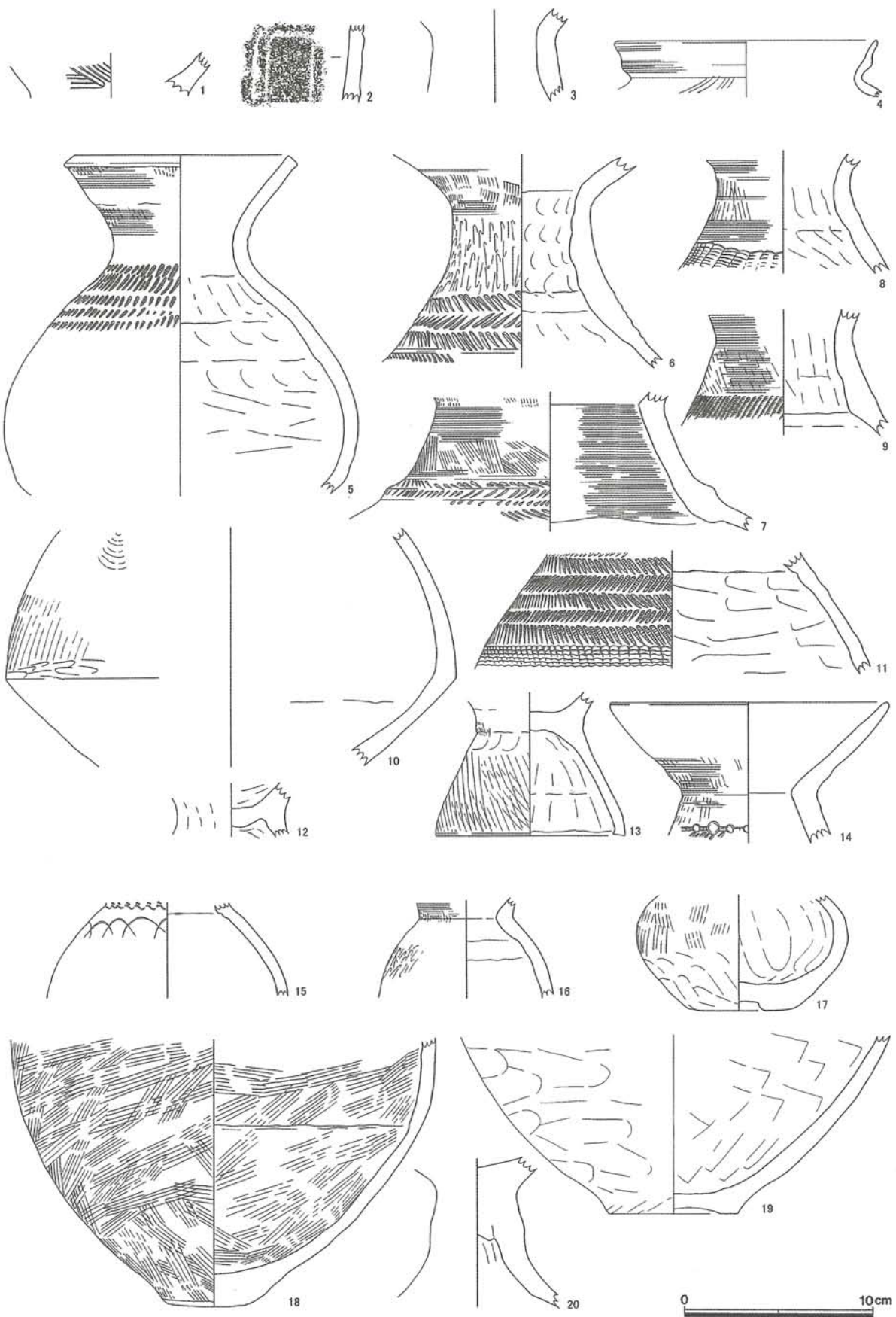
B'



- | | | | | |
|----------|----------|-----------------|-----------------|----------|
| 13 黒褐色土 | 18 暗黄色土 | 23 黒褐色土 | 28 暗褐色土 | 34 暗褐色土 |
| 14 暗褐色土 | 19 暗茶褐色土 | 24 黒褐色土 | 29 暗褐色土 | 35 暗褐色土 |
| 15 暗茶褐色土 | 20 暗黄色土 | 25 暗褐色土 | 30 暗褐色土 | 32 暗茶褐色土 |
| 16 暗褐色土 | 21 暗茶褐色土 | 26 暗褐色土 | 31 暗黄色土・暗褐色土の互層 | 33 黒褐色土 |
| 17 暗茶褐色土 | 22 暗茶褐色土 | 27 暗黄色土・暗褐色土の互層 | | 36 暗褐色土 |
- L=51.600m



第4図 SZ01実測図



第5図 遺物実測図

図版 1

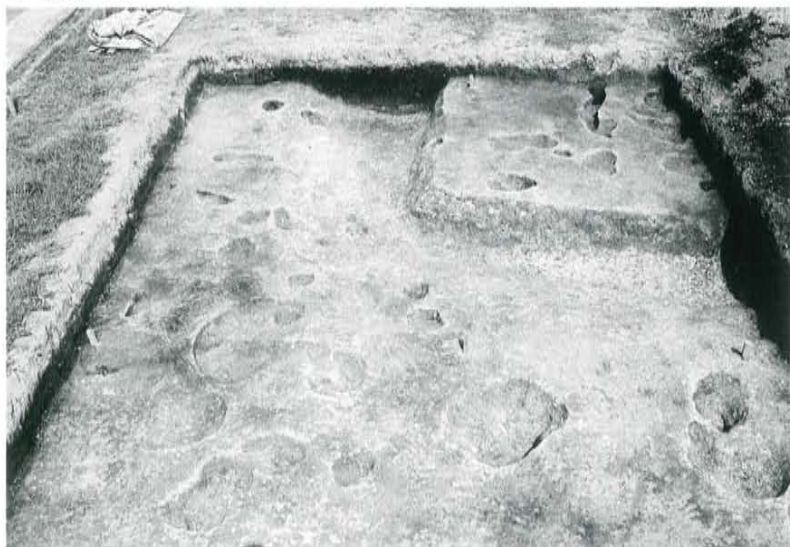


南区全景 (東から)



北区全景 (南西から)

図版 2



SZ01全景 (西から)



SZ01周溝土層断面 (西から)

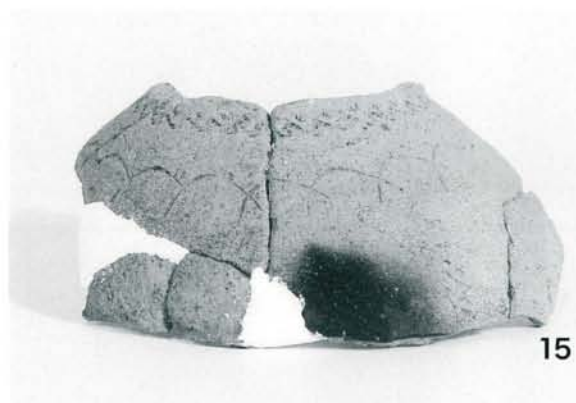


作業風景

图版 3



図版 4



IX 女高 I 遺跡第 10 次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成 18 年 6 月、女高 I 遺跡内で個人住宅建築・下取り車のストック場建設の計画に伴い、農地転用の申請書が提出された。7 月 24 日に確認調査を実施した結果、地表下 40～50 cm から溝状遺構、竪穴住居跡が検出され、弥生時代後期と考えられる土器が出土した。そこで、遺跡の保護・保存のため、住宅の建築位置の変更について協議したが、計画変更は困難という結論に至った。

平成 18 年 8 月 31 日に、保護層が確保されない住宅部分については、本発掘調査が相当との副申を付けて、「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。9 月 22 日付けで、静岡県教育委員会から事業者に対し、住居部分については本発掘調査実施とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」通知された。

そこで、記録保存のための発掘調査を実施した。

2. 調査の方法と経過

調査対象地のほぼ中央に基準となる杭を打ち、平面実測を行った。遺物は、基準杭を基に 4 分割し、基準杭の北西を 1 区、北東を 2 区、南西を 3 区、南東を 4 区として取り上げを行った。

現地での図面作成は、遺構図を縮尺 20 分の 1、微細図は 10 分の 1 とした。写真撮影は、6×7 カメラ 1 台（ブローニー白黒用）と 35 mm カメラ 2 台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

平成 18 年 9 月 25 日に耕作土除去のための機械掘削から開始し、11 月 30 日に機械による埋め戻しを行い、現地調査を終了した。

3. 調査の内容

調査では、柵列、竪穴住居跡等を検出し、弥生土器、土師器が出土した。

ここでは、遺構、遺物の順に概要を述べる。

i) 遺構の概要

40～60 cm の厚さの耕作土の下に、中央を東西に横切る幅 3.15m、深さ 55 cm の攪乱溝（2・3 層）が存在した。また、東端近くにも改植に伴うと考えられる攪乱があり、遺構の残存状況は良好ではなかった。

第 2 図の土層断面中、4～6 層は、攪乱の可能性が高く、包含層・遺構と考えられるのは、7・8～14 層である。15 層は、地山である。

1) 柵列 (SA)

SA01 (第 2 図・4 図)

調査区東端から検出された SP19・21・18 で、SP19 の南側は改植による攪乱を受けているため、さらに南に延びるかは明確にできなかった。SP19 と SP18 を結んだ軸の方位は、N-8°-W を測る。柱間は、SP19・21 間で 1.48m、SP21・18 間で 1.22m を測る。

柱穴は、直径 35～39 cm、確認面からの深さ 38～48 cm を測る。柱穴の覆土は、黒褐色土・暗オリーブ褐色土・褐灰色土である。SP18・19 から、弥生土器か土師器か区別のつかない小片が出土した

2) 竪穴住居跡 (SH)

SH01 (第 3 図)

調査区の南西隅で検出された竪穴住居跡で、炉跡は検出されなかった。住居跡の南壁から東壁までが残存していて、南壁は湾曲し、東壁は直線状を呈する。

住居跡の残存状況は良好ではなく、最も残りの良いところでも確認面から床面まで 11～12 cmの深さしかない。床面から掘り方までは、3～8 cmの深さを測る。掘り方上に、黒褐色土・褐灰色土を厚いところで 5 cm程度入れ、その上に黒褐色土を 2～3 cm入れて、床面をつくっていた。

主柱穴は、S P 36・35・26 が想定される。主柱穴間の距離は、S P 36・35 間で 1.67m、S P 36・26 間で 1.79mを測る。北東隅に位置する浅い皿状の S P 40 は、貯蔵穴の可能性がある。

床面から、234 ページ第 5 図-15 が出土した。

3) 柱穴 (S P)

調査区の南壁近くに、直径 40 cm前後、確認面からの深さ 18～40 cmの柱穴が集中する (第 2 図・4 図の C-C' ライン)。また、中央の南北方向には、直径 42～57 cm、確認面からの深さ 8～37 cmの柱穴が並ぶようにみえる (第 2 図・4 図の D-D' ライン) が、掘立柱建物等に抽出できるものはない。調査区東端近くの南北方向に、直径 40～56 cm、確認面からの深さ 31～38 cm、柱穴間の距離 2.1～2.3 mを測る比較的大型の柱穴が存在する (第 2 図・4 図の F-F' ライン)。しかし、調査区内で建物として復元できる組み合わせはなかった。

4) 性格不明の遺構 (S X)

S X 0 6 (第 3 図)

調査区の北東隅から検出された。黒色土を掘削中に土器片の集中がみられ、土器片の下から地山を 2 cm程度掘り込んだ浅い掘り方が検出された。掘り方のほぼ中央から、直径 40～45 cm、深さ 17 cmの掘り込みが確認された。234 ページ第 5 図-16 が出土した。

S X 0 7 (第 3 図)

S X 06 の東約 75 cmの位置に、S X 06 同様、黒色土の掘削中に土器片の集中がみられた。土器片の下からは、地山を 8 cm程度掘り込んだ長方形の土坑が現れた。南端に直径約 20 cm、深さ 13 cmの小穴があるが、切り合いは不明である。234 ページ第 5 図-17 が出土した。

ii) 遺物の概要 (234 ページ第 5 図)

15 の壺は、肩に結節縄文と工具による連続する山形の文様を施す。古墳時代前期に位置づけられる。

16 の壺は、体部外面にミガキを施す。古墳時代中期に位置づけられる。

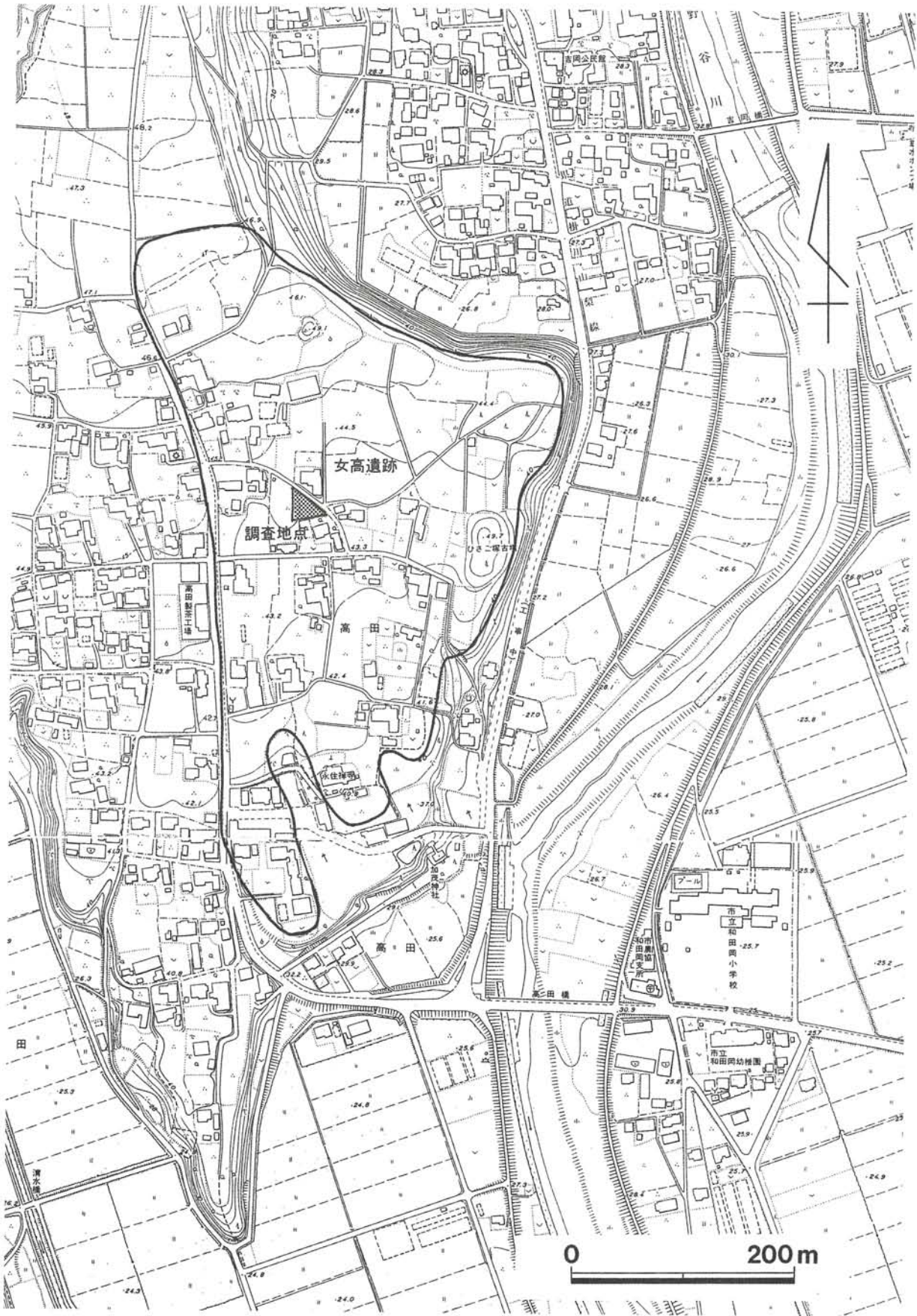
17 の壺は、体部最大径 11.3 cmを測る。体部外面の上半は、ハケ後ナデ、下半はナデを施す。内面に指頭痕が明瞭に残る、縦方向のナデを施す。器壁を厚くつくる。古墳時代中期に位置づけられる。

18・19 は、北壁の 12 層中から出土した甕である。18 は、体部最大径 22.8 cm、底径 5.6 cmを測り、内外面をハケ調整する。底部は丸味を帯び、安定が悪い。底部近くから体部全体に煤が付着する。19 は、底径 6.9 cmを測り、内外面に工具ナデを施す。体部から底部外面にかけて、煤が付着する。18・19 は、古墳時代中期に位置づけられる。

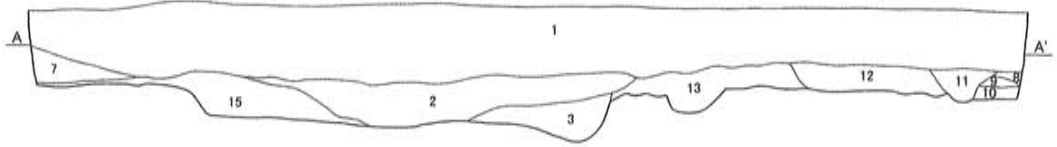
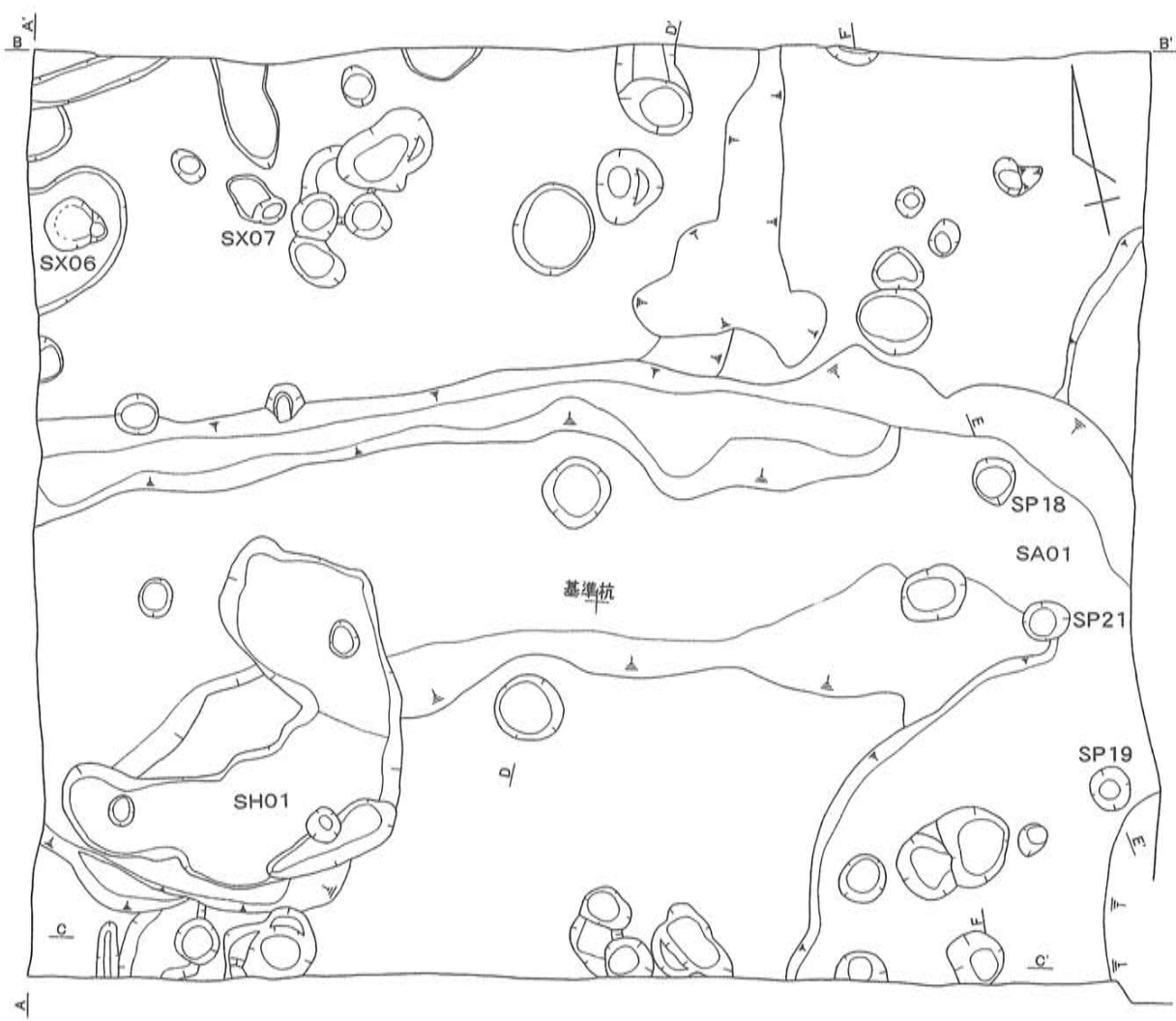
20 は、排土中から発見された古墳時代中期に位置づけられる高坏である。

4. まとめにかえて

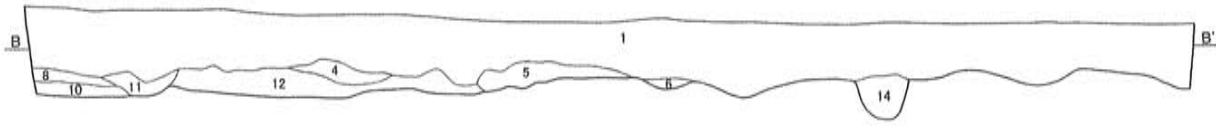
古墳時代前期に位置づけられる竪穴住居跡が検出され、弥生時代後期～古墳時代中期の土器が出土した。遺構は明確ではないが、古墳時代中期の煤が付着した甕が出土したことにより、今回の調査地点周辺では検出例が少ない、この時期の人間の営みがあったことが明らかとなった。



第1図 遺跡内における調査地点位置図



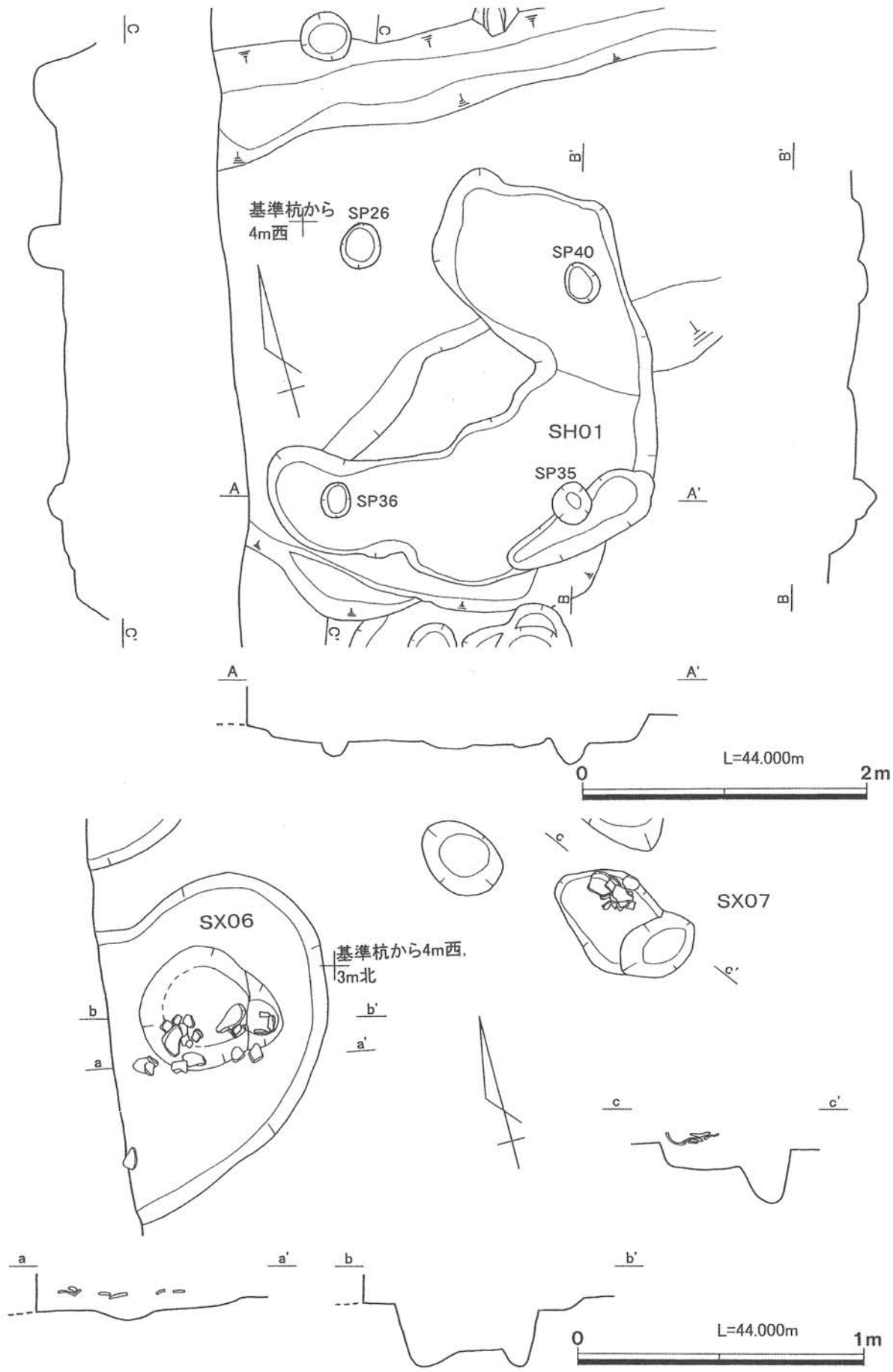
- | | | |
|-------------|---------|---------|
| 1 褐灰色土(耕作土) | 6 褐灰色土 | 11 黑褐色土 |
| 2 褐灰色土(攪乱溝) | 7 黑褐色土 | 12 黑褐色土 |
| 3 灰黄褐色土 | 8 黑色土 | 13 黑色土 |
| 4 褐灰色土 | 9 黑褐色土 | 14 黑褐色土 |
| 5 黑色土 | 10 黑褐色土 | 15 褐色土 |



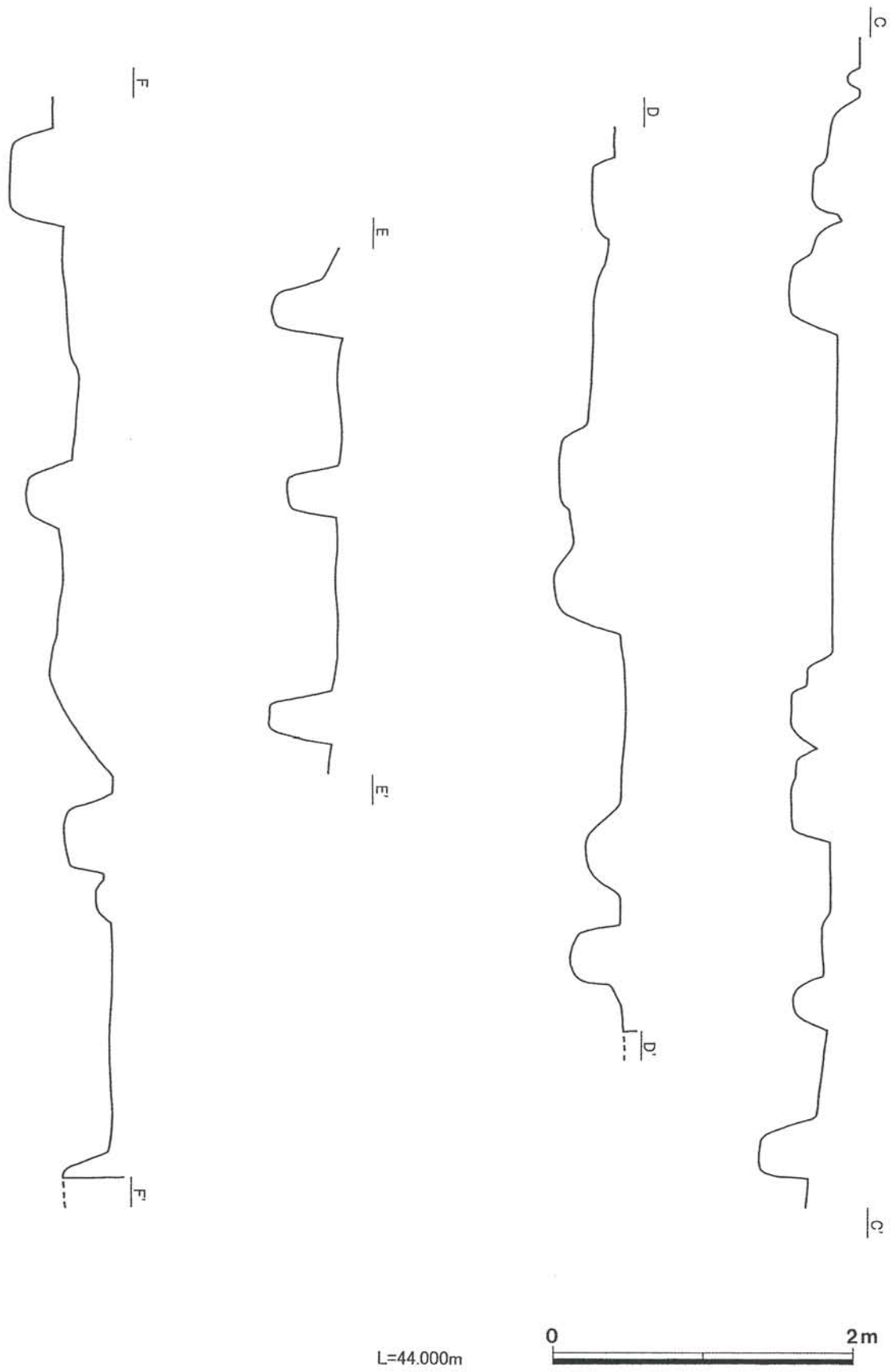
L=44.200m



第2図 遺構全体図

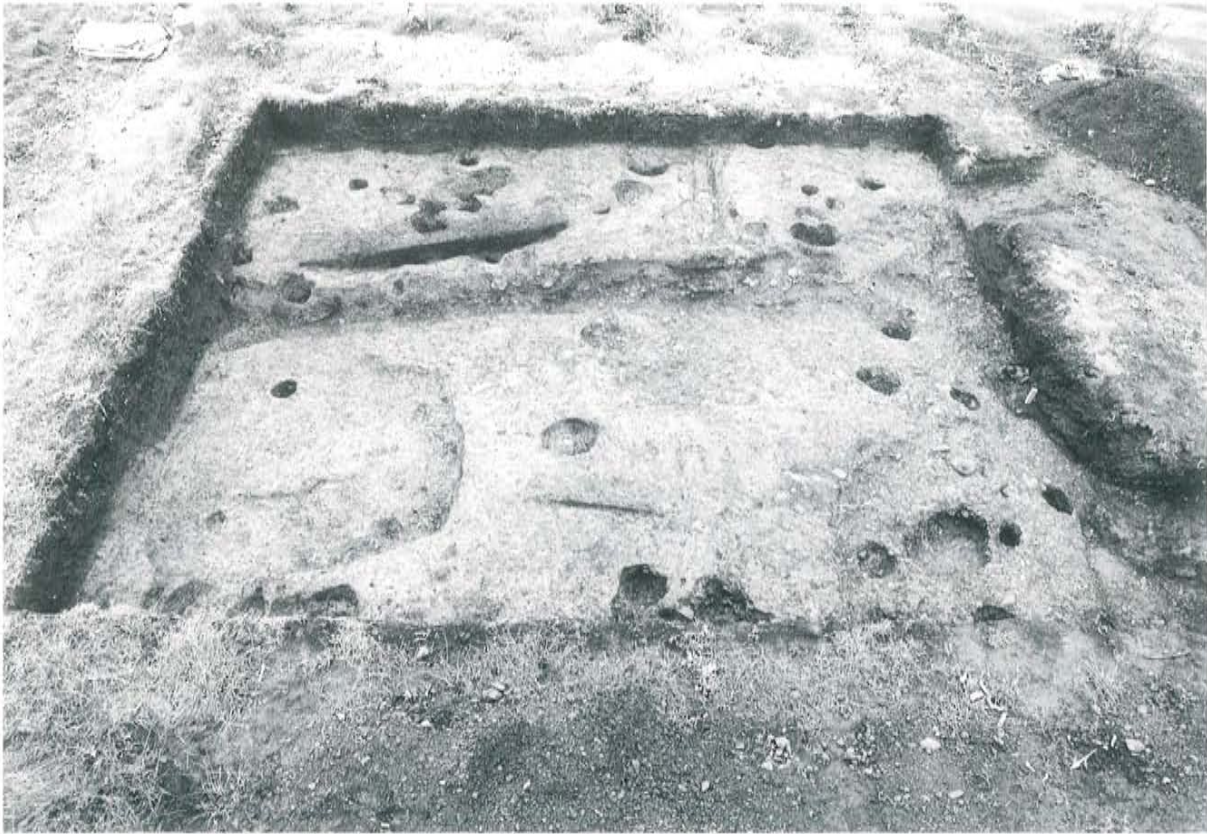


第3図 SH01, SX06・07実測図

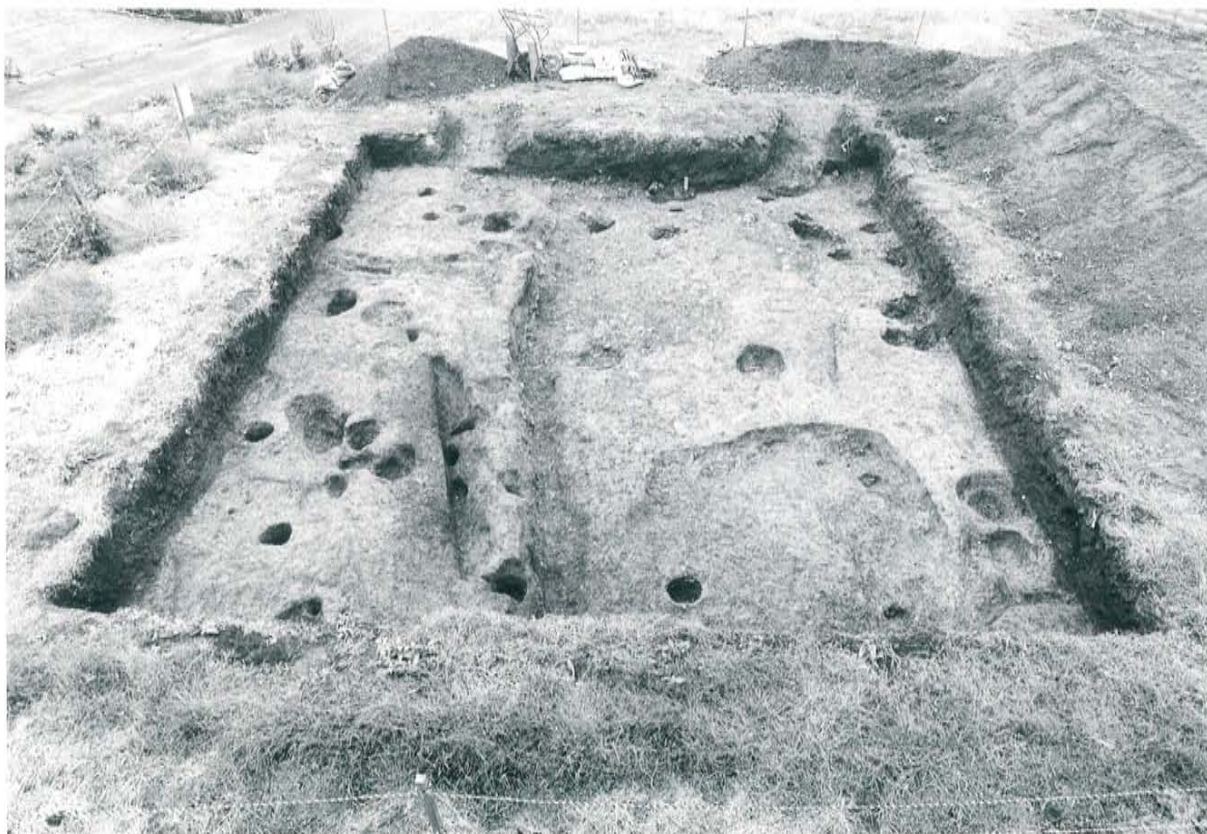


第4図 柱穴実測図

図版 1

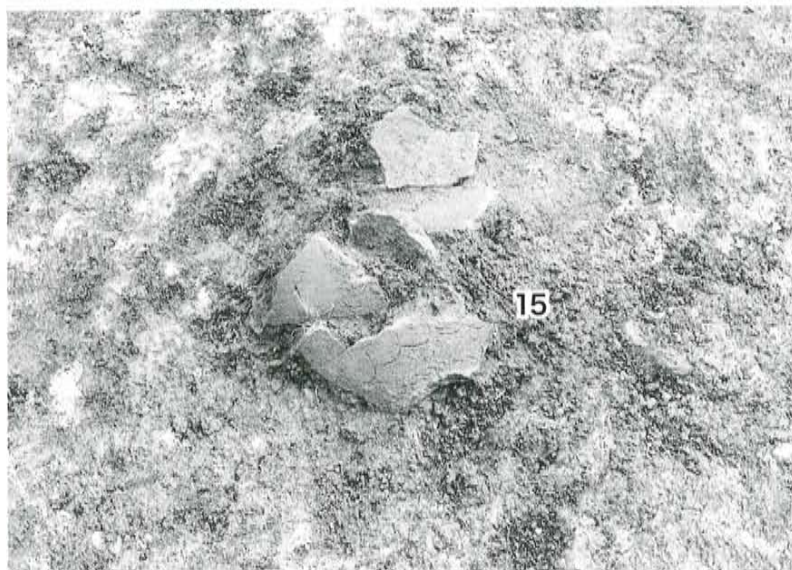


調査区全景 (南から)



調査区全景 (東から)

図版 2



SH01床面の土器（西から）



SX06内遺物（東から）



SX07内遺物（西から）

X おわりに

今回の発掘調査の成果と課題を挙げて、締めくくりとしたい。

1. 成果について

i) 高田遺跡第17次調査

市内で4例目、和田岡地区では中原遺跡に次ぎ2例目の発見となる縄文時代中期の石囲い炉をもつ竪穴住居跡の発見である。

弥生時代後期の土器棺墓・土坑墓の発見である。土器棺墓・土坑墓の同時性と時期差の課題はあるが、この時期の集落の端にあたることが明らかとなった。

弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる大型の掘立柱建物跡S B03の検出である。S B03は、約4.3m×6.2mの規模があり、当該期では市内最大の掘立柱建物跡である。

古墳時代前期に位置づけられる大型の竪穴住居跡S H05・06の検出である。S H05は、推定7.5m×8.4mの規模で、S H06は7.45m×8.25mを測り、市内で最大級である。

ii) 高田遺跡第19次調査

弥生時代後期に位置づけられる竪穴住居跡を検出したことにより、当該期の集落の存在が明らかとなった。今回の調査地点の南約200mの丘陵縁辺部で、平成5年度に実施した高田遺跡第5次調査においても、弥生時代後期～古墳時代前期に営まれた集落跡を検出して、同一集落の可能性はある。今回の第19次調査・第5次調査ともに、夥しい数の柱穴が検出されている。過去の発掘調査は、第5次・第19次調査と同一丘陵の東側縁辺部が多く、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を検出している。検出された柱穴の数は、西側縁辺部の第5次・第19次調査が、東側縁辺部を上回っている。

古墳時代中期のゴミ穴の検出である。このゴミ穴の検出により、付近に当時の居住域が推定されることとなった。高田遺跡から発見された古墳時代中期の遺構は、今回報告した第17次調査のS H11と、S H11の覆土を切り紡錘車型石製模造品が混入していた遺構だけである。

iii) 高田遺跡第20次調査

調査により出土した土器は、縄文時代中期、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期がある。

調査地点の包含層はすでに失われていて、耕作土下は地山であった。どの程度削平を受けたか推測も不可能であるが、竪穴住居跡の掘り方は確認されなかった。

市内の弥生時代中期の土器は、集落跡・墓跡である原川遺跡を除き、墓跡からの出土である。今回の調査地点からは、墓跡と考えられる遺構は検出されていないので、原川遺跡同様、掘立柱建物で構成される集落が存在した可能性がある。

IV) 吉岡原遺跡第7次調査

弥生時代後期の竪穴住居跡が検出され、住居内から砥石が出土した。これは、この時期に鉄器が普及していたことの傍証になると考えられる。

弥生時代後期の竪穴住居跡S H14からガラス玉が出土した。この時期のガラス玉は、墓跡からは出土していたが、住居跡からの出土は市内初である。

市内2例目の発見となる布掘りの掘立柱建物跡の検出である。布掘りの掘立柱建物跡は、本調査地から350mほど北で平成9年度に調査された溝ノ口遺跡から検出されているにすぎない。

V) 女高I遺跡第11次調査

弥生時代後期～古墳時代中期までの竪穴住居跡を検出し、土器が出土したことにより、当地域にお

ける当該期の土器編年に寄与すると考えられる。

古墳時代前期の方形周溝墓が検出され、周溝内から古墳時代前期～中期中葉までの土器が出土した。周溝内からは、土器だけでなく、ミニチュア土器、石製模造品、ガラス玉、砥石が出土した。土器の中には、体部に煤が付着していて、使用されたと考えられる甕が多数含まれていた。砥石は、破損して廃棄されたようである。

VI) 吉岡原遺跡第6次調査

上位段丘の縁辺から弥生時代後期と考えられる方形周溝墓が検出された。1基単独の可能性がある。

VII) 吉岡下ノ段遺跡第6次調査

弥生時代後期の方形周溝墓1基と柱穴が検出され、弥生時代後期の墓域と考えられる。

VIII) 女高I遺跡第10次調査

古墳時代前期の竪穴住居跡を検出し、古墳時代中期の甕が出土した。古墳時代中期の遺物の出土は、女高I遺跡・高田遺跡内では、まだ数少なく、貴重な発見である。

課題について

枚挙にいとまがないので、掘立柱建物跡と方形周溝墓に絞ることとする。

i) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、高田遺跡第17次調査で11棟、19次調査で1棟、20次調査で4棟、吉岡原遺跡第7次調査で4棟、女高I遺跡第11次調査で5棟が検出された。

このうち、高田遺跡第17次調査・吉岡原遺跡第7次調査・女高I遺跡第11次調査の掘立柱建物跡の中には、2棟で対になっていると考えられるものが存在する。高田遺跡第17次調査のSB03・08は、東側の柱筋を揃えていると考えられる。吉岡原遺跡第7次調査では、SB01と02、SB03と04は、隣接して建てられ、方位を同一にしている。女高I遺跡第11次調査では、SB02と03が東側の柱筋を揃え、SB04と05は並行して建てられていると考えられる。

今後、掘立柱建物の機能等について、解明していかなければならない。

ii) 方形周溝墓

今回報告した方形周溝墓は、高田遺跡第19次調査、吉岡原遺跡第7次調査、吉岡下ノ段遺跡第6次調査、女高I遺跡第11次調査のそれぞれ1基ずつである。女高I遺跡第11次調査が、古墳時代前期に降るほかは、弥生時代後期に位置づけられる。弥生時代後期の高田遺跡第19次例は、丘陵の縁辺に1基単独で造られていて、吉岡原遺跡第7次例は上位段丘の縁辺に1基単独の可能性が高い。吉岡下ノ段遺跡第6次例は、丘陵縁辺から50～60m離れているが、1基単独で造られている可能性がある。

市内で発見された弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓の中には、群れから離れて、1基単独で丘陵縁辺に造られているものがあり、市内における古墳出現前夜の動向と考えていた。高田遺跡第19次例・吉岡原遺跡第6次例は、これと共通する動向と捉えていた。

ところが、今回、女高I遺跡第11次調査で検出した方形周溝墓は、丘陵縁辺から200mも離れた位置に造られていた。今後、調査例の増加を待ち、検討を加えたい。

平成19年度も、和田岡地区では茶園の改植に伴い3個所の発掘調査を実施した。この調査により、新たな知見を得ることができたが、一方で新たな課題も生まれている。

今後、知見を積み重ね、課題を解決していくことによって、中期古墳と考えられる国史跡和田岡古墳群が形成された背景にたどりつけるものと確信している。

1. はじめに

掛川市の高田遺跡第17次調査では縄文時代中期の竪穴住居跡や弥生時代後期の埋葬土坑等が検出された。また、吉岡原遺跡第7次調査および女高遺跡第11次調査では弥生時代後期の竪穴住居跡が検出された。これら遺構からは炭化材が出土したことから、これら炭化材の樹種を検討した。

2. 試料と方法

試料は、高田遺跡第17次調査、吉岡原遺跡第7次調査、女高遺跡第11次調査の各遺構から出土した炭化材20試料である(表1)。

試料は、3断面(横断面・接線断面・放射断面)を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、銀ペーストを塗布した後乾燥させた。その後、金蒸着して走査電子顕微鏡(日本電子㈱製 JSM-5900LV型)を用いて同定した。

3. 結果

炭化材の樹種を検討した結果、常緑針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のクリ、カエデ属、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属と呼ぶ)、シイノキ属、タブノキ、サカキの7分類群であった。

高田遺跡第17次調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡(SH01)と弥生時代後期の埋葬土坑(SF01)から検出された炭化材は、いずれもクリであった。縄文時代における建築材および燃料材には本州東半部においてクリが多く出土していることが知られている(山田, 1993)。

吉岡原遺跡第7次調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡(SH03)から検出された炭化材は、カエデ属、サカキおよびクリであった。

女高遺跡第11次調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡(SH02)から検出された炭化材は、ヒノキ、シイノキ属、サカキ、タブノキ、アカガシ亜属であり、シイノキ属とサカキの出現率が高く、全体としても常緑広葉樹が多い。

なお、浜松市南伊場町の梶子遺跡の弥生時代中期の建築材として落葉広葉樹コナラ亜属コナラ節、コナラ亜属クヌギ節、クリ、サクラ属、常緑針葉樹イヌマキが利用されている(山田, 前出)。

表1 検討した炭化材の詳細と樹種同定結果

試料No.	遺跡名	遺構	遺構の性格	地区	取上げNo.	時期	樹種
1	高田17次	SH01	竪穴住居跡	B-14区	炭化物1	縄文時代中期	クリ
2		SF01	埋葬土坑			弥生時代後期	クリ
3	吉岡原7次	SH03	竪穴住居跡	A-4区		弥生時代後期	カエデ属
4				A-4区			サカキ
5				A-4区			クリ
6	女高11次	SH02	竪穴住居跡	3B区	炭3	弥生時代後期	ヒノキ
7				3B区	炭6		シイノキ属
8				3B区	炭7		サカキ
9				3B区	炭15		タブノキ
10				3B区	炭18		シイノキ属
11				3B区	炭20		シイノキ属
12				4B区	炭23		シイノキ属
13				4B区	炭25		シイノキ属
14				4B区	炭26		シイノキ属
15				4B区	炭27		サカキ
16				4B区	炭28		サカキ
17				4B区	炭29		サカキ
18				4B区	炭30		アカガシ亜属
19				4B区	炭32		サカキ
20	3B区	炭36	アカガシ亜属				

[樹種記載]

(1) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版1 1a-1c (No.6)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は少なく、樹脂細胞は年輪の後半に分布する。分野壁孔は大きく、孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型で1分野に2〜4個あり、主に2個が水平に整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、建築材・曲物などによく使われる。割裂性がよいので材を細く薄く裂き、編傘や箆や屋根葺きなどにも利用される。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版1 2a-2c (No.18)

小型〜中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材である。接線状の柔組織が顕著である。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列のものと集合放射組織とがある。

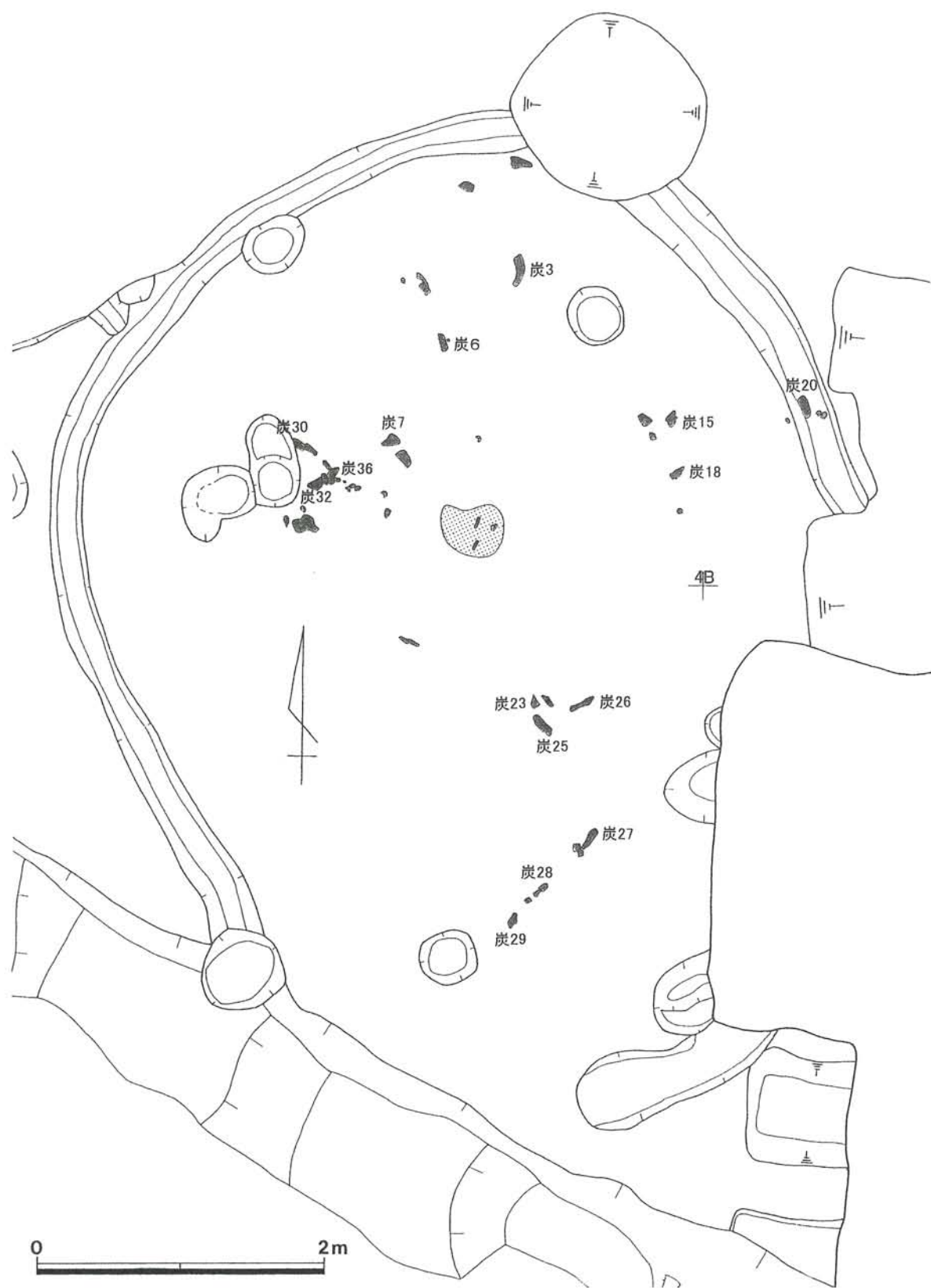
アカガシ亜属は、常緑でドングリをつけるカシ類の仲間であり、おもに暖温帯に分布するアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジログシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。

(3) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c (No.5)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状・柵状である。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通に生育する落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性に優れている。

(4) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版1 4a-4c (No.7)



第1図 女高遺跡第11次調査SH02検出炭化材平面実測図

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列し除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。年輪始めの管孔が間隔をあけて配置する。

シイノキ属は、暖帯に生育する常緑高木である。関東以西に分布するツブラジイ (*C. cuspidata*) と福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイ (*C. cuspidata* var. *sieboldii*) がある。

(5) タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et ZUCC クスノキ科 図版1 5a-5c (No.9)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在する散孔材である。軸柔細胞は周囲状に分布する。道管の穿孔は単一、内腔に細かならせん肥厚がある。放射組織は、異性1~2細胞幅、2-20細胞高、端部は直立細胞である。

タブノキは、本州、四国、九州、琉球に分布する常緑広葉樹であり、沿海地に多い。材は、割裂性は小さく加工は比較的容易である。

(6) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版1 6a(No.3)、図版2 6b・6c (No.3)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在し年輪界は不明瞭で、帯状の柔組織が顕著な散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は、日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約26種があり多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

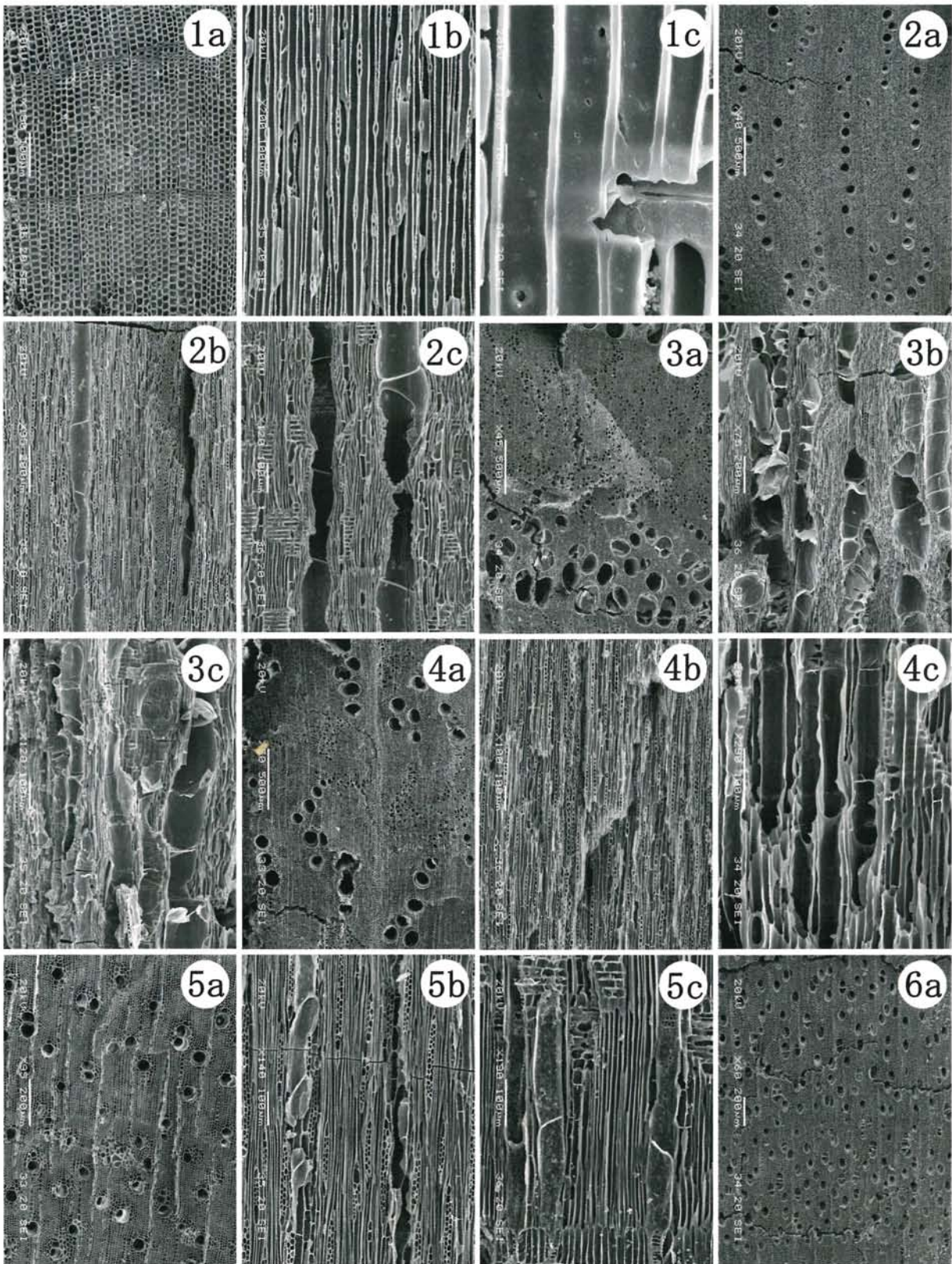
(7) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版2 7a-7c(No.4)

非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材である。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒の数が30前後の階段穿孔、内腔にほぼ水平のらせん肥厚がある。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

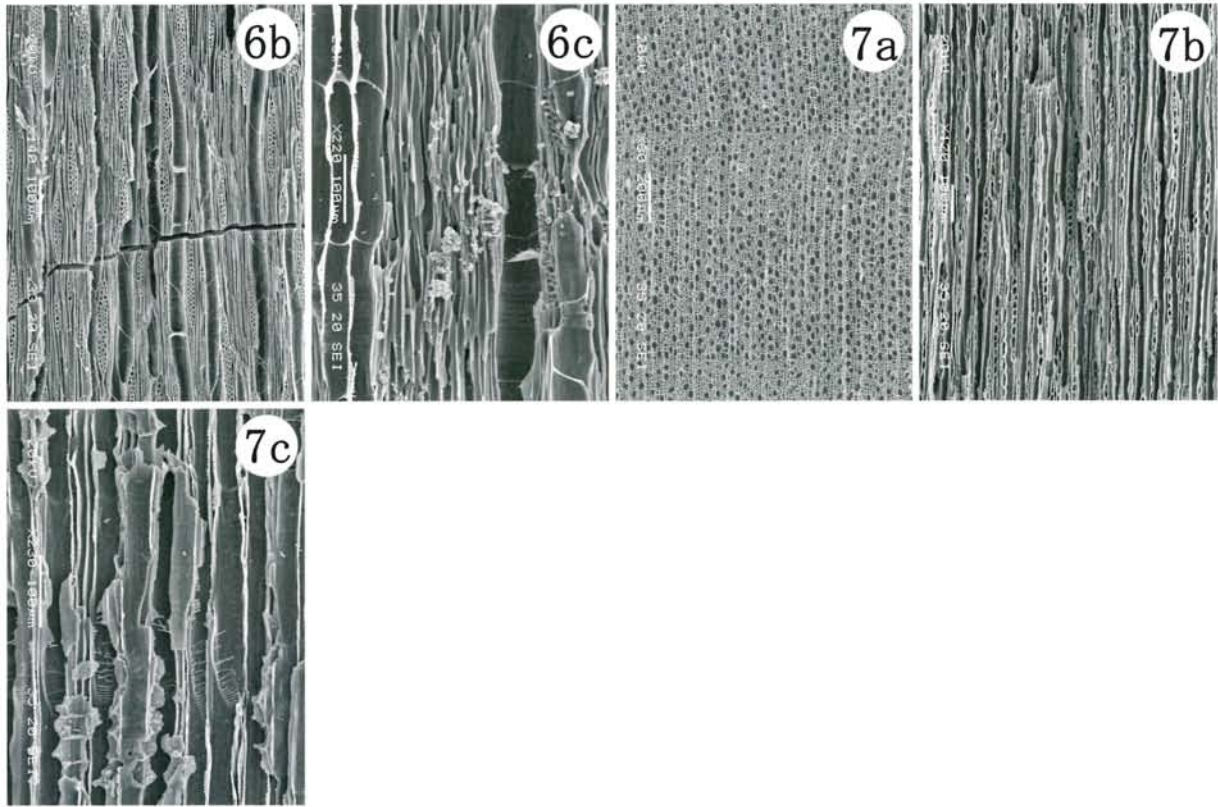
サカキは、本州の茨城県および石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。材は強靱・堅硬で割裂困難であり丈夫である。木製品として遺跡から報告されることの多い樹種であり、農具の柄・漁労具・杭・杵や小物器具類などに使用されている。

引用文献

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史—。植生史研究,特別第1号,242p.



図版1 出土炭化材の電子顕微鏡写真 (a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面)
 1a-1c. ヒノキ (No.6) 2a-2c. コナラ属アカガシ亜属 (No.18) 3a-3c. クリ (No.5)
 4a-4c. シイノキ属 (No.7) 5a-5c. タブノキ (No.9) 6a. カエデ属 (No.3)



図版2 出土炭化材の電子顕微鏡写真 (a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面)
6b・6c. カエデ属 (No.3) 7a-7c. サカキ (No.4)

1. はじめに

吉岡原遺跡第7次調査により出土した岩のブロックに付着している赤色顔料について蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

2. 試料と方法

分析対象資料は、吉岡原遺跡第7次調査で検出された竪穴住居跡 SH06 の床面下より出土した岩のブロック 1 点で、外面に赤色顔料らしきものが残存している (図版 1 左上)。SH06 は、弥生時代後期と古墳時代前期の土器が出土しているが、床面下から出土したことから、弥生時代後期の可能性が高い。

分析に際して、セロハンテープを岩のブロック表面に貼り付けて剥がすという形で顔料を極少量採取して分析試料とした。

分析装置は (株) 堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。この装置はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV・1mA の Rh ターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器 (Xerophy) で、試料室の大きさは 350×400×40mm である。検出可能元素は Na~U であるが、Na、Mg といった軽元素は蛍光 X 線分析装置の性質上、検出感が悪いいため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、1.00mA (自動設定による)、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s、パルス処理時間 P4 (分解能を重視した設定) に設定した。定量分析は標準試料を用いない FP (ファンダメンタルパラメータ) 法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

3. 結果

分析により得られたスペクトルおよび FP 法による半定量分析結果を図版 1 に示す。主に Si、Fe、Al が多く検出され、また、P、S、K、Ca、Ti、Mn が検出された。

4. 考察

弥生時代後期に使用されていた赤色顔料としては、朱 (水銀朱) とベンガラに大別される。水銀朱は、硫化水銀 HgS で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄 Fe₂O₃ (鉱物名赤鉄鉱) を指すが、広義には鉄 (III) の発色に伴う赤色顔料全般を指し (成瀬、2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約 1 μ m のパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており (岡田、1997)、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す (成瀬、1998)。

当試料からは、Si、Al などの土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、Hg は検出されなかった。Fe がよく検出されていることから、赤い発色は Fe によるものであると推定できる。顔料としてはベンガラにあたる。なお、顕微鏡下で観察したところパイプ状の粒子は観察されなかった (図版 1 右下)。

5. おわりに

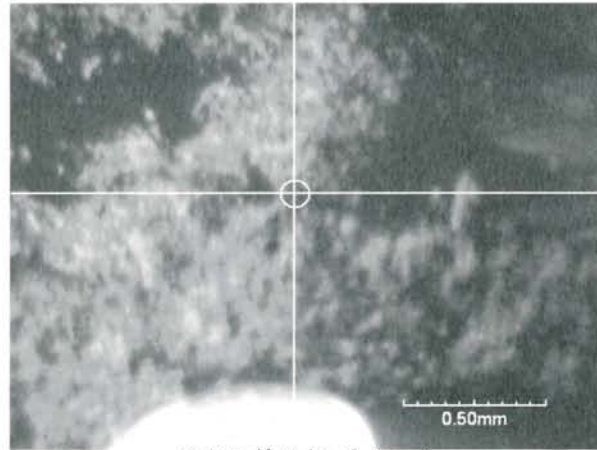
吉岡原遺跡第7次調査により出土した岩のブロックに付着している赤色顔料について分析した結果、Fe が多く検出され、鉄 (III) による発色と推定された。以上から、使用されている赤色顔料はベンガラであると考えられる。

引用文献

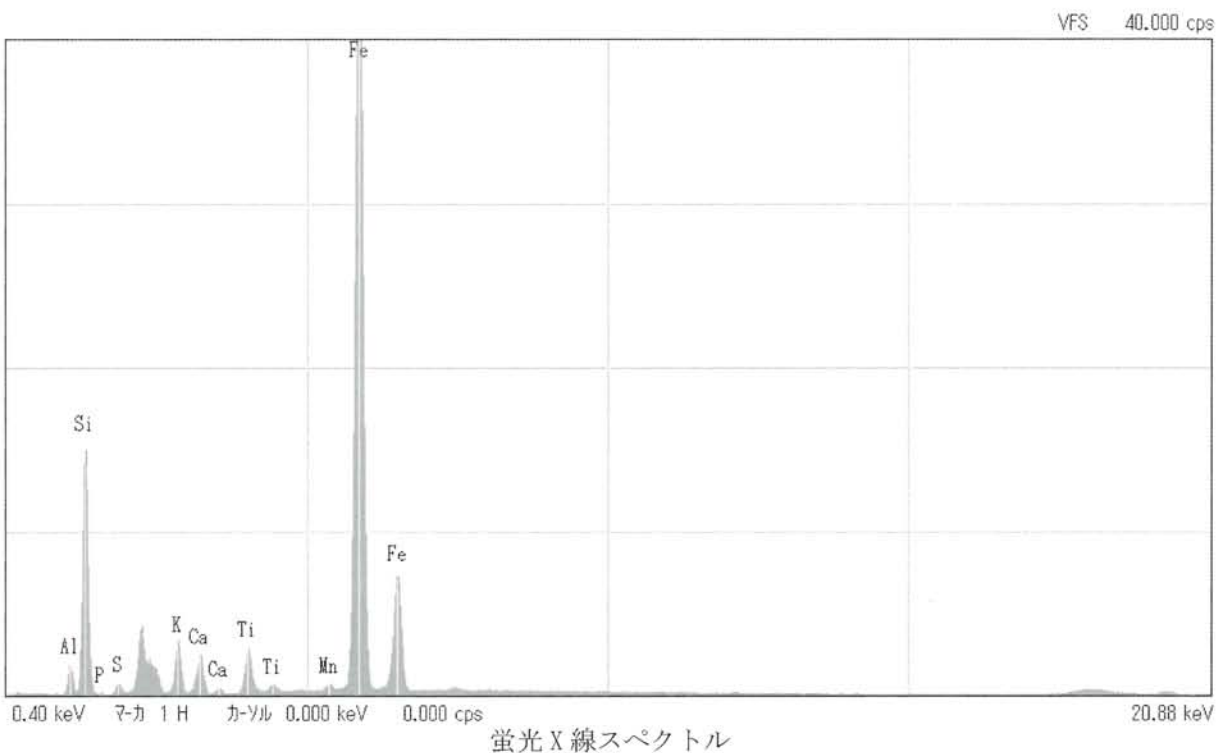
- 成瀬正和 (1998) 縄文時代の赤色顔料 I—赤彩土器—, 考古学ジャーナルNo.438, 10-14, ニューサイエンス社。
成瀬正和 (2004) 正倉院宝物に用いられた無機顔料, 正倉院紀要, 13-61, 宮内庁正倉院事務所。
岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元, 日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集, 38-39。



分析対象資料

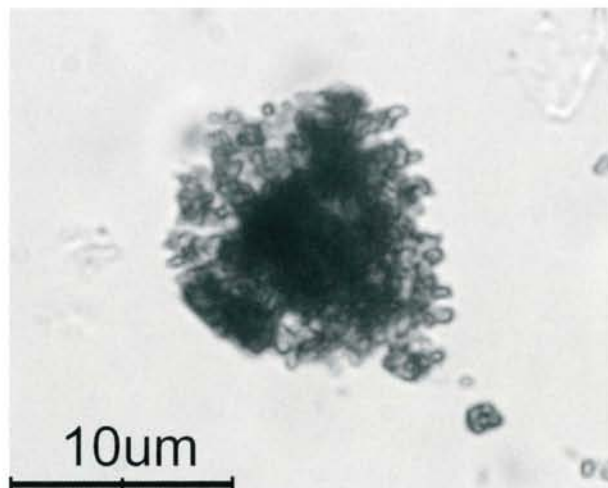


蛍光 X 線分析ポイント



測定時間 : 500s パルス処理時間 : P4
 XGT径 : 100 μm X線管電圧 : 50kV
 電流 : 1.00mA
 定量補正法 : スタンダードレス

元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/mA]	
13	Al	K	12.11	0.58	18.29
14	Si	K	58.25	0.53	171.36
15	P	K	0.26	0.12	0.85
16	S	K	1.00	0.08	7.91
19	K	K	4.55	0.14	39.03
20	Ca	K	2.61	0.10	30.69
22	Ti	K	1.89	0.07	36.93
25	Mn	K	0.15	0.03	5.15
26	Fe	K	19.18	0.22	823.13



採取試料拡大図

図版 1 吉岡原遺跡出土土器付着顔料分析

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつちつちようさほうこくしよ
書名	市内遺跡発掘調査報告書
副書名	高田遺跡第17次調査 高田遺跡第19次調査 高田遺跡第20次調査 吉岡原遺跡第7次調査 女高I遺跡第11次調査 吉岡原遺跡第6次調査 吉岡下ノ段遺跡第6次調査 女高I遺跡第10次調査
編著者名	前田庄一・戸塚和美
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかだいせきだい17じちようさ 高田遺跡第17次調査	静岡県掛川市吉岡	22213	K-243	34度 47分 23秒	137度 56分 57秒	2006年5月 ～ 2006年8月	1,334㎡	茶園改植
たかだいせきだい19じちようさ 高田遺跡第19次調査	静岡県掛川市吉岡		K-243	34度 47分 23秒	137度 56分 50秒	2006年6月 ～ 2006年11月	395㎡	茶園改植
たかだいせきだい20じちようさ 高田遺跡第20次調査	静岡県掛川市吉岡		K-243	34度 47分 30秒	137度 56分 54秒	2006年10月 ～ 2006年12月	829㎡	茶園改植
よしおかばらいせきだい7じちようさ 吉岡原遺跡第7次調査	静岡県掛川市吉岡		K-234	34度 47分 31秒	137度 56分 32秒	2006年8月 ～ 2007年1月	514㎡	茶園改植
めだかいちいせきだい11じちようさ 女高I遺跡第11次調査	静岡県掛川市高田		K-244	34度 47分 12秒	137度 57分 3秒	2006年12月 ～ 2007年3月	392㎡	茶園改植
よしおかばらいせきだい6じちようさ 吉岡原遺跡第6次調査	静岡県掛川市吉岡		K-234	34度 47分 39秒	137度 56分 52秒	2006年6月 ～ 2006年7月	47㎡	個人住宅の 敷地拡張
よしおかしたのだんいせきだい6じちようさ 吉岡下ノ段遺跡第6次調査	静岡県掛川市吉岡		K-231	43度 47分 38秒	137度 56分 58秒	2006年6月 ～ 2006年8月	90㎡	個人住宅の 建築
めだかいちいせきだい10じちようさ 女高I遺跡第10次調査	静岡県掛川市高田		K-244	34度 47分 15秒	137度 57分 4秒	2006年9月 ～ 2006年11月	69㎡	個人住宅の 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高田遺跡第17次調査	集落跡	縄文時代 弥生時代 ～ 古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑墓 土器棺墓	土器、石器 土器	段丘内部に展開する竪穴住居と掘立柱建物から成る集落
高田遺跡第19次調査	集落跡	弥生時代 ～ 古墳時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡 溝跡（方形周溝墓） 性格不明遺構	土器	段丘縁辺部に展開する集落
高田遺跡第20次調査	集落跡	縄文時代 弥生時代 中世	掘立柱建物跡、柵列	土器 土器 陶器	段丘縁辺部に展開する集落
吉岡原遺跡第7次調査	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡	石器 土器	段丘縁辺部に展開する集落
女高I遺跡第11次調査	集落跡	弥生時代 ～ 古墳時代	方形周溝墓、溝跡、竪穴住居跡	土器、石器、石製模造品	段丘内部に展開する竪穴住居と掘立柱建物から成る集落
吉岡原遺跡第6次調査	墓跡	弥生時代 ～ 古墳時代	方形周溝墓	土器	段丘縁辺部に造られた方形周溝墓
吉岡下ノ段遺跡第6次調査	墓跡	弥生時代 ～ 古墳時代	方形周溝墓	土器	段丘縁辺部に造られた方形周溝墓
女高I遺跡第10次調査	集落跡	弥生時代 ～ 古墳時代	竪穴住居跡	土器	段丘内部に展開する集落

市内遺跡発掘調査報告書

高田遺跡第 17 次調査

高田遺跡第 19 次調査

高田遺跡第 20 次調査

吉岡原遺跡第 7 次調査

女高 I 遺跡第 11 次調査

吉岡原遺跡第 6 次調査

吉岡下ノ段遺跡第 6 次調査

女高 I 遺跡第 10 次調査

2008 年 3 月 31 日発行

発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷一丁目 1 番地の 1
TEL 0537-21-1158

印刷 株式会社 幸栄グラフィック
静岡県掛川市弥生町 21
TEL 0537-24-4341

